

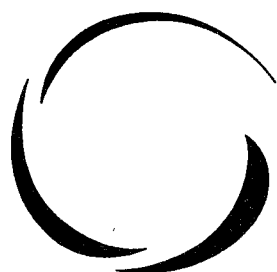
C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

オーラルヒストリー

松野頼三

[元自民党衆議院議員]

〈下巻〉



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

松野頼三 オーラルヒストリー

目次

〔松野頼三・略歴〕

《第11回》

現在の政局と次期総裁候補について

三木内閣の政策

三木内閣末期

ロッキード事件について

田中と三木

《第12回》

高祖議員の辞職とテロ対策

福田内閣時代

選挙と政治資金

革新自治体の誕生・クアラルンプール事件

昭和五十三年の自民党総裁選挙

ダグラス・グラマン事件

小泉首相とその周辺・日本の情報機関の必要性

政局関連年表：「全米同時多発テロ事件に伴う自衛隊海外派遣関連年表（二〇〇一年）」

年表（二〇〇一年）

《第13回》——『佐藤栄作日記』と松野頼三（一）

自衛隊殉職者の追悼式について

テロ対策法・現在の政局
アフガン攻撃・米軍と自衛隊
道路族と予算要求について
岸と佐藤

日ソ国交回復交渉・鳩山一郎・吉田茂の人物評

ポスト鳩山をめぐる

池田内閣の頃

欧州への外遊・父鶴平の死

《第14回》——『佐藤栄作日記』と松野頼三（二）

愛子内親王の誕生・議長の投票について

自民党総務会

昭和三十九年党総裁選挙

第一次佐藤内閣の成立

防衛庁長官に就任

椎名外相不信任案と牛歩戦術

農林大臣に就任

東南アジア訪問

選挙制度調査会と政治資金規正法

米価問題・昭和四十三年党総裁選挙

政局関連年表：「三矢研究関連年表」

《第15回》——『佐藤栄作日記』と松野頼三（三）

現在の政局の動きなど

F X問題

大学臨時措置法案の成立へ……………	116
日米安保の自動延長と川島正次郎……………	119
軽井沢と別荘……………	122
第三十二回総選挙・第三次佐藤内閣成立へ……………	126
渡米・ロックフェラーと会談……………	128
統計・数学を学ぶ……………	130
第九回参議院選挙と台湾訪問……………	132
昭和四十七年・勤続二十五年表彰……………	133
昭和四十九年・チソソ問題等……………	137
三木内閣誕生へ……………	140
政局関連年表：二加藤紘一事件関連年表……………	143
《第16回》……………	145
鈴木宗男と外務省のことなど……………	147
戦後の政治家評……………	153
大平内閣成立まで……………	157
藤山愛一郎とのこと……………	160
議員辞職へ・現在の経済政策など……………	163
政局関連資料：「川口外務大臣より外務省職員への訓示（平成十四年二月五日）」……………	170
「開かれた外務省のための十の改革（平成十四年二月十二日外務省発表）」……………	170
《第17回》……………	173
『大正天皇実録』公開・政治家の不祥事について……………	175
ダグラス・グラマン事件のこと……………	179

《第18回》……………	199
現在の政局・若手政治家のことなど……………	201
落選と再選……………	204
鈴木内閣から中曽根内閣・安倍晋太郎のこと……………	207
政界を引退……………	210
三木・海部との関係……………	212
中曽根内閣後・安倍晋太郎の周辺等……………	214
高橋圭三との関係……………	217
引退後―政界の語り部として―……………	220
闇鍋会の誕生……………	222
農林問題の関わりについて……………	224
父松野鶴平関係の文書について……………	225
《第19回》……………	227
政治家のスキヤンダル・小泉内閣の解散について……………	229
細川護熙との関係……………	231
自民党の下野・細川連立政権の成立・そして自社連立へ……………	234
新進党について……………	237
現在の政治家評・党内事情……………	239
「松野頼三関連文献目録」……………	253
「あとがき」政策研究大学院大学教授 伊藤隆……………	258

松野頼三略歴

生年月日：大正6年2月12日

学歴：昭和15年慶應義塾大学法学部政治学科卒業

本籍地：熊本県鹿本郡菊鹿町

備考：祖父野田卯太郎（政友会）。故参議院議長松野鶴平三男。

子息：松野頼久（衆議院議員）

昭和15年 9月	日立製作所勤務を経て、海軍經理学校へ入学。	昭和44年12月	衆議院議員に10回当選（第32回総選挙）。
昭和20年 5月	任海軍主計少佐。	昭和46年 7月	党総務に就任（党選挙制度調査会長兼任）。
昭和22年 2月	内閣総理大臣秘書官となる。	8月	日台関係に関する佐藤の密使として台湾訪問（～9月）。
4月	衆議院議員に初当選（第23回総選挙）。		
昭和24年 1月	衆議院議員に2回当選（第24回総選挙）。 この年農林部会長に就任する。	10月	南ベトナムのグエンバンチュウ大統領の就任式に特命全権大使として出発、米国大使館でコナリー財務長官に会う。
昭和26年12月	厚生政務次官に就任する（～昭和27年10月）。	昭和47年 7月	党総務を辞任（党選挙制度調査会長は留任）。
昭和27年10月	衆議院議員に3回当選（第25回総選挙）。	12月	衆議院議員に11回当選（第33回総選挙）。
昭和28年 4月	衆議院議員に4回当選（第26回総選挙）。 この年自由党政調副会長に就任する。	昭和48年 7月	党顧問に就任する。
昭和30年 2月	衆議院議員に5回当選（第27回総選挙）。	昭和49年12月	自由民主党 政務調査会長に就任する（～昭和51年9月）。
11月	自民政調副会長に就任する。		
昭和32年 7月	政調会審議委員に就任する（～昭和33年6月）。	昭和51年 9月	自由民主党 総務会長に就任する（～昭和51年12月）
昭和33年 5月	衆議院議員に6回当選（第28回総選挙）。	昭和51年12月	衆議院議員に12回当選（第34回総選挙）、 政綱等改正委員長に就任する。
6月	総理府総務長官に就任する（～昭和34年3月）。		
昭和34年 6月	労働大臣に就任する（～昭和35年7月）。	昭和52年 1月	党顧問に就任する。
昭和35年11月	衆議院議員に7回当選（第29回総選挙）、 総務会総務に就任する。	昭和54年 5月	この年ダグラス・グラマン疑惑が発覚、 日商岩井からの政治献金を証人喚問で 認める答弁をする。
12月	自民党総務会副会長に就任する。		
昭和36年 4月	財務調査委員に就任する（～同年7月25日）。	昭和54年 7月	衆議院議員を辞職、党顧問を辞任する。
昭和38年11月	衆議院議員に8回当選（第30回総選挙）。	昭和54年10月	衆議院議員に落選する（第35回総選挙）。
昭和40年 6月	防衛庁長官に就任する（～昭和41年8月）。	昭和55年 6月	衆議院議員に13回当選（第36回総選挙）。
昭和41年 8月	農林大臣に就任する（～昭和41年12月）。	昭和58年 6月	自由民主党院内会派へ復帰する。
昭和42年 1月	衆議院議員に9回当選（第31回総選挙）。	昭和58年12月	衆議院議員に14回当選（第37回総選挙）。
2月	自由民主党 選挙制度調査会長に就任する（～昭和49年12月）。	昭和61年 7月	衆議院議員に15回当選（第38回総選挙）。
12月	総務会総務に就任する（～昭和45年1月）。	平成 2年 2月	衆議院議員に落選（第39回総選挙）。
昭和43年 3月	自民党の政治資金法改正案（「松野試案」）を まとめる。	平成 5年 6月	第40回総選挙に不出馬を表明する。

参考文献

- ① 松野頼三著『議員生活二五年』（中央公論事業出版 1972年）
- ② 松野頼三語り、戦後政治研究会聞き書き『保守本流の思想と行動』（朝日新聞社 1985年）
- ③ 『私なりの戦後50年(1)～(12)』（産経新聞1995年7月連載）
- ④ 『自由民主党党史 資料編』（自由民主党編 1986年）
- ⑤ 『佐藤栄作日記』全6巻（朝日新聞社 1997年）
- ⑥ 『松野頼三経歴書』（松野頼三事務所作成）

松野 頼三

オーラルヒストリー

第11回

[2001年9月27日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員) (於：松野頼三事務所)

■現在の政局と次期総裁候補について

伊藤 ……いろいろな事件があつて、先生も出番が増えていますね。
松野 私がまだ忙しいということがおかしい。私なんかもう過去にならなければいかんのに、まだ出ているのがおかしいんだ。小泉「純一郎」意識革命は神風みたいなものですね。神風が吹いているうちにやらないとね。

伊藤 このあいだは、「靖国参拝を」二日ばかり早めましたね。

松野 あれは駄目だ。「首相の」周辺も駄目なんだ。

伊藤 福田「康夫」さんはもうちょっとしつかりしているかと思つたな。

松野 最後まで頑張つたのは安倍「晋三」です。安倍だけは褒めておいた、「君は一番正しい」とね。ここまで来たら、中国、韓国は刺激しても、せめて国民だけでも握らなければね。国民は民族意識が戻つたと思う。それだけでも掴まえておけば。

小池 ちょっといい訳が利かなくなつてきましたね。

松野 本人も非常に大きな打撃だ。

伊藤 内閣改造はやるんですか。

松野 やりませんね。山崎「拓」なんていう幹事長は、ただおるだけだね。

伊藤 あまり役に立たず、ですか。

松野 役に立たない。悪くはなるけれど、役には立たない。

小池 山崎は地方の自民党に評判が悪いですね。広島でも評判が悪いですね。演説が下手だし。

松野 演説も下手、表現も下手。ただ、虫みたいにじつとして

伊藤 印象としてネクラみたいない感じでしょう。

松野 ネクラだ。

小池 もう少しうまくやれば、次の総裁候補になる感じがするのですが。

伊藤 もう、断然落ちたでしょう。

松野 見ていると、平沼「赳夫」かもしれないね。

小池 今度の特殊法人改革で、平沼がどういう手腕を見せるかというところが、大きなネックになるんじゃないでしょうか。まだ何も言っていないから。

松野 平沼はどちらかでしょうね。

小池 亀井「静香」との関係がどうなりますかね。

松野 亀井が邪魔ですね。

小池 亀井は建設国債の増発とか、意気軒昂ですから。

松野 あんなことを言っていたらね。ちょっと後ろ向きだ。

佐道 麻生「太郎」さんがこのところ政治家として力をつけてきた要素は何ですか。

松野 経済人にわりと信用があるでしょうね。生きた経済人ですね。

伊藤 いま小泉さんを支えているのは誰なのか、と思うけれどね。

松野 一に本人でしょうね。本人の精神は私はよく教育しているからわかるけれど、個々のことについては一切話をしないと断つたんだ。個々のことについて私が出ることはしない。私も自由にしゃべれなくなる。私は自由にしゃべるから、個々のことについては、君が在任中は俺は話をしない、相談もしない。そうしないと俺がしゃべれなくなる。何をしゃべってもいいですよというから、俺はなんでも自由にしゃべるけれど、引退した俺が出て来ては君の邪魔になる。素直に言つて「小泉の」欠点は、勉強不足でしょうね。八割はわかるところとわからんところがある。財政はわかるけれど、経済はわからない。政治論はわかるけれど、具体案になると弱いでしょう。財政は福田「赳夫」流でしょうな。福田財政で教育されているから。

伊藤 特殊法人の民営化は大変でしょうね。

松野 大変だ。民間で引き取るものと引き取らんものがありますからね。四国の橋なんて、引き取る民間人はいないでしょうね。

小池 このあいだ通りましたけれど、対向車もなく通過しました(笑)。夜走ると、後ろも前も真つ暗ですからね。

松野 民間が引き取らないものが多いんじゃないかな。

伊藤 やっぱりコミで売る以外にないでしょう。

松野 コミで売っても買わないでしょうね。

小池 岡山から香川まで、橋を渡るだけで四六〇〇円取るんですよ。誰も引き取り手がないですよ。

松野 全国の高速道路全部まとめて。

小池 地域ごとに分割するんですかね。儲かる場所と儲からないところをうまく合わせてやるしかないでしょうね。

松野 北海道なんか「儲かる場所がないですよ」。

小池 北海道はそもそも高速道路は要らないですからね。そんなことをいうと怒られるかもしれませんけれど(笑)。

松野 住宅公団の引き受け手はあるだろうか。あれがわからない。小池 なぜ住宅公団に手を着けたのでしょうか。財投の問題があるからだと思います。郵政三事業の民営化があるからでしょうけれど、大衆的には一番後回しにした方がいいような気がするんですけれどね。

松野 財投でしょうね。

小池 やはりいまの内閣の一番の弱点は「田中真紀子」外務大臣なんですか。最近雑誌マスコミは竹中「平蔵」を叩き始めましたね。

松野 今度の靖国も外務大臣が駄目でしたね。外務大臣が、「必ずやめるように言います」なんていつて中国から帰ってきたりね。あれはちょっとね。

小池 ある意味では内閣改造の目玉なんですけれどね。

松野 おもちや箱をひっくり返したようなもので、收拾がつかないんだ。次々に、外務省全部でしょう。四人の「歴代」事務次官を整理「斎藤邦彦・IC A総裁、林貞行駐英大使、柳井俊二駐米大使、川島裕事務次官を更迭。後任事務次官は野上義二外務審議官(経済担当)」したけれど、また出てくる。また五十万だけ返還するという意味が私にはわからない。今度議会が開いたら、民主党のやつに、聞いてもらいと言ったんだ。五十万を減俸して返済したというけれど、それはどういう意味か、どこで五十万と評価されたか。福田官房長官は六百万、あとは五十万。責任の所在は外務大臣の方が重いように思う。官房長官が六百万なら、外務大臣は一千万ぐらいの評価をすれば、責任の所在が「はっきりするけれど」。なんで五十万なのかわからない。

伊藤 最近、雑誌ジャーナリズムが、田中金脈問題をいろいろ突っついてますね。

伊藤 相統税の未払い問題でしょう。

松野 外務省をやっていたら、泥沼みたいだ。底なし沼でしょうね。

伊藤 ああいうふう内部告発が次々に出て来たら收拾がつかないでしょう。

小池 收拾がつかないですね。特に人間関係が完全に壊れますしね。

松野 あいつもやるなら、俺も、となる。

小池 慣習的にやっているようなこともたくさんありますからね。

松野 慣習だ。前の課長がやったことを次の課長がやらんわけはいかないからね。だから一種の伝統なんだ。

小池 機密費の問題もそうなんです、実際にちゃんとした仕事に使っているものも結構ありますからね。

松野 外務省はもう泥沼で、私もハラハラしている。

小池 銀行の方はどうなんですか。最近七ヶ月で不良債権を圧縮するという拙速な案が柳沢「伯夫」から出て来ましたから。

松野 銀行の不良債権に政府が手を出したことが間違いないんだ。日銀にやらせればよかつたんだ。金融を金融でやらせればね。私は、個々に銀行に政府資金を出したことが間違いで、日銀に金融部内でやらせればよかつたと思う。必ずしも政府資金が銀行救済のために良かったかというと、そうでもないんだ。借りた銀行、借りない銀行がある。返した銀行もある。案外、銀行自身にも好評じゃなかつたんじゃないか。ある意味では二千億ずつ全部並べて借りろ、なんて貸しているんだからね。すぐ返す銀行があつた。何か銀行の基準がね、個々の自己査定ですからね。そこまで踏み込んで行かれないんだから。自己査定にいちいち政府が手を出すのはどうだろうと思うな。

あなた方が生徒の採点をするより難しいでしょうね。採点は点数が出るけれど、自己査定は情実が入るからね。古手が入っている銀行は甘く見る。銀行の古手がみんな取次に入っているんだから。そういう者が入っているところと入っていないところとは情実が違う。

私も麻布中学で、数学は特に点数が悪かつた。数学の先生のところには習いに行くと、点数が上がる。良くできるようになった、と言われて、点数が上がるんだ。良くなつたかどうか知らなければ、点数が上がるんだ。

伊藤 昔からそういうことがあるから、禁止されていたんですね。

松野 私は習いにいってましたよ。

伊藤 それはいけないことになっていてるんです。

松野 私学の麻布中だから。

伊藤 私学はいいのかなあ。

松野 私学はいいんですよ。それが私学だ。私学が官学の真似をするからいけないんだ。私学が補助金をもらうからいけないんだ。

私は断れ、と言つたんだ。もらわん代わりに、金で入れればいいんだ。経営が悪ければ、協力する生徒を入れればいい。それだつて教育ですからね。麻布中学は私学だから、私たちは寄付もずつとしていた。その代わり、入れてくれればいい。私学補助金をもらうようになったから駄目になつた。墮落して、官学の真似を始めたんだ。真似をしたら勝ちっこない。馬鹿は馬鹿なりだ。だから、卒業生から寄付を取ればいいじゃないか。入りたい子供がいるんだから、それで補助金に合わせればいい。四千万足りない、それなら百万の子供を四十人入れればいいじゃないか。それなら協力する。頭の悪い子には金をつけてやらなければ嫁だつてもらい手がない(一同笑い)。持参金をつけるのは当たり前だ。それが公平な社会だ。点数が公平なだけでなくて、すべてを公平にするのに、頭の悪い娘に持参金をつけるのは当たり前だ。それが社会の公平なんだ。

伊藤 そうか、持参金をつけないから最近結婚しないのが多いんだ(笑い)。

松野 美人の娘は引く手あまただから向こうから結納金を持ってくる。結納金をもらうような娘ならいいけれど、持参金をつけないばいけない娘もいる。それが社会にいる以上仕方がない。

伊藤 それは査定が難しいな(笑い)。

松野 現実社会というのは、それが本当の公平だ。

小池 娘を持つ身としてはちよつと辛いです。

伊藤 「小池氏に」もらえろと思つたんじゃないの(笑い)。

松野 医学部はそうですね。みんな金を取るんだ。少なくとも四〇〇〇万ぐらい取るでしょう。必要経費としてとるわけだ。私立の医学部はみんなそうです。二五〇〇万ぐらいが必要経費、一五〇〇万が持参金、それで四〇〇〇万ぐらいが常識でしょうね。社会の公平というのは、何をもって公平とするかだ。

■三木内閣の政策

伊藤 この前、三木内閣のお話を伺いまして、三木内閣の政策などについてもいろいろお話を伺ったんですが、ロッキード「の話」に行く前に、もうちょっと三木内閣についてお願ひします。発足当初に、公共料金の値上げをやめるという問題がありました。それは三木内閣の目玉ですか。

松野 目玉の一つは、防衛費の制約、これは前回言いましたね。GNPの1%を限度とする。もう一つは公共料金の凍結。これを三木さんがやろうと言った。それで三役に相談された。中曾根「康弘」、灘尾「弘吉」、私「松野頼三」です。私は真つ先に賛成した。公共料金の凍結はバラバラにいろいろあるけれど、電気会社もガス会社も、どれもそんな大きな値上げをしなくてもやれるんだ、多少の赤字・黒字は出るけれど、破産するような大きなものはない。それを基準にして、物価体制を整えて、それで公平な政治をしたいというのが三木さんの一つの思想でした。

伊藤 この当時、公共料金というと、国鉄―。

松野 国鉄、ガス、電気。

伊藤 ガスはだいたい地方でしょう。

松野 電気、ガスは通産省の認可ですね。

伊藤 それは言ってみれば、国の財政とは直接関係がない。

松野 電話、郵便。

伊藤 電話、郵便は関係ありますね。電話、郵便と国鉄は国の財政に関係がある。

松野 それから電気も通産省の認可でしたね。ガスもそれに近かったと思いますね。民間だけね。

伊藤 国の財政に直接響くことはないんじゃないですか。

松野 生活が中心でしたね。生活物価水準の安定の方が先だった。財政の赤字・黒字ではなくて、物価の安定ということが念頭にあ

った。だからガス・電気も含めた話でしたね。

伊藤 これは政調から出したんですか。

松野 いえ、三木さんが言いました。

伊藤 じゃあ三木さんは、総理になったらいろいろなことをやろうということですか。

松野 いろいろなことをやろうと、彼は考えていた。あの頃は物価が非常に不安定でしたから、物価安定のためにまず公共料金の凍結をしようということだった。それから財政的には防衛費にキヤップをかけよう。本人がそんなことを勉強していました。三木さんの発案でした。

伊藤 これは党内ではどうでしたか。

松野 党内もだいたい賛成しましたね。多少、個々にはあつたけれど。

伊藤 大蔵はどうですか。

松野 大蔵もあまり反対しなかった。あのとき大蔵は福田「赳夫」でしたからね。福田も反対しなかった。ただ福田は統制的なものは嫌いだしたね。三木が言うならしょうがないかな、という感じでした。福田は統制的なもの嫌いだから、財政は経済で動くんだから、あまり決めない方がいいよ、という感じだった。でも三木が言うならいいだろうと、福田からはそんな感じでした。「こういうふうにしたいが、どうだろう」と言ったら、「あまり経済は縛るものじゃないけれど、三木が言うならいいだろう」と言つて、福田も賛成しました。政治姿勢だから、三木が言う通りにすればいいだろう、という感じだった。だから大した反撃はあまりありませんでした。個々に反対はなかった。誰も文句を言うものはいませんでした。

伊藤 公共料金の値上げ凍結というのは、いずれまた上げるといふことですね。

松野 いずれ上げるけれど、三木内閣のあいだは、という感じで

したね。三木内閣のあいだならいいだろう。まあ二年ぐらいだ。
 伊藤 あと先生、日銀の公定歩合の話がありますね。いままた日銀の政策に対して政府との関係がどうだというような話が出ていますが、先生が公定歩合の問題に対して口を出したということ、ちよつとー。

松野 それは初めてでした。日銀に関しては一切関与してはいけない、金融財政の独立、ということが池田勇人以来ずっと守られていた。

伊藤 実際、本当にそうだったんですか。

松野 内々には言っても、公に言うことはなかったでしょうね。銀行局長が日銀総裁と後ろで個々に相談することはあるけれど、議会で表立つては、金融財政は独立ということを、戦後ずっと守っていましたね。初めて私が、「公定歩合を引き下げろ」と言ったと思いますね。それで、それが大きく新聞に出た。

伊藤 それは政調会長として新聞記者が何かに言ったんですか。

松野 政経懇話会で言ったわけだ。

伊藤 そうですか。パーティですか。

松野 政経懇話会のパーティで言った。新宿の京王プラザで開かれた東京都の政経懇話会だから、わりに派手な会だ。そこで私は意識的に言ったんだ。これは初めてだと承知して、三木内閣だから言ってもいいかな、と思った。佐藤内閣なら言いにくいけれど、三木内閣なら改革を旗印にしているからね。佐藤、池田内閣だったら、おまえは馬鹿だと言つて、すぐに取り消されたでしょうね。三木なら改革だからいいだろう。改革の狼煙を上げるために私は意識的に言ったんだ、公定歩合を引き下げろべきだと。

伊藤 これは三木さんとは相談なしですか。

松野 なしだ。三木は知りません。日銀のことなんか知らないんだ。

伊藤 先生はどうしてこういうことを考えられたわけですか。

松野 私はいつか言いたかったんだ。池田の時も佐藤の時も言うに言えなかったんだ。池田には叱られるだろう。「おい松野、そんな馬鹿なことを言うな。金融財政の独立は、戦後日本の基本的な姿勢だ。それでこの貧乏な国はやっていくんだ。もちろん、全然反対の方へは行きはせんよ。でもそれを支配してはいけない。大蔵大臣が金融を支配してはいけない。その独立の尊厳を守ってきたから今日がある。馬鹿なことを言うな」。

佐藤も、「それは池田が言った通りだ、そんなことを言っちゃいけない」と言うだろうから、言うに言えなかった。党内では言っていたんですよ。それで三木になって、政調会長になったから大きな声で言った。それが大きく新聞に出た。金融、公定歩合に口を容れたのは初めてです。言いたかったことを、何年目に言ったことか。

伊藤 これはどうなったんですか。

松野 それは影響があります。日銀にも影響がある。結果として、日銀はそれに反抗も反応も示さなかったけれど、いろいろなものが一斉にそれに呼応して、結局最後には日銀は下げましたね。半年ぐらい後だけれど。銀行屋、金融機関がみんな言い出した。結局私のしたことは、最後に当たりましたね。

伊藤 これは大蔵大臣なんかはどういう反応なんですか。

松野 福田は黙っていました。福田は、池田・佐藤ほどは厳しくなかった。でも、すぐに電話をかけてきた。「君は今日公定歩合のことを言ったそうだね。俺も言えないけれど、君は言ったな。まあ、君だからいいだろう。大蔵大臣は言えないから、君が言った方がいいや」。

伊藤 政調会長が言ったら影響は大きいですね。

松野 それで翌日の新聞に大きく出ましたね。そのパーティの中で、そればかり大きく出ちゃつてね。中曽根はそれがそんなに大きな問題とは知らなかったんだ。普通の話だと思っていたら、大

大きく出たので驚いたそうだ。これは十年間言いたくて黙っていたんだ。いまは当たり前みたいになっていきますね。

伊藤 それからもう一つ、スト権ストの問題にこの前ちよつと触れられましたが、三木さんは多少色を付けて妥結しようという感じだったわけですか。

松野 ありました。私と中曽根が反対した。特に中曽根が反対でしたね。彼は思想的に組合叩けの方でしたからね。私は労働大臣をしたから、今の時期なら大丈夫だ、と見たわけだ。組合の力が弱っていた。

伊藤 突っぱねても大丈夫ということですね。

松野 大丈夫だと思った。中曽根は前から思想的に組合は嫌いだった。私は労働大臣だったから、この時期なら大丈夫だと思って、それで三木さんを押さえつけた。「大丈夫か」と言うから、「大丈夫だ」と言った。「食料が来なくなったら困るぞ」「大丈夫だ」。そこで中曽根が陣頭に立って、貨物、トラック会社の社長を呼んで、輸送をやれ、生鮮食料をやれと発破をかけていましたよ。

伊藤 結局これは、向こうが完敗という形ですね。

松野 あれは一つの大きな労働運動の境でしたね。私は三井三池の時に労働大臣をしていて、あのときは組合にさんざんやられたけれど、いまなら大丈夫だと思った。あれは当たりましたね。あれでストがすっかりなくなりました。

伊藤 でも結局、三木さんと労働側は何かの形で接触をしてたわけでしょう。

松野 三木はどちらかという妥協案で、ほどほどで手を打つという感じだった。

伊藤 その妥協案は組合の方から。

松野 妥協案が三木の方から出て来ました。私と中曽根はそれを蹴ったんだ。

伊藤 三木さんは、妥協案を作る過程で組合との接触はあったん

でしようね。

松野 ありました。

佐道 向こう側はどういう人なんですか。

松野 あのとときは石田「博英」がいたかもしれないな。三木と親しかった。組合と親しい。石田を通じて三木のところに来たんでしようね。三木、石田は石橋内閣の頃から親しかったですから。たしか、石田を通じて来たと思いますよ。石田もその時は少し病気があったけれど、電話か何かで来ましたね。

佐道 石田さんは、ずっと労働行政が強い人ですね。

松野 労働大臣をしましたから。石田、倉石「忠雄」、松野と確か三人並んでいたんだ。

伊藤 組合側ではどういう人たちですか。

松野 組合は岩井「章」でした。石田とは岩井が親しかった。太田「薫」じゃなかったと思う、岩井だったと思う。

伊藤 しかし岩井さんという人は、池田さんとも近い感じですよ。ね。

松野 太田よりも岩井の方が策士でしたね。太田というのは要するに先頭に立ってワンワン演説する方で、岩井が参謀でしたね。あの頃は太田・岩井というのが名コンビで、いまの鷺尾「悦也」・笹森「清」みたいなものですね。鷺尾より笹森の方があつたでしようね。

伊藤 先生はあまり組合とは。

松野 私はあまり組合に深入りしなかった。

伊藤 総評は。

松野 総評は激しかったですね。

伊藤 激しい一方で、政府とのパイプもずいぶん持っていたでしよう。

松野 持っていました。あの連中は、攻撃しながら、妥協案を常に持っていましたね。組合というのは、最後は妥協しないと。組

合運動は妥協のないものはありませんから、どこかで妥協する。向こうは有利なときに妥協したい。スト権ストの時も、ほどほどのところで条件をつけて妥協したかった。

伊藤 三木さんだから妥協するだろうと向こうは思ったんでしょね。

松野 妥協すると思ったでしょうね。要するにスト権の内容半分ぐらいで、スト権を公務員にいくらか。そんな案が出て来て、私も中曾根も、「こんなものは駄目だ、時代が違う。ここまでやった以上もう許しては駄目だ」といった。三木さんはどちらかというと、譲るという案を持っていましたね。

佐道 スト権ストの時は見かけ上は労働側は結構攻勢という雰囲気があったと思うんですね。松野先生が、いま蹴つても大丈夫だ、というふうに判断されたのはー。

松野 「労働側の」中がバラバラだった。もう一つは、世論がストを認めるという空気ではない。新聞もほどほどにしろという論調だ。それまではストを援護したけれど、もういい加減にしろという世論がある。それで大丈夫だと思った。世論では勝つ。組合の内部も必ずしも一致していませんでした。あれほど大宣伝するわりに組合の中は及び腰だった。妥協案を用意してましたね。

伊藤 そういう場合、あれだけ大きな問題になると、やはり幹事長がとり仕切ることになるんですか。

松野 これは幹事長がとり仕切りましたね。関係の部会長を全部集めて、農林省を集めて食料はどうだ、運輸省を集めて交通連絡はどうだ、とやっていました。問題は食料でしたから、農林省の食料在庫、運輸省のトラック。汽車が使えないからトラック輸送をしよう。それで食料が一週間もてばいい。食料関係、生活用品関係ですね。それを各部会長を集めて、中曾根がやっていた。それから業者を集めたり、役所を集めたりして、やっていましたね。

伊藤 政調会長としても、いろいろやるわけですか。

松野 私は労働省及びその役所もありますからね。中曾根と一緒にやっていました。

伊藤 そういう闘争になると、中曾根さんはなかなかやるわけですか。

松野 そういうことは好きですね。やっぱり海軍少佐で、号令をかけたたり命令をしたりするのが好きですね。一つの方向を決めてやるときは中曾根は有能なんだ。方向を決めたものについていくときにはいいが、自分で上になってしまおうとわからなくなってしまう。部隊長としてはいい方でしょうね。彼が総理大臣になったときは、なんだか政策がうろろうろしてましたからね。長いわりには安定がなかった。あっちに行ったり、こっちに行ったりしていた。

伊藤 いまの内閣では部隊長はいないんですか。

松野 あれは大将一人だけです。

伊藤 やっぱりそんな感じですか。

松野 部隊長がいらない、大将が一人。

武田 戦争ができないですね。

小池 参謀もいらないですか。

松野 参謀もいらない。

伊藤 参謀はいなくてもいいかもしれないけれど、部隊長はいないですね。大将自体が部隊長じゃあ、やれることは少ない。

■三木内閣末期

伊藤 三木内閣には解散という問題はどうでしたか。

松野 ありました。本日に解散前夜まで行った「一九七六年九月」。私の中曾根に、「党の金はいくらあるんだい」と聞いた。「何をするんだ」というから、「いや解散したとき、公認料を計算すると

四十五億は要るんだけど、いくらあるか調べてみる」といったら、「いまある金は五億しかない。松野、やるのか」という。「やるかもしれないな」。中曽根は、「それでほんとうにやるのか」、おれは「やるかもしれない」と言った。

それで三木さんに「五億ぐらいいろくないが、公認には、三木さん、払わなきゃならん。一人三千万にして、三百人いれば九十億要りますよ。一千万にしても三十億要りますよ。五十億なければ選挙できませんよ。解散したその日に、それだけは要りますよ」と言った。それで後で新聞に出たけれど、河本「敏夫」が四十億用意したらしい。実際、それだけ用意したんだ。河本が用意した。それで党に五億あるから、四十五億。まず公認料だけ払えば、後は銀行借入もできるかもしれないが、解散した翌日渡すには、現金がなければ。

伊藤 それは翌日渡すんですか。

松野 告示が一週間後ですから、一週間の間に渡す。その間にふつうは銀行から借入れをするわけだ。自民党の建物、財政を担保にして、借入れをする。それにしても三日間ぐらいいかかりますから。公認料の四十億はその日に持つていなければ。いかにしても議員が帰れない。翌日帰る人もいるんだから。その人に公認料後払いというわけにはいきませぬ。だから公認料だけは用意しないと。選挙になればその日に帰る人がいるんだから。

そこまで準備して閣議を開いたわけだ。それは、三木辞めろ、という勢いだったんだ。党内の総務会も全部、三木は辞めろ、退陣しろ、ということだ。そこで閣議を開くと、内閣の中から、三木辞めろ、というのが出てくるんだ。閣内で、福田・大平が言うんだ。だから閣議を開くときは覚悟して開かなければならない。そこで覚悟して開いたら、案の定、三木いつ辞めるか、という。

そこで閣議の途中で、海部「俊樹」官房副長官が電話してきた。午後の二時頃だったか。「どうしても閣議では辞めると言う声が

強い」という。「数はどうだ」と聞いたたら、「採決はしないけれど、辞めると言う声が強い」「じゃあ解散しようか」。

その中で一人、坂田道太が、「今日の閣議はこれまでにして、あしたもう一回お開きになってはどうですか」という案を出した。それも電話で聞いたわけだ。

「よし、もうしようがない。あしたの十時まで延ばしたらどうだ。あしたの十時に解散しよう」と私が海部官房副長官に命じて、彼が三木さんに伝えて、三木さんが、「それじゃあ今日はこの辺で」ということでやめた。明日の十時に解散だ。こっちはもう準備してあるんだ。

そうしたらその晩のうちに大平、福田勢が、任期いっぱいまで三木で認めてもいいと決めて、翌朝九時に言ってきた。代表者が、任期いっぱいなら三木を認めると言ってきた。朝の九時だ。閣議は十時だ。そこで、三木・福田・大平三者会談をして、任期いっぱい三木を認めるという話になった。

伊藤 解散なしで、ということですね。

松野 解散なしで。その解散が本気だということが夜中にわかったんだ。

伊藤 金を用意したな、と。

松野 翌朝十時に解散ということが、空気でわかったんだ。その時は中曽根幹事長ではなかったですからね。幹事長は内田「常雄」と、「政調会長は」桜内「義雄」だ。この二人はほとんど知らないんだから。解散という声を聞いた途端だ。あれは九月でしたが、十月から十二月までが任期だった。十二月まで無条件で認めると。たしか九月でしたよ。それで任期が十二月までになった。ちょうど四年目ですから、衆議院も解散、三木内閣もその選挙で終わり。だから任期いっぱい三木はやった。いまの騒動は九月です。それは田中の逮捕が原因だった。福田、大平はまだ閣僚だった。内閣改造はしましたけれど、二人は残っていますからね。田中逮捕が

七月でしょう。その後の話だから、党内は騒然としていたんだ。三木が逮捕させた、という非難が出たときだ。

伊藤 三木さんとしては解散をするか、任期いっぱいやるか、難しいところですね。

松野 その二つしかない。難しい。やめろというのなら解散するということで、九月に覚悟したわけだ。それが一晩で変わった。その話を私はその後小泉にしたわけだ。小泉は使い走りでしたからね。総理大臣、解散。「三木はすいぶん乱暴をしますね」「乱暴じゃないよ、当然の権利を行使するだけだ。同じように森にやらせればいいじゃないか」「森はできません」。

あのときは三木の支持率は三三%あった。森は九%だ。その走り使いを小泉はしていたから、今度、それが私は身に染みていると思う。今度は、その問題は私が言おうが言うまいが、身に染みていると思う。最後には解散権を使うことを考えている。それを二月に使うか、いつ使うか。この行革の問題で私は使うと思う。

伊藤 あまり支持率が落ちないうちに。

松野 彼は体験している。本当にやるんですかというから、何も心配ないよ。当然の大権だ。そのために解散権があるんだ。国民は三木を支持しているんだ。内閣が支持しないというんだから解散すればいいじゃないか。その時は福田、三木がこう「喧嘩状態」ですからね。小泉はその福田の走り使いでおろおろしていた方だ。本当に解散になるのだろうか、と議員から見ればみんな心配ですね。本当にやる気でした。

それを知って、一晩で変わったことも事実。翌日の閣議は円満だ。九時に三木・大平・福田の三者会談で、十時に閣議を開いたから、円満だ。普通の通りだ。三木辞めろという声はゼロ。総務会も円満だ。政治の厳しさはそこにあるんだ。三役だった内田と桜内、これは連絡がありませんけれど、私と三木だけの話だった。

伊藤 その時は、河本さんが資金を集めたということは、先生は

ご存知だったんですか。

松野 あとで新聞に出た。

伊藤 でも解散というのはお金がいるという話でしょう。

松野 私は知っていましたよ。誰も知らないと思ったら、どこかで新聞に出ちゃった。

伊藤 そういう意味ですか。

松野 河本が四十億出したというのが、あとでどこかの週刊誌か何かに出ましたね。だから解散が本気だったということだ。誰かがちよつとしゃべったんでしょね。その前に、八月。一番大きな問題は田中逮捕なんだ。田中逮捕は、私は本当に朝の七時に知ったんですよ。七時にニュースを見たら、検察が田中邸に入るものだから驚いて、すぐ三木さんに電話したんだ。三木さんはもちろん起きていましたけれど、「うーん」といって返事をしなかった。

振り返ってみると、私はなんべんも、ほとんど毎日、三木の公邸に行っていた。あるとき三木は、「いろいろ事件が進んでいるんだ。直接聞かないが、稲葉「修」がちよこちよこ話をしてくれる、容易じゃないよ」という話を二週間前ぐらいにしていた。私もうすうすわかっていたけれど、「そうですね」といった。「どんな事態があっても、民主主義は健全だよ、日本の民主主義は大丈夫だよ」、そういう話を謎みたい私に話していたのを覚えている。「田中の事件が新聞に出ていますか」「いや、それは俺も検察にはそれはしない。稲葉も言わない。ただ、だいたい進んでいるように思うがね」「逮捕ということはないでしょうね」「それは……」といって言葉が重い話を二週間前ぐらいにしていた。その結論を知らないまま、私は逮捕当日の朝七時に見て驚いたわけだ。

そうしたところが、その昼、福田からちよつと来てくれと、大蔵大臣室に呼び出された。「おい、松野、君はいつ知ったんだ」

「今朝の七時」「もっと前に知っていたらう」「いや本当に知らない」「俺に三木は一言も言わなかった」「いや三木さんも知らなかったんじゃないか。方向はわかっているけど、逮捕をするという最終決定は法務大臣に任せたいと思う。法務大臣は検事総長に任せたいと思う」「そんな馬鹿なことはない。私は同じことをなんべんも聞いて不満があるんだ。三木は知っていて、俺に知らせなかった」「そんなことはない。三木は法務大臣に任せ、法務大臣は検事総長に寄せた。一切、それ以上のものはないと思う。私が七時に初めて知ったんだ」。

そのことが福田、三木の溝になった。それが九月の引き下ろしになってきた。不信感がそこにある。副総理にも田中逮捕を事前に知らせなかった。それが七月の問題で、それから挙党協ができて、三木おろしが始まった。三分の二は福田・大平だから、三分の一しかないんだ。ちょうどいまの小泉政局みたいなものだ。しかもその時は、いまのように世論は違うけれど、議会の数で決まる。総務会でも代議士会でも全部三分の二をもっている。必ず議決される。三木退陣決議なんてやるんだ。総務会でもやれば、代議士会でもやるし、閣議でもやる。それは激しい。

伊藤 それだけ解散権というのは強い力ですね。でもこのとき実際に解散したら、分裂選挙になりませんか。

松野 私はなるかもしれんと思いましたがね。その話の後で、夜来てくれというから、十一時頃行ききましたかね。三木はずっと字を書いている。えらい真剣な顔をしている。「松野君、俺はこれぐらいきついことはない」と言って、本当に涙を流した。「政治家の一生の中で、こんなきついことはない。おれはそれを文章でしただけだ」といって、本当にぼろぼろ泣いている。それで私は手を握って「三木さんはきついけれど、国民の政治を背負っているんだから、頑張っていきましょう」といって、そこで涙ながらに抱き合った。その時文章を書いていたのが、まるで自決の文

章みたいに見えた。それは閣議で毎日毎日、福田と大平をはじめ閣僚十四人が、十時の閣議の前に九時半にホテルに集まっているんだ。九時半に十四人が集まって、十四人が揃って閣議に来るんだよ。こんなことがあるか。予備閣議を開いてくるんだ。今日は何を反対する、何を反対すると決めてくる。「こんな政治が、松野君、あるか。綱紀紊乱という言葉があるのなら、これは内閣の最高の閣議の紊乱だ。総理としてここにいることがどんなに苦しくて恥ずかしいか」という。文章は読まなかったけれど、巻紙に書いてあるんだ。私は自決するんじゃないかと思った。それぐらい深刻だった。

私は三木を一所懸命助けて、その態度で福田と大喧嘩をした。長い盟友だったけれど、大義だからね。それで私はめちゃくちゃに我が身を捨てて、お前おかしい、と言われるぐらい三木を助けたのは、夜中の十一時から一時頃まで会ったからだ。三木さんの奥さんも知らなかった。あなたが来ていたことをあとから聞いたが、知らなかった。呼べと言うから呼んだだけで、という。それで二時間ぐらい。私は自決文書みたいにした。三木の話の聞くど、ごもつともなんだ。それで私は福田に対して「君はもう少し考えたらどうだ」といい、「何をおまえ、言うんだ」といわれた。私は福田と二年ばかり喧嘩したのはそのことだ。「内閣法を考えると、内閣法違反をするような閣僚で、おまえは総理を取れるか。次の総理に決まっているんじゃない」「そんなことできるか、三木はけしからん。俺を無視した」。それは田中逮捕を知らせなかったということだ。

私は後から三木に問い質したけれど、三木はうすうすは感じていたが、それ以上は稲葉に任せた。稲葉は検事総長に任せた。聞いているのは困るんだ。ある程度のルートは出るけれど、いつ逮捕するかせんかということまでは触らなかつたんだ。怖ろしいし、また、触ると危ないと思つたんでしよう。三木は稲葉に、稲葉は検事総

長に、承諾は与えておいたけれど、いつどうするかということまでは具体的には知らなかった。後から聞いてみたら、間髪を入れずに本人にあの事件は直結していたらしいな。真ん中に人が入っていなかった。秘書官と田中角栄だけで取り仕切っていたから、直線で行ったらしい。

伊藤 それはかつての造船疑獄の時の指揮権発動みたいな可能性は—。

松野 そんな話も、私は三木と二人の雑談の時に、昔こういうことがあったという話をした。田中の問題ではなく、吉田・佐藤のときの話を、三木と懇々としたことがある。三木は黙って聞いていた。「私はそうしろというのではない、こんなことがありましたよ、あなたもご存知でしょう。私はこちら側で見ていたが、こういうことだった」という話を、何日かかけてしましたね。三木は黙って聞いていて、「民主主義は、松野君、健全だからね」というようなことを言ったからね。あの頃は民主主義ではなしに権力主義、いまは違うんだという印象を受けたな。「吉田さんの時は権力政治だ、いまは民主政治だ。民主政治は健全だからね」という話をその話の後で聞いたから、それをいま振り返ると、吉田さんの指揮権発動は権力政治だった、その時といまの民主政治は違う、という判断だったんでしようね。確かに吉田さんの時は権力政治ですよ。指揮権発動で、検事総長から法務大臣から、内閣総辞職までやったんだから。

伊藤 福田さんや大平さんたちの間では、それは指揮権発動という可能性もあつたじゃないの、ということでは—。

松野 そういう気持ちがあつたと思う。田中派周辺には、昔は指揮権発動があつたじゃないか、幹事長の佐藤栄作でもやったじゃないか、ましてや総理大臣であつた田中角栄なら、という感じがあつた。それが三木おろしの原動力でしょうね。あのときは佐藤は幹事長だった、幹事長でも指揮権発動した、前総理なら当然の

ことだという感じが、田中派の中にはありました。しかし三木は、権力政治の時代といまの民主政治の時代と違うと考えていた。その感覚のズレが非常にあつた。それで田中派を原動力として三木おろしが始まったんだ。

伊藤 それに対して、解散、ということですね。

松野 解散、ということだ。

伊藤 本当に解散をしたら、どうなると思いましたが。

松野 私は分裂選挙だと思う。選挙事務所が二つできたと思う。党本部に三木、大平・福田・田中が別のところに選挙事務所を作つたでしょうね。公認料は党から取るけれど、選挙は別々でしょうね。私は間違いなく分裂選挙だつたと思う。

伊藤 三木さんは、選挙の結果如何によつて退陣と。

松野 私がその計算をしてみたら、どうしても三木の勢は五〇％は取れない。三対七だから。四分六分までは行くけれど、六対四にはならないと思つた。

伊藤 その当時、三木さんを支持しているのは三木派と中曽根派—。

松野 だけです。田中・大平・福田は向こうだ。やっぱり三分の一ぐらいしかない。三木派は小さいですからね。仮に選挙になつても、四分六か。出て来た代議士会では足りないでしょうね。しかし三木の精神だけは国民が認めてくれるかなと思つた。もちろん分裂はしません、選挙は分裂選挙でしょうね。どちらも自民党を名乗つた派閥選挙でしょうね。

伊藤 そうしたら挙党協の方は、いっそのこと解散をしたらどうか、というふうにはならなかつたわけですか。

松野 三木・福田の争いで、大平・福田が揃つて、三木さん辞めろ、と二人で官邸に来たわけだ。そこで二時間ぐらい会議をしましたよ。終わってからすぐ私が呼ばれていった。「どうですか。君たち、「三木に」辞めろと言つてどうするんだ」といったら

「二人でやるから心配するな」という。

「二人でやるって、どっちが先にやるんだ」と三木さんが聞いたそうだ。そうしたら福田が「いやなことを聞くな。おれたちが決める」と言った。三木さんは「いや椅子は一つなんだから、どっちが先なんだ、ということ俺は聞いてるんだ」。話ができていないものだから、福田が「いやなことは聞くな」という。「聞くな」といつたって、君、総理をやる責任者がどっちかわからんのでは、俺だつて辞められないじゃないか」といつた。二人とも黙って、頭を掻いて帰った。

それで拳党協に帰って、福田か大平かという話が、拳党協の中で揉めたわけだ。拳党協の中には代議士がたくさんおる。拳党協の中には田中派も入っているわけですから、さあそれで揉めたわけだ。

その時に不思議なことに、坪川信三という保利茂の側近が、私も懇意だけれど、翌日私のところに来て、「松野君、保利でどうだ」と言った。私が「どういうわけだ」と聞いたら、「大平、福田は、どちらにもまとまらない。拳党協の議長は保利茂だ。それで松野君、やれるだろうか」と言うんだ。

伊藤 暫定内閣ですね。

松野 暫定だ。これならまとまるかな、というが、私もさすがに返事をしなかった。「うーん、俺もな、いくら懇意でもな」「駄目か」「うーん」、それが本当にあつた。それはいかにも私物化している。天下国民に向かつて、暫定というのは場当たりだろう。それは三木も承知せんだろうな。命がけでやっているんだから。それは泣いて二人で手を握った後ですからね。それでその話はずぶられた。しかしそれは、その後の週刊誌にも出た事実です。それでまとまらない。だから三木が「どっちが先にやるんだ」といつた言葉に非常に困ったんだ。数は、大平も福田もわからない。大平が多かったかもしれない。

伊藤 田中派がどうするか、ですね。

松野 田中は太平に決まっていますからね。福田と田中はよくない、大平と田中は一緒だから。そんな事態が現実になりましたから、あの頃は百鬼夜行、どんな事態になつてもおかしくない。真剣になると、そういう案が出てくるんだ。いまは平和ボケだから、何も出てこない(笑)。ぎりぎりになると、人間の本性がちゃんと出てくる。政治というのは案外人間性があると思う。きれいな事を言っているうちは真剣じゃないんだ。煮詰まってくると、個人個人の人間の欲望と人格が出てくるな。保利さんもその気があつたと思う。なかつたら来ないだろう。保利さんでも、と言いたいくらいだった。その場にチャンスが来れば、二人が争うなら保利でまとめようじゃないか、と言えば一気にまとまったかもしれない。暫定という言葉をつくつければね。暫定と言つたつて、暫定という約束は守れるか。政治家の約束は守らない。なつてしまえばね。なるまでの約束で、なれば、それは別なんだ。いろいろなことが出てくるものだ。

伊藤 いまは小泉を倒して、誰がなるか。

松野 いま小泉を倒す迫力がある者はいませんね。ぼちぼち不満が出て来た。不満が出て来ても、それをまとまるものがない。まだカルメラじゃないけれど、膨れ上がらない。カルメラの水で、膨れ上がる勢力がない。いまのうちに早くこれをやらなきゃ。ただ不満はぼちぼち出て来ますね。

佐道 いまの、ぎりぎりのところで人間性が出てくるという点で言うと、椎名裁定の時も、椎名「悦三郎」さんの前に饅頭が置いてあるようなところもあつたわけですからね。

松野 あのとときも人間性が露骨に出ましたね。あのとときの四人は露骨だった。佐藤はしかし知っていましたね。私は佐藤に「どうも噂では三木という話があるけれど、三木じゃひどいよ、福田じゃなければ」といつたら、「まあ、松野、任せたらもう触るな。

任せたのにいちいち言う男らしくないぞ。どうなつてもいいじゃないか。しょうがない、任せただから」と言った。もうそのとき佐藤は三木だということを知っていましたね。私は「福田じやなければいかん、電話をかけて確かめてくる」と言ったが、「松野、もう言うな、任せたらしょうがない。任せる前に言うならいいけれど、任せたら言うな」。佐藤は前の日に三木だということを知っていましたね。だいたい椎名という人はみんなの意向を聞いていましたね。

小池 椎名の暫定案もありましたね。

佐道 自分が饅頭を食べちゃうということもあり得たわけですね。

松野 あれも洒落つ気が多い男だ。「みんなまとまらなかつたら、俺がまとめるよ。四が駄目なら五番目があるよ」と、そんなことを言っていましたからね。ユーモアはいいけれど、五番目が自分だという意味なんです。四人が言うことを聞かなければ、おれがやるんだ」、それは一つのユーモアで言っていましたね。本人はその気はもちろんありません。四人がまとまらなければ、と言っていた。この椎名案が破棄されれば、俺も立候補する、と言っていましたね。椎名案を破棄するならば、俺も第五の候補者になると。それはまとまると思っていましたね。根回しをよくしていただきましたよ。佐藤は全部知っていましたからね。三木じゃなければいかん。福田、大平は五分五分で争いが激しい。中曽根は少数だ。三木でまとめるしかないな、これなら仕方がない。暫定という意味で認めるだろうなという意味でした。

伊藤 三木さんはやる気だろうし、そのためにもいろいろやっただけでしょうね。

松野 椎名案の三木は、田中の金脈の後ですからね。それは国民の目をそらすにはいいということですね。金権の匂いがすると駄目なんだ。一番ガラッと変えるにはこれしかない。ちょうど今度

の小泉のように、ガラッと変えたんでしょね。再び橋本では、同じ利権というものが消えない。田中の利権を消すには、大平、福田と言っても利権の仲間がいますからね。三木が一番きれい。私は椎名裁定の基本は、金権というものに対する国民のアピール。いまの利権と権力政権に対する小泉のようなものでしょね。清潔というところで勝ったんでしょね。自民党は図体は大きいけれど、ときどき良識を取り戻すんだ。図体が大きくて掴み所がないけれど、大事なときには良識を取り戻す。田中の後の三木、今度の橋本、小淵、森の後に変わった小泉を持つてくる。良識をときどき取り戻すんです。これが長期政権の妙味じゃないかなと思う。体験から来るんでしょね。

■ ロッキード事件について

伊藤 まあ、目眩ましというか良識というのかわかりませんが、最初（笑）。それでいよいよロッキードの問題になるんですが、最初にロッキード事件というのはどういう事件だったと先生はお考えなのか、ちょっとお聞きしたいと思うんですけど。

松野 ロッキード事件というのは、自分の感じから言うと、これはアメリカのことです。アメリカの政争の中に出てきた。SECを使うなんていうことは、いままでなかった。証券取引委員会ですからね。ふつう検察庁を使うとか、あるいは裁判所を使うということはあっても、SECという委員会を使ったのは、アメリカの中でも政治の裏道に長けたことでしょうね。もとは何かと言えば、アメリカの政争から出て来たでしょうね。私は、戦時軍閥の争いじゃないかと思う。ロッキードとかグラマンとかヒューズとか、いろいろ兵器を日本に売り込んだのがたくさんいますね。軍事産業を背景とした政争じゃないかと思う。よくウォーターゲ

トトと言うけれど、それと同じようにSECから出て来た。そのため、世界中の高位高官に飛び火した。

伊藤 日本だけじゃないですね。

松野 日本だけじゃないんだ。世界中の高位高官に飛び火した。その一つが田中に来たんだ。

伊藤 やはり飛行機を売り込むときに、いろいろな資金が動くというの、一般的な常識だったんでしょか。

松野 一般的な常識ですね。単価がないんだから。兵器は単価がない。私もいろいろ関係したけれど、単価がない。こんな値段交渉はない。その代わり一所懸命、値段交渉を二年もかけてやるんです。じゃあ何をやったんだろうと思う。これは部品から何から、その単価はあるんです。タイヤの単価とか、それぞれ全部あるんです。いちばん大きなものは開発費というのがあるんだ。この開発費をどうかけるかによって、単価が倍になったり三倍になったりする。

伊藤 つまり何機売れたかということですね。

松野 その通り。私のところに一度売り込みに来たので、アメリカの単価を見せろといったら、二百機の単価を見せた。あのと私の想像では、一機が一二〇億〜一四〇億円だったと思います。それがアメリカの単価だという。「これは二百機の単価だな、二百一機はこれより安くなるはずだ。日本が買うのは二百一機目からだから、この単価よりも一割か二割安くならないとおかしいじゃないか。これだけのランニングができていんだから」といったら、笑っていましたがね。その通りになったかどうか知りませんが、私はその話をしたんだ。そんなものなんだ。開発費をどうかけるかによるんだ。向こうの計算だと開発費がべらぼうにかかっているんだ。開発費がだいたい五十機分ぐらいかかっていますね。一機百億の飛行機するときには、五千億ぐらいかかっている。五十倍ぐらいかかっている。だから五〇倍にかけるか、二百倍にかけ

るかによって、単価が変わってくる。

伊藤 それは六百機も七百機も売れば、莫大な利益になるわけですからね。

松野 それからその後で、大臣、それもいいことを言っていたのですが、もっと危ないんですという。部品がまた別だそう。飛行機は安く売って、部品でうんと取るところがあるというんだ。部品の単価まで決めておくと駄目なんだ。飛行機は安く売って、部品を倍取ってくる。部品がなければ動かないに決まっているんだから。だから兵器というのはめっちゃくちゃに難しいというんだ。めっちゃくちゃに難しい。単価計算、いまの日本に売ってくるアメリカの軍用品、単価計算がわからないですよ。いちばん大きいのは、開発費をどこにかけるかというのが最大のものだ。これで五十機分ぐらいの開発費がいるわけだ。だから五十機以上やらないと採算が合わない。しかもそれも失敗したり、成功したり。そこで各会社で争うわけだ。ロッキードだ、グラマンだ。

伊藤 ロッキードの会社は、日本で売り込むときには、日本の商社を通じて売り込むわけですね。

松野 代理店。グラマンは代理店がある。まず最初に、日本の代理店を向こうは選ぶ。その選んだところと契約する。それで値段を決め、単価を決めて交渉するんですね。イギリスも来たんですよ。

伊藤 そのときに、いったいどこに働きかけたらいいか、ということがありますね。

松野 それは日本の商社が考える。だから丸紅は政治家をずっと当たって、それで田中のところに行っただけでしょうね。丸紅の社長は松山「広」ですね。松山が政治家を知っているから。松山も誰がいいか、いろいろ調べるんです。秘書官からずっと調べていく。それで田中がいいと思ったんでしょか。

伊藤 裁判の過程で職務権限云々ということが問題になりました

ね。だけど、総理大臣に権限がある。

松野 総理大臣の権限を認めた裁判でしたね。あれは運輸大臣の所管事務だ。所管でも、総理大臣に権限があるか、これが焦点でしたね。所管の運輸大臣は罪にならなくて、総理大臣になった。これが正しい裁判でしたね。所管大臣は金を取っていなかったんでしょね（一同笑い）。飲み食いがあったでしょうね。あのときのロッキードと民間飛行機は、ほとんど同じだったそう。私は日本航空のやつがいたから、どうするんだ、性能から単価から全部同じだ。よくまあこんな同じ飛行機を作ったと思うぐらい同じだ。ただ製造が一年早かったか遅かったかだ。それを、両方が揃うまで一年間延ばしたところが問題だ。それは運輸大臣が所管なんですからね。決定権は内閣にあったんでしょね。そう見たんでしょ。運輸大臣が決定するが、その決定権は内閣にあるという解釈でしょうね。

また事務次官がそうですね。閣議報告事項だから、閣議報告事項は総理大臣に権限がある。だから事務次官というのは、大臣に任命権がある。ただし閣議報告事項なんだ。そうするとそれは内閣の権限になるわけだ。それでしょね。飛行機の機種選定について、閣議決定事項なんだ。運輸大臣が決定しても、閣議で了承されなければ。そこが総理大臣の権限になるんでしょね。閣議決定事項ということは総理大臣の権限なんだ。運輸大臣は推薦権があるけれど、決定権は内閣ということをおの判決は採ったんでしょね。

伊藤 一般的な話ですが、これは向こうで発覚して事件になりましたが、実際にそれまでだつてたくさん兵器の売り込みがあったわけですから、当然リベートというのは。

松野 いままではヒューズとかね。私のときに一番大きな争いで問題になったのは、三次元リーダー。ヒューズとなんとかというところで、だいたい問題になった。そのときは大臣は志賀健次郎だ、

志賀節のお父さん。志賀が防衛長官のとき、たしか私は部外者でしたが、だいたい揉めた。それは三次元リーダーというもので、全部につけると四百億と二百六十億かかる。四百億と二百六十億でだいたい揉めて、政治家もそれにだいたい介入して、賛成・反対があった。

それが巡り巡って私が防衛長官になったとき、性能が悪くなったといつて、改修するという。改修する値段がまた二百六十億なんだ。なんだ、これは五百二十億で買ったんじゃないか。それから四百億の方を買った方が安かったんじゃないか。私は偶然そのとき防衛長官だったからわかったわけだ。「これは揉めたやつだろ」「安い方に志賀大臣はお決めになった」「だって俺の時にまた倍近くかかる」「そうですね、兵器ってこんなものです」。私は揉めた時は部外者だけれど、私が防衛長官のとき、再補修の単価がわかったわけだ。それで私はいろいろな話を聞いて、兵器の値段がどうして決まるかという、わからない。だからアメリカが納入する飛行機の値段を単価にせざるを得ませんと言った。ただし開発費はこれに上乗せされます。だからアメリカで買った単価プラス開発費の分税金を入れたものが兵器でしょう。それを基準でやるしかありません。時代が違うもの。アメリカが使っているから日本が買うときは六年ぐらい後ですからね。六年間の古物を買うんじゃない。作るものは新品を作るんです。そんなことで兵器というものほど難しいものはない。鋳型でもつぶすような鋳型をもう一回起こして作るわけだ。そういうものが安くできるわけだから。それを第三国に輸出するのはほとんどそうですね。古い鋳型を作り直してつくるんでしょね。それが東南アジアとかに兵器が売り込まれる。だから兵器ぐらいわかんものはない。またこれは比べようがない。シミュレーションしてやるだけです。

もう一つ大きなのはパイロットだ。パイロットの養成は大変です。飛行機が変わるたびにしなければならぬ。その飛行機を買

つたら、パイロット養成に四年ぐらいかかるでしょう。これはまたアメリカに行つて養成しなければならぬ。日本で二百時間なり千時間なり飛んだのを、また向こうに連れて行つて再教育だ。戦闘機用のパイロットというのは何億もかかる。約六年から七年。飛行機の値段よりも、人間のパイロット養成は大変だ。

しかも高速だから部品の消耗が激しい。タイヤも、四、五回着陸すると取り替えてすからね。自動車タイヤなら一年ぐらい使えが、飛行機は三、四回着陸すると、もう駄目なんだ。まあ、防衛費というのは問題が多い。

いちばん安全だったのは海軍の船ですね。世界でも船は日本は負けませんね。ただ搭載兵器がべらぼうに高い。駆逐艦一つで、搭載兵器は二百億ぐらいかかるでしょうね。船よりも搭載兵器が高い。それはミサイルを入れるものだから、ミサイルは性能が素晴らしいものをアメリカから買わなければいけない。搭載兵器は日本ではとてもできません。兵器も日進月歩で、五年もすれば良くなる。また新しいのを入れなければいけない。それでいまの精鋭品に結びつくでしょうね。いつ換えるか。日本だつていまわからんでしょね。いつ戦争があるか予測できないんだから。予測できないものを準備するんだから、予測できない。それだけ予算単価が、飛行機はわからないでしょうね。真剣に考えれば考えるほど、良心を持ったものは契約ができないだろうな。契約してから完成するまで六年ぐらいかかるんだから。それまでに人事が替わってしまう。

伊藤 いま日本が東南アジアで商売するときに、政治家へのアプローチは絶対に必要だと言われておりますね。

松野 ええ。

伊藤 これは別に日本と東南アジアとの関係だけではなくて、世界的にかなり大きなものをやるときは、必ずそういうことが起こるわけですね。

松野 起こりますね。日本の場合、一番多いのはODAですね。日本政府が出すんだから。日本でいま問題なのは、兵器ではなくてODAだ。ODAぐらいわからんものはないでしょうな。真面目にやっているのはあるけれど。ほとんど金でやるよりも物で援助しますからね。ダム作つてやるっていう、日本のダム技術、ダム工事が行くんだから。労賃だけは向こうでしようけれどね。そうすると熊谷組とかが出ていく。これは日本で指定しますからね。入札があるのかないのか私はわからんが、入札もどうだろうと思うな。外国まで行つて調査してもわからない。ただ見てくるだけでしようね。あとは出来高払いみたいなものだ。そこでODAが問題になるんだ。会計検査院だつてODAには手が着けられない。数が多くて、国情が違う、政情が違う、三年と言つても、政権が替われば向こうは相手にしませんからね。ODAぐらい無駄なものはない。いままでに累積六兆ぐらいいあるんじゃないですか。一番多いのが中国でしようね。中国は二兆ぐらいいあるでしょう。

小池 中国の場合は輸銀も使つてさうとうやっていますからね。

松野 それで軍事力を強化しているんだ。ODAぐらいね。福田はODAを非常に嫌っていましたね。福田は中国のODAというと、IMFを通してくれという。要するにIMFの保証をとつてくれということだ。福田は直接が嫌いだつた。IMF経由だとIMFの保証みたいなものだ。効果があるなしは別として、福田は非常に直接投資を嫌つた。IMFに投資するならいい。再投資ならいいけれど、直接はいやだ、福田はわりにさういうことを言いましたね。

それがいま外務省から出てくるかどうか知らんが、外務省の不正事件が増えれば、ODAに火がついたら民間に飛び火するでしょうな。そこに政治家が介入するところがあります。それが〇〇議員連盟というものだ。議員連盟がODAに関係するから。〇〇議員連盟とか△△議員連盟というのはみんなそれだ。ODAの推

進派だ。

伊藤 やはりそういういろいろな形でのコミッションで、政治資金に流れる部分がかなりあるわけですか。

松野 かなりあります。それで政治資金規正法というのは年中変わっていますけれど、昔はほとんどザルみたいでしたから、噂では一番ひどいのはフィリピンでしたね。フィリピンの賠償ということで、賠償とODAがくっついて。

伊藤 額でいえば小さいですが、口利き料とかなんとかという形のものから、日常のつき合いでもお札とか、いろいろなことがありますが、それがかなり大がかりになるんですね。

松野 だいたい自分の懇意なものの中に入れてるんです。商社を入れたり、土建屋を入れたり、農機具メーカーを入れたり。たいていそこに入れるんです。入れた業者から政治資金を取るわけだ。ODAからは取らないわけだ。

伊藤 もちろんそうでしょう。ODAから取ったら大変だ。

松野 業者を入れて、入れた業者から取るから間接的になる。ODAの業者であるから、日本の業者もわからんですね。だから熊谷組なら熊谷組を入れるんだ。それで熊谷組から政治献金を取る。熊谷組は日本のダムもやっているんだから、わからんわけだ。そういう政治献金なんです。

伊藤 この場合は丸紅。

松野 商社が入ることもあります。丸紅が入れば丸紅が仕切つてやるから、丸紅から政治献金を取ってしようね。また入れてもらえば、お礼をするでしょうね。

伊藤 ロッキードの場合は、丸紅が間にいったわけですね。

松野 丸紅がロッキードの代理店だから、丸紅がコミッションの中から出すでしょうね。丸紅がロッキードから幹旋コミッションを何十億と取るんだから、その中から出すでしょうね。

伊藤 そうしたら、それは丸紅対田中さんの問題であって、ロッ

キード直接ではない。

松野 もちろんそうだ。

伊藤 だけどロッキードは、丸紅がどういうことをしたかということ、いちおう報告を受けるわけですか。そうでなければ証券取引委員会がー。

松野 丸紅がロッキードに説明するわけだ。丸紅はコミッションはこれだけしか取れない。しかし私の方は田中さんにこれだけの努力をして、これだけのことを約束しているから、それは別途だという。そうでないと丸紅が損しますね。だから丸紅の手数料は、田中のコミッションを入れたものがコミッションになる。だからロッキードの方は、それを承知したかどうかで、コーチャンが出てくるわけだ。それで、外国に検事が出て、コーチャンにそれを入れたのか、入れないのかということを確認したんだ。そうするとコーチャンは入れたという。丸紅の手数料はこれだけ、田中のコミッションはこれだけ、合わせてこれを丸紅に渡したということになったから、犯罪行為になったんでしょうね。代理店と向こうとの手数料の交渉に入ってくるわけだ。丸紅の方の手数はせいぜいそんなものでしょうね。五億ぐらいの手数料で、それを全部田中に渡して、丸紅の手数はゼロでしょうね。それが、SECから出たわけだ。

伊藤 田中さんは出るはずがないと思っていた。

松野 SECなんて出るものでないと。検事局なら別ですけれど、SECから出るなんていうことは、私も気がつかない。やけにSEC、SECとやったのは、アメリカの政争の具にそれが供されたんだ。

伊藤 あの時期だけですか。

松野 あの時代だけ。SECはそんなものではなかったんだ。海外株式投資委員会みたいなものだからね。検察ではなかった。それが使われたんだ。それで諸外国の大統領とか首相が狙われた

わけだ。私は兵器産業の争いだと思う。あのときは兵器産業がめちゃくちゃに多かったときですからね。産業の中で最大の産業は兵器産業だったでしょうね。あれ以来、SECは何もないんですよ。あの時期だけ使われたんでしょうね。

小池 装備の再編期だったようですね。あの後いくつか会社がつぶれますから。

松野 それでSECの委員長もみんな替わりましたね。だからこの時は政争だったと思う。民主党も共和党も、業者を巻き込んだ争いでしょね。アメリカという国は怖い国で、非常に明るいけれど、ひとたび出るとみなバラすからね。バラすことを正義だと思っている。日本ではバラすことは不道徳なんだ。アメリカではバラすことは正義なんだ、捜査に協力するという意味なんだから。日本だったら、そんなことは男らしくない。武士は相身互身だという。知っていることでも黙っていることが美德なんだ。アメリカは怖いものだと思ったね。

伊藤 この時の、小佐野「賢治」という人はどういう人ですか。

松野 私は小針「曆二」を知っていますが、ずっと田中を見て応援しておりましたね。小佐野の名前が一番出たのは、田中大蔵大臣のとき、いまの満鉄ビル、アメリカ大使館の分室がある、文部省の真ん前、あそこは児童公園だったんだ。虎ノ門病院の前。小池 三井商船ですか。

松野 いま大きなビルが建っているでしょう。文部省の前、虎ノ門病院の前。後ろが金比羅さん。

伊藤 いま三井商船のビルですね。

松野 あそこが昔は児童公園だった。それを田中角栄が民活という名前で、その児童公園を譲ったんだ。それであそこにビルが建った。それも大蔵大臣が国有財産で処分して、そのはんこうをもらったのが小佐野だ。前から小佐野は田中を目してきたわけだ。これは利権に使えると思ったんだろう。そこで大蔵大臣になった

ら真つ先にそれをやらせたんだ。それが成功して、あそこに大きなビルができた。池田勇人が東京駅前鉄鋼ビルをつくった。あれを作ったのが池田大蔵大臣のときなんだ。

伊藤 国有地だったんですか。

松野 国有地ではありませんが、統制時代で鉄がなかったとき。特に都市復興という名目をつけて、初めて大きな鉄鋼ビルができた第一号なんだ。統制時代で鉄材がない。政府の許可がないとつけない。公共性のあるものしかつくってはいけない。そこで東京都市開発という名目で、鉄鋼ビルをつくらせたのが、吉田内閣で、池田勇人が大蔵大臣の時だ。それと同じように、田中角栄が満鉄ビルという名前のビルを建てた。いま三井ですか。小佐野というのはいまそういう政商なんだ。小針というのはいまですが、これも政商なんだ。もつと古くはナガラツパ「永田雅一」(伊藤 大映)。こういうのは政治家にくつついていて、政治家を上手に使って、その政治家が権力につくとちゃんと持つていく。

小針は河野「一郎」にくつついていた。それで那須野開発をした。小針が持っているあそこは国有林なんだ。小針は国有林の裏側を持つているわけだ。裏側は陰だから、表側と取り換えたい。国有林と裏側の自分の民有林と取り換えた。それで私たちは当時「反対だから、河野に「けしからん、なぜやったんだ」と追及した。「林野庁は森林を太らせるためです。こちら側「国有林」は太らないんです、こちら「小針の持つ森林」は太るんです。太る方と太らない方を取り換えたんだから、林野庁の目的は達する」という。小針は太る方は要らないんだ、温泉の方が要るわけだ。だから林野庁は使命として、林野の太る方を抱えた。こつち「小針」は太らないが温泉の出る方を取った。目的が違うから、交換するのは当たり前だ。等価交換した。それがいまの那須高原のあの一帯だ。林野庁の目的は森林を増やすことになる。こつち「国有林」は森林が増えない。こつち「小針の森林」は増える、増えるだけ

ど温泉は出ない。温泉と森林と取り換えた。その詭弁を弄したのが小針であり、鉄鋼ビルの増岡であり、小佐野である。そういう政治家を上手に使う財界人がおるわけだ。しかもその理由は、非常に巧妙な議論なんだ。

伊藤 聞けば、もつともな話ですね（笑い）。

松野 私は質問した方だから。私は農林委員会で河野に、「わずか五十円のところと、五百円ぐらいと、価値が違うじゃないか。どうして取り換えたんだ」と追及した。森林は坪五十円ぐらいですよ。こっち「国有林」は五百円か五千円する。しかし「温泉が出て、林野庁は何もならない。木が増えないじゃないか。こっち「国有林」は灌木ばかりで木が増えないんだ。増えるところと増えないところを交換したんだ。それは各人お使いになるのはいい。目的が合うから話がまとまったんだ。温泉がなければ向こうは買わないだろう。目的が合うからいいじゃないか。向こうは温泉で使う、こっちは森林を使う。当たり前じゃないか。林野庁が温泉を持っていて何になる」と聞き直る。

伊藤 それは攻めにくいですね。

松野 攻めにくい。林野庁が温泉を持っていてどうするんだ。温泉宿をやるか。それは規則違反だ。そういう政商というのは、うまく理屈をつけたものが出てくる。東京の復興第一号ということ、鉄鋼ビルをつくった。これも理屈がつくわけだ。鉄が少なくて、政府の許可がないと使えない。少ない鉄鋼を有効に使うということ、それが目的だ、それには有効に都市開発の第一号として東京駅前に作ることが当然だ。それがたまたま増岡という、そこに作る資本家がいたから、それに任せたんだ、何が悪い、ということになる。そういう理屈を、政商は上手に国民につける。それがうまいんだ。

そういわれると困った。本当は十倍ぐらい違う、価値は百倍ぐらい違うんだ。五十円と五千円ぐらいの違いだ。そういったら、それは、政府は何も金儲けするんじゃない。林野のためにやるん

だ、何が悪い。困ってね、攻めにくい。二日ぐらいで終わっちゃった。林野庁は温泉を掘る役所ではないんだ。森林を太らせる役所だ。森林が太るところと交換して何が悪い。これには困った。観光局なら温泉もいい。俺のところは林野局だという。それが小針だ。そういうふうにな上手に使う者がおるんだ。それが政商ですね。だから悪いだけじゃないんだ。ちゃんと理屈がつくようになってる。

■田中と三木

伊藤 このロッキード事件は、田中さんが問題ですね。三木さんは、この田中さんに対して、知っている知らないの問題は別にして、敵愾心があった。

松野 もう根本的に田中政治に批判的でしたね。田中が総裁になるときも田中嫌いでしたね。佐藤の後が田中ですが、佐藤の後は福田の方に三木は傾いていましたね。田中ではなくて、福田応援の方に三木は行ってましたね。

伊藤 やはり田中金権政治みたいなものは、前から問題にしていたわけですか。

松野 田中の方には大平がついていた。田中・大平、福田・三木が争ったのが、角福戦争だ。三木はだから福田についた。大平は田中についた。そっちの方が数が多いんだ。

伊藤 田中というのが金脈というか、政商を使ったり、いろいろなテクニクを使って政治資金を膨大に集めるという手法を開発するわけですね。

松野 それに常に抵抗していたのが三木でしたね。三木が政治資金規正法をつくったのは、その長い思想の現れで、総理になって真つ先に政治資金規制法をつくったんですね。それは長い間の金

権政治を非常に嫌っていた。「政党は内部から崩壊するんだ。外からはつぶれない。内部は何かという利権と金だ。金を使うことが一番悪い」、これは彼の政党人として長い思想でした。その反対の代表が田中だった。だから田中と三木は常に対立的な思想を持っていましたね。

伊藤 だけど政界というものは、どこからか政治資金を得なければならぬ。田中さんのようなやり方と、必ずしもそうではない政治資金の作り方が。

松野 三木は本当に政治資金は少なかったですね。三木派はお歳暮・お中元は三十万ぐらいしか配らなかつたでしょうね。田中のところは三百万だったでしょうね。三木はそれを見ながら、「金が欲しいものは田中派に行くが、金が要らないという政治家もあるんだ、それが俺の方に来てくれればいいんだ」といつていた。それを是認しながら彼は抵抗してましたね。「そういう政治家ばかりではないんだ。金がなくてやる政治家も必ず生まれる。それを俺は待っている」と。

伊藤 田中さんのお金に対する執着と、ロッキード事件というのは一連のものですか。

松野 当然のものでしょうね。当然そういうものに執着したでしょうね。ロッキードでなくても。金は金を必要としますから、私はいつかは倒れたと思う。金額がだんだん増えていくんです。ロッキードがなくても、田中はいずれ苦しんだでしょうね。結局自分の首を絞めてしまう。金を使い始めると、一が十、十が百、百が千になっていく。その限界に来ていたでしょうね。そこでロッキードに手を出した。SECが外国の安全地帯と思ったのも事実でしょう。聖域といったらおかしいが、日本の検察の外であることは間違いない。そこで田中が油断したかもしれない。その外が、SECで中に入ってきたものだから。

伊藤 三木さんはこの事件のために、例えばアメリカから資料を

出してもらおうように交渉するとか、いろいろやったわけですね。

松野 たしかそのときの外務大臣は宮沢「喜一」じゃなかったかな。それは稲葉と宮沢でやって、三木はそれを認めたでしょうね。稲葉が三木に持ってきて、三木が外務大臣にいつて、それを認めてやれよ、と言ったことは事実でしょうね。だから検察から要請があつて、稲葉が認めて、三木が認めて、宮沢が認めたんでしょね。そんなもの認めなければよかつたじゃないか、という批判もあるけれど、しかし検察が持つてくるものを拒否するということは政治家としてはなかなか制約ですよ。検察に介入ということになる。拒否することは介入ですからね、指揮はしなくても。これはしかし初めての問題で、よく検察はそこまでやったと思う。新しい道をよくやった。ふだんならそこで自然消滅だったでしょうね。それをやるというのは、検察がよほど自信があつたのか。

もう一つは海外通信がすでに田中の名前を出してしまつた。それで日本の検察もそこまで行つたと思う。日本の検察が動く前に、向こうでは田中の名前がどんどんニュースに出て来たんだから。飛行機から田中が出てくるのが、漫画チックに描いてあつたそうです。それで日本の検察もやらざるを得なかつた。アメリカでは田中という固有名詞も出ているのに、日本で海外捜査を打ち切るということとはしにくかつたでしょう。

伊藤 これは田中逮捕、有罪というところまで行くだろうな、ということは、いつ頃からお考えでしたか。

松野 私は逮捕ということを知ったときは、もう有罪だと思つた。逮捕で無罪ということはあり得ない。私がうすうす考えたのは、田中が辞めた後でしょうね。辞め方のあわただしかつたこと。粘らなかつたですからね。自分で辞めましたからね。何かあると思つた。本人が一番早く感じたんでしょね。それから『文藝春秋』でしたか、立花隆が細かく書いた。あの辞め方の早かつたこと。何かあるな、という感じがした。ロッキードだとまでは気がつか

なかった。本人があわてて辞めたのが早かったこと、それから隠居みたいに蟄居するのが早かったこと。

伊藤 当時の政界で田中派の力は非常に大きいものがあつたでしょう。

松野 こっちは田中が退いたときも政治家を替えようとしていましたね。彼は院政を布きたかつたんでしょね。表に出にくいよ

うで、自分自身で用心したんでしょね。

伊藤 三木内閣の時も、田中派を無視することはできないでしょう。

松野 ところが田中はほとんど発言がなかつたですね。重要閣僚を入れませんでしたからね。逮捕じゃないのに。だから何かあつたと思う。三役に一人も入っていないし、入れようとしなかつた。田中派の閣僚は誰か入っているでしょうが、重要閣僚にいませんでしたね。そのときも田中自身が蟄居みたいで、田中派の要求もなかつた。すでに現職の時から金権のそしりを拭いきれなかつた。すでにあのときから静かでした。大平、福田ということ

はあつたが、田中派は後継者に入らなかつた。候補者にも入らなかつた。

伊藤 田中派の内部に後継者がいないでしょう。ときどき二階堂「進」というのが。

松野 二階堂がおつたし、竹下「登」もおりましたね。二階堂が第一の後継者ですが、二階堂は組上に乗らなかつた。田中は金権で、田中派はすでに死に体でした。

伊藤 先生は田中派の人たちとはあまり接点がないんですか。

松野 いや、二階堂は親しいですよ。竹下も親しい。

伊藤 二人は袂を分かちますね。

松野 橋本「龍太郎」も親しい。梶山「静六」なんかも親しい。ただ、田中と親しくなかつたものだから、自然に隣の部屋でした。同じ部屋には行かなかつた。私は田中というのは、何か起こ

すという感じがした。

伊藤 有能は有能なんでしょう。

松野 有能、雄弁、努力家。ただし危ない。落ち着きがない。だから一緒に政治献金をもらったことはないですね。一緒にもらいにいったこともない。佐藤とは一緒におつても、右と左で、同じ列で行動しませんでしたね。田中は常に何か利権がついていて、道路特別法でガソリン税をやろうとかいうと、これは何かあるんじゃないかと思つて、あまり賛成じゃなかつた。田中と組んで政治行動をしたことはほとんどないですね。

伊藤 時間でですね。

松野 だいたい三木まで済みましたね。

伊藤 三木の終わりの方ですね。

松野 選挙では負けなかつたんですが、勝たなかつた。負けもしないが勝たなかつたために、三木は辞めなければいけない。そこで三木は最後に総裁を辞めるとき、自民党の党大会で辞任の挨拶をしたわけだ。なかなか演説は上手だつた。その答礼の挨拶を私にしてくれと指名が来た。松野にやつてもらいたい。私はたくさん答辞をしました。そのときに誰かの話で、「ミネルヴァの鼻は夕暮れをもつて飛び立つ。まさに三木さんの功績はこの言葉の通りだ。いまこそ三木の真価が現れるだろう」と、そんな言葉を引用して答辞をしたんですね。三木さんは自宅で涙を流していた。それから私の三木に対する責任と感情がふくらんだ。それまではそうでもなかつたんですね。要するにきれいな事をいう政治家だと思つていた。「金権は、松野さん、よくない」という。本当にきれいな事の政治家だ。それがみずから身を守るし、それを実行するし、最後には自決するようなどころまで来ていたから、それで三木という人間を見直した。

伊藤 だからといって三木派になつたわけではないでしょう。

松野 三木派には一切入らない。私は福田派だ。

武田 そのところを聞かなければいけませんね。

伊藤 福田派を追い出されたわけではないんですね。

松野 いや、除名はしませんでしたね(笑)。福田と大喧嘩したけれど、除名はしない。福田も長い同志だから、佐藤の時に、田中に行かずに福田を応援したのが私たち十七人ですから、どちらかというと思人でしょうね。私は福田の思人だと思うぐらいだから。

伊藤 その間に行かないと。

松野 行かないけれど、私は君の思人だよ、日光の円蔵だ、ぐらの腹でおるから。喧嘩しても翌日は赤プリに行っていましたからね。彼は煙たい顔をしているけれど、いやとは言えないね。

それから小泉は、三木のその心境に一度は立つだろうと思う。遺書を書くぐらいの心境になったとき、本当の政治でしょう。私は三木の遺書だと思ひ込んだ。この人は自決するのではないかと思った。

伊藤 次回の日程を決めてよろしいですか。

松野 私はもうあなた方とおつき合いし始めた限り、生きている

限りおつき合いますよ。週刊誌とか、つまらんものばかりおつき合いしているから、真面目な方とおつき合いするのはあなた方だけだ。

伊藤 週刊誌のおつき合いは大変じゃないですか。

松野 いい加減なものですよ。裏なしの話だから。裏を取らなければ。あなた方は裏表の話だけれど、週刊誌は裏なしですから。表だけだから(笑)。

伊藤 週刊誌の記者はどうですか。勉強してきますか。

松野 あまりしていませんね。だから裏なしで平気なんですよ。

伊藤 ただ面白ければいいということですか。

松野 面白ければいい。そのつもりでこっちも応対するんだ。面白くしゃべるんだ。事実と違って、ああそうだったか、記憶違いだ、と言えはいい。あなた方は表裏に印刷してあるけれど、あそこは表だけしか印刷してないんだ。一万円札の表だけですからね。裏のない一万円札だから。

伊藤 ちゃんとまた後で追及しますので(笑)。今日はどうも

ありがとうございます。

松野頼三 オーラルヒストリー

第12回

[2001年9月27日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員) (於：松野頼三事務所)

■高祖議員の辞職とテロ対策

松野 あれ「これまでの速記録」を読み直してみると、オーラルヒストリーは怖ろしいものだと思うって、私も最近身震いしているんです。

伊藤 まだこれからいろいろ手を入れるんですから、大丈夫です。

松野 いや、もうそれこそ大変なものだ。字というのは怖い。テレビよりも字が怖い。

伊藤 そうですね。テレビは消えちゃいますからね。

松野 テレビは話題をつくるだけだね。テレビは話題だけだけれど、これは残るからね。

伊藤 週刊誌も売れたらそれつきりですからね。その時売れなければ、話にならないから。

松野 週刊誌なんて売らんかなで、あとの責任はないから。

伊藤 「おれはそんなことを言っていない」といくらでも言えますよね。「あれはもう記者が勝手につくったんだ」と（笑い）。本当にそうなんだ。新聞記者なんか取材して、そんなこと言った覚えがないのに、たくさん言った中でこの部分だけ取って彼らの文脈の中に入れて使うから。

松野 それから、そのうちに記者がいなくなったとかね。一年前にもう記者を辞めましたとか言うので、追及のしようがない。

まあしかし、世の中はいろいろなことが起こりますね。今度はテレビの力で、飛行機あの画面「二〇〇一年九月十一日の全米同時多発テロ事件」がいつべんに勝敗を決めた。ただニュースで大きなビル「世界貿易センタービル」が被害を受けたならいいけれど、あれはみんなが見ているからね。崩れるのも見ているでしょう。あれはかつてない、湾岸戦争以上に大きなことですね。

伊藤 映画の一シーンですね。非常に現実的なんだけれど、現実

離れている。

小池 SFXを見慣れているせいなのかもしれない。

佐道 映画なら映画だと思って見ているけれど、あれは現実ですからね。

松野 昨日あることで、新しい慶應の塾長に会いましたら、今度やさかに弁護士を増やす、慶應も手を挙げる、とか言っていましたね。大学院ですね。

小池 ロースクールですね。

松野 ええ。あれで受験の資格を取るんでしょう。

伊藤 全国の法学部という法学部が、みんなロースクールになっていつているからね。そんなに弁護士を増やして、弁護士のために仕事をつくってー。

松野 私だって法学士ですよ。法学士の称号を持っている。昔は税理士ではなしに、税理士の前になんとか士というのがありましたね。

小池 公認会計士ですか。

松野 もっとやすいもの。商科の単位をとると、すぐくれるんです。

伊藤 しかし、小泉さんも大変ですね。次から次へいろいろなことが起こる。

松野 大変。私がいっている話するだろうというけれど、いま話したって駄目なんだ。総理大臣は、ふだんの実績を持ってから総理になるんだ。総理になってから勉強したって、それはかえって間違う。総理になる前に勉強して総理になればいいので、なっかってから勉強するようではもう間に合わないんだ。試験場に入る前に勉強していなければ駄目だ。試験場に入ってから勉強するやつは、カンニングするしかない（笑い）。だから、総理になってからは「私は小泉氏に」一切言わないことにした。言うて誤る。

佐道 内政でも外交でも、昔の何年分かの問題がいつべんに押し

寄せてくるという感じですね。

小池 特に外交は、外務省が機能しないから辛いんじゃないですか。「田中真紀子」外務大臣が機能しないから。

松野 ひどいものですよ。接待費ばかりやっているといるからね。

伊藤 高祖「憲治」議員が辞職に追い込まれたでしょう。やはりあれは橋本派にとつて非常に大きな打撃ですかね。

松野 やはり相当な打撃ですね。あのグループは毎年橋本派が独占していたから。高祖が特に悪いと思うのは、あのために高級官僚がみんな逮捕されて、退職金を没収されて、えらい目に遭ったからだ。早く辞めれば、検察も下っ端のほうで済ませたんです。残るからどんどん上に行ったでしょう。「三嶋毅」近畿郵政局長までいった。あれは高祖が悪いと私は思う。公務員は早く辞めれば、それで捜査は済んだんです。対象がなくなれば、選挙違反とというのはそんなに深くはやらないんです。高祖がいる間は、上までやるわけだ。

伊藤 でも野中「広務」さんあたりは抑えていたわけでしょう。

松野 抑えていたのは、自分たちのためにやっていたんでしょうね。私なら、すぐ辞めろと言うでしょうね。そのためにどれだけ現職官僚が被害を受けるか。いま辞めれば、すべての捜査は終わるんだ。それは高祖君が現職官僚を使っただけ間違っていたと思う。だいたい現職を使っちゃいかなんですよ。いま辞めたって、近畿郵政局長なんてどうとう逮捕されましたからね。逮捕した以上、起訴しないわけにはいかない。起訴すれば公務員の身分に影響するんだ。

伊藤 まあ、将来はないですね。

松野 馬鹿なことをした。高祖というやつは馬鹿だ。次に繰り上げ当選になった中島「啓雄」というのは運輸省でしょう。

小池 JRでしたね。高祖は岡山出身でしたね。橋本「龍太郎」さんなんかも関係があるんですかね。まあ近畿ということ、野

中さんは思い切つてかばつてくれたわけですからね。

松野 野中なんてね。

伊藤 野中さんと先生は接点があるんですか。

松野 ほとんどありません。自治大臣になった時、飛行機の中で会いましたね。その時初めて名刺を持って挨拶に来ました。初めは「野中君、しっかりやりたまえ」といって、肩を叩いて、それっきりです。

伊藤 やはり一時期は、自民党の中で野中という人は非常に大きな力を持っていたんでしょう。

松野 持っていましたね。野中の政治力の背景は公明党ですから。京都の府会議員をやっていた頃、公明党と一緒にやっていたから。それで、橋本、小淵「恵三」、森「喜朗」内閣での公明党との連立の功績で伸びた男ですからね。

伊藤 公明党なんていうのは籠絡しなくても寄ってくるんじゃないですか。

松野 寄ってくるんでしょう。

佐道 特にいまはそうですね。

松野 一回タイの刺身を食うと、イワシは食えないんだ。人間はみなそうだ。一度権力の味をしめたら、夢よもう一度となる。もうタイの刺身で座敷に座っちゃったから、いまから屋台のラーメンは食えなくなる。

小池 護憲平和政党だったんですけれどもね。

佐道 護憲はどこへ行っちゃったんでしょう。

小池 どこへ行っちゃったんでしょう。それから特に今回の自衛隊派遣は。

伊藤 社会党がああいうふうになったんだから、ましてや公明党は（笑い）。

武田 でも昔は公明党は共産党と密約したわけですからね（笑い）。

小池 創共協定「一九七四年十二月二十八日」までやりましたからね。

松野 まあ、私のいろいろな話は小泉が聞いているとみえて、時々側近から、この間のはこうだった、ああだった、と報告を受けますけれどもね。本人に私は言っているけれど、私は直接話をしないことにしている。すると、自分も困る、おれも困る。自由に批評ができなくなる。私の話をよく聞いていますと言ってくれど、聞くのは自由だが、私は言いたいことを言っているだけだよと言っている。

伊藤 小泉さんは、しかしそんなにたくさん側近がないでしよう。

松野 いない。この間アメリカへ行く前に、いま何かというから、アメリカが一番求めているのは、日本国内のテロ対策をやってくれということじゃないか、それを一番アメリカは望むんじゃないか。総理大臣の使命は日本国民の生命財産を守ることだ。それを担いで大事にするには、国際的なテロ反対の支援は第二義的だ。一は国内じゃないかと私は思う。日本ぐらい世界でテロに弱い国はないんだ。すべてテロに譲歩している。シンガポールではテロの言う通り聞いた上に、金まで持たせてアルジェまで送ってやったじゃないか。その時送ったやつが赤軍派として、いまだにアラブゲリラの中核に残っているんだ。その上にまた「よど号犯人グループが」北朝鮮から帰ってきたりすると、日本はまさにテロの交差点になりつつあると私は思う。これに対してなんとか考えなければいけない。アメリカの支援より、まず国内じゃないか。国内のテロ対策、次にアメリカの支援だ。私はそれだけが心配だ、と言っておいた。

日本ぐらい国内がテロに弱い国はない。しかもアメリカの同盟国だから、標的になるに決まっていますからね。それはフランスやドイツも近いけれども、日本が一番彼らの標的になりやすい。

赤軍派の四、五人がまだに残っている。そして重信「房子」は日本に帰ってきているでしょう。これをみると、まるで内外が呼応して日本はやられるんじゃないかという感じがしてしかたがない。彼らもどうせ旅券法違反だから六ヶ月もすれば釈放になると思つて帰ってきているんでしょう。殺人裁判は日本ではできないことを承知して帰ってきているんだ。本当に日本の国内が問題だ。それで自衛隊を使ったかどうかという。それは総力戦なので、国家機関のすべてを使ってテロ対策をやるときに、警察の次は自衛隊を使わないと言う方がおかしい。

小池 それも野中さんでしたね。

松野 隣組も使いたいです。すべての国家機関を使って対策をやらなければ。相手は見えない敵だから。それを自衛隊を使つてどうだとか、あまり過去の戦争の遺物みたいなことを言っているのは間違いじゃないか。野中とか橋本とか古いやつは、まだ過去の亡霊から逃れられない。私は、これは新しい敵だと思う。憲法にも法律にもないやつだから、新法をつくる以外にない。考えを変えろというんだ。自衛隊が九条を守らないでけしからんというが、それならバッキンガム宮殿はどうしているんだ。みんな銃を持つている。それは一種の儀礼でもあるけれども、やはり総力で守るといふ気持ちがあればいけない。スパイ活動はできない。盗聴法「通信傍受法」であの大騒ぎでしょう。盗聴法であの大騒ぎになる日本では、とても情報なんて取れっこないんだ。

■福田内閣時代

伊藤 話を始めていいでしょうか。この前は三木「武夫」内閣のところを伺いました。また後で補足をお願いするかもしれませんが、いちおう三木内閣は終わりということにして、先に進みたい

と思います。

先生の本「『保守本流の思想と行動』」が、もうそのところで切れているものですから、一体どういうふう聞いていいのかなかなか難しいんですが、最初に三木さんが十二月まで、とにかく任期いっぱいやるということになって、総選挙が十一月「一九七六年」に行なわれますね。この総選挙で「自民党は」二十数議席減りました。これは先生はどういうふうにご覧になっていましたか。

松野 私はやはり党内のゴタゴタだと思う。三木の不人気というよりも党内のゴタゴタが影響したと思います。三木ひとりに責任を持たすにはかわいそうだという気持ちです。とにかく九月に引き下ろし事件があったものだから、それに抗して、それを押し切る約束は「任期いっぱい」ということだった。三木さんは黙っていました。私はこれで三木さんもまっとうしたなという気で三木さんに、「三木さん、これでひとつまっとうされてはどうですか」と言った。三木さんは「おれは負けてない」と言っていましたね。「負けたんじゃない」と。

伊藤 じゃあ、そんなサバサバした感じではないんですね。

松野 ない。三木は「負けたんじゃない」。国民は自分をまだ支持している。ゴタゴタするのは、あの連中がゴタゴタしたから、その数だけが負けたんだ。おれは負けていない」と言っていました。世論調査でも「内閣支持率が」三十四、五%ありましたからね。それを言って「おれはまだ国民が認めている」と言っていました。私もさすがに「もう一回やりませんか」とは言いにくかった。それはあの連中を取めたのが、「任期いっぱい」という約束だったから。しかし三木さんはサバサバしていなかった。

伊藤 「任期いっぱい」ということは、そのあとは白紙の状態とということですか。

松野 白紙の状態だと三木は思ったんですね。

伊藤 だけど向こう側としては、引き渡すという一。

松野 当然引き渡す。「任期いっぱい」ですから。

伊藤 ある意味では玉虫色の話し合いですね。

松野 そうでした。それから、残念だけれども選挙に負けたから。三木の責任じゃなかったにしても、負けたことは事実だ。三木は、「負けていない。世論調査は自分を支持している。あの連中が悪いんだ」という議論を選挙後に言いました。私は黙って聞いて、それにはまだ反論しなかった。しかしこれ以上は無理だなあと思った。党内の数でね。だから、選挙の時にすでに分裂選挙になったんです。

伊藤 実際上そうなんですか。

松野 実際上そうだ。三木と福田「赳夫」と大平「正芳」で、三人で一緒に演説したのは最後の一日だけです。東京で。その間は、三木が応援に行くところ、福田が応援に行くところ、大平が応援に行くところ、ばらばらなんだ。もうすでに候補者が、三木の応援を気持ちよく受けていないんです。分裂選挙になっていた。

伊藤 じゃあ、先生の場合なんかはどうなるんですか。

松野 私は別にどこも応援を受けません。

伊藤 受けなくてもいい。

松野 ええ、受けない。三木と福田と大平と一緒に演壇に立ったのは、最後の日だけです。東京で。それまではお互いに別の日程をつくったんだ。

伊藤 中曽根「康弘」さんは中曽根さんで、また別ですか。

松野 中曽根は中曽根で別です。まあ、中曽根は三木に近かったけれど、福田と大平はもう全然別でしたね。その状況がすでにあった。これを無理してやれば、三分の一と三分の二になって、三木をいじめると思った。あとは三木はこのへんでいいところかなと思って、三木に余韻を残してこのへんで退いてはどうですかと言った。そうすると、結局そのあとは福田と大平の大喧嘩ですね。

どっちがなるか。

伊藤 この前、「福田か大平か」どっちだという話でグツと詰まったことですが、この時の自民党の総裁選挙は一体どういう具合だったんですか。

松野 その時はいちおう福田に譲ったけれど、その次の二年後には、大平が福田と総裁選挙で争いましたね。

伊藤 あれは約束があつたんですか。

松野 約束は二年で、前期は福田に、あとは大平にということ、一期・二期と、前期・後期みたいな気持ちだったんでしよう。ところが福田も辞めたくないわけだ。そこで居残ろうとしたので、そこで総裁選挙で福田・大平が激しい選挙をしましたね。

伊藤 じゃあ、この時はいちおうは手を打ったということですね。

松野 手を打ったんだ。大平が一步下がったわけだ。

伊藤 それで幹事長をとった。

松野 その代わり幹事長をとった。それは数は大平のほうが多かったかもしれないね。福田にしてみれば自分が大蔵省の先輩であるし、すべて自分は上だという感じなんです。大平は党内では多かった。それで福田が前期だといった。それは一期だという意味でしょうね。だから一期やった。その一期のあとで福田はまたもう少しやろうとしたが、大平が出て、とうとう激しい総裁選挙になって、予備選挙をやった。

伊藤 あれは大変な選挙でしたね。

松野 予備選挙で大平が勝って、最後には本会議で総理大臣指名選挙までやりましたからね。私は福田を支持した。その前には大喧嘩をしましたけれどもね。その時、福田と私は三木を応援していたから、福田と二人で大喧嘩をした。本当に二人きりでした。それで、「君はなんだ」「なんだ」というぐらいで、喧嘩するときには若い青年と同じですよ。他人がいない時は本当の喧嘩です。若い青年の喧嘩と同じです(笑い)。政治家だって人間だから。「何

だ君は」「お前は何だ。何が悪いんだ」といって、お互い一時間ぐらい罵り合うからね。二人きりの時は青年の喧嘩と同じですよ。他人がおれば政治家として争うけれど、二人きりの時は「おれ、お前」で、「貴様が悪いんだ」「何が悪いんだ」というぐらいの話をしませうから。

この喧嘩をした後で、渡海元三郎という人が来ましてね。私がうる覚えの百人一首を書いてやった。「瀬をはやみ岩にせかるる滝川の われても末に逢はむとぞ思ふ」。それを紙に書いて渡海に渡して、福田に持たせてやったのを覚えています。それは妙なもので、政治はなかなか取り返しがつかないけれども、友情は取り返せる。唇は取り返せない、友情は取り返せるということがわかって、その後は福田と非常に仲良くなった。

伊藤 じゃあその三木内閣が終わって福田内閣になった途端に、状況は一変するということになりますか。

松野 そうは行きません。それはその次の大平との争いの時に私が福田の応援に行つたから。大平・福田の争いの時に、私は福田を全面応援したわけだ。それで仲が元へ戻ったんだ。だから、「瀬をはやみ」で、末に逢つたのは大平と福田の争いの時だ。大平・福田の時は一人でも応援が欲しい時で、それで私は福田のために真に応援した。

その時、民社党の佐々木良作というのがいた。彼に本会議で福田に入れると言った。佐々木良作はそのとき民社党の委員長でしたから、「お前が本会議で入れると福田が勝つ。その時は君との連立をするから、やれ」と言った。佐々木良作は非常に悩んだ。私と年齢が同じですからね。当選回数もほとんど同じだ。非常に悩んで、一晩考えさせてくれという。翌日「おい松野、きのう君の言ったことはわかるよ。同盟がおる。背後に組合がある。福田が同盟に挨拶をしてくれれば、おれは動いてもいい」という。自分がごぼう抜きみたいにはできない。福田から同盟に挨拶をして

くれんか、という話をするわけだ。さあそこで私も困った(笑い)。党内問題に同盟と総評を引き込んで、ちょっと自民党内の受けが悪い。党内の色気が悪い。そこで福田に話すには話しましたが、福田も怖いんだ。それをやれば福田派の体制が乱れる。援軍をよそに求めるなんて、いままでの福田の思想と違う。党内で、福田派の中できつと反論が出る。結局それは、私と福田だけで終わりました。

やはり本会議では負けました。ただ、当然二年で替わるべきものを福田が横車を押し込んだというのが党内の空気でした。そこで中立的な人も大平に入れたでしょうね。もちろん中曾根もその時は大平に入りましたからね。

伊藤 福田内閣ができたなら、先生は干されちゃうことになるわけですか。

松野 それは私は当然覚悟していました。私は三木と心中する気でいたんだから。福田内閣の二年間は私は一切役職なしです。

伊藤 党内の役職ですか。

松野 党内の役職は何もなしです。

伊藤 そういう時は代議士さんは何をなさっていらつしやるわけですか。

松野 そういう時は、やはり妙なもので、代議士だったら肩書きがなくなつて、どこにでも顔は出せますから。おそらくほとんど私のところには三木派がついていましたね。三木派が私の周りにはついていて、河本「敏夫」とか、いまの伊藤宗一郎とか高村「正彦」とか森山「欽司」とか、そういうのが、私と一緒に。三木に対する恩義だったんでしょうね。それが一緒でした。

伊藤 じゃあ、福田派の会合なんかには行かないわけですか。

松野 福田派の会合には行かなかつた。しかしいよいよ大平との戦争の時には、私が行くと拍手で迎えるんだからね。安倍「晋太郎」なんていうのは拍手で迎えるんだ。

伊藤 じゃあ、三木派の会合に行くわけではないんですか。

松野 三木派の会合には、時々呼ばれて行きました。

伊藤 じゃあ、いちおう三木派ということでは。

松野 私が行くのと拍手して迎えられる。

伊藤 そうですか。じゃあ、福田内閣の二年間は、何をなさっていたんですか。

松野 何もしていません。

伊藤 何もしていません、といつても。

松野 役職はしていない。

伊藤 役職はそうでしょうけれど。

松野 私は大平とあまりつき合いがなかったから。佐藤・池田の流れですからね。私は佐藤・池田では佐藤についた。田中角栄は池田に近かつた。その流れが大平であり前尾「繁三郎」であり、だからあまり私は中にいませんでした。

佐道 資料に「政綱等改正委員長に就任」というのがあるんですけども。

松野 そんなものがありましたかね。それはあと一年ぐらい経つてからでしょう。

佐道 福田さんが総裁になった時、十二月に、政綱等改正委員長になられています。これは福田内閣の時にずっとやっておられて、そのあと党顧問になられています。

伊藤 党顧問はいつですか。

佐道 昭和五十一年十二月です。三木さんが退陣したあと、福田内閣の時代ですね。

武田 自民党の党史で調べたんです。

伊藤 党顧問というのはなんですか。

松野 党顧問は二十五年以上務めたもの。顧問は四、五十人いるんです。

伊藤 あまり実質的な意味はないですか。

松野 何もない。一年に一回、顧問会をやるぐらいだ。二十五年以上務めた者が皆なるんです。いまはもうその制度はなくなりました。だからいまは名刺に自民党顧問と書けないんです。顧問制度がなくなつたから。そんなものがありましたかね。

「瀬をはやみ」だった。「瀬をはやみ岩にせかるる滝川の われても末に逢はむとぞ思ふ」。渡海元三郎が心配して、「福田と先生と仲が悪いと困る、どうしたんですか」といつて来たから。それをすらすらと書いて、「これを福田に渡しておけ」といつた。そうしたら、それを福田の派の会で発表したらしいんです。

それで大平の時は「われても末に逢はむとぞ思ふ」で会つたわけだ。安倍なんて拍手で私を迎えて、手を握つたりした。

伊藤 各派閥が派閥解消ということをした時にやるんですね。派閥の解消といつても、実際は「〇〇研究会」という政策研究グループに衣替えしただけで、実際はあまり変わらないといつていいですか。

松野 派閥解消も常に言っているんですが、実行されたことは一度もありませんね。いまだにありません。ああいう言葉でいつも言うんですが、三十年言つて、三十年実行されたことがない。少なくとも十回以上は言われているでしょうね。「派閥解消、党風刷新」。福田は「派閥解消、党風刷新」で旗揚げしたんですからね。池田内閣に反抗して。それでいつのまにかそれが派閥になつたんですからね。派閥解消を唱えるグループが派閥になつたんですから、あまり看板の通りにはいきませんね。

伊藤 やはり看板の掛け替えといつていいですか。

松野 まあ、場当たりでしようね。二年ぐらい受けるタイトルをつけるだけで、あとは忘れていきますね。

伊藤 この福田内閣の時に、三木さんが総理の時の鬼頭「史郎」判事の賈電話事件の判決が出ていますね。そのことはお聞きしませんでしたけれども、何かご記憶はありますか。

松野 あります。何か鬼頭がー。

伊藤 鬼頭をご存知なんですか。

松野 いや、知りません。それは三木さんから聞いたんです。その事件があつたころ、「あなた、鬼頭と電話したんですか」と聞いたら、「鬼頭か誰か知らんよ。電話で田中逮捕の問題をさかんに言つてくるけれども、わしはわからなかつた。検事正が電話してくるわけもない。「あ、お、あ」と聞いただけ聞いて、おれは電話を切つた。それがあとで見ると鬼頭だった」「あなた、返事はしましたか」「返事するもんかい。「あ、お、あ」と相づちは打つたけれど。ちよつと話を聞いているうちに、検事正の電話にしてはちよつとおかしい。稲葉がおるのに、稲葉から聞いたことがない。言っている内容は非常にきわどいことを言っているの、「あ、お、あ」と返事した」といふことを、鬼頭事件が起きた時に三木さんに聞きました。だから、あの人は用心はしていたようですね。また、直接電話してきたこともおかしいんですね。

伊藤 この福田内閣の時期にはロッキード事件の裁判がずっと続いていて、衆議院のロッキード問題調査特別委員会がかなりいろいろなことをやっていますね。この特別委員会なんかには、先生はー。

松野 私は出ませんでした。

伊藤 ご覧にも行きませんでしたか。

松野 委員会に出ても、委員会では政治論をやるだけ、野党が言うだけで、与党が言うことは何もないんですから。その時はすでに裁判中ですからね。なぜ特別検事を派遣したのかとかね。検事をアメリカにやつたでしょう。それからコーチャンの証言が有効なのかとか、そういう法律論が主であつて、弁護士さんみたいな人がたくさんやっていますね。しかし、もうそれが有効か無効かはあまり興味がありませんからね。そういう議論がたしかに多かった。初めて向こうへ行つて、コーチャンの証言は果たして証

言として裁判所で採用するのかとか、コーチャンが日本の裁判所に出頭するのかとか、そういう法律論が主だったな。

伊藤 それは弁護士の世界であって、法学士の世界ではないですね。

松野 法学士ではない。そういうことが多くて、あまり興味もなかったし、実際に裁判中ですからね。

伊藤 その衆議院の特別委員会では中曽根さんなんかも証人喚問されていますね。

松野 なんででしょうね。何かありましたね。

伊藤 中曽根さんもしょっちゅういろいろそういう問題がありますね。

松野 しょっちゅうありますよ。

伊藤 実体のあることなのかないことなのか、全然わかりませんけれども。先生なんかはどういうふうにご覧になっていましたか。

松野 私は中曽根というのは用心してやっているなと思いましたが。必ず誰か代理を立てているなど。確信犯みたいな感じだったな。

伊藤 児玉「誉士夫」さんが告発されて、ということになりますよね。

松野 「中曽根は」児玉とも親しかったし、小佐野もあるでしょう。それから殖産住宅の東郷民安、それからもつと古くは永田ラッパ「永田雅一」か何かの事件があった。武州鉄道のなんとか、いろいろな時にちよこちよこ出るけれど、用心していて、自分で泥沼に踏み込まないように、常に長靴を履いているような感じでしたね。

伊藤 先生もそうですか。

松野 私はなるべくそういう危ないやつには近づかなかった、最初から。児玉誉士夫とは、会ったことが一度ぐらいあります。その部下の一人にヨシダというのがいた。それとは会ったことがあ

る。それは海軍主計で私が武官補で平壤にいた時だ。児玉機関の代理として、ヨシダという者が来たわけだ。それで会った。向こうで。「おれは児玉機関のヨシダだ」という。要するに参事の中の一人です。児玉の次かその次ぐらい。海軍の少佐ぐらいの若造がおれの名前ぐらい知っているだろう、という横柄な顔をしていて。当時は知らなかった。そうしたら「これ、君にやるよ」といつて、ダンヒルのライターを出すんだ。戦争中ですよ。昭和十八、九年だ。ダンヒルのライターを「これ、君にやるよ」という。「それからプロミスの自動車を一台寄附するから」という。それは上の幹部の方だ。とんでもない男でした。それをもらうのはどうしようかと思っていたら、「お前、何をきよるきよるしてんだ。こんなもので君はびくびくしているのか」と、まるで小物扱いだ。それで、命令書を持つてくる。その命令書は、経理部で保管している阿片の出荷命令だ。私はそれを部下に渡すだけだ。そこに阿片があったということがわかる。私は見えないが帳簿には確か五トンと書いてあった。それをいくらか渡すという書類だ。それがヨシダでした。

その阿片で驚いたのは、いまの北朝鮮の阿片です。薬用として阿片、満州とか豆満江とか、あのへんの寒いところにつくらせていたんじゃないかと私は思う。名目は薬用だったと思う。それで、今の北朝鮮にもあるでしょう。だから、あれは日本の時からあの地帯にあったんだ。栽培していたんだ。

終戦後日本に帰ってきた時に、ヨシダが帰ってきたといつて挨拶に来ました。それで一度行ったら、えらい焼け野が原に大きな掘つ建て小屋をつくっていた。築地のあたりでした。築地になんとか通商という名前で、児玉機関の金でつくったんでしょうね。そこに一度呼ばれて行つたね。だから児玉とはそういう間接的なものだ。

伊藤 そのヨシダという人とは、その後のおつき合いはあつたん

ですか。

松野 その後、若いうちに死にましたから。だからとうとう私は金脈までいかないうちだ。ライター一つももらったことだけは覚えてる。ダンヒルなんて初めてで、もう手にとって驚いた。そのころ、相手方と貿易をしていたんですね。相手方と貿易しながらやっていた。だから、いまでいえば中間の情報屋でしょう。いまこんな時、アフガンなんかにこういうのがおれば一番便利でしょうね。それでまたアフガンに阿片をつくっているというんだから、やはり戦争の裏にはそういう思わぬものが出てくる。だからとうとう私は兎玉とは直接話した覚えはありません。顔ぐらい見ている程度です。ヨシタというのは、その後四、五年で亡くなりましたね。それっきり何も関係がなくなりました。

伊藤 さつき先生から民社との関係の話が出ましたが、その後もずっと彼らとの接点はあるわけですか。

松野 春日「一幸」と佐藤栄作は親しかったです。佐々木は私と同級で親しかったです。だから春日、佐々木という民社党とは親しかったです。よく委員会と一緒にあって、同じ発言をしていました。彼らは保守的でしたね。いまの民主党の中にその流れがありますね。川端「達夫」とかいいう、わりにしっかりしたゼンセン同盟のがあります。民社は組合というよりも、どちらかというとサラリーマン組合ですから、わりに紳士が多かったです。国鉄にも一人いましたね。民社とは非常に親しかったです。佐藤は特に親しかったです。法案によく賛成してくれたり。

伊藤 それはやはり、何かの時に助けてもらおうとか。

松野 助けてもらおうし、こつちも助けてやる。民社のストライキ、同盟のストライキだとなるべく早く、資本家側が突っ張らないように早く妥協してくれとか、会社側に勧告したりしますね。同盟の場合、ストライキまで行かないうちに、たいてい妥結する。それはやはりそういうふうにしてもらいたい、ということだ。闘士と

いうより、職員組合的なものでしたね。

伊藤 この前のスト権ストの段階で、だいたい大きなストライキは終わりですからね。ですから組合との関係といっても、だんだん形式化してきた。

松野 それがひいては国鉄の民営化につながる。あれが中曽根内閣だった。あれが中曽根がいいように自信をつけた。スト権ストで彼は非常に自信をつけた。それで国鉄民営化の時の国鉄ストライキはほとんど大きな流れにならなかったですね。千葉とか激しいところだけで分断してしまつて、全国レベルにはならなかったんですから。

伊藤 千葉の人は気の毒でしたけれども（笑い）。

小池 千葉の動労だけでしたね。

■選挙と政治資金

伊藤 この年に参議院議員の選挙がありますが、先生は衆議院に出ています。熊本の参議院選挙というのにも、ある程度クビを突っ込むんですか。

松野 私のおやじが出ていましたからね。

伊藤 この時ですか。

松野 そのもつと前です。

伊藤 その後はどうなんですか。

松野 その後も毎回ずつと突っ込んでいましたよ。私の仲間を一人ずつ出していましたからね。一区から一人、二区から一人出すから。私が一区だから、その人選に私も重大な影響を与えていました。

伊藤 先生は県連なんかでは、県連の会長とか。

松野 県連会長は河津寅雄というのがずっとやっていましたから

ね。

伊藤 それは松野さんの子分なんですか。

松野 私の長年の、私の代貸みみたいなものです。代理みたいなものです。町村長会長で県連会長をしまして、それを約三十年やっていました。だから県連は、ほとんどこの人が押さえてくれた。

伊藤 じゃあ、熊本県は松野王国みたいな感じですね。

松野 その頃はそうでした。知事つくるのにもそう。知事もほとんど私たちの言う通り、県連も言う通りです。

伊藤 けっこう地元にも行かれたわけですか。

松野 私はほとんど年に二回ぐらいしか帰らなかった。

伊藤 そうすると、向こうが来るわけですか。

松野 向こうが来るか、電話で話しています。その河津という人が全部代理でやってくれる。私は年に二回しか帰らない。一週間、一週間ぐらいしか帰らなかったな。

伊藤 先生は自分の後援会はい。

松野 後援会はもちろんありますけれど、金を集める後援会ではなしに、飲み食いの後援会だった。後援会というのは往々にして資金集めが目的になるのがほとんどなんだ。私の後援会は飲み食いの後援会だけで、資金集めをしたことは一度もない。選挙区で私は資金集めをしたことは一度もありません。

伊藤 政経懇話会みたいな形のパーティですか。

松野 いっぺんもやったことはない。やっても、それは飲み食いの会です。五百円とって、あと私が五百円払うような感じでした。二千円とって千円払うという会が普通だけれど、私は五百円とって千円の会をしてみましたね。

伊藤 じゃあ、政治資金のほうはまた別に。

松野 政治資金はまた別です。

伊藤 政治資金の話というのはなかなかお聞きしにくいんです

が、ある程度大きなスポンサーがついているんですか。

松野 大きなスポンサーを一時は持っていましたね。

伊藤 やはりそういう強いスポンサーを持っていると安定するわけですね。

松野 それはスポンサーを持っていれば安定しますね。そのスポンサーがひっくり返れば、こっちも被害を受けるわけだ。私は三つぐらいのスポンサーですと賭つてきたから、後援会という制度で金を集めたことは一度もない。そのスポンサーが成功しているうちはよかった。スポンサーが失敗すると、こっちも危ない。それは運だから、しかたがない。乗りかかった以上、そこから逃げたりするわけにいかない。しょうがないということです。把握してスポンサーと組んだんですからね。それ以上はしかたがない。それは組むまでは用心しますけれども、組んだら向こうも私を信用するし、私も信用する。それは共存共栄というところがおかしい、しかたがないでしょうね。私のおやじもそれに近い感じですよ。

伊藤 それはお父さんから引き継いだというわけではないですか。

松野 引き継いだものもあります。私が自分で開拓したものもあります。いろいろあります。おやじもそうやっていて、特に土建屋だけは用心しろと言われた。当時、おやじの後援会にも土建屋はほとんどありません。私の後援者にも土建屋は一つもない。なぜかという、土建は必ず敵味方になる。今日味方でも、明日は敵になるんだ。だから、土建屋は必ず長続きできない。政治家が一番近づきやすいのは土建屋だ。今日は味方でも来年は敵になる。だから安定しない。土建屋というのは入札競争が激しいですからね。入札を入れてもらった時には神様のように言うけれど、入れてくれないと敵のように言うしね。やはり競争だから、一方が味方と思うと、他方が敵になる。

私の父も、土建の大きなスポンサーはありませんでした。個人

的に親しかったのは鹿島です。鹿島は土建という意味よりは、鹿島守之助と親しかった。鹿島守之助と親しいだけで、鹿島組と親しいんじゃないんだ。

伊藤 守之助さんとはどういうおつき合いなんですか。

松野 鹿島守之助というのは、私の父の時に最初に参議院議員になる時に頼みに来たわけだ。守之助が参議院議員になる時に、私の父に先輩として頼みに来た。政治家としての今後をね。それであの人は吉田内閣「第一次岸内閣か」で大臣になったでしょう。それは私の父が推薦して大臣になるんだ。それで吉田さんが、「鹿島組か」と言って躊躇した。鹿島組でも、この男は大丈夫だ、養子だから。

武田 もともと外交官ですし。

松野 土建屋の息子じゃないんだ。鹿島組はみな養子ですからね。吉田さんは、それを知らんものだから、そうなんだ。そうしたら、案外品が良くてね。吉田さんも喜んだ。

伊藤 それは外交官ですからね。

佐道 法学博士でもあります。

松野 私のおやじが吉田さんに推薦して、参議院に入れたんだ。土建屋はいやだというから、「土建屋じゃないんだ。土建屋に養子に来たんだ。本当は違うんだ。土建屋で生まれて、土建屋で育ったんじゃない」といった。鹿島グループは全部そうですからね。そういうことで、それならいいだろうと。そういうことで鹿島は、こちらも世話になったが、向こうも世話になったわけだ。ずっとおやじの間は親しかった。それは土建という意味ではなかった。伊藤 会社が応援したわけではなくて、個人が応援したんでしょうけれども、政治資金規制法が引かかってくるということは一。松野 あのころ政治資金規制法は、個人はなしです。個人は届出がないんです。個人からの献金は無制限です。伊藤 そうですか。三木内閣でつくった時はー。

松野 もっと前、吉田内閣のころですか。

伊藤 三木内閣で規制が変わってからはどうしたんですか。

松野 もうそれは駄目です。吉田内閣のころは、個人献金は無制限でしたから。

伊藤 じゃあ、政治資金規正法がかかってからはー。

松野 個人献金の制限もある。それまでは個人献金は制限がなかった。

伊藤 先生としては政治資金に困ることになるじゃないですか。

松野 まだ私の時までは大丈夫でしたよ。個人は無制限だから。三木内閣から苦労したけれど、それまでは個人は無制限ですから。伊藤 そうしたら、やはりそういうのを増やさなければいけないじゃないですか。

松野 増やさなきゃいけないけれど、もうその頃になったら、あまり政治資金はー。まあ一部会社から、まあいろいろやりくりやりくりしてましたね。表に出さずにやりくりですよ（笑い）。それに苦労したわけだ。「電話のため一時中断」まあ政治資金は、なかなか親子兄弟にも言えないことだね。

政治資金は、確かあなた方の業務に関係がある。要するに選挙と政治資金は、守秘権限がある。だから一般の場合は言わなくてもいいわけだ。刑事事件の時は別ですよ。刑事事件でもみずから言わなくてもいい。選挙と政治資金は守秘義務がある。義務というとおかしいな、権利があるんだ。政治家の生存のために必要欠くべからざるものなんだ。選挙名簿と資金は個人の権利だ。

伊藤 社会党だって同じことですね。

松野 同じだ、誰でも同じだ。議員の業務上。

伊藤 共産党だって同じことですね。

松野 それは誰でも同じ。

伊藤 だけど先生は、そんなにたくさん政治資金を集める必要はないわけですね。

松野 それはありません。

伊藤 みんなに配ったりは—。

松野 少しあります。

伊藤 松野派ですか。

松野 それは、必要がある時は、また取りましますからね（笑い）。

それは角福戦争のころ、それから三木内閣を守るころ。それはだ
いぶ松野派ができましたよ。四十人ぐらいできました。

伊藤 じゃあ大派閥じゃないですか。あれっ、松野派というのは
聞いたことがないな。

松野 それは隠れ松野派だから。私が中心じゃないんだ。三木の
ために、福田のために入れてくれればいいわけだ。それだけの問
題です。

佐道 目的を絞っているわけですね。

松野 目的を絞って、三木のこれをやってくれとか、今回は福田
にやってくれとか、それについてはとって、個々に集める。そ
の時はタダというわけにはいきませぬね。よそからもらっている
んだから。それに該当する程度の金額は用意しなければいけない。

伊藤 それは自分で用意するわけですか。

松野 それはどこからか用意します（笑い）。それはちゃんと用
意しますよ。そういう目的のためには出す者がおり、取るところ
があるわけだ。

伊藤 これは三木さんのためですからとか、これは福田さんのた
めですから、ということですね。

佐道 それは派閥として、ずっと永続していくわけではないんで
すか。

松野 永続する場合もあります。ある程度の資金ができてくるも
のもあるし、その一回だけで、あとは永続しないものもある。その
時代は相当ありましたよ。だから私とその争いのキーポイントにな
るの、そういうグループを持っているからキーポイントにな

れるわけだ。松野だけでは駄目だ、松野の後に四十人ぐらいいる
ということがわかるから、私の言うことで動くわけだ。それをみ
んながわからなければ、動きませぬよ。

伊藤 でも、そのためには普段から少しづつ資金散布もしなければ
ならないんじゃないですか。

松野 それは普段の時も—。それを福田から取っては駄目なんだ。
そうしたら福田の自分にならなければいけない。三木から取った
ら、自分にならなければいけない。だから、そこが問題のところ
なんだ。それは曰く言い難しで—。

伊藤 しかし金を取る時は、これは三木さんのためにか。

松野 いや、おれの政治行動のために必要だから出してくれとい
う。「どういうことですか」と言われれば、「こういう争いでこう
だから、どうしたって福田にしないとけない。田中のやつがや
ると大変だ。だから日本の将来の政治のために、おれは田中を倒
すためにやっているんだ。保利「茂」もいるし仲間もおるから、
これだけでは足りないから、金を出してくれ」という。その時は、
保利とか大橋武夫とか、愛知揆一とかがいました、反・田中でし
た、佐藤派の中で。そうすると、佐藤が金を出すわけじゃない。
田中派でも集めている。福田に出せといたって、福田は自分の
ところで戦力が一杯だろうし、そこから私が分けてもらってきて
も価値がない。

伊藤 非常によくわかる話ですね。

松野 だから自分が努力して、いままでの政界の中でいろいろな
金脈を伝わって、わかりそうなどころへ行くしかない。それは、
やはり弾薬、兵器、輸送すべてです。自衛隊じゃないけれど、そ
れがなければ湾岸戦争はできないわね。

佐道 ここぞという時に総力戦をやるわけですからね。

松野 それはそういうことだ。だから私が威張っておれたのは、
そういうことを皆が暗々裏にわかっているからだ。もらったもの

はわかるし、また仲間も顔を見れば、これは松野が用意したなどいうことはわかる。不思議に、どこかで聞くやつはいないんだ。政治家はお互いだから。

伊藤 これが相身互いというものだ。

松野 聞いたやつは一人もない。聞くやつは野暮でしようね。政治家はいろいろ言われるけれど、「どこから?」とか、「何の意味か?」とか聞くやつはいないんだ。聞くのなら断る。

伊藤 いやいや、聞くのはわれわれです(笑い)。

松野 昨日、ちょうどまた金の話で、安西「祐一郎」という慶應の塾長と会った。ハーバードは二千億ぐらいの資金を持っている。研究費とかファンドを持っている。それを研究費やいろいろなものとして使っていく。その多くのものはハーバード卒業で成功した人が、みんなファンドで出したものだ。慶應はその百分の一もない。そのファンドは二十億ぐらいしかないと言っていましたね。要するに出せる金が、でしょうね。そんな話をして嘆いていた。それで「安西さん、そのことは私は昔から、石川忠雄の頃からいろいろな話をしている。寄付すれば、してもいいんだ。慶應に寄附を集めてもいい。しかし必ず入学がくることを覚悟しろよ」と言った。息子の入学です。ハーバードとかオックスフォードは、必ずじいさんが孫を入れてくれるんだ。それは自然にそうなる。慶應だつてそうするなら、私学振興の金は断つたつていいんだ。その代わり慶應の一族しか入れないよ、という、それは困ると言うんだ。入学目当ての寄附は一切お断りということは、慶應の伝統だ。

たった一つ例外があった。これは私は知っている。カンザキというのが理事をした時、大野伴睦が百万円寄附した。カンザキは「うちは入学条件上困ります」と言ったが、「ああ入学なんて、そんなことはない。黙って取れ、寄附だ」と言って、翌年もまた持って来てくれた。そうして三年目になったら、息子を入れてくれ

という。それで、カンザキは困った。すでに二年もらつてしまつた。やられた、と思つたけれども、二年間もらつちやいましたよという。今年が条件なら断るけれど、もうカンザキは困つて困つて、どうしようかという。それで大野の息子が慶應に入ったから、何か入つたんじゃないか。その先は私は知らないけれども、入つたことは事実だ。そういう逸話がある。

だから、どちらかなんだ。取るだけでは駄目なんだ。ギブ・アンド・テイクだから、その覚悟でやらなければならぬ。おそらくハーバードやオックスフォードはほとんど寄附しているけれども、みんな孫が入っている。生まれた時から登録するところもあるそうだ。それが伝統なんだ。日本がそういうことをすると、裏口入学だ、不純だ、不潔だという言葉で追い出す。金は欲しい。入学はいやだ。その割り切り方が私学というのはできないということだ。

今度いよいよ官立が私学になる。いま法人税でもめているそうだ。国立を学校法人にすれば、今度は対等に、私学と同じように法人税を払えというけれども、特殊法人だから法人税は抜きだといつて、そこでもめている。これは今日の問題です。不公平だ、その代わり私学振興費をもらつているじゃないか、といつている。

だから、やはり政治資金も同じように、出す以上は、その出した苗木が太らなければならぬ。向こうは投資なんだ。だから私に三つぐらいの会社でやつていたのは、投資なんだ。私が大成することを期待して投資する。見返りを期待していることはない。それによつて見返りはどうだというのは、会社の一つの名誉でしょうね。自分のところで育つた政治家が偉くなったということは、社内および役員会の名譽にはなるけれども、それでどうしてくれといつても、それはほとんど土建屋以外ありませんよ。税金をまけてくれという会社がありません。大蔵大臣になつたから、うちの法人税を半分にしてくださいというような会社は今はない。な

いけれども、ひとつの名誉というのか、他社に対して、自分のところが育てた政治家がこうなったということは名誉だ。だから一年に一回、正月に挨拶に行くとか、社員に挨拶するとか、それは必ずしています。正月に行つて、「あけましておめでとう。いつもお世話になってます」という普通の挨拶です。そういうことが、私たちを育てる意味でしょうね。特にそれによつて利益を得るということはない。名誉を得ることはあつても、利益はほとんどありませんよ。そのことを期待して、十年も二十年も育てて、利益が出てくるわけがない。だいたい一つのつき合いが成長したようなものでしょうね。

伊藤 だけど、ほかの代議士も多かれ少なかれそういうものですか。

松野 昔はそうです。三木内閣以前は、多かれ少なかれ背景があつた。あれは、日興証券だとか、あれは何とかだとか、あれは森ビルだとか、大なり小なりほとんどの背景は、お互い親しい仲にはわかつていましたね。だから委員会の時には、森ビルの応援者は森ビルの話しかえつてしにくいんです。

伊藤 まあ、そうですね。何かゼッケンをつけているみたいな感じで（笑い）。

松野 私たちはわかつています。お互い三十人集まると、いちおうわかつているんです。その関係の時は、そのものは発言しない。その代わり皆が顔を見ていれば、好意的な話をしていられるんです。それはお互いの仁義だ。逆に、なるべくそういう委員会に入らないようにしないとね。それはやはり互いの仲間の仁義、政治家の道義でしょうね。

委員会が発言して、事件が起きたら贈収賄になるんだ。それだから当該委員会にはなるべく入らないようにしている。何かの裁判でそういう判決が出ていられるんです。本会議はいい、というんです。みんなが賛成する。委員会で発言すると、それは贈収賄の対

象になる。砂利船かなにかで、運輸委員会で砂利船を何とかしてくれ、もつと取り締まりを厳しくやれとかいだったので、砂利船汚職というのがあつたんですね。小さいことだけれど。だからそういうものは関係する委員会に入らないようにしている。

伊藤 でも、そういうことを絶えず気にしていないと危ないですね。

松野 昔はね。いまはその点はない代わり、非常に薄く浅くなつていられるんですね。三万円ずつを一千社から集めなければならぬ。私たちは三社もあればよかつたんです。三社で一千万ずつ出してくれれば三千万になる。いまは三万円を一千社から集めなければいけない。

伊藤 竹下さん流なんだな。

松野 竹下流だ。

伊藤 それがかなり一般的になっていますか。いまは政治資金でドカンというのはあり得ないんですね。

松野 あり得ない。会社のほうも制限される。報告もする。個人も報告しなければいけない。そうなると一社がどこかの代議士に大量に出すということとは資金法違反になるから、それをいくつにも分けて、竹下はやっていたわけだ。だから、竹下は後援会を十ぐらい持つていて、百万が制限なら、十持つていれば一千万までもらえる。数を増やしてましたから。それは脱法だが、それも三木さんの時に禁止になった。三木までは、それが続いていましたね。

■革新自治体の誕生・クアラルンプール事件

伊藤 この時期というか、その前からそうですねけれども、都市で革新自治体がどんどんできていくという事態がありましたね。革

新自治体ができて、地方からだんだん中央へそれが波及していくんじゃないかという見方もありましたね。

松野 その一番が、東京都知事です。

小池 ええ、美濃部「亮吉」ですね。

松野 美濃部の時は愕然としましたね。それまでは、安井「誠一郎」、東「龍太郎」と、代々自民党でしたからね。鳩山市長以来。それが美濃部になった時は愕然としましたね。京都の—。

小池 京都は蜷川「虎三」、その時大阪は黒田「了二」ですね。

松野 ああいうのがどんどん出た時は愕然としましたね。

伊藤 かなり危ないという感じでしたか。

松野 危ないという感じを受けた。

伊藤 そうですか。といてどうしようもない。

松野 それで都市政策というのを一所懸命やろうじゃないかといつて、都市の高層ビルをやったりした。その時はたしか、高層ビルというものをやったはずですよ。それは池田内閣の頃から、下駄履きビルとか高層ビルで都市計画をさかんにやった。それが、一番早くできたのが、森ビルだったんですね。あの法律に合致した。森ビルができたところに都市計画、都市ビルの法律をつくった。

伊藤 さつきから森ビルの話が出てきますが、先生は森ビルとは何か関係があったんですか。

松野 私の懇意なのが森ビルのあれで、よく話を聞きました。森ビルの東京出身で、森ビルの顧問をいまでもやっているはずですよ。それが私と親しかったんです。

佐道 先生は福田内閣においては無役にられるわけですから、森も、総務にはなっておられたのですか。

松野 総務にはなっていないかと思えますよ、その頃は。

佐道 では、総務会にも全然出ない。

伊藤 まるで冷飯食いですね。

松野 冷飯でも別に何も怖れたことはなかったですね。

佐道 約二年近くですよ。

松野 二年近くです。

佐道 福田さんの時に、例の日中の問題が大変に盛り上がりましたね。

松野 その時にいまでも思い出すが、テロがシンガポールかなにかであった。

佐道 ダッカで赤軍がハイジャックしまして、それを超法規措置で釈放して、身代金を渡して、それでアルジェリアで解放した。

松野 あれが、やはり世界の一つの大きな物笑いになった。いまそれが戻ってきて、一番怖いのは日本なんだ。歴史は元に戻るかもしれないね。

佐道 「人命は地球より重い」というセリフがありましたね。

松野 それはいいけれども、いまはあの貿易ビルをみると、人命なんてどこかに吹っ飛ばしちゃった。あの時はわずかだったでしょう、赤軍派が三人か四人。福田というのは、私はずっと長く一緒にいたから、三木の問題以外なら福田越夫は好きだったんです。三木の問題で、田中逮捕の時に三木の中に入って、これが一番こたえた。

「三木は」夜中の十一時半ごろ自宅に私を呼んで、着流しでしたかね、ちゃんと着物を着て、正座をしているんだ。薄暗い畳の部屋で、お香かなにか焚いてあったと思うな。その時私はもう身震いしたよ。何だこれかと思った。決断でもしてるようで。その時はもう本当に涙が出て、手を握って泣いたけれども、あんなことは一生の中で少ないですね。その雰囲気で、三木は自決でもするんじゃないかという感じがしたね。一命偉業じゃないけれど、義憤を感じて、政治の不純さを断つ、そんな雰囲気、私はあの時だけは怖ろしかった。部屋に入ったとたんにとぞとした。薄暗い中、電気もつけずにきちんと着物をきて、きちつとして座っていました。いまでもあの時のことは覚えている。

それだから、私は福田と意見が割れた。しかし「われても末に」会うから、大平との争いの時には真つ先に福田のところに駆けつけて応援したわけだ。

伊藤 いまのダツカの問題は、先生は直接には何も関係されなかつたわけですね。

松野 私は官邸に行きました。その時。

伊藤 意見を言うためですか。

松野 意見を言う。どうするんだ、何とか人命を助けなければいかんと。三木内閣の時も何かひとつあつたと思つたな。

佐道 それがクアラランプールです。

松野 それがクアラランプールだ。クアラランプールの時も、二日間ぐらい議論したかな。あの時は確か私が総務会長をしていたかな。警察は「やれます」というようなことを言っていたんですが、ただ外地だから、向こうの了解を得なければいけない。私は日本警察がやってはどうか。爆破しろと。爆破と人命と、人命が大事じゃないのかと。そんな大爆弾を持っているわけじゃあるまいし。だいたい準備したんですが、外国に出られない。マレーシア政府に許可はとれないだろう。取るまでに時間がかかる。なんだかそんなことで、とうとうあれも見逃しましたね。見逃してばかりなんです。それが、いま報復が逆に来ている。「復讐」とか「報復」という言葉は、日本人は昔は使つたけれども、いまはもうなくなつてしまつた。

伊藤 「リベンジ」というんです。

松野 いまは「リベンジ」だのカタカナが多くてね。あれは終戦直後は禁止語だったんです。終戦の時は占領軍が禁止したんだ。「復讐」「仇討ち」は駄目。したがって『忠臣蔵』は上映なし。本当にひどいんだ。だから日本人は中断しているんだ。そこでしかたがない、「リベンジ」なんていう言葉が出てきた。最近カタカナが多くて多くて、こんな国はない。何でもかんでもカタカナで、

そのほうがインテリに見えるんだから、たまらない。上下水道完備なんていうのは、なんとかインフラというんでしよう。あんなのひどすぎる。上下水道完備と言えはいいのに、インフラと言わなければいけない。馬鹿なことだ。誰がつくつたのかね。そのリベンジも馬鹿馬鹿しい。『忠臣蔵』をリベンジといわれたつて、ピンとこないわな。

■昭和五十三年の自民党総裁選挙

伊藤 いよいよ自民党の総裁選挙ですが、この時は予備選があるんですよ。それで、昭和五十三年十一月一日に総裁選挙の告示があつて、福田・大平・中曽根・河本と四人が立候補を表明して、十一月二十六日に予備選が行なわれた。一位は大平、二位が福田という結果で、この時は本当に大紛乱ですけれども、これは大体その前から始まつているわけでしょう。

松野 ええ、前から始まつています。

伊藤 先生は、やはり半年ぐらい前から動き始めるわけですか。

松野 ええ、その前から動き始めていました。どうしても大平のほうが数が多かつた。福田はやはり何となしに硬い感じがある。大平はヌーボーみたいで、あまり頭が良くないものだから、誰でも御しやすと思う。福田はシャープでイエス、ノーをはつきりいう男だつた。だから皆が怖いというのか、近づきにくいわけだ。大平は「うゝ、はゝ、うゝ」と言っています。誰だかわからないけれど、誰でも近づきやすい。その差でした。

伊藤 やはりそのパーソナリティは大きいですかね。

松野 それは非常に違う。人間の感情はみなそうですよ。挨拶して、ものを言わなかつたといえは、それで一生恨むんだもの。廊下でたまたま気が付かずに横を向いて通つただけなのに。気が付

かなくて通つていったら、それがおおごとだ。それが一生残るんだもの。そんなものでしょう、気が付かなくても。だから福田の方は、いっても厳しいものだから、怖いわけだ。大平のほうは「うゝ、はゝ、うゝ」で、ああこれなら、と思う。だから、当初の数は大平の方が多い。それでも私は大平に入れたことは一度もない。どの時でも、全部福田に入れています。あれほど喧嘩しても、福田に入れている。

伊藤 先生は、さつきちよつと隠れ松野派とおっしゃいましたが、だいたいのあたりを手を突っ込んでいたわけですか。

松野 私はだいたい三木派が多かったですね。三木派と中間派。それから福田派の一部ですね。

伊藤 まだ、このころは中間派がありましたね。

松野 それから、私に近い福田派の何人か。

伊藤 まだこのころは水田派とかいろいろあったのかな。

松野 ありました。だいたいいろいろなのがたくさんいましたよ。

いろいろ理屈の多い人がたくさんいた。

伊藤 この時予備選挙というのは、最初でしたか。

佐道 予備選は最初です。

松野 その時は地方選挙は一票だったでしょう。一票ですけれども、地方選挙は必ずしも絶対ではなかった。

佐道 マスコミでは最初、福田が有利と言われていたんですね。

松野 それは地方で大平が多かった。しかし本選挙では、結局二年間ということも福田が先で、一期ということですね。

伊藤 いちおう約束があったということは、政界では常識になつていたんでしょう。

松野 もちろん常識です。

伊藤 それは福田さんにとっては不利な条件じゃないですか。

松野 そうです。その時真ん中に立ったのは保利茂でしょうね。

保利茂が立会人になって、三人で話してまとまったはずですよ。

から、それは常識です。

伊藤 そうすると、やはり約束を守らないのはおかしいじゃないかという声があるでしょうね。

松野 はい。二年経つたらね。

伊藤 先生の立場としては、それはなんとかしなければならぬでしょう。

松野 それは何とかしなければならぬ。だから私は、「国民のための政治じゃないか。失政があるなら別だが、一期と一期と二期だつて一期やらなければかわりない。衆議院の任期は四年で一期じゃないか。二年と決まったものじゃない、一期という意味は二年なのか。衆議院の選挙は四年だろう」とかね。

伊藤 ああ、そうですね。

松野 衆議院選挙は四年だから。政治がよければいいじゃないか。

何年に辞めるというそんな書き付けでもしたもんじゃありませんか。政治家はお互い、岸のあとには誰だと言き付けを書いても守らない。それも口頭の話じゃないか。まあそのへんになると、もう屁理屈みたいなものですよ。

伊藤 まあ、政治家の約束はあまり守られないと。

松野 守らない。公約だつて守っていない。

伊藤 これは公約じゃなくて、私的な約束でしょう。

松野 公約でも守らないんだから。三人の私約だ。これは私信の域を出ないんだ。

伊藤 この時、福田さんは降りないでー。

松野 福田も随分迷つたんですよ。それで、その時の予備選挙で、福田が総裁でありながら負けたものだから、そこで本人は辞めると言いだしたんだ。

伊藤 いや、この時は議会で争うじゃないですか。

松野 それは議会で争うその次の時です。

佐道 この時は、予備選で負けた福田が本選を辞退したんですよ。

小池 「天の声は変な声もある」ということで予備選の結果を尊重したんですね。

松野 それは総裁になって、二期目の時です。福田が一期やって、二期目の時の話です。その時に「当然おれは予備選挙でも勝つ。もし負けたらおれは辞めるよ」と言った手前、負けたから辞めざるを得なくなつた。私は「辞めなくていいじゃないか。本選挙をやれ。本選挙をおれも応援するから、勝つから、やれ。最終的には本会議までやれ」と、私はその時は官邸に行つて、強硬に福田を口説いた記憶がある。「いや松野君、それは駄目だ」「駄目ということはあるかい。君は総理大臣だろう。一人じゃないんだ。君が約束したときは私人だ。総理大臣になつた時は違うんだ。福田と大平の時はいいだろう。総理大臣になつたら、国民に向かつて返事をしなければいけない。小さな個人の約束を持ち出すことはよくない。国民と約束しなければ駄目だ。その約束は蹴れたんだ。それは個人の約束で、公私を間違えるな。公は政治だ」という理論で私は直接官邸に行つて福田本人を口説いた。「福田は」黙つていた。「私は」「やれ」と言った。

そうしたら、その一時間後にとうとう降りちゃつた。私が言った時は黙つていた。私は「公私を間違えるな、君。私人の大平と福田の約束と、総理大臣・福田の約束は違うだろう。ものの大事さを間違ふな。やれ。やつて負けたらそれはしかたない」と言ったが、福田はああいう性格だつたから、私がしゃべつた一時間後にはとうとう降りたんです。その時は川の流が元へ戻つていたから、私もしつこく言つた。

伊藤 この第一回の時、首相指名の臨時議会が開いたんですが、三役人事が決められないで一日延びました。

松野 ありました。それは混乱したから。その時の三役は、第一回は誰がなつたんですかね。坊秀男がなつたんじゃないかな。

伊藤 それもめたというのは、やはり福田派と大平派の間でも

めたということですか。

松野 福田派と大平派の中でもめて、大平が幹事長になつた。

伊藤 いえ、大平内閣ができた時です。

松野 大平内閣ができた時は、大平と福田でもめた。福田のほうが入るか入らんかということだ。しばらく三役も組閣も延びたんじゃないかな。組閣が二日ほど延びたはずですが。それは福田のほう閣僚を送らんといいだした。福田はそうじゃないが、送るなどいうんだ。それで大平の方から言つてきたものが、三人ばかり組閣本部に行かなかつた。そこで組閣ができなくて延びたんです。それが三役に影響したでしょうね。

伊藤 やはり三役を誰が取るかということは、自民党にとっては決定的に大きいですか。

松野 それは大きいです。大臣一人よりも、三役の方が大きい。三役は閣僚をやつた者でなければなりません。閣僚を二回ぐらいやらなければ三役にはならない。三役の方がウエイトは大きい。

伊藤 三役の中でも、幹事長が一番ですか。

松野 幹事長が一番です。あとは同じですけれどね。

伊藤 総務会長、政調会長ですね。

松野 それは人間次第で、どちらでもいい。適材適所です。幹事長は会計を持つ、政治資金を持つから、それが違うんだ。三役としては平等でも、出納責任者は幹事長だもの。幹事長のはんがないと金が出ない。そこだけが三役で違うでしょうね。

伊藤 この大平内閣では、先生はどうなりましたか。

松野 大平の時は何もしない。

伊藤 また干されつ放しですか。

松野 干されつ放し。大平に頭を下げる気もないし。

伊藤 いや、頭を下げたからどうか、というものでもないでしょう。

松野 大平に忠誠を誓つて、大平のためにやるのもいやだと思つ

た。

伊藤 忠誠を誓ったらなにかなりませんか。

松野 いや、ならない(笑)。それは向こうが用心しますよ。

佐道 何か裏があるに違いないと。

松野 もう使うわけがない。

佐道 幹事長は桜内「義雄」さんですね。

松野 桜内でした。桜内というのは調子のいい男だったから、敵のいない男だ。敵を作らない政治手法だから。

伊藤 いやいよ激突みたいな状態になって困ったときは、そういう人が出てくるわけですね。

松野 激突になると、過去の実績、政治手法、人脈、そういうものが政治力でしょうね。人脈も大事でしょうね。あれには何人ついているとか、どういう者だとか。それから実績も大事でしょうね。

伊藤 その人自身にあまり野心があったのでは具合が悪いでしょう。特に両派が対立しているときには。桜内さんはそうではないんですね。

松野 桜内は全然そんな気はない。わりに調子のいい男です。誰にでも合わせます。だから敵もいない。しかし味方もそんなにいいでしょうね。誰にでも合わせて、自分の主張はあまり言わない。その意味では円満でしょうね。

■ダグラス・グラマン事件

伊藤 それで大平内閣が始まるのが昭和五十四年です。そこで岸さんと松野さんの証人喚問という問題が出るんですね。

松野 ああ出た、出た。大平の時だ。幹事長が桜内ですね。大平とは何度かそのことで電話をしました。私は当事者ですから。

伊藤 これはどういう事態なのか、先生、説明してください。

松野 これは事態を言えば根が深いもので、急に出たものではないんだ。過去において何年かその問題は続いていったんです。

伊藤 くすぶってはいたんですか。

松野 事件ではないんです。人脈がずっと続いていた。日商岩井というのが私のおやじ以来の応援者の一人だった。むかし鈴木商店といった。私はずっと、今でも親しいんです。今の日商岩井は代が替わりましたが、鈴木というのが実権を持っていた。それは私を動かすために人脈がくっついてきたんだ。私をどうしても動かさなければいけない。それは岸、佐藤の頃ですね。佐藤内閣だ。問題が出たのは大平内閣の時だけれど、問題は佐藤内閣のときだ。なんとか私を動かさなければいけない。そこで岸の秘書に外国のセールスマンがついたわけだ。中村「長芳」だ。それがどこからか知らないが来て、私を何度もご馳走する。何かわからない。

伊藤 誰がご馳走するんですか。

松野 中村が私にご馳走するんだ。そのうちに、「日商岩井というのがある、いい会社だから会ってくれ。たしか君も親しいだろうだ」と言われた。私は「親しいよ」と言ったら、「そこに海部「八郎」という専務がいる。これと会ってくれ」「会ってもいいよ」ということだ。会ったところから、私は中村と海部と日商岩井を知ったわけだ。その時は何かわからなかった。

そのうち、一年ぐらいするうちに、別の外国人を連れてきた。川部「美智雄」という岸さんの秘書がいて、これは英語ができる。アメリカに留学していた。川部も親しいわけだ。これが外国人を連れてくる。そのうちに飛行機の話が始めた。軍用機の話だ。ずっと今までの軍用機の歴史を説明するわけだ。日本にボーイングを何機入れたか、その前はなんとかいう飛行機だとかいう。みんな聞くと、政治で判断しているという。性能で判断するより、政治家が判断している。どうして軍用機を値段で判断しないんだ、

と言つたら、入札なんてあるわけがない。軍用機の入札は、世界中で一件もありませんよという。兵器の値段の入札があるわけがない。小銃の入札はあるでしょうが、新兵器、秘密兵器を入札する国はどこにありますか。

伊藤 仕様書ができませんね（笑い）。

松野 みんな機密なんだから、値段も機密に決まっている、契約も機密に決まっている。これは軍機なんだから。そんな説明を聞いた。そのうちにその男が、私が防衛長官になったときに、また来たわけだ。それまではただふつうの話だ。私が防衛長官になっちゃった。そうすると、いままで聞いた知識で、目の前に模型とかが出てくる。その時は、要するに私の父の時の鈴木商店時代からの応援はずつとあるわけですね。それが親しい応援者の一人だった。そのうちにその話がだんだん進んで、中村と川部だ。川部が英語が上手だったから、ほとんど川部でしたね。

伊藤 相手はアメリカ人ですか。アメリカ人の何ですか。

松野 アメリカ人は、通信社みたいなものだ。会社のものじゃないんだ。あれはグラマンでしたか、会社じゃないんだ。宣伝屋なんだ。代理店みたいなものだ。

伊藤 それはジャーナリストですか。

松野 要するに業界新聞だ。その川部も、その会社の業界新聞なんだ。だからグラマンの業界新聞の代理店をまた川部がやっているわけだ。だから直接じゃないんだ。みんな業界新聞で、裏はつながっていると思いますよ。金は出ていると思いますよ。それが年中来て、ご馳走したりする。そのうちに防衛長官になった。

伊藤 いや、たいしたものですね。向こうは防衛長官になると思っ

松野 そんなことは私は思っていなかったんだ。そうしたら川部が来ていろいろ話をする。そのうちに見ていると、あそこに海原「治」というのがおつた。海原がいろいろなことをちよこちよこ

言うんだ。私は聞いていた。そのうちに、何か標的飛行機を二機入れようと言いつ出した。

伊藤 射撃の対象にする飛行機ですね。

武田 海原さんが言い出したんですか。

松野 海原が言い出した。それを見ると、新しい飛行機なんだ。二機入れるという。「今まではどうしていたんだ」というと、「今までは古い飛行機が曳航していた。新しい飛行機を二機入れる予算を計上したいがどうだろう」という相談にきた。「今までは古い飛行機を曳航していたのなら、それはできないのか」「できないわけじゃないけれど、新しい飛行機だ」という。そんな話をしているうちに、なんだか口がもごもごするから、そのまま放つたらかして、私のときは予算要求に入れなかった。

それから川部がいろいろな話をしてくて、「こういう話があった、こういうふうにして、飛行機を防衛庁に入れるようになってははずだ、どうしましょう」と言うから、「おれはやめたよ」「そうですか、入れてもらわん方がよかつたんです」「おれは知らないから、とにかく延ばしたよ」「いや、それでよかつた」という話をあとから聞いた。

その時に海原という人間が何かいろいろな話で、知恵がありません。それから海原の話を聞くと、とにかく旧軍人を圧迫するわけだ。おまえたちは戦争犯罪人だという。それで仲間の話を聞くと「海原天皇」といわれて、これがユニフォームに一番嫌われている。

もう一つは、その話は岸さんから聞いた。中村から聞いたことかどうかわかりませんが、岸さんが「おい松野、海原というのは用心しろよ。それが今まではすべてを牛耳っていたやつらしい」という。岸さんが、「私が防衛庁長官に」就任してしばらくしたら、次の事務次官を誰にするかというときにそんな話をされた。事務次官は三輪「良雄」というんだ。「三輪というのは人柄が良くて、

まず間違いない。官房長の海原を用心しろよ」というんだ。それは岸さんが、私に雑談のときにしたことなんだ。「防衛庁はどうだ」というから、「いまいろいろなのがおつて、私は飛行機のことを言われていますが、どうせ私のときは危ないから触りませんよ。どうもいろいろなこと、この前のバッジ・システムで防衛庁は問題になって、私のときは何も触らんで行こうと思います。いろいろ話は出ていますが、私は触りません」と言った。海原というのがあるから、といって、岸さんがどこから聞いたんです。軍人から聞いたんでしょう。それで私のときは、正直な話、何もなかった。

私がしたのは、練習船を一つ増やしたこと、「かとり」「かしま」だ。それから女子自衛官を初めてつくった。二百人ぐらいの定員だ。私がやったのは、それからタンク、戦車の新しい装備のものをつくったんだ。新規の予算をとった。

小池 七四式か、七五式ですね。六一の次ですね。

松野 予算を取ったのは、戦車と、女子自衛官を初めて採用したこと、それと練習艦だ。これは福田が大蔵大臣だったから、とつたんだ。それで飛行機はいろいろな話を聞いているけれど、怖いから逃げたというか、流してしまつた。一切触らなかつた。それあとで増田「甲子七」さんに引き継いだ。増田さんへの引き継ぎはその通りにした。「こういう話があるが、私はとても手に負えないし、力もない。岸さんからこういう話で、私は用心している」と、引き継ぎの話は私が増田さんにしたわけだ。それで増田さんも海原を用心したと思う。

だからおたくの『海原治オーラルヒストリー』を見ると、海原が松野がどうだこうだと言っているけれど、松野のもっと上に問題があるんだ。松野の問題じゃないんだ。岸、川部、中村、そして旧軍人がたくさんいますからね。「海原は」旧軍人に対して、まるで制服は戦犯だ、シビリアン・コントロールだと言って、三

矢事件以来しゃにむに叩く。それが海原に対する反撃だった。あの『オーラルヒストリー』を見ると松野がどうだと言っているが、もっと上がいることがわからないんだ。私は海原について無知識で行つたけれど、知識を与えられたのは、彼は警察上がりでしょう。そこでいろいろ話があつて防衛庁に来たんだ。それがあの『オーラルヒストリー』を見ると、松野が、松野が、と書いてあるけれど、もっと上がいたことを知らなかつたんだ。それは岸さんに誰が入れ知恵をしたか知りません。私のときはそのまま一切審議なし。したがって調査もなし。グラマンの話も一切なし。

そのうちにそのつながりで、日商岩井が私の政治資金の応援で、防衛長官を辞めたあと、松野を応援する。それは中村とか川部が進めたんでしょうね。その流れがずっと続いて、私に政治献金をする。そこで、田中・福田の争いが出て来た。そこで約四十人、とにかく集めなければいかんわけだ。「松野、何とか金ができないか、田中の方はこれだけばらまいているぞ」という。それは実弾が金額で来るからわかるんだ。なんとかならんか、と言われて、その政治献金の一部が、それなんだ。それは名前を言えば、あのときは岸さんの名前も私は出さなかつた。私一人で使つた。私一人で選挙に使つた、私の借金を払つた。全部名前が出さなかつた。政治行動としては、そういうルートからいろいろ出ている。新聞の一部がちよつと出たけれど、私は一切言わない。

岸さんはいろいろな情報はくれたけれど、命令したことではないものだから。ただ用心しろよ、ということだった。あとで見ると、海原は別の会社の方に近かつたということがわかるわけだ。私のときにはまだそこまでわからなかつた。とにかく飛行機は危ないから、私の時代には決めまい、ということだけを決めた。増田さんに頼むしかない。その一つが鈴木商店と日商岩井の政治資金だ。そのときは無制限なんです。私は政治資金規正法の違反ではないんだ。個人献金はその頃はまだ無制限なんだ。三木内閣

の時に制限されたけれど、その事件は佐藤内閣、田中内閣の時の政治献金ですからね。

佐道 防衛庁長官も辞められたあとなので、実際の職務権限の問題も関係なかった。

松野 もちろんです。それからその問題が出たときも、もう六年経っているから調査の時効が過ぎていた。

伊藤 この時に特別委員会で証人喚問をするというのはいい、どこがどういふふうにならぬ目的でやったんですか。

松野 それはどうも、私に対する敵もいましたからね。

小池 自民党内に、ですね。

松野 自民党内に。

武田 大平も敵ですし（笑い）。

松野 それは表立っては言いませんよ。野党の要求を、まあ仕方ないかな、といって吞んでしまった。これは本当ならば野党要求を拒否しますよ。予算が二日間遅れても拒否しますよ。しかし予算が二日間遅れるなら、証人喚問を呑んだ方がいいという方向に変わっちゃった。大平内閣だからね。だから松野が証人喚問に出ないと予算が二日遅れる、だから出した方がいい。だから私は出させられた。

伊藤 これは岸さんと一緒でしょう。

松野 岸さんは出なかつた。私が背負つたんです。私が出たから、私のところで一切止めたんです。私の証人喚問で、その内容まで話した。岸さんには関係ない、ということ、岸喚問はそこで止めたんだ。要求は出て来ていました。

伊藤 喚問した人は、何を追及したかつたわけですか。

松野 要するに政治献金と飛行機との連携を突いた。目の前の委員に増田さんがおるんですよ。その時は辞めているんだ。私は「増田さんに聞きなさい」と言つたんだ。増田さんが委員で、「松野の言うことは正しい、何も関係ない」とワンワン言うんだ。

私は、「増田さんがここにおられるから、増田さんにお聞きになつてはどうですか」と言つたら、増田さんが「そうだ、松野からは何もそんな申し継ぎを受けてない」と目の前で言つてくれた。私は引き継ぎで一切そんな話をしたことはない。日商岩井とグラマンと関係があつたかもしれないけれど、私の決定権はないときだ。私の決定権は明らかにない。それは私も自分の時は、用心に用心していた。日商岩井は鈴木商店の時から親しいから、なおさらこの場合は駄目だと特に注意した。だからその問題はその通り、政治資金はもらつたが、この問題とは関係ない。防衛長官をやったときには、何も私はこの問題に触れていない。増田さんに全部白紙で渡した。増田さんが「そうだ、おれは松野から頼まれた覚えはない」と目の前で、委員の中で喚びてくれた。結局そこだつたんです。

もう一つは、参議院にまた喚ばれた。参議院は出なくてもいいんです、拒否してもいい。衆議院だから、一院でやれば二院は行かなくてもいいんだ。私は衆議院議員だから。ふつうの民間人なら両方出るが、衆議院議員は衆議院でやれば、参議院に行かなくてもいいんだ。そうしたら遮二無二、参議院に出てくれというんだ。

伊藤 人気があるんだ（笑い）。

松野 だから私は参議院までつき合つた。二回つき合つた。行かなくてもよかつたんだけれど、私は出てやろうと思つた。それは市川房枝がさかんにやつていた。

佐道 市川房枝がいたんですね。聞かれる内容は結局同じことですか。

松野 同じことです。市川房枝は、「あなたにはアルコール患者病棟をつくつてもらつてありがとう、感謝する。そのことには感謝するが、今日の問題は別だ」という。アルコール病棟をつくつてくれといつて、市川房枝が頼んできたんだ。それで私がアルコ

ール病棟を久里浜につくったんだ。それは池田勇人が大蔵大臣だったから、「アルコールを飲ませておいて、患者になった病人をアルコールの税金でテイクケアするのは当たり前じゃないか。それは当然だ。だからアルコール税を取る以上は、アルコール患者の病院をつくりなさい」と言ったんだ。池田勇人はわかりがいい。「よしわかった」と、その瞬間に決めた。今でもあるんですよ。国立アルコール患者療養所久里浜病棟。これは市川房枝が、私が政調副会長の時に頼みに来たんだ。それで大蔵大臣池田勇人にそれを持っていった。これはやるべきだ。池田勇人もわかりが早い、じゃあやるかといった。それで池田勇人は施政方針演説に入れたんだ。アルコール病棟をつくった。それは池田内閣の時です。それは市川房枝から頼まれた。その話で、証人喚問のときに市川房枝がお礼を言ったんだ。速記に出ている。

佐道 締まらない質問ですね。

松野 だからいろいろいるなことがあるけれど、真実はそんなものだ。それをいろいろ疑いを持っていえばキリがないことだ。しかしそれも長い中の一つであって、最初からできていたわけではないんだ。長い人間の脈の中にそういうものが生まれてくるんだ。私は、これぞ人脈というものは大事だと思う。たまたまそれがそういう事件で大きく取り上げられたというだけで、本当をいうと私の話はもう時効になっていることだし、贈収賄の問題ではないんだし、取り上げられなくてもよかったものが、時間が過ぎて内閣が替わったものだから、与野党の取り引きの中で生まれてきたんだ。その頃それが新聞にちょっと出た。

伊藤 ちょっと出た、じゃないですよ。大きく出ましたよ(笑い)。
松野 もう一つは、日商岩井の内紛にも問題があった。日商岩井の中で海部がえらい横暴だというような内紛の中から出て来た。会社の中がスタートだったんだ。

伊藤 じゃあ五億円という金額はそこから出てくるんですか。

松野 五億円といつても、いつべんに五億円持ってきたんじゃないんですよ。ずっと継続された金額、トータルの金額ですから、いつべんに来たものではない。もうひとつ、本当に五億来たかどうか、会社の帳簿の五億かもしれないですよ。領収書を出したわけではないんだから(笑い)。だから私も、否定も肯定もできないんだ。

伊藤 こちらの帳簿があるわけではないから(笑い)。

松野 ないんだ。向こうがそういうから、そうか、そうだったかということですよ。それは向こうが四億三千万だといつてもしょうがない。

佐道 そんなに多かつたのか、と云えないですからね。

松野 言えないでしょう。私が覚えていないのは、その時は政治資金法で登録しなくてもいいんだから。だから否定もできない。私の方から、いや四億だ、違う、といったら、私の方がおかしくなる。献金なんだから、いただく方だから、ありがとうございまして言うしかないね。それは金額が違うとか言えない。五億だと言うから、まあそうだろうと。おかしいなといつても、それはいいぺんにもらったんじゃない。計算してもらっているんじゃないんだ。会社の会計決算のためにもらったこともあれば、わからんと言った。私も帳面をつけてない。そのへんは、事件の大きいわりには、最後はなんだかわからない。

佐道 法的には職務権限の問題でもなくて、しかも時効ですから罪に問われるということではないんですが、結果的に議員を辞職されますね。

松野 それはあまりうるさくて、うるさくてね。もう一つは、自分自身がこんなことばかり言われてはたまらん、という気がしたんだ。自分がたまらない。

伊藤 やはり毎日毎日、新聞で書かれたらー。

松野 やっぱり自分も、非は非として認めて、きれいに再起しよ

うという気持ちで辞めました。そうしなければ、こんな馬鹿な話は消えないと思った。消すために、私は自分の身を捨てた。そうしなければ私は一生これで終わってしまう。再起できるかできないか知らないが、一度は自分で断崖を飛び越えてみなければならぬ、それが私の決心だった。できるかどうかわかんけれども、このまま終わるぐらい不愉快なことはない。どちらかというと、自分の身の潔白を示すために飛び降りたようなものでしょうね。区切りを打つしかなかった。

伊藤 しかし証言したときにはすでに捜査は中止になっていたのでは。

松野 もう捜査はなかったですよ。

佐道 立件できるような問題ではなかったわけですからね。

伊藤 僕らもよくわからないけれど、新聞でわんわん大きな活字で書かれると相当衝撃が大きいですね。

松野 私も不愉快だけれど、周辺が困りますね。家族や秘書たちが。

伊藤 選挙区にも影響がありませんか。

松野 選挙区にも影響がある。ちょっとあれ「国会中継…首相の施政方針演説」を聞きましょう。

伊藤 時間ですから、ここで終わりにしましょう。次回を決めましょう。ここでグラマンの山も越えたことですし。

松野 あれは、私にとつて一番不愉快な思い出です。

松野 もう一年やったでしょう。

伊藤 もう一年やりましたか。そうだ、一年やったんだ。

松野 十月から始まったから、一年ですね。

武田 今度は十三回目ですね。

伊藤 あとまだ数回は必要ですね。小泉内閣まで来ないと(笑い)。

佐道 同時進行になりますね。

伊藤 同時進行になったら終わらないじゃないですか(笑い)。

松野 私が死んでから本にしてください。もう恥ずかしいから。小池 このあいだのお話では、死ぬまでおつき合いいただけるということですから。

松野 その代わり、死ぬまで出さんでください。いまの海原の話なんて、私は海原の話は読んだんだ。

伊藤 いや、生きているうちに自分のをちゃんと見ないと駄目ですよ。

松野 海原はまだ生きていますよ。

伊藤 だいたいお体の具合は悪いようですが。

■小泉首相とその周辺・日本の情報機関の必要性

伊藤 「TVで小泉首相の所信表明演説を見ながら」何か少し疲れた感じですね。

松野 このあいだ会って、「おい大丈夫か君」といったら、「ええ、大丈夫です」と言っていたけれど、疲れているんだ。痩せたな。

ゴルフと同じように、スウィングを始めたら変えられない。変えたら失敗する。だからこのまま行かすしかない。この前は英語をしゃべったのには驚いた。

小池 英語は上手でしたね。でもそのあとの質問で日本語になっただけです。

松野 あれはイギリスの大学に二年いたんだ。

伊藤 二年いればなんとかなるんでしょう。

松野 貧乏生活をした二年なら覚えますよ。金を持っているやつは駄目だ。貧乏で二年いなければ駄目だ。歴代の総理より顔がいいね。ちょっと鼻が高くてね。

小池 特に前との比較が。

伊藤 意気が見える。

佐道 しかし最近目の下に隈ができて、顔色もよくないですが。
伊藤 お医者さんがついて、診ているんでしょうね。

松野 診ています。家族の団結がすごいんだ。

伊藤 それは大きいですね。

松野 家族が一丸となって、家族は一切マスコミに出ない。

小池 弟さんが秘書ですね。

伊藤 女の姉妹ですね。

松野 弟が一人いる。一切出ないことになっている。

伊藤 息子が出ているじゃないですか。

小池 芸能界に。

松野 政界に、ふつうなら家族が出てくるけれど、一度も出ない。

このあいだ箱根にもみんな家族で行っているんですよ。姉さんや家族は時間を別にしてはいるんだ。前の日に行ったり、翌日帰ったり。それからホテルからは出ない。見事に統制がとれている。

佐道 芸能界に入った息子にもSPがつかますね。

松野 SPがついている。SPは知っているけれど、新聞記者の

時には裏口から出ている。家族が見事だ。

伊藤 とにかく前に突き進む以外にないですね。

松野 それ以外ない。妥協したら負け。問題は党内です。野中と

か橋本とかあのグループですよ。

小池 亀井がお先棒を担ぐみたいな形でけっこう騒いでいます

ね。

松野 あれはまあ、一人芝居でしょうね。あまり受けません。

伊藤 あまり亀井は出てこないんじゃない。

小池 雑誌『正論』『経済界』に出しています。

松野 あまり新聞には出なくなりました。過去の話ですね。

小池 あの派閥の中で、平沼に移りつつあるような気がしますね。

松野 平沼と麻生でしょうね。どちらかだ。

伊藤 石原はなかなかいいじゃないですか。

松野 今のところいいですね。でも力がない。党内ではいかにもルーキーですね。

小池 しかし中谷とか、若手がよくやっていますね。

伊藤 中曽根さんは大統領型といわれましたが、そういう意味では中曽根さんよりもやっていますね。

佐道 支持の形態がそうですからね。国民の支持を背景にしているから。

松野 英語ができるのには驚いた。あそこでしゃべるだけ自信があるということだ。

伊藤 「テレビに塩川財務相が映る」このおじいさんはどうですか。

松野 おととい会いました。「支えてください、しつかりやるように」と言うから、「私が言うより、あなたがやればよい」といった。

小池 羽田に行くとか小泉ケーキとか塩爺煎餅というのがあって

すよ。やっぱり東京では、と思いましたがね。

松野 そのとき、「ドルの値を維持してやれば、アメリカは喜ぶ」と言っていましたね。

小池 円高ドル安は進めたくないということでしょうね。

松野 ドル高がいい。日本はドル高が好きなんだ。

小池 そうしないと輸出ができませんからね。

佐道 景気回復のためにも、いまのところ円高を抑えたいということですね。

松野 だから一七〇円と言っていたよ。「一七〇円ぐらいにできないか」と言ったら、「そりゃあできませんよ」と言っていたな

(笑)。すると日本の景気がよくなるのにねと言ったんだ。

伊藤 それはアメリカが怒るでしょう。

松野 いまは維持してやっているようなもので、暴落を防いでや

っている。

伊藤

伊藤 日本とヨーロッパは何とか支えているから。

松野 暴落しない。日本は暴騰してくれる方がいいんだけれどね。

伊藤 ふつう戦争というのは、株は買いたんだけすけれど。

松野 買いたんだけすけど、いまは違うんだ。不思議だな。今度の

戦争は、ちつとも戦争景気が出ないんだ。油も出ない。

佐道 たくさん物を作る戦争じゃないですからね。

松野 技術戦争のようだな。人工衛星で戦争するようなものす

ね。消費がないんだから。戦争景気が出ないからしょうがない。

伊藤 ふつうは戦争が一つの転機になって景気が回復するんす

けれどね。

松野 そういうことになっているはずなんだけれど、しょうがな

いんだね。自衛隊を五万人増やせば、雇用が増えるかもしれない

な。

佐道 でも中高年ばかり増えても。

松野 中高年が自衛隊じゃ困るな。

小池 いま学校の教師を増やそうという話になっていますね。

松野 情報、諜報みたいなものを増やさんとな。

伊藤 やっぱりCIAみたいなものをきちんとつくらなければ大

変ですよ。

松野 CIAみたいに二千人もつくらなければ。

佐道 日本独自の情報システムをつくらないと駄目ですな。なん

でも日米安保、アメリカ頼みじゃ、しょうがないですからね。

松野 何かこのあいだある新聞記者がワシントンに行ったら、す

ぐ千ドルで論文を書いてくれと言われたというんだ。書くとき千ド

ルくれるんだ。千ドルもらうと、すぐ次の情報を聞きに来るそう

だ。それがCIAの諜報官になるそうだ。だから新しい新聞記者

が行くとすぐに書いてくれという。書くのはどうでもいいんだ。

伊藤 そのつながりで、今後ずつとつながっていく。

小池 安全保障の問題が大きくオーバーラップして、環境とか人

権というのが吹っ飛んでしまいましたね。

松野 そういう金が機密費でなければいけないんだけれどね。領

収書を取るわけにはいかないんだ。ただサインさせるそうだ。そ

のサインはみんな取ってある。それが広くいえば諜報員。本人が

意識しなくても、向こうではそう思っている。それが何万人とい

るから、何かの時には、それを呼び出して聞けるでしょうね。

伊藤 そうやって国のために情報を提供するという人間をつくら

なければ駄目ですな。

松野 ルートをつくらなければ駄目なんだ。それがルートになる。

日本はそれをやっていないから、ルートがとれないんだ。急に行

って千ドル持っていったって、誰も教えてくれないんだ。ふだん

から渡しておかないとね。

伊藤 次に小泉さんに言ってください。

松野 本当だ、そうしないと無理です。

佐道 そういう情報ネットワークはつくるのも大変だし、維持す

るのも大変ですからね。

伊藤 すぐに速効があるというわけではないですからね。

小池 安全保障の問題は特にそうですからね。速効性がなくても、

常にやっておかなければいけないことですから。

佐道 内政ばかり話が進んでいるけれど、外交、安全保障の構造

改革もやってもらわないと。

伊藤 安全保障関係を官邸マターにしたといつても、情報がちゃ

んと入らないとどうにもならないでしょう。

松野 ことに今度はそうでしょうね。

小池 直属機関みたいな形の情報機関をつくれればいい。

伊藤 ロシアなんか、情報機関の長が国のトップになる国だから。

小池 このあいだまでスパイをしていたドイツでー。

武田 ドイツ語がうまいんだ。

小池 インテリは違う。
佐道 小泉さんが英語を喋るけれど、イギリスで諜報活動をやったわけじゃないか。

松野 千ドルもらってきたのかな。

小池 英語をしゃべったので、うちの女房もおつと言っていました、やっぱりプーチンのドイツ語の方がすごかったですね。

松野 あれは本職だ。小泉の英語はまあまあ合格ですか。

小池 合格みたいでしたよ。

松野 私はわからなかったけれど、だいたい合格でしょう。

伊藤 「テレビで最上段の議員席を映し出す。中曽根、宮沢、橋本、森と並んでいる」宮沢さんがいる。

武田 すごいメンバーだな。
松野 この四人がいたら駄目だ。脱皮できない重石だ。たくあんの重石。

武田 あの四人以外ないという感じで、誰もあいだに入れない。

伊藤 だんだん上がっていくんだ。

松野 あれがいると自民党は伸びない。若い者がついていかない。

伊藤 松野先生はどこまで行きましたか。

松野 私もある辺まで行きましたよ。最後列まで行きましたよ。

伊藤 あそこが上がりの席ですね。

松野 上がりだ。じゃあまた来月お願いします。

一同 どうもありがとうございました。

政局関連年表

「全米同時多発テロ事件に伴う自衛隊海外派遣関連年表(二〇〇一年)」

九月十一日

ニューヨークを中心に同時多発テロ事件発生。

小泉首相、「できることは何でもす

る」とベーカー駐日大使を通じてブッシュ大統領に連絡。

九月十二日

政府・自民党が、自衛隊が在日米軍基地を警備できるように自衛隊法改正案を次期臨時国会に提出する方針を固める。

九月十三日

小泉首相とブッシュ大統領が電話会談。米国の報復措置への支持を正式に表明。

九月十八日

ベーカー駐日大使が、日本が憲法と現行法の枠内で可能な支援を行うことに強い期待を表明。

九月十七日

外務省の野上事務次官が、核実験実施を理由としたパキスタンに対する経済制裁解除の可能性を示唆。

柳井俊二駐米大使が、自衛隊派遣による対米協力の必要性を表明。また、自衛隊派遣の法的根拠について、新規立法をすべきだとの認識を示す。

九月十九日

小泉首相が、米軍の報復攻撃に対し物資の輸送・補給や負傷者の医療などの後方支援に自衛隊を派遣することなど七項目の「当面の措置」を発表。防衛庁が二十一日に横須賀基地を出港予定の空母キティホークとともに、海上自衛隊の艦艇をインド洋に派遣する方向で検討。

九月二十日

小泉首相が、首相官邸で野党三党首と会談。首相が、米軍の後方支援のために自衛隊を派遣するといった政府方針を説明、臨時国会で必要な法整備を行う考えを伝え、協力を要請。小泉首相が、山崎幹事長ら党幹部と会談。首相は米同時多発テロへの武力報復に合わせ、自衛隊が後方支援を実施するための新規立法について、臨時国会で早期成立を図る意向を表明。

九月二十三日

政府・与党が、避難民の救援を効果的に実施するため、PKO協力法にある武器使用制限を緩和させる方向で検討。

九月二十四日

小泉首相が訪米。会見で、民主党との事前の法案協議に柔軟な考えを明らかに。

九月二十五日

日米首脳会談。ブッシュ大統領が、テロ対策での日米同盟の重要性を強調。小泉首相は、武力を伴わない範囲で可能な限りの協力を行う考えを伝達。

十月十六日

衆院国際テロ防止・協力支援活動特別委員会が、テロ対策支援法案を「国会への事後承認」を盛り込む一部修正の上、与党三党などの賛成多数で可決。

十月十八日

テロ対策支援法案が衆院本会議で、「国会の事後承認」などを盛り込んだ一部修正案を自民、公明、保守の与党三党などの賛成多数で可決、参院に送付。

十月二十九日

テロ対策支援法案と自衛隊法改正案など関連三法案が、参院本会議で与党三党などの賛成多数で可決、成立。

十一月一日

タリバン政権のザイーフ駐パキスタン大使が、米国のアフガニスタンへの攻撃支援で日本が自衛隊艦艇の派遣に向け準備していることについて、間接的な口調ながらも強く反発。

十一月二日

与党三党幹事長がパキスタン・カラチへ出発。

十一月十五日

中谷防衛庁長官が、インド洋に派遣する海上自衛隊艦艇について、イージス艦派遣の考えを政府として初めて表明。

十一月十六日

政府が、安全保障会議と臨時閣議を開き、自衛隊支援の内容を定めた基本計画を決定。政府は最新鋭のイージス護衛艦の派遣は断念。

十一月二十日

中谷防衛庁長官が、テロ対策支援法に基づき米軍のアフガニスタンへの軍事行動やアフガニスタンに対する自衛隊の支援活動の詳細を定めた実施要項を決定し、海・空の自衛隊の部隊計千五百人に派遣命令。

十一月二十五日

海上自衛隊の艦艇三隻が、横須賀基地など三つの海自基地からそれぞれ出航。

十一月二十六日

テロ対策支援法に基づいて、アフガニスタンでの米軍などの軍事行動やアフガニスタンを支援するための自衛隊活動を承認するかどうかの審議

が、衆院国際テロ防止・協力支援活動特別委員会で行われ、与党三党と民主党などの賛成多数で可決。

十一月二十七日

衆院本会議が、テロ対策支援法に基づき、アフガニスタンでの米軍などの軍事行動やアフガニスタンを支援する自衛隊の活動承認案を、自民、公明、保守の与党三党と民主党などの賛成多数で可決。

十一月三十日

参院本会議が、テロ対策支援法に基づいて、アフガニスタンでの米軍などの軍事行動やアフガニスタンを支援する自衛隊の活動承認案について採決し、自民、公明、保守の与党三党と民主党などの賛成多数で可決。民主党では七人が党の賛成方針に違反。

十二月三日

防衛庁が、テロ対策支援法に基づいて、海上自衛隊艦艇による米艦艇への燃料補給活動をアラビア海で開始したと発表。

十二月七日

臨時国会閉幕。

十二月十二日

海上自衛隊の掃海母艦「うらが」がパキスタンのカラチに入港。

松野頼三 オーラルヒストリー

第13回

[2001年10月29日12:00~14:00]

『佐藤栄作日記』と松野頼三（1）

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員)

■自衛隊殉職者の追悼式について

松野 ……毎年、自衛隊の殉職者の追悼式に行っています。一年間の追悼式を年に一回、まとめてやります。今年は幸いに少ないんですが、それでも四人です。私の時は一年間に八十人ぐらいだった。飛行機が一機落ちると十何人でしょう。そういうことがいろいろあるんですね。

防衛長官をやっていると、追悼式が一番いやですね。家族に会うのが申し訳ない。自衛隊員の年齢からすると、子どもが小さい小学生なんです。親が六十から七十歳ぐらい。親はしっかりと知っているけれど、未亡人と子どもがかわいそうですね。職務でお国のために死んだんですからといって、親は奉職だと思う。子どもを見ると、子どもはそんなことはわかりませんからね。

有馬 長官は遺族に言葉をかけたりするわけですか。
松野 もちろんです。もう追悼会の何ヶ月か前に会っていますからね。だいたい死亡してから三週間後ぐらいには必ず会います。遠くならこつちから行くし、向こうから来ることもある。防衛長官の一番きつい仕事は、殉職者の家族と会うことです。

佐道 飛行機が墜落して、民間人にも被害が出るとか、そういうときも大変ですね。防衛庁長官は挨拶に行きますね。

松野 そう、本当に防衛長官をやっているやなことはそれですね。また、ある程度過激な訓練をしなければならぬし。

伊藤 「なだしお」のときなんかは大変だったでしょうね。

松野 それで、こつち「追悼式の控え室」で待っているあいだ、防衛長官だとか参謀だとか、いろいろな人に会うから、「君たちはインド洋まで行く能力があるのか」と言ったんだ。プロペラの飛行機でパキスタンまで行くのに三日かかっているでしょう。往復六日でしょう。「能力がそんなにないのに、君たちは大丈夫か」

と言った。

私は帝国海軍でインド洋まで行った。その時の苦勞を知っている。一番困るのは水や食糧の補給です。缶詰はいいけれど、生鮮食料品、野菜がない。昔の船乗りはみんな脚気と白血病で死んだんです。それはなぜかという、野菜を食べないからだ。日本の海軍も明治時代にそれで苦勞したわけです。イギリスでは「脚気や白血病が」わりに少ない。どうしてだろうと研究したら、麦を食べる、パンを食べる。パンを食べると白血病が少ないということがわかった。それで海軍ではパンを食べるようにしたんだ。兵隊は麦ご飯、将校は昼は必ずパンに決まっている。

伊藤 自衛隊の見学に行つて、食堂に入つてご飯を食べると、麦ご飯です。

松野 とりあえず白血病と脚気が問題なんだ。

伊藤 いまは国内だから別段そんなことはないけれど、伝統になつているんだな。

松野 それを発見したのが、軍医官の高木「兼寛」という人だ。高木という人にその功績がある。それで慈恵医大の開祖がその高木なんだ。慈恵医大の開立者です。いまでも慈恵医大では高木が教祖になつている。

■テロ対策法・現在の政局

伊藤 今日テロ対策法が通るのかな。

松野 参議院ですね。

伊藤 あれと引き替えに中選挙区だつて（笑い）。

松野 下品な話だ。下品、下品。

伊藤 しかし公明党というのはそういう厚顔無恥なことを平気でできるんですね。

松野 あれは国民政党内ではなく創価学会政党内だから、創価学会が便利だからやるわけだ。どうもあれは教祖のご託宣のようだな。あれをやると公明党が四人ぐらい増えるということなんだ。

伊藤 この間の例のテロ対策法の際に、記名投票云々という問題があったでしょう。きのう記名投票をやったら面白かっただろうなと思うけれど。

松野 あんなこと屁理屈でね。その前に何か別の法律をつくった時は野中の時で、起立採決だった。野中は自分が責任者の時は起立採決をしている。そこに下品さがある。いかにもいじめの類でね。どちらにしても関係ないですよ。

伊藤 あの法案には民主党だつて賛成する人がいただろうにね。鳩山はもたさしているから。

松野 だいたい鳩山が賛成でしょう。小沢一郎流に言うると、憲法を曲解している、集団行動に間違いはないじゃないか、それをそうじゃないとごまかしている、ちゃんと集団安全保障ということを入れる、ということだ。

伊藤 だけど自民党の綱領は、最初から集団防衛ということですね。

松野 書いているんですよ。

伊藤 なんていつの間にかそれが駄目ということになったのか。

松野 だんだん追い詰められたんですよ。朝鮮戦争のようなときにアメリカの戦争に巻き込まれるじゃないかと言われて、集団安全保障はしませんということを追い込まれて答弁したから、それが生きていくわけだ。あれはインド洋まで行けば、アメリカと共同戦争に決まっていますよ。

小池 野中は息を吹き返しましたね。

伊藤 あれで吹き返したのかな。

小池 テレビの露出度は非常に高くなりましたね。ただ、足元はぐらついているみたいですね。

佐道 自民党は単独過半数を取り返したから、これで少しはやりやすくしたという話もあるんじゃないですか。十二月の内閣改造は、やはりいいですか。

松野 できませんね。

小池 せめて外務大臣だけでも替えれば。

松野 内閣改造を主張するのは野中たちなんです。野中たちのグループは一人も入っていない。全部締め出されているんだ。改造を機会に入れようというわけだ。野田毅は扇「千景」と替わりた。みんな自己中心的です。

伊藤 外務大臣を替えたいと思っても替えられないということですかね。

佐道 あの外務大臣で我慢しなければいけないんですかね。

松野 スタートダッシュはよかったけれども、あとの田中「真紀子」の失速には驚きますね。失速の早いこと。

伊藤 最近週刊誌が田中真紀子のスキャンダルめいたことを次々と書いていますからね。

伊藤 自分で辞めることはないからね。

小池 いま辞めたら政治生命は完全になくなりますものね。

松野 小泉は改造することはありません。「田中」本人が辞めた、といえれば別ですけどね。

伊藤 本人に辞めたいと言わせるといっただけはなかなか難しいだろうな。

松野 扇が辞めたいというならいいでしょうね。野田は扇に替わりたくてしょうがない。

小池 最近小泉官邸と鳩山の関係はいいですね。

松野 鳩山もきついでところで、小泉に近づくと、党内が半分になる。「小泉と」離れても、打倒する計画は立たない。今度の道路公団の改革なんていうと党内は大変ですからね。土建議員が巻き返しますからね。

佐道 古賀誠などもテレビに出て、いろいろ発言をしていますね。
小池 独立行政法人案といっている。

松野 橋とか道路をつくるというけれど、通る人間がいなければ
ね(笑い)。道路も大事だけれども、通る人間のほうが大事だ。

通る人間を考えずに道路をつくる馬鹿はない。まさにそれですよ。
そうすると、彼らは必ずまた座談会か何かで、「道路をつくれれば
人が増える」と言うんだ。それじゃあ君は、金を稼いで使うのか、
使ってからあとで稼ぐのか。それと同じ議論だ、と思う。金は稼
いでから使うだろう。使ってから稼ぐというのはどんな危ないこ
とになるか。どんなに金利がかかるかわかるだろう。それと同じ
だ。人が増えたから道路を造るなら私も賛成する。道路をつくれ
ば人が増えるという論拠は、金を使うときに、先に使ってから後から
稼ぐのと同じだ。そんな危ないことは子どもだってわかる。君ら
の議論は、かつての軍閥と同じだ。八紘一宇の精神でアジア全部
も恩恵に浴するという。恩恵といって侵略したんだから(笑い)。
八紘一宇の精神と君らは通じるところがある。
そんな議論がいまだに行なわれていますからね。もういまにな
ると、人が通るような道路はないんです。もうほとんどの幹線が
できているんだから。通らない道路をつくる馬鹿があるか。どこ
の知事も、橋も大事だけれども、上を通る人間を大事にしる、と
いうんだ。橋より人間が大事だ。

■アフガン攻撃・米軍と自衛隊

伊藤 まだ一ヶ月前はアメリカ軍の爆撃は始まっていなかったで
しょう。

松野 だんだんアメリカのほうで情勢が悪くなりましたね。だん
だん悪くなっていく。まるで宗教戦争みたいだ。

伊藤 思うつぼにはまりかかっている感じですね。

松野 フィリピンなんかも待っていましたという感じだ。ザンボ
アンガなんて私も戦争中に行つたところですからね。一年半ぐら
いいいたところです。

伊藤 フィリピンの南のほうですか。

松野 はい、南のほう。ザンボアンガはいいところでしたよ。ス
ールー海というのがあって、そこがイスラムなんだ。常に反抗し
ている。いまでもそうですよ。税金を払わないで自治領のよう
ですね。あそこはイスラムの過激派です。すぐ後がボルネオに近い
ところですよ。あれは激しかった。私の時も激しかったけれども、
いまだにそうですね。あそこは自治領みたいに、いまだに税金を
払っていない。

伊藤 同じイスラムでもマレーシアなんかはそんなに激しくはな
いでしょう。日本に対して非常に好意的でしたね。インドネシア
もそうですね。

小池 インドネシアはちよつと変わりましたね。

伊藤 インドネシアには原理主義が入つて来た。

佐道 フィリピンはこの間まで政府と和解していたんですね。そ
れが急にまたこんなふうになつてしまった。

松野 あの国は昔から、もうずうつとそうです。

佐道 和解しては、またぶつかつて。

松野 あそこへ船で三日間ぐらい行つたんです。イスラム教だが、
陸へ上がろうと思った。そうしたら、うちの王様は神の使いだと
いう。どうしてかという、指が六本あるというんだ。それで見
ると、なるほど小さいのが一本あるんだ。医者に聞いたら、あれ
は変形した骨がちよつと出ているだけです。その一本がちよつと
ここに伸びているだけだ。でも、それを見せて神さまだという。
それがイスラムだ。私はそこへ行って、三、四日いた。

そこですよ。七歳の子どもを連れてきて働かせてくれという。

慰安婦として採用してくれというんだ。七歳だからとても駄目だといったけれど、親が連れてくるんだ。それぐらい民度の低いところでしたね。

武田 不思議なところですね。

松野 慰安婦問題もあるけれども、慰安婦は志願してくるんだね。現地で募集すると集まってくるんですからね。韓国の慰安婦は徴集みたいだという話もあるが、現地の慰安婦はみんな志願してくるんだ。だからわりに慰安婦問題の補償が少ないんです。台湾なんか一つもない。韓国はある程度、徴兵みたいに徴集したんですからね。

こんなに国状が違っていると、アメリカの近代兵器が届かないかもしれない。自衛隊の船に乗ってみて私が驚いたのは、作戦室を見たら全部英語なんだ。私にはわからないんだ。最後に、「『きをつけ』は日本語だろうね」と言ったら、「もちろんそれはそうだ」という。でも全部、作戦、行動、暗号、通信は英語なんだ。それを見て私は、まるで米軍に編入されているみたいな印象を受けたな。

佐道 先生が防衛庁長官をやっておられた六五年ぐらいはまだそうではなかったのでしょうか。

松野 まだそうでもなかった。

佐道 七〇年代になってアメリカ海軍と海上自衛隊の一体化が進んで、共通のマニユアルで訓練を始めて、それからは全部一緒になっちゃったんですね。

松野 命令はそうでも、「きをつけ」は日本語でしょうね。そういうことを疑うぐらい、私は作戦室に行つて唖然とした。全部のポイントに英語が書いてあるんだ。私なんかわからない。英語がわからなければもうゼロだ。おそらく暗号も信号も同じだろうと思う。あれでイージス艦を派遣しろといえば、向こうの部隊の一部だと思ってしまうね。イージス艦は日本に四隻あるんです。それで四隻出せとアメリカは要求してきているようですね。

伊藤 アメリカがやっているときに、おれのほうは知らんよと言つたら大変でしょう。

松野 それから自衛隊は年中米軍と共同訓練、共同信号をやっているから、精神が一体化しているんだ。行くのが当然のように思っているんですね。規約がうるさいだけだ。彼らはもう米軍と常に一緒に訓練したり、一緒に通信しているんだ。命令はどうするんだ、指揮命令権はどっちにあるんだ、と言いたいぐらいですね。

小池 先任将校でアメリカになるでしょうね。

松野 そうでしょうね。外に行けばわからんですね。

佐道 現地で中心になってやっているのがアメリカだとしたら、アメリカの中に入ってやらざるを得ないでしょう。

松野 弾丸も大砲もミサイルも同じ型でしょう。

佐道 みんな共通しています。

松野 共通している。だから、補給もどれでも自由に合うわけだ。私はあれを見て、大丈夫なのかと思いますね。しかし今度のイスラムは、敵はアメリカとイギリスとロシアとインドだと言っている。インドが入っているね。インドが敵だというのは、カシミールがあるし、ヒンズーだからでしょうね。まるで宗教戦争みたいだ。イギリスとアメリカとロシアとインドというんだから。日本は指名されていなかったから、まだテロはないでしょうね。

伊藤 だけど中国がどういう態度に出るか、ですね。

松野 中国は隣国ですからね。国境で接しているところだから。

小池 国境は封鎖しましたね。新疆のあたりは原理主義がいますからね。

伊藤 結局アメリカの行為を認める代わりに、新疆地帯で弾圧をやっているんだから。

佐道 対テロ対策ということで、法輪功もみんな弾圧していいわけです。ロシアと一緒にです。いま一番困っているのは北朝鮮だと言われていますね。

松野 中国が気持ち悪いですね。私は中国が一番怖い。
小池 脅威論としては中国ですね。

■道路族と予算要求について

伊藤 さて、今日はちよつと廻りますが、武田君が『佐藤栄作日記』の中の松野さんに関する記事を全部拾い集めてくれたので、それを中心に質問したいと思います。その関連で、少し繰り返し部分が出てもしようがないと思いますが、お話しただけだと思います。

『佐藤日記』の一番初めに先生のお名前が登場するのは昭和十七年です。これは佐藤さんが山口に帰省する時に、お父様と一緒に同行したということですね。

松野 二十七年ですか。ああ、山口へ行きました。墓参りに行ったんだ。

伊藤 その後、鳩山内閣の時期にちよつと出てきますが、しばらく空白があつて、昭和三十六年から昭和五十年まで、毎年先生のお名前が出てきます。どうもそれを見てみると、自民党の派閥政治の調整役、あるいは労働、防衛等の政策通として、あるいは佐藤の信頼が深い側近としての松野さんという感じが窺えるわけです。それで『佐藤日記』を補足するような質問事項を考えてみたわけです。われわれのほうから次々と質問を申し上げますので、よろしくお願いいたします。

武田 昭和二十八年「一月五日」にも松野先生のお名前が出てくるんですが、「夕刻松野君、党の予算案をもち来る。明日の閣議の為」ということですね。

松野 その時は何内閣でしたかね。
武田 吉田内閣です。

伊藤 党の予算案というのは、どういう意味だろう。よくわからないな。

松野 それは私が政調副会長をしていた。だから佐藤に関連があることを佐藤に持っていったことがあります。政調副会長はだいたい予算の原案を見ていたものだから、それで佐藤のところにか持っていった。そのころ佐藤は幹事長でしょう。何かの事件があつて持つて行ったと思うが、そのころは米価のことかもしれない。農林関係の予算をやっていましたから、それを持つて行ったのかもしれない。

伊藤 でも、党の予算案と書いてあるんだろう。

松野 党の予算案の中の農林予算があるんですよ。

伊藤 そういう可能性があるということですね。

武田 次は昭和三十一年になるんですけれども、一月十八日に同じように予算案のことが書かれています。

松野 これは吉田内閣ですか。

伊藤 三十一年ですから、もう鳩山内閣です。

松野 その時は野党だったと思うな。

武田 その部分を読ませていただきますと、「瀬戸山「三男」君から電話にて予算難行の様子」。この時に五六年度の会計予算のいろいろな復活要求が行なわれていた。「直ちに二階堂「進」君に連絡し、明朝来る様にす、めた。松野君に連絡したら大要は解せたが、建設組を如何にして納得さすかの問題、見当をつけてやすむ」という記述なんです。

松野 そうですか。二階堂は公共族ですから、私がそれを抑えたわけだ。それはおかしいといってね。二階堂は公共族で道路族だった。田中、二階堂は道路族です。私は道路はあまりい。

伊藤 二階堂も田中もそうなんですか。

松野 そうです。二階堂も田中も道路族で、田中派ができたんだから。

伊藤 でも二階堂さんは別じゃないですか。

松野 いや、あのころは一緒ですよ。最後には分かれたけれど、ずっと一緒です。二階堂も道路族です。辺鄙なところから出てくるやつはみんな道路族です。あれは鹿児島の一歩辺鄙なところから出ていたから。

伊藤 それはずっと延々といまの橋本派まで続いているんですか。

松野 「橋本派の言い分を」聞いていると時代錯誤なんだ。あの時代の頭がまだ変わらないんだ。私がさっき言ったようなことだ。有馬 しかし党内調整でそういうときに道路族を抑えるというのは、どういうふうにするんですか。

松野 道路族を抑えるというのは、公共事業の中に農林も入っているんです。農林の治山が入っているわけです。治水は入っていないが治山は入っている。公共事業の中に農林も入っているんだ。だから、「農林は増やさないで道路だけ増やすのはおかしいじゃないか、道路と山は一体だ」というふうに言っただけで、私は道路に反対した。私はいつもなるべく道路を抑えた。

それは田中が向こうの相方だし、私は逆だから、なるべく田中を牽制する。道路より田中がいやだ、ということのほうが強かったですね。あれは勢力を持ち合うから。それで私は農林のほうの肩を持った。だから農林と建設は、常に予算の奪い合いをする場所だった。農道、林道と道路と似たようなところでしょう。それでいまの農免道路というのは私がつくったんだ。やはり競合するものだから。

伊藤 あれも公共事業ですか。

松野 公共事業です。そういうふうにな小さな内紛を常に起こしていた。佐藤は幹事長だから、その調整をしたわけです。二階堂がだいぶわがままを言いに来ましたよ。私は「それはおかしいよ」と言った。

伊藤 いまお話では、河川は違うわけですか。

松野 河川は建設省です。

伊藤 これも公共ですか。

松野 公共事業です。ただ、あの連中は道路が大切なんだ。河川にはあまりウエイトを置いていない。河川は、災害復旧のとき、洪水のときだけです。河川を延ばせといつても、延ばせない。だから利権は道路に決まっています。票をとる利権だ。川をこっちにつくってやるぞといったって喜ばない。それよりも道路をつくってやるというと票につながる。だから川にはあまり関心がない。災害復旧のときは別だが、ほとんどありません。だから川で議論したことは一度もないし、川を主張する人は一人もいない。道路だけです。

伊藤 河川族というのはないわけですね。

松野 災害復旧のときだけでしょ。特別な時だけで、予算には出てきませんからね。

■岸と佐藤

武田 この時は、たぶん佐藤は自民党に入っていない状況ですね。

松野 その時はまだ無所属だったでしょうね。それでも私たちは、どうせ佐藤も入ると思って常に連絡していた。それから指示も仰いでいました。国は外でも、常に連絡を取っていた。

伊藤 要するに党籍がないというだけで、佐藤派はあったわけですね。

松野 そう、その通り。党籍はないが、佐藤派は残っている。それで佐藤の復帰の時には、こちらから要請したんだ。佐藤は入党申請をしていない。佐藤を入れるという党内運動が起こった。いま入党のときは、みんな本人が入党届を出すでしょう。佐藤は入

党届を出さんと言うんだ。じゃあ招待状を出そうかといって、党内のみんなで佐藤復帰運動を起こしたわけです。これはまたちょっと異例なことでしょうね。だから党内手続き、入党届は最後には書いたかもしれないけれども、入党の時は代議士会が拍手で迎えた。やはり一種の政治の英雄を迎えるような感じでしたね。

伊藤 まあ、吉田さんに殉じたよ。

松野 佐藤は無所属でも佐藤派は健在だったということでしょうね。だから、常に連絡していましたし。

伊藤 その時、ハシトミ「橋本登美三郎」さんなんかも一緒ですか。

松野 一緒です。その時に思い出すのは、佐藤が無所属の時に、岸・石橋の総裁選挙があつたんです。佐藤は困った。無所属なのに党の総裁選挙だから。それでも佐藤は党員に運動に行つたんだ。岸を頼むと、無所属の佐藤がいった。金は持つて行きませんでしたが、要するに懇意の者を使った。だから、党外にいて党内への影響は多かったですね。岸さんは残念ながら負けたけれど、佐藤は非常に一所懸命やっていました。党外で、党内の代議士に会いに行っていた。議員会館で何十人の人に会つたでしょうね。

伊藤 岸内閣の前後は、「佐藤の」『日記』がないものですか、そのへんがー。

松野 岸内閣のときの日記が少ないんですか。

伊藤 いえ、数年間の日記がボコッとないんですよ。

松野 あれはその後すぐだから。岸になってから佐藤は復帰したんです。復帰してすぐ大蔵大臣になった。復帰第一号で。それでみんなが「なんだ、兄弟で」と言った。私は言わなかったが。

伊藤 「岸・佐藤兄弟商会」と言われていたんだ（笑い）。

松野 兄弟カンパニーとか言われた。それで、岸さんが、「兄弟だからじゃない。佐藤は有能だから、したんだ」といって澄ましていましたね。私たちは佐藤派だから当たり前だけれど、ほかの

派閥は面白くない。それで兄弟カンパニーという言い方をした。

その時に岸さんが外遊した。「佐藤が」大蔵大臣の時、岸総理はシンガポールかなにかに行つていたんです。そうしたらシンガポールで大きなスキャンダルが出て、猫目石を買つたというわけだ。総理が外遊した時に出ていたでしょう。佐藤は大蔵大臣で「兄貴も馬鹿なことをしゃがって、猫目石なんて東京で買えばいいのに。シンガポールまで行つて買うからいけない。東京だつてあるじゃないか」と言つて笑つたのを覚えています。

伊藤 キャッツアイ事件ですね。

松野 「猫目石なんか東京で買えばいいのに、兄貴も馬鹿だ」といつていた。まあ暇だし、ちよつと半日ぶらぶらしたから、岸さんはどちらかというと親善のつもりで何かその品物を買うのが礼儀だと思つて買ったんでしようが、猫目石だから悪かつた。もつとほかのものを買えばよかつた。

■ 日ソ国交回復交渉・鳩山一郎・吉田茂の人物評

伊藤 鳩山内閣の時の日ソ交渉の問題がありますね。

松野 その岸内閣の前が鳩山さんですが、鳩山さんの日ソ交渉は突然だった。それで一番働いたのは河野一郎です。河野一郎と平塚常次郎、これは日ソ漁業を戦前からやつて、日魯漁業という会社を持つていた。平塚さんは日魯漁業の社長なんだ。河野一郎などは同級の代議士だ。魚問題で平塚常次郎は戦争が終わつてソ連と親しくなつて、河野一郎も親しいから、そのルートを伝つていった。

もうひとり若い松本瀧蔵というのがおつたはずですよ。松本瀧蔵というのは、アメリカの大学を出た、英語ができる外務省官僚の古手だつたと思う。それが外務省と交渉して、それで突然日ソ国

交回復となった。しかし領土問題は解決していないわけです。それで共同宣言で行こうとした。そこで平塚と河野一郎がその前にソ連に行つて、突然でしたが、だいぶ強引にやりましたね。まあ向こうの利害が一致したんでしようね。

帰ってきた河野一郎に、「私たちはソ連はわからないんだ、どうだった」と聞いたたら、「いやあ、怖ろしい大きな国だよ。クレムリンの宮殿に入ると大きな守衛が立っていて、ドアも鉄で厚いんだ。その扉をガタンと閉められると帰れなくなるような気がする。また次の部屋に行くと、またガタンと閉まる。三つも閉められて奥まで引つ張っていかれた時には怖ろしかった」という。「あなたでも怖ろしかったですか」「そうだよ。まだ敵国だからね。おれだつて怖かったよ」とそんな話をして帰ってきた。それで第一回の交渉にいつて見通しができたので、案文を決めて、やっただけです。

私たちは当時は反対野党だから、「何だこれは、領土問題を置き去りにして、売国的じゃないか」といつて攻撃したことがあります。領土問題をそつちのけにしている。しかしいま考えれば、あれ以外になかったでしょうね、日ソ国交回復には。だから条約じゃない、宣言文、共同宣言ですね。いまでもそのままですね。

伊藤 この時は、野党ということはないんじゃないですか。もう自民党ができていた時ですね。

松野 自民党はできていたから、党内野党です。要するに吉田のグループの党内野党だ。

伊藤 党内野党が相当強く反対していましたからね。

松野 党内野党は強かったです。

伊藤 それで「昭和三十一年」八月十二日にお名前が出てくるんですね。

武田 ちように重光外務大臣が全権で行つていて、ソ連側が日本の主張を全部拒否したという日なんですけれども、松野先生が鳩

山邸を訪問して種々会談した模様を話しに来たという記述があるんです。「現内閣の失政、スキャンダル等をあげて出直す以外に道はない、日ソ交渉も亦予期に反して行きつまったので、これも亦スエズ運河会議に重光を参加さし、その内河野君をピンチヒッターとしてモスカウに派遣する等の進言したと云っていたが、鳩山氏には（中略）行き詰りの段階についての認識もスエズ問題の重大性も判らぬらしいと情けない話ばかりだった」という記述があります。

松野 小石川の鳩山さんの家へ行きました。鳩山さんはすぐ会つてくれて、にこやかに、やあやあと話す。いろいろな話をするんだけど、「そうかい、そうかい」と言う。えらい相槌を打つけれど、わからないんだ。それで私も、これは誰かが後で操つていのがいるんじゃないかということ心配して、佐藤に言つたんです。どうも首謀者は鳩山じゃなさそう。鳩山は「ああそうかい。うーん、そうか」と言うだけなんだ。私がいくら「平和条約をつくらぬといけない。領土を返さないで、このままでは利益だけとつて日本に対するお返しは何もないではありませんか、何かあるんですか」と言つても、「うーん、そうか、そうか」と相槌をうつんです。それは鳩山の手柄です。

伊藤 そうですか。人に対応するときにはそういうやり方もあるんだ。

松野 「それで何の見返りがあるんですか。見返りの約束はありますか。日本は平和条約で、今後おそろくいろいろなものを出す。向こうは出さない。何もなし。何かありますか。領土は返さない。何もなし」と言つても、「うーん、そうか。うーん、そうか」と言うだけだ。人が好いし、それ以上攻められない。はあ、これは大人物だ、反論もしないで頷いている。あの時は体が悪かったですからね。私もこれ以上難しい話をするのもいけな思つて、二十分ぐらい話して、「鳩山さん、わかりました」と言つて帰つ

てきたんです。何もわからないけれど、わかりましたと言った。何もわからないということがわかりました、ということだね。それを佐藤に言ったわけです。鳩山さんはこうだったよ、だれか後にいるんじゃないか、と。

武田 特に鳩山さんと親しかったというわけではないわけですね。

松野 おやじが親しかったから、私も親しかった。鳩山さんと廊下で会えば、いつも挨拶する。その時です、名刺をもらったのは。鳩山さんに廊下で会ったときに、車椅子に乗っている鳩山さんに「名刺をください」と言った。「なんでおれの名刺を」と言うから、「とにかく鳩山さんの名刺をください」と言ったら、その不自由な体で名刺をくれました。その時は親しかったんです。ずっと親しかったです。私の家内の仲人は鳩山さんですからね。だから鳩山さんとは家族同士で親しい。

伊藤 その名刺はなんで必要だったんですか。

松野 それは、私は吉田茂さんが総理大臣をしているときに名刺をもらった。「吉田茂」と書いてあるだけで、裏も表も何も書いてない。電話番号も住所もない。総理大臣とも書いてない。「吉田さん、これじゃあ手紙が行きませんね」と言ったら、「おい松野、ロンドン・チャールと書けば手紙は行くだろう。日本・吉田茂と書けば手紙はくるんだ。それが政治家なんだ。肩書きを書いたり住所を書くのはまだ小物なんだ」と言う。私はそれを持っていたから、鳩山さんにももらったわけだ。

伊藤 どうでしたか。

松野 何も書いてない。「鳩山一郎」そのもの。この二枚の名刺には、私は驚いた。本人からももらった名刺でなければ、秘書からもらったのは駄目。本人からもらわないといけない。そのことを吉田さんで覚えたから、鳩山さんにももらった。驚いたことに、「鳩山一郎」だけだ。それで今日は私の名刺をあげるよ。「松野頼

三」だけしか書いてないんだ。もうひとり、細川護熙も「細川護熙」しか書いていないんだ。これを私が細川に教えたら、すぐその目につくった。私は吉田さんと鳩山さんの名刺をもらったから、すぐ私の名刺も真似してつくったんだ。まだ私のは通用しませんね。細川護熙もそのままですよ。機会があったら名刺をもらってごらんさない。私はわざと鳩山さんにもらったら、同じだから驚いた。吉田茂のはあるが、鳩山さんはなんと書いてあるか、その興味があつた。驚くなかれ、同じだった。

伊藤 いや、何か悪用するのかと思つた(笑)。

松野 「なんで君はおれの名刺がほしいんだ」と言うから、「いや、とにかくください」と言つて、廊下で車椅子に乗っている鳩山さん本人に私はもらったんだ。秘書にというから、「いや、鳩山さん、あなたからください」と言つたら、不自由な手を出して、こうやって名刺をくれた。そうしたら「鳩山一郎」だけだ。この二人は本当にいまだに、ひとつのエポックだったな。私の一生の中で、その話を細川護熙にしたわけですよ。「細川君、そうならなければ駄目だよ。肩書きを喜んでいるうちはトクホンを貼るようなもので、肩書きを貼るようではまだ小物だよ。肩書きがなくなつた時に政治家なんだ」と言つたんだ。

「ミスター・チャールと手紙を出したら届くか、松野君。大日本・吉田茂とあれば、世界中から届く。それが政治家だ。だからこれはいらなんだと。住所まで書かなければ届かないようでは政治家じゃないよ」と、吉田さんはチャールを例に言つた。それは驚くべきことだ。それで鳩山さんにもらつた。あの時代なら「東京・鳩山一郎」で届くでしょうね。全盛時代だから。

伊藤 松野さんは、「熊本・松野頼三」になるんじゃないですか。

松野 私は熊本なら届くかもしれない。なるほど政治家というものだ。官僚は肩書きがなければ駄目だ。肩書きが偉いんだ。政治家は人間が偉くなければいけない。その教えを受けたのは、この

二人の名刺と逸話と私の体験です。私もいまの名刺には「松野頼三」しか書いていません。住所、電話番号は秘書のほうに書いてある。私はそれを出して、どんな反応かと思って、この三年間同じ名刺を使っている。

伊藤 松野さんから名刺をいただいて、ああ、何も書いてないなと思いましたね。

松野 私が直接あげるときは何もない。秘書がやるときは書いてある。

伊藤 名鑑がありますから、あれですぐに住所やなにかはわかりますから。

松野 それはそういう逸話なんです。私が体験した中でこの二人だけは期せずして同じだった。やはり政治家として鳩山、吉田を私が讃えるのは、その一事です。ほかのはみんな、「内閣総理大臣」と書いてありますよ。

一番困るのは内閣総理大臣で、橋の記念碑とか、いろいろなところに書くわけだ。あれは書いてはいけない。その時は名前だけ書くものだ。名前は永久に残るけれど、「内閣総理大臣」というのは、辞めたら「元」というのを彫り直さなければいけない（笑い）。あれは私は本人が知らないと思う。内閣総理大臣なんて記念碑に書いてはいけない。自分の名前だけ書くべきだ。そんなことしたら、内閣総理大臣にまた「元」でも彫り直さなければいけない。私はそれを見て政治家というものの生き様を覚えたな。私はインチキ名刺を持って一所懸命やっているんですがね。

伊藤 石碑を探して歩こう。

松野 それでたった一ついまでもいやなのは、「農林大臣 松野頼三」と書いたのが私の郷里にある。あれは困ったなと思った。あの時、農林大臣というのは書かなければよかつたと思つて、あんな役職は。でも地元はそういうものを欲しがらんのだ。それを書いてしまったから、いまは「元」と書かなければいけない、

「元」と彫り直してくれと言いたいくらいだ。ああいう肩書きは書くものではないということをつくづく思いました。

伊藤 「元」は駄目ですよ。日付が入っているでしょう。

■ポスト鳩山をめぐる

松野 次は何ですか。

伊藤 次は外交小委員会の経過を佐藤さんに報告したということですね。

武田 そうですね。これは非常に簡単な記述です。

伊藤 絶えずそういうふうにつながっていたという意味ですね。

松野 絶えず連絡していました。

伊藤 その次が大事ですよ。

武田 次は「昭和三十一年」十一月五日なんですが、鳩山が引退することがだいたいの予測されて、候補を絞ることになった。「その為鳩は、益谷「秀次」、林「讓治」、加藤鑠五郎、松村謙三、砂田「重政」、植原「悦二郎」、松野等を各々招致して意見を徴」する事とした由」という記述があるんです。どうやら十一月六日にこの会合があったようで、十一月七日にその様子を、今度は橋本龍伍さんが佐藤に伝えているという記述があるんです。

伊藤 松野さんが会合を開いたわけではないでしょう。

武田 鳩山に各々呼ばれて、それで意見を聞きたいということですよ。それが十一月六日にあったようで、その様子を橋本龍伍が佐藤榮作に伝えている。

伊藤 何で橋本龍伍なんだろう。

松野 橋本龍伍は、佐藤榮作が官房長官のとき副長官だった。吉田内閣の時に佐藤と非常に親しかった。橋本龍伍は佐藤の弟みたいに仕えていました。二人とも非常に親しかった。ただ、意見は

合わなかったですよ。年中喧嘩していたから。人柄は同じ系統です。それで、橋本が佐藤派におるから。それがいまの橋本龍太郎になっている。

伊藤 ポスト鳩山については、先生はどんなご意見だったんですか。

松野 私はその時には、自由民主党の連立で鳩山にしたんだから、今度は自由党のものがやるべきだという意見だった。

伊藤 当時としては、石橋「湛山」さんか石井「光次郎」さんか。

松野 石橋は入ってまだすぐですから、石井さんです。私はどちらかというところと石井を念頭に置いていた。それから緒方「竹虎」さんはそのころもう亡くなっていたかな。だから私たちは石井光次郎という意向でした。それがいかなかったら当然緒方だったけれど、たしか緒方さんが急に肝臓を。

伊藤 そうですね。急死されたんですよね。内容は書いてないでしょう。

松野 それで私たちは石井光次郎でした、年齢的に。佐藤は岸だったでしょうね。岸さんは民主党の幹事長だったから、私たちは岸さんと言わずに石井光次郎でした。

伊藤 では、佐藤さんとは意見が違うわけですか。

松野 佐藤は口で石井さんと言っていました。腹の中では岸でも、口では石井さん、石井さんと言っていた。

小池 ということも松野先生はだいたいわかっていたんですね。

松野 わかっている。私は石井さんがいいねと言っていた。政治家はやはり腹が深く二重底ですからね（笑い）。まあそんなものです。それはわかっているわけなければ。さすがに「佐藤は」岸とは言わなかった。石井さんがいいね、石井さんがいいねと言っていた。

■池田内閣の頃

伊藤 その後しばらく『佐藤日記』がないんです。その次に出てくるのは昭和三十六年です。五年ぐらい飛んでしまっんです。

松野 池田内閣ですね。

伊藤 池田内閣です。それで一番最初に出てくるのは周山会のゴルフ会です。

武田 そうですね。三十六年になると、松野さんはよく佐藤さんとゴルフに行かれると出てくるんです。

松野 そのころは池田内閣ですよ。私は池田不満ばかり言ったんだ。池田は駄目だから、ひとつ早く立候補しろと、そればかり勧めていた。

小池 ゴルフをやりながら、ですか。

松野 やりながら。佐藤に、「早く立候補しろ、池田は駄目だ」といって、池田批判ばかりしていた。それでいよいよ立候補するかと思ったら、しなかった。しなかったが、その代わりに外遊に連れて行ってやるというって、橋本龍伍と私と木村武雄を外遊に連れて行ってくれた。世界を見てこようじゃないかということだ。ドイツ、ロンドン、フランス。それはケネディの時だ。ケネディのキューバ危機のとき、その当日だった。

伊藤 それは翌年、三十七年の話ですね。

松野 それがちょうど総裁任期の時だ。池田が二年目だから立候補しようといつて、八月ごろが確か任期だった。それが、立候補をとりやめた。とりやめた代わりに外遊しようじゃないか、英気を養って次に備えよう、二年先を待とう、という理屈で、私たちはうるさいやつを外遊に連れて行ってくれた。

伊藤 先生は前からゴルフはやっていましたか。

松野 前からやっていました。

伊藤 好きですか。

松野 そうですね。よくやっています。ハンディ一六ぐらいだった。東京クラブに入っていた。いまでもまだ東京クラブです。

伊藤 例えば政治家同士でゴルフをやったら、やはりそれは「話」でしょう。

松野 もちろんです。石井さんが国会議員のゴルフの議員会長で、戸塚の会長をしていました。これがゴルフへ連れて行ってってくれる時に条件を付けられた。なかなかゴルフへ連れて行ってくれないんだ。私と保利茂と橋本登美三郎。「橋本」龍伍はしません。石井さんが会長だから連れて行ってもらうじゃないかといつも、なかなか石井さんは連れて行かない。それで私と保利で「どうしてゴルフに連れて行ってくれないんですか」と聞いたたら、「うーん」と言うんだ。「どうしたんですか」「いろいろ考えているんだ」「何を考えているんですか」「ゴルフはね、紳士の遊びだ。まず一番ティーに立ったとき、相手に不愉快な印象を与えるような服装をしてきてはいけない。君たちはうっかりすると、昔の軍隊服の古いのも着てくるんじゃないかと思って、おれは言いにくいけれども言わなかった。相手に不愉快な印象を与えてはいけない。ゴルフが上手、下手はその次だ。まず不愉快な言語、行動、服装、それでおれは君たちを見て考えていた」と言うんだ。

それで保利さんと二人ですぐ美津濃に行つて洋服買おうやといつた。腰に手拭いでも下げて、庭掃除みたいな格好して来られたら戸塚が泣くよという。上手、下手は許せる。マナーが悪いのだけは許せない。戸塚はその伝統を守っている。それで、戸塚は食堂に入る時に上着を着るんです。スポーツシャツでは入れない。だからスポーツシャツでスポーツやつても、ロッカーへ行つて上着を着て食堂へ行く。食堂から、また上着を脱いで出ていく。いまでもおそろくそうでしょう。それは石井さんのやり方です。

武田 佐藤日記では大利根、それから霞というところが出て来ま

すね。

松野 大利根は佐藤栄作が発起人です。大利根は確か千葉県の安西で、佐藤が発起人が入つて、そこへ私も入りました。それから霞も佐藤はメンバーでした。私は東京からのメンバーで、年中そのへんに行きました。佐藤はハンディが二一ぐらいでしたね。私のほうが若かったから、私のほうが上手です。その外遊の時にセントアンドリュースに行った。

武田 成績が悪かったと書いてありますね。

松野 セントアンドリュースへ行つて、驚いたんです。ゴルフ発祥の地。汚いし、コースは悪いし、ワン・グリーンに二つボールが立っている。こつちが一番のホール、そつちに一四番がある。同じグリーンの中に二つ棒が立っている。さあ、打てない。そうしたら、「打て、打て」という。「だつて向こうでプレーしているじゃないか」「あれは一四番のほうだ。お前は一番だからこつちに打て」「こつちといつてもグリーンは同じだ。怖くて打てない」「こつちだろう、こつちへ打てばいい」という。そうはいつても、どつちに行くかわからない。それがまず驚いたことです。

もうひとつは全部フェアウェイがベントなんだ。浮いていないんだ。普通のフェアウェイは浮いているでしょう。グリーンはベントだから、ボールが浮いていない。地面にびつたりついている。だから泥を打ったり、チョロしたりする可能性が非常に強い。それで、私も一回はウッド持つてやつたけれども、チョロしたからほとんどフェアウェイはアイアンで打つて、一四〇ぐらい叩いたでしょうね。佐藤は一二〇ぐらい、私は一四〇ぐらい叩いたかもしれない。

武田 『佐藤日記』「昭和三十七年九月二十二日」では「古いコース。成績不良。橋本君一等、大津二等、松野の出来殊に不良」と書いてあります。

松野 私は一四〇ぐらいだった。それは力を入れるやつは打てな

いんだ。グリーン全部、フェアウェイがベントなんだ。それは浮いていないでしょう。だから、私が入力を入れると泥を打つ。そのうえ、バンカーへ入れたら、まあ届くものじゃない。梯子をかけて登るんですからね。ちょうど壁にボールを打つようだ。届かない。だから後ろへ出してもらって打つんですね。

佐道 佐藤さんのいまの記述だったら、いつも負けているからー。

武田 いつも負けているから悔しい。

松野 それからベルギーでもゴルフをしました。パリへ行ってもゴルフした。だいたいゴルフのメンバーでしたからね。

伊藤 何か佐藤さんは負けず嫌いで、負けるのがいやだったみたいです。

松野 負けず嫌いですね。奥さんもやりますし、龍太郎、信一と、家中四人ともゴルフをしますね。それに私に橋本登美。木村はゴルフはしなかったが、秘書の大津「正」がやるので、みんな二組できるんです。二組でセントアンドリュースへ行つた。みんな八人ですね。

伊藤 日記をみると、家族ゴルフが多いですね。

武田 佐藤家四人、というのが多いですね。

松野 四人ともゴルフをやるからね。龍太郎、信二、奥さんもゴルフをします。奥さんもなかなかの努力家で、四十歳から英会話の習い始めたんですから。外国人を週二回自宅に呼んで、四十歳からの手習いです。ファーストレディになった時のためにといって、努力をよくした奥さんです。私も感心するぐらいだった。

伊藤 佐藤寛子さんですね。でもみんな「カンコさん」と言っていないですよ。

松野 ヒロコさん、カンコさんでしょう。佐藤も養子ですからね。

佐藤家から佐藤に養子に来たんだから。

武田 いたこになるんですね。

松野 いたこだ。だから佐藤家から佐藤を養子にした。カンコさ

んのほうが本家なんだ。それが松岡の系統ですよ。国際連盟を脱退した時の外務大臣の松岡洋右が佐藤さんの叔父さんにあたる。カンコさんのほうが名門なんだ。岸さんも佐藤から岸に養子に行つたんですから、あそこは二人とも養子に行つている。「養子のほうが偉いんだぞ。悪いのはもらわれない。いいのしかもらわれない。実子は良くも悪くも仕方がないけれど、養子は選ぶんだから、いいものじゃなければもらわれない。養子はいいんだ」と言つて、二人とも養子自慢をしていましたよ。

伊藤 岸さんは、自分のほうが佐藤さんよりは出来がよっぽどいいと言つていたけれど。

松野 あの時代の岸はさすがに一世を風靡したでしょうね、新官僚という名前で。確か小林一三が商工大臣で、岸信介が事務次官で小林一三のいうことを一つも聞かなかつた。だから『落第の記』で、思い切つて岸の悪口を書いたんだ。

武田 このゴルフのメンバーの中に政治家は比較的少ないような印象があるんですね。

松野 木村と橋本と私でしょうね。それから石川「清二郎」の奥さん「華子」が行つたはずですよ。「石川は」英語ができたから、通訳代わり。それから小宮山重四郎というのがいました。それも通訳だ。それがのちに代議士になった。

武田 小宮山さんは外遊と一緒に付いていったんですね。

松野 その時は通訳でした。その後代議士になったんです。石川夫人も通訳でした。あとはみんな英語ができませんから。

伊藤 周山会と岸派とはけっこう仲がいいわけでしょう。

松野 仲がいいですね。

伊藤 ゴルフで一緒に対抗戦をやったり。

松野 周山会と岸派と、一緒にやっていました。岸派は戦前の代議士が多かった。川島正次郎とか南條徳男とか赤城宗徳とか、戦前派が多かった。戦後のほうが佐藤ですね。戦前派の人はみんな

岸のほうについていって、戦後派が佐藤についていた。もちろん仲はよかったですよ。

武田 それからもうひとり、南「好雄」という人がいるんです。

松野 南という代議士はいました。わりに明るい。よくゴルフをしました。

伊藤 佐藤派ですか。

松野 佐藤派です。役人みたいななかったかな。

武田 それから秘書の楠田「實」さんと大津さん。それから山田というの、山田栄三さんですか。

松野 ああ、それは秘書グループ。代議士は三人だけでした。それでゴルフはちょうど八人で、できた。小宮山重四郎はそのとき、確かアメリカに留学して帰って来たぐらいですよ。それで通訳代わりで、まだ代議士にはなっていません。その次ぐらいに代議士に出ました。

伊藤 この三十六年一月三十一日の記事はどういうものですか。

武田 これは、池田首相の施政方針演説に対して、松野さんがたぶん総括質問をしたんですね。佐藤さんに相談をして、一月三十一日に佐藤さんは出来が大変よろしいと褒めていらつしやいます。この時は、池田さんが「他の弱小国はいざ知らず、わが国は絶対に中立主義は採らない」と答弁したのを松野さんが批判して、池田首相が、きのうの失言は取り消しますと言った、という記述があります。

松野 私が池田を批判したのは、弱小国と言ったからだ。「弱小国とはどこの国を言うんだ」と言った。そうしたら、とうとうそれを取り消した。

武田 佐藤さんが喜んでいたのでわかりですね。

松野 何かそんなことを言ったから、「弱小国とはどこのことを言うんだ。私は概念はわかるけれども、国を指して言ってくれ」と言った。さすがに言えませぬね。弱小国といえる国はあるんだ

けれども、それは前言取り消しだ。

伊藤 やはり与党の質問でも、そういうふうにするんですか。

松野 与党の質問ではあまりやらないんですが、私はわりに批判的でしたからね。所得倍増ということをかんに言っていたし、外交は毅然たる中立外交で、弱小国みたいにあつちへいつたりこつちへいつたりしないというように言ったんです。だから、弱小国とは何だという質問をしたのを覚えています。代表質問は与党がやるんです。その与党の代表質問に私が当たったんだ。

伊藤 当たる、というのはどういうことですか。

松野 幹事長から、「松野、やってくれんか」と言ってくるんです。それは私が政調副会長を長くやっていて、政策通だから。みんなあまり与党の代表質問はやりたくないんだ。あまりひどいことを言えば総裁に失礼だし、言わなければ演説にならない。だから、ほどほどのところで、みんなやがるんです。野党の質問なら志願が多いけれど、与党質問は志願はない。ただ、自分の名を売るためだけならいでしょうが、名を売ったところで、下手ならあいつ下手くそだと言われるし、妙なことを言えば、あいつ何だということになる。だから与党質問にはプラスもマイナスも出てくる。それで志願はあまりありません。たいてい幹事長が頼んでくるとか、指名してくる。やってくれんか、という言い方です。

伊藤 野党はみんな志願するでしょう。

松野 野党は手を挙げて、中で選ぶ。与党は志願はありません。向こうからやつてくれと言ってくる。

伊藤 そういうものですか。

松野 それも当選何回以上とか、一つの基準で決めるんです。

武田 ちょうどこの「昭和三十六年」三月一日に、佐藤さんが、保利さん、松野さん、愛知揆一、田中角栄、橋本登美三郎と会合するというのがあります。これはいわゆる佐藤の五奉行が集合した最初の記述のような感じなんです。

松野 そんな感じでした。その後、池田が病気になったから、その五人は頻繁に会っていましたね。

伊藤 だいたいこの五人が多かった。

松野 だいたいこの五人が多かった。政局が動く時は頻繁でしたね。

伊藤 その次に出てくる塚原外遊問題というのは何ですか。

武田 これは少しよくわからないですが。

松野 塚原俊郎という仲間が外遊したんですけれども、イギリスで病気になった。その病気が病院の医療間違いで、イギリス人並の強い薬を飲ませられたものだから、胃がただれてしまって衰弱して、病院車みたいな寝台で、飛行機で帰ってきたんです。その問題です。強い薬だから、イギリス人には適量でも日本人には過剰ですよ。飲んだ薬のために胃がただれて、とうとう飛行機で帰って来る時には寝台車で帰ってきた。塚原問題というのはそのことです。

伊藤 塚原さんも佐藤派ですか。

松野 佐藤派です。

伊藤 それからその次がILO条約ですね。

松野 これは労働大臣の時ですね。

武田 ちょうど同じ年の三月「二十三日」に、池田首相から佐藤に電話があつて、「松野、相川「勝六」両氏へILO問題につき推進方につき依頼する」とあります。それで、佐藤さんが松野さんと相川さんに電話連絡をする。これはあしたの総務会に出席する松野さんと相川さんをお願いするというような形なんですけれども、これは何かご記憶ありますか。

松野 あります。私は労働大臣をやっていたが、ILO条約の批准について、総務会では反対が多いんだ。社会党は推進だけでも、公務員にストライキ権を与えるというので非常に反対が多い。総務会で反対されて否決されると困るから、私に賛成するように

言ってくれということでした。私はもともと労働大臣で推進派でしたから、特に発言して推進してくれという。労働問題がわからない人も多くて相も変わらないうちで、ストライキ権を与えるなんて反対だというから、それを推進してくれという注文が特に来た。私の思想から見れば当然でしょうね。

武田 相川さんという方も同じような考えですか。

松野 相川もそう。相川というのは宮崎の代議士だった。おとなしい人でした。

伊藤 やはり労働関係ですか。

松野 そうではありません。総務会に佐藤派から私と相川の二人が入っていたんですね。

武田 もうひとつ政局の問題で、政暴法、政治暴力禁止法というのがあるんです。これは昭和三十六年六月三日で、『佐藤日記』によれば「田中角栄君等の計らいにより政暴法は委員会を通過。本日はこれをうけて議長職権で本会議を開き、混乱の内に成立」。その後政暴法通過後の政局について、佐藤さんが保利、田中、橋本、そして松野さんと呼んで意見交換したとされています。

松野 政治暴力禁止法というのは何でしたか。

有馬 あれは六〇年安保を受けてでしょう。

松野 じゃあ政治運動の暴力でしょうね。六〇年安保の時のような政治スローガンを掲げながら暴力をふるう集団暴力でしょうね。

伊藤 あまり役に立たない法律ですね。

松野 いろいろ学生運動があつたから、安保の後始末でしょうね。あまり有効ではなかったようですね。

伊藤 これは愛知さんがいないけれども、五奉行の集まりですね。松野 それは政局が、池田が病気をしたりしていたからでしょうね。

武田 それから、これも『佐藤日記』をみると、吉田茂さんが、

池田さんと佐藤さんの間をなんとか取り持とうというのがたくさん出てくるんですね。

松野 それは岸さんの後の問題ですね。岸内閣で岸さんが安保条約改定を通した直後でしょう。池田を担ぐ者と佐藤を担ぐ者と、党内は半々なんですよ。それでどうしようがない。それを心配して吉田さんが二人を大磯に呼んで、二人で考えてやれ、というようなことを言われたんだと思います。

武田 何か佐藤さんから直接聞かれたことありますか。

松野 それはそんな話だ。「大磯の吉田さんが仲良くやれと言っているぞ」「仲良くやれって、二人で手を組んでやれということですか」「そうだ」「じゃあ、どっちが先でどっちが後かという話はどうするんだらうな」なんて言いながら。ちょうど勢力が佐藤、池田は半々ぐらいでした。そこで佐藤が立候補をやめた。

伊藤 岸さんに宛てた吉田茂の手紙があつて、とにかく先に池田をやらせてくれというふうにつていているから。

松野 そんな印象でしたね。

伊藤 それで池田さんには、然るべき時に佐藤に譲れという話なんです。

松野 ええ、そういう話です。そこで佐藤が立候補を辞退したわけです。そこでこっちは池田に行きたくないから、私たちは藤山立候補に走ったわけです。藤山愛一郎が立候補した。佐藤が「立候補を」やめた。はつきりと、おれはやめるといふ話だ。岸さんは藤山にやらせたかったんだ。

伊藤 でもあれは形じゃないですか。

松野 いや、そうでもないですよ。本気でそう言いましたからね。それで、南條徳男とか小泉純也とか江崎真澄とか私が藤山に行っただ。岸さんの後の話ですね。

伊藤 吉田さんにだいたい池田、池田と言われて。

松野 だから、吉田さんは池田だった。岸は必ずしも池田という

わけでもなかった。それは岸内閣の安保の時に、池田と灘尾「弘吉」と三木「武夫」が辞任したんだ。

伊藤 あとで戻ってきて、だいたい恩義になっている。

松野 戻ってきた時の印象は、「岸は」池田とは多少溝がありました。あの時は大きな安保の最中だもの。安保が成立するかせんかという真つ最中に三閣僚が辞任したから、岸にしてみれば大変な打撃でしたよ。

伊藤 結局、吉田さんに言われて池田が戻ってきて、最後の後始末をやったんですね。

松野 結論は後始末でしょうね。すらつと岸から池田に行つたわけではない。

伊藤 まあ、「岸は」藤山さんに対しては義理もあるでしょうしね。

松野 義理もある。それで、藤山立候補が出たわけだ。それで、私はその時は藤山派にいったが、もちろん惨敗でした。

伊藤 佐藤派は、だいたい藤山派に行つたというわけでもないです。

松野 それはない。それはほとんどない。

伊藤 じゃあ、やはり振り分けたり、いろいろやっているんです。

松野 それは各人の自由だ。小泉純也もそっちに行つた。それで小泉純也と小泉純一郎とはその時からずつと親しかった。一緒に藤山派ですからね。その時は南條徳男、江崎真澄も来しました。

武田 実際に池田内閣になつてからは、佐藤さんと池田さんといふのはかなりライバル意識があつたようですね。

伊藤 それは強烈じゃないですか、『日記』に出てきます。

松野 それは非常にあつた。池田は「総理に」なる時は佐藤に世話になつておきながら、なつてからはほとんど佐藤を軽視していただきますよ。佐藤は、あれは」とかいうような感じだ。なる時ま

では佐藤に会っていたが、その後の態度は佐藤も気に入らない。「佐藤は、あれはちょっとな」というような感じだった。

伊藤 佐藤には渡したくなかったんでしょね。

松野 同級生ですからね。それでも最後には約束を守って、池田の遺言は佐藤でしたからね。

伊藤 本当にそうなのかどうか知らないけれど（笑い）。

松野 それは遺言状に書いてあったという話だからその通りでしょうね。遺言状というか、病床で声が出なくなった時、前尾繁三郎という男が池田の側近だったからね。黒金泰美とかもそうだけれど。それが池田が「佐藤だ」と言ったという。

伊藤 何か華国鋒の話のようだな。

松野 喉から声が出ないけれども、佐藤と言ったという。

小池 ちょっと資料を見ていると、それはだいたいの伊藤昌哉が言っていることであって、実際に大平記念館の資料の見ていますと、池田は最後まで河野一郎なんですよ。やはり佐藤には渡したくない。前尾自体がそんなに佐藤が嫌いなはずはないんでしょけれども、前尾が代貸しみたいな形で河野で動くということは言われているんですが、前尾自体は全然動かない。やはり池田の意志は反佐藤だったと思うんですけどもね。

松野 前尾が佐藤だと指名したということで一晩で決まった、ということが正しい伝説でしょうね。あとのほうはややドラマティックに書いてある。池田が「総理に」なるまでは、佐藤、池田は仲が良かった。「池田が」総理になってから、溝ができた。それは佐藤のいう人事をほとんど採らなかつたから。

小池 それからやはり池田内閣の時に、池田は、例えば川島派とか三木派とか、あのあたりを取り込み始めますね。それから大野「伴陸」とは肝胆相照らす仲になるし、河野ともかなりよかつた。

松野 佐藤は孤立してしまつた。

小池 孤立するような形にしまつたね。

松野 それは私も感じた。なんだか、佐藤のほうに冷たくなつた。伊藤 やはり一番のライバルだからでしょう。

松野 一番のライバルだったんです。一番のライバルだから、一番ライバルを怖れて、一番ライバルをつぶそうとした。それは佐藤も日に日に感じていた。だから、佐藤と池田の電話会見が少なくなつてきた。「池田が総理に」なつたころは年中、毎日かかつてきた。それを一所懸命になって、「大丈夫だ、大丈夫だ。池田は佐藤だ、佐藤だ」と言つて連絡していたのが、田中角栄です。あれは池田内閣の大蔵大臣だから。

小池 この時には、もう大平「正芳」・田中という関係ががつちりできていたんですか。

松野 もうできていましたね。大平は池田の秘書官みたいでしたからね。

武田 その前にひとつ、これは松野先生にご記憶があればなんですが、このころの『佐藤日記』にいろいろ佐藤の相談役の名前が出てくるんです。児玉誉士夫、岩淵辰雄、鈴木貞一、成田努。児玉誉士夫、岩淵辰雄はわりと資料があるので、佐藤に意見を具申していたというのはわかるんですが、例えばこの鈴木貞一とか成田努というのは！。

松野 鈴木貞一というのには、企画院総裁ですか。会つたことがあります。スラツとした美男子の、軍人みたいな姿勢の人でした。伊藤 軍人ですから。

松野 軍人みたいに姿勢のいい人だった。児玉誉士夫には私は直接会つたことはない。

伊藤 成田努はわかりますか。

松野 わかりません。

武田 そうですか。

伊藤 あれは空港公団か何かの総裁かなにかしているんだ。

小池 平沼騏一郎の秘書官ですか。

伊藤 そう、もともとは平沼の秘書官です。

武田 また後の話になりますけれども、平沼趙夫さんの立候補の問題で松野さんがちょっと出てくるみたいですね。だからご存知かなと思っただんですが。

松野 その成田という人は知りません。平沼趙夫を私は推薦した。それは慶應の後輩ということですよ。私はいまでも平沼趙夫とは親しいんです。私は賛成した。

伊藤 その人が平沼騏一郎の養子だということはご存知だったですか。

松野 知っていました。平沼騏一郎は奥さんがいまして、弟の子どもになるから、まあ養子みたいなものでしょうね。それも知っていました。平沼という人は私たちの印象では悪い総理ではなかった。あまり仲良くなかったけれど、非常に清潔な政治家という印象を受ける。よく字を書いた。いかにも堅く漢字みたいな正確で、私は子ども時から見て、こんなきれいな字を書く人は正確もきつと堅い人だろうと思って、私のおやじに聞いたたら、「いや、この人は人格者だ。名総理大臣とは思わんけれども、人格者だ」と言った。それで平沼の養子だし、慶應の後輩だから、賛成したんだ。平沼騏一郎というのは堅い総理大臣だという印象があつて、字がまたきれいだつた。

伊藤 字がきれいだというのは、大事なことだな。

松野 字は残るからね。生きている時はそうでもないんです。生きていた時は人間を知っているからどうでもいい。死んだあとで、今度は知らない人が字を見て判断するんだ。

■ 欧州への外遊・父鶴平の死

伊藤 それで今度ははいよいよ外遊ですね。昭和三十七年です。

武田 九月十八日に出発された。

松野 ロンドンに行ったんですね。

伊藤 それで、さつそくさつスキのセントアンドリュースですね。

松野 その時に大野「勝巳」という大使がいて、そこで誰に会いたいのかというのがあった。それで私は佐藤にハロルド・ウィルソンという人をひとつ指名してくれんかと言った。野党の労働党の党首だつた。いまは野党で、院内総務かなにかしている。それは「インサイド・ヨーロッパ」の五人の中に出ているんです。それを私は読んだものだから。是非この人を指名してくれと佐藤を通じて大野大使に言った。行って、夕飯を食べた翌日、ハロルド・ウィルソンに議員会館みたいなところで会いました。

私は真つ先に「あなたは野党の院内総務だが、野党というのはどういふことをすればいいのか」と聞いた。「野党には野党の倫理がある。不可能な政策を掲げては駄目だ。常に政府を攻撃しなければいけない。国民を代表して常に政府を攻撃すること。もう一つは常に国民の意向の先を読むこと。これが野党の倫理だ」といふ話をしてくれました。

そんないろいろ話の後で、議場を見せてくれた。私の政治学の板倉「卓造」といふ先生の話を知ると、「議場は神聖に保たれていて、演壇は絶対に傷がない。ただ、グラッドストーンが卓を叩いて演説した時に指輪をしていたので、その指輪の傷だけ残っている。あとは非常に神聖なものだ」といふことだつた。だからその傷を見せてくれたと言ったわけだ。そうしたら、「それは駄目だ。それは戦争前だ。戦争で焼けてこの議場はきれいになつてしまった。昔は確かに傷があつた」といふことだつた。そんな話をしたりした。それからベンチがあるからベンチに座つて、「どうして椅子ではなくて、こんなベンチなんだ。日本の議会は一人ひとりのクッションのいい椅子だ。これはベンチで硬くて座りにくい」と聞いたたら、「これが伝統なんだ。昔は椅子を持って殴り合

いをしたから、持てないようにベンチなんだ。これだと持てない」、そんな話を議場を見ながらしました。党首と党首が前に座って討論をする。真ん中に議長がいて、その後はクイーンがいて神聖で、その間隔も決まっています。そんな話をイギリスで聞いたことが印象に残っている。

買い物にも行きましたよ。運輸省が日本館というのをつくった。日本館というのは、初めて運輸省がつくった観光施設です。日本館という名前の「日本」という字を、佐藤が書いた。それを看板にして、日本館という観光局のロンドンの出店ができた。

武田 日本の観光事務所ですね。

松野 そうです。

武田 「秋定君の主催するもので」とありますね。

松野 そのためにも行ったんです。その秋定かアキタミという人が運輸省の佐藤の後輩だ。観光だから運輸省の所管だ。そこでその記念館に行きました。それは事務所だ、まだ会館までいかない。武田 ブリティッシュ・レールウェイ・センターにできた事務所ですね。これは運輸省ですね。

松野 そんなことをして買い物をした。買い物で印象に残ったのは、ハロウズというところへ行ったときです。おのほりさんみただ。そこで佐藤も何か買って、私は珍しいから背広を買った。「上着とズボンでいい」と言ったら、「いや、上着とズボンだけでは駄目だ。ジャケットがあつてスーツだ。お前はパンツ・アンド・ジャケットを買うのか。お前はスーツを買おうと言っただろう。スーツは三つ揃ってスーツという。上と下はアメリカ流で、それはジャケット・アンド・パンツで駄目だ」という。どうしてもチヨッキを買わせたいんだ。そのじいさんがしつかりしていること、承知しないんだ。「ハロウズの名にかわるからスーツを買ってくれ。スーツは同じ色じゃなくてもいい、それは自由だ、三つ買えという。三つ買わなければスーツじゃない」という。そのしつ

こいのには私は啞然として、印象に残っている。

その話は佐藤もそばで聞いていて、「このじいさんの言うことは本当だ」という。佐藤栄作は昔イギリスへ行ったことがあるわけだ。昔の役人は二年間自由に旅行していいそうだ。佐藤はその話をしていました。「おれは二年間自由に洋行した。まずマルセイユに行つて、それからだいたいフランスとイギリスへ行く。二年間政府が金をくれて、優秀な役人はみな外遊に行っている。婦りはロシアのシベリア鉄道で帰った。だから、おれはイギリス人を知っている。英語もできる」、そう言っていたのに、行ったらあまりしゃべれない。奥さんのほうがよく喋つて、「あんた英語ができるんじゃないの」「いや、もう忘れたよ」と言っていた。

その後、ドイツへ行つて、ドイツからオランダ、オランダからパリへ来た。ドイツでもだいたい優遇されましたね。ボンで向こうの政府はなかなか大事にしてくれた。オートバイをつけて、ノーストツプで案内してくれましたよ。

伊藤 まだ、この時期は吉田さんは生きています。

松野 まだ、生きてはいます。

伊藤 確か吉田さんが紹介状を書いたんじゃないかな。

松野 そうです。吉田さんが招待状を書いてくれて、ボンでは非常に優遇してくれました。吉田さんが泊まったホテルに私たちは泊まりました。

武田 吉田茂さんが行きなさいというようなことでですか。

松野 そのホテルに泊まりました。これは吉田さんが気に入ったホテルで、ボンの山の上の古いホテルでした。ドイツでは非常に優遇されました。オランダでも優遇されました。パリでも、大統領、ドゴールに会いましたね。

武田 最初は、もしかしたら会えないかもしれないなかった。

松野 会えないかもしれないことだったけれど、その日になつたら会えました。その時ドゴールと会って、私たちは隣の部

屋だったが、佐藤が「この人と握手をしておく運勢が良くなるぞ。この人は苦勞して成功した人だ。だからお前たちみんな握手してもらえ。強運が移るぞ」なんて言われて握手したのを覚えています。私たちは握手だけだったけれども、佐藤がそれこそ冗談に、「この人は運の強い人だ。世界を動かす人だ。みんな握手してもらえ」といって、私も一所懸命握手して、これで運が強くなるぞ、佐藤内閣ができるぞ、なんて言っていた。そういう逸話がありました。

パリでは、古いホテルで、クリオンとかいうホテルに泊まった。パリのホテルはどこも汚いんですよ。いいホテルはみんな町の外だ。「町の中のホテルは」直してはいけません。外側は直してはいけません。しかし外をいじらずに中だけというところ、リフォームですから、そんなに全部は直せない。だから町の外のほうが新しいホテルだ。クリオンというのは汚いホテルでも、古い格式があるんです。隣の部屋のお風呂のバスの音がワーツと響くようなところだ。ナポレオンが入るような大きなバスタブでしたね。それが一番いいホテルです。印象に残っているのはそんなところですね。

それからアメリカに行ったが、そのアメリカに行った日に、私はおやじが亡くなって帰った。その日に「チキトク」という電報がワシントンに来て、その足ですぐ帰った。だから私はケネディに会わず、その日の夕方の最終便で東京に帰ってきた。そこまでは佐藤と一緒にした。

武田 佐藤さんの『日記』「昭和三十七年十月十七日」には、「頼三君は米國旅行をやめて帰国し度いと云って居たが、矢張り虫の知らせでもあったものか」というような記述もありますね。

松野 それで帰ったけれども、ちようど死んだ直後になりました。

伊藤 東京ですか。

松野 東京です。危ないなと思った。ただ危篤なら普通なら帰ら

ないけれど、私は危ないと思った。どうしようもない。帰ったらやつぱりその日に死んでいました。それで佐藤はケネディと会っているが、私はケネディに会わずに帰ってきた。アメリカ旅行は一切ありませんでした。

あの時の十日ばかりの旅行で非常に人間佐藤を知るし、お互いに胸襟を開いた。やはり佐藤というのは、堅い男でした。養子に選ばれるような人でした。規格を破れない人だ。だから、改革はできない人でしょうね。改善はできるけれど、改革はできない人だ。やはり規格が常に念頭にありますね。岸のほうが国を壊した。もつと大胆だ。自分で国を壊した男だから。だから安保条約の改定なんかも大胆だ。

佐藤は改善はしたけれども、大きな改革は沖繩でしようね。彼は沖繩に賭けた。賭けたのは、安保改定の時に岸が一番苦勞したのは沖繩条項だからなんだ。沖繩条項をどう安保に入れるかということは大変なことだった。あれは、まだアメリカに施政権がありましたからね。安保条約に、岸は沖繩を入れようとした。しかしアメリカは、沖繩はもうこちらの施政権に入っているから、完全保障はおれのほうで国がやるんだから、安保条約に関係ない。しかしあそここの百万ぐらいの沖繩県民を捨てて条約を結ぶというのは非常にいやなんだ。例外にしたくない。それで岸も一所懸命悩んだ。その時は佐藤と一緒に、なんとか沖繩を取り戻したいと思った。それから佐藤が沖繩返還に政治生命を賭けるようになって、念頭から消えなかった。ひとつの政治の目標を立ててまっすぐやるように、佐藤は堅い。

それでたまたま沖繩返還が佐藤の最後の仕上げとなると同時に、辞めるようになってしまった。それは常々それを言い続けているものだから、田中なんかは「もう沖繩返還がきたら、佐藤は辞めるんだ」といって、次の路線を敷いていましたからね。それは私たちが迂闊だった。田中は前までは、佐藤は沖繩返還が終

われれば辞めるんだ、あとはおれがやるんだという路線を一年前から、沖縄交渉が妥結したところからやっていた。

その時に私は確か佐藤の命でベトナムに行きましたよ。沖縄返還のとき、佐藤内閣の最後のころ、私はベトナムに派遣された。

伊藤 前にお話伺いましたね。

松野 それから佐藤内閣の時には台湾にも行きました。呼ばれましてね。

伊藤 その外遊の時、一緒に行った中で秘書は大津さんだけですか。

松野 大津がほとんど一緒です。

武田 大津さんというのはどういう方ですか。

松野 大津というのは、ずうっと佐藤の家に秘書でいた。二十年ぐらい、佐藤栄作が代議士になった第一回から、大津というのはずっと一緒です。

武田 佐藤内閣になってからいつたん辞めますね。それで、最後にはまた戻ってくるんですね。

松野 大津というのはずうっと昔からで、佐藤内閣ももちろんやっていたけれども、やり過ぎだという批判があつて、一回辞めて、またなったんだ。何もかもやり過ぎる。その批判で一回総理大臣秘書官を辞めて、また最後に復活したんです。

伊藤 あと、楠田さんは。

松野 楠田というのは新聞記者上がりだった。産経ですか。大津というのは佐藤が第一回の議員になった時からの秘書です。もう家族と同様で、何もかも知っていて、財布も全部これが預かっていました。政治献金も全部これがやってきた。「佐藤が」総理大臣の時は大津に機密費をどうのこうのという噂が出て、それで一回身を退いて、一年間やめて、それでまた元に戻ったと思います。

伊藤 佐藤さんの秘書というのと、他にもー。

松野 大津が一番でしょうね。

武田 山田栄三さんもそうですね。

松野 山田栄三もいた。しかし大津のほうが実権がありましたね。山田より大津のほうが年が上じゃなかったかな。第一秘書は大津で、山田は次の秘書でした。だから外遊の時は、山田が行かずに大津だけでしたね。大津が全部財布を持って、全部政治資金をやっている、機密費も大津がやっていた。

武田 この外遊の時に木村武雄さんが同行したというのは何か理由があるんですか。

松野 木村武雄も池田打倒だったな。木村武雄は戦前の代議士でしてね。

伊藤 そうですよ。東方会だもの。

松野 それで話が大言壮語で面白いんですよ。佐藤のところに行中行って、「佐藤さん、そんなことを考えたって、天下は回るものだからね」なんていう大言壮語が上手でね。それで、わりに好かれていたんだ。

伊藤 でも年はかなり上でしよう。

松野 上です。戦前派です。佐藤のまわりでは、そういう戦前派は木村だけだったでしょうね。

伊藤 案外そういう人が好きなんです。

松野 ええ、わりに好きなんです。小間使いのように働く田中も好きだけれども、鈴木貞一も大言壮語で、そういう夢みたいなのが好きなんだ。案外人間というのはそんなもので、ふだん几帳面なやつは夢が好きなんだ。木村武雄は夢みたいなことばかり言っていた。

伊藤 元帥、元帥と言われているね。

松野 ドゴールに会う時も、一番威張っていた。だから政治家でも、事務的な話ばかりでなくて、そういう話をするホツとするんでしようね。一服の清涼剤だと思えばいいと思う。そういうものは必要だ。

伊藤 五奉行の会合なんかで、その脇のほうに椅子を置いて、竹下「登」さんはいたと言っていますけれども、そうなんですか。

松野 竹下もその次だ。「おい、竹下」というぐらいだ。それはとても同席しません。この時テーブルに一緒に座りません。その程度だ。

伊藤 その程度でも、とにかくいたわけですね。

松野 呼ばれた時しかいませんよ。ちょこちょこ盗み聞きはしていませんけれどね。

武田 そういふのは佐藤さんが呼ぶんですか。

松野 佐藤さんです。それで、サツと入ってくる。「あれは何だったかな。あの代議士はこの選挙区だったかね」というと、「なんとかのなんとかで、当選何回。生年月日は〇月〇日」という。それで出世した男だ。代議士の名前と経歴から生年月日まで覚えている。それだけだ。だからわからなるときは、あれを呼べばいい。政務次官にする時にどっちが上かなということに、この二人はどっちだというと、「なんとか先生は年はいくつです。経歴はこうです」と、サツと言うんだ。五百人全部覚えているから、いちいち名簿を見なくても竹下を呼べばいい。どっちを政務次官にしようかというときには竹下を呼ぶ。

伊藤 便利な人なんだな。

松野 竹下が総理になるなんて、瓢箪から駒が出るようなものだ。それほど人がいないんだ。

伊藤 竹下さんは、何かそういうことがあったものだから、自分は田中派ではなくて佐藤派だという。

松野 竹下は総理になったけれども、何も業績がないでしょう。印象に残ったものが。

小池 消費税の導入。

松野 消費税導入はぎりぎりでいやいやながら、功績というか押し切られたんでしょうね。だから政治家として印象に残るものは

少ないんだ。竹下とか海部とか宇野とか宮沢は、ただ総理大臣ということであって。

伊藤 宮沢さんも含めてですか。

松野 大蔵大臣とか外務大臣とか、いろいろな大臣の時の宮沢はいいんですが、総理になった宮沢は何もなかったな。高橋是清も大蔵大臣の時は残っているが、総理の是清は残っていないでしょう。総理のほうが先になったんですが、誰も覚えていない。大蔵の高橋是清として「覚えている」。

伊藤 総理のあと、また大蔵大臣でしたからね。

松野 宮沢もそのつもりでなかったけれども。

小池 大蔵大臣としても駄目だったかもしれない(笑い)。

松野 大蔵大臣としても、まあ公債を乱発したというだけが後世に残るかもしれないですね。

小池 平成の高橋是清とか。

松野 どうも才能のあるのは度胸がない。度胸のあるのは才能がない。どうも両方揃うのは難しいですね。結局、包丁みたいに、使う時期で生まれるんだ。度胸の必要な時期に度胸のあるものが出ると、ピシヤツと合うんだ。だからピッチャーと同じで、いい時に出るか、悪い時に出るかでは違う。吉田とか鳩山はいい時期に出たから、名総理として残ったでしょうね。あの時期には、吉田が先で鳩山が後だからよかった。鳩山が先だったら、占領政策は混乱したでしょうね。

伊藤 お父様が亡くなられて、何か先生にとって影響がありましたか。

松野 それはありますね。それはやはり父が亡くなるということ、人脈が少なくなる。しかし政治家は人脈が財産ですから。おやじが生きていると人脈も生きていけるけれど、亡くなると、人脈は日々に疎くなるな。

伊藤 そういふものですか。何か必要な時にお父さんに言えば。

松野 話の伝わる人が、おやじがいなくなると伝わらなくなる。自分で訪ねて行って説明しなければ会えないわけだ。会わないといかんけれど、時間がかかる。おやじがおれば電話で紹介してもらえらるが、紹介してもらえなくなる。

吉田さんが、おやじが亡くなった時に大磯から真つ先に来てくれた。父のほうが先でしたからね。吉田さんが真つ先に来てくれて、あの人は愛想が悪いけれども、しみじみとお悔やみを言っていました。

伊藤 政治家の葬儀というのは、またある意味で政治的な行為になるでしょう。

松野 なりますね。政治家の最後の仕事は、死んで葬式をすることでしょうね。それが最後の仕事でしょうね。佐藤は「棺をもって政治家は初めて価値がわかる」という言葉が好きだった。だから佐藤の政治の最後の仕事はお葬式でしたね。葬式にどんな人が来るか、どんな人が集まってくるか、どんな空気で送ってくるか、それが最後の仕事でしょうね。佐藤も最後はなかなか立派でしたね。たしか福田がやったからね。吉田さんの葬儀は佐藤だから国葬だ。佐藤の葬儀は福田が出しました。準国葬並にやった。それも巡り合わせなんだ。自分が本心に尊敬する人が総理になったならば、それは大変な礼を尽くしてくれる。

伊藤 お父さんの時はどなたが葬儀委員長になったんですか。

松野 たしかその時は葬儀委員長は佐藤じゃなかったかな。佐藤はまだ総理になっていない、池田内閣だ。池田さんと私の家は必ずしも親しくないから、そんなに葬儀に力をいれてくれなかった。佐藤です。

伊藤 やはりそういう時に葬儀委員長とか、誰が用事を読むとか、そういうことはかなり大事なことでしょ。

松野 それは私がほとんど決めている。あまり気にいらん人には。でも池田はまだ総裁ですからね。党葬でしたから、「葬儀委

員長は」池田だったかもしれない。池田で、幹事長は前尾ですね。あの本願寺だ。あとは私がだいたい決めた。

武田 佐藤さんの『日記』でも、松野さんのお父様は自分で後見人である、一番の後見人を失って残念だということを書かれていますね。

松野 それは実際そうだったでしょうね。「佐藤を」官房長官にと吉田さんに薦めたのは私のおやじですから。スタートがそうだ。政界入りのスタートは、私のおやじが推薦人で、「佐藤は」官房長官になった。その時は代議士じゃないんです。

橋本龍伍もそうです。私のおやじが推薦して、吉田内閣に入れてスタートした。佐藤が私を大事にしたのは、そういう一つの人脈もあつたでしょう。岸さんが大事にしたのもそうですね。

武田 佐藤内閣の成立の昭和三十九年になると、「松野さんの名前は」たくさん出てくるんですね。

佐藤 たくさんありますので、こちらへんで切ったほうがいいかもしれません。そこはまとめて聞いた方が。

松野 佐藤内閣ができた時にちよつと問題があつたな。

伊藤 やはり佐藤内閣に向けての動きがありますね。先生、『佐藤日記』には先生の名前がいっぱい出てくるんです。まだまだ出てくるんです。

松野 佐藤と親しかったし、ずいぶんごねたり、私の意見を言ったりしたからね。当選回数は私のほうが上ですからね。当選回数は上なんだから、いつも言っていたもの。そうすると木村が、「おれは戦前派だから君たちより上だ。おれは東条「英機」と渡り合つたんだ」という。それはそうでしょう、戦前派ということ

伊藤 あれは東亜連盟だから、東条とやりあつたんでしょう（笑い）。石原莞爾だ。

松野 彼は石原莞爾と非常に親しかった。山形で、石原莞爾だか

ら。そういうホラを吹きながら、いつも遊んでいたんだ。話題で遊んでいた。

伊藤 ではそこで切って、次回をお願いします。

伊藤 こうして伺ってみると、前と重複しない話が多いですね。

松野 いや、忘れてるので、思い出すんです。次々忘れていて新たに思い出すと、もうエンドレスになる。

武田 月に一度、先生のお話を聴かないとー。

小池 新しい月が迎えられない。

松野 そう間違ったことは言っていないだろうけれど、記憶のあ
るうちだから。

伊藤 前と矛盾した話ではないですからね。

松野 私はこういう話をしていると若返りますよ。その時代に返
って、あの時はあんなことをしたとか、あんなことは言わな
ければよかったとか。あんな悪口を言わなければよかったとか
思う。

一同 今日はどうもありがとうございました。

松野頼三 オーラルヒストリー

第14回

[2001年12月3日12:00~14:00]

『佐藤栄作日記』と松野頼三 (2)

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員)

■愛子内親王の誕生・議長の投票とUNION

松野 ……板倉「卓造」さんが、「民主政治は、学究より大事なのは体験と経験だ。民主主義はそれがなければ進歩しない。イギリスだって決闘に乱闘、それで成熟した。日本だってゼネスト、労働争議、そういう体験の上に民主政治は伸びていくんだ。いくら勉強しても駄目だぞ」と言われた。「おれは体験の方だから、体験学の方は博士だ。板倉さんが、『民主主義は経験と体験のもとに進歩していくんだ。一番代表的なのは選挙権だ。選挙法ぐらい各国で違って、議論の究極がないものはない。選挙違反をしなから、金権政治をやったりして、だんだんよくなってくる』と言った。君は学究の徒だ、おれは体験の徒だ、俺の方が手本だ」と言ったんです。曾根「泰教」というのはよくしゃべる男でしたから、一緒に討論をしたので、まず嘯ませたんだ（笑い）。板倉卓造さんの話をしたんです。

伊藤 それで勉強もしなかつたら、もつと大変です。

松野 学究の徒らしい。それは体験をして初めてものになるのであって、学究と体験と二つがなければ駄目だ、私は学究は駄目だったけれど、体験は豊富だからね。

板倉さんというのは、非常に枯れた先生で、生徒が一番困るのは、一学期に一回か二回しか出席をとらない。その出席にあたるかどうかで困るんだ。一学期は四、五、六、七月でしょう。初めのほうはとらないんだ。真ん中と後半に一回とるんだ。その日にあたるかどうか。その日に出席していると皆出席になるけれど、出席していないと、この生徒は出席していないということになる。その一回を当てるが大変だ。

伊藤 いまだつたらケータイ「携帯電話」で知らせるでしょう。

武田 「出席とってるよ」というんでしょね。

松野 いまならケータイで呼び集めるでしょうね。その頃はケータイがないから、それをうまく当てるんだ。

伊藤 この一ヶ月間にあった重大事件は、皇太子の第一子「敬宮愛子内親王」が生まれたことですか。残念ながら男の子ではなかった。やはり女帝を認める以外にないんじゃないですか。

松野 明治の皇室典範以前には男子という言葉はなかったんです。明治のときには、一種の軍国主義的思想で、日本の憲法と皇室典範をつくったんでしょね。

伊藤 ヨーロッパの皇室のことを研究してつくったんじゃないですか。あれは女帝もいますが、男子のほうが優先でしょう。天皇家はどうしても女ばかり生まれるんだらうね。

小池 ずっと、ですからね。でも次は男の子が生まれるんじゃないですか。

松野 大元帥陛下にしたものだから、あそこで私は狂ったと思う。大元帥陛下を抜けば、男子という皇室典範はなかったと思う。

伊藤 大元帥陛下も女だつていいわけです、神功皇后のことを考えれば。

松野 私は、明治憲法のとくに男子と書かなければよかつたんだと思う。

伊藤 まさかこういう事態が起ころうとは、ついぞ思わなかったんでしょね。

佐道 そのために皇族も多少は残してあったはずなんですけれどもね。

伊藤 多少どころではない、たくさん残していましたよ。

佐道 戦後、臣籍降下したのを除いても、みんな女性ですからね。

松野 神功皇后も、昔は女帝が多かつたですね。

伊藤 孝謙天皇もそうでしょう。

松野 推古天皇もそうだな。だいたい天照大神がそうだ。

有馬 でもだいたい基本的には戦地に行きましたね。

伊藤 どちらか決めておかないと具合が悪いことはたしかだね。

有馬 だから変なところで、男女共同参画社会のほうから基礎付けをしないと、ルールを作るときにそれとバッティングするから、おかしなことになりますね。

小池 それでやっちゃおうと、王家がものすごく増えてしまいうでしよう。いま女性は結婚すると臣籍降下しますからね。限られた予算でやるとなると――。

有馬 しかし皇族をつくっておいたのが功を奏して、どこかで男ができていて、そこに行ったりしたら、また妙なことになりますね。

松野 いずれこれは議論になるでしょうね。

伊藤 女帝になったら、その夫はどうするんだらうな。

有馬 結婚しなければいけないから、大変だと思っんですよ。

小池 そういえば、天皇の一番下の娘さん、皇太子の妹君「紀宮清子内親王」も結婚されていませんものね。三十歳を越えただでしょう。

伊藤 三十過ぎて結婚しない女性は周りにごろごろいる。

小池 先生、民主党はどうですか。

松野 いま鳩山「由紀夫」に電話して、「民主党は保守中道と革新中道の連合体なんだから、そう思った方がいい。今度の場合「テロ対策支援法に伴う自衛隊派遣に対する衆院の国会承認で民主党では大量に造反者が出た」はけしからんけれど、処分、処分といつてあまり処分を厳しくやって分裂を招くことは最低だ。けれども処分しないわけにはいかんから、君は一人ひとりに会って、丁寧に理由を聞いてみたらどうだ。それだけの手を尽くすとみんながわかる。一人ひとり、二十何人に会ったほうがいいぞ。それだけの事情をかけて、同じ処分といつても一人ひとり会え」といった。どうも昔「直人」とうまく行っていないらしいな。昔が今度は一切この問題では顔を出さならしい。党規を守るのは幹事

長の責任ですからね。その幹事長が黙っているものだから、みんな鳩山に来る。

伊藤 昔も精彩がないな。

松野 曾根の話の中にあつたが、議会の議長投票権があるけれど、議長は投票しないことが議会の慣例だ。ただし、可否同数の場合は議長の投票は認められる。そんなことが私の五十年間のあいだに初めてあつた。それは三木「武夫」内閣の政治資金規正法のときた。衆議院は通つた。抵抗勢力が、「衆議院で通さないと三木は解散する」というから通せ。参議院で否決だ」といった。参議院で否決したら、衆議院を解散するとは言えないだろう。それで抵抗勢力の挙党協力は、衆議院で通して、参議院で否決しようとして欠席したわけです。そうしたら可否同数になつた。これで負けたら三木内閣は解散ができない。参議院で負けたから衆議院解散とはちよつと言えない。参議院は解散できない。そうなると内閣総辞職だ。そこに挙党協力が追い込もうとして、衆議院は通した。それで参議院に行つたら、可否同数だ。河野謙三が「可」に投票して、初めて通つたわけだ。これは憲政史上たつた一つで、この法案以外はない。与党は必ず勝つに決まっている。本会議で同数なんていうことは、抵抗勢力がサボタージュしたからだ。それを考えれば、まだ小泉「純一郎」の抵抗勢力はそこまで行っていない。佐道 一時、十二月、遅くとも一月の冒頭解散になるかという話の流れでしたが、そういう線はないですか。

松野 まだちよつと妥協をしていますね。今度の医療では妥協したな。三方一両損という花は小泉に与えたけれど、内容は後送り、後送りだね。それで予算編成でいまもめているわけだ。三木の抵抗勢力のときのことを考えると、まだそこまで行っていない。そのときは衆議院解散を覚悟してやっていたら、衆議院を通した。参議院でいじめるから、これは解散できないぞ、というんだ。悪知恵がある。河野謙三が「議長は可に投票します」と宣言して投

票して、通したんだ。

可否同数以外は、議長は投票しないことになっている。一票の差のときに議長が投票すれば五分五分になるから、永久に解決できない。それで議長は、賛否同数のとき以外は投票しないという話になっている。「曾根君、君は知らんだろうが、おれは体験の話としてしているんだ。君たちは簡単に理論をいうけれど、議長の一票というのは大変な重みがあるんだ。普段は何もない飾り物だ。私の五十年の中で初めての可否同数の法案だ」と言ったんです。

■自民党総務会

伊藤 この前はどこまで行きましたか。

武田 今日は昭和三十九年からですね。

伊藤 ILO問題については前に伺いましたね。「佐藤日記」では「昭和三十九年になると、松野さんの名前がたくさん出てきますというところで終わっているんで、四月二十日のILO問題もまだ残っているのかな。

松野 ILOは、私が労働大臣を終わった後だから。官公労の労働組合ですね。

伊藤 これは、池田「勇人」前首相がILO問題について佐藤「栄作」に協力を依頼したということだけれど、「武田氏に向かつて」文脈を説明してください。

武田 これは間違いですね。池田首相ですね。その日の「佐藤日記」の「記述は、「池田首相からILOを特別委員会できとりあげるからと協力をもとめられたので、松野、増田君等総務会の猛者に連絡して協力方を頼む」という記述なんですな。

伊藤 増田君というのは増田甲子七ですか。なんで増田甲子七なんだらう。

松野 増田甲子七は労働大臣は「やったことが」ない。吉田さんのときにやったかな。大橋武夫がやっているんだな。「増田は」何か調査会長か何かをしていたのかもしれないね。労働問題調査会長とか、そういうことをやっていたかもしれないね。

武田 三十九年は松野先生が総務会にだいぶ関係されていて、佐藤は総務会をまとめるときには松野さんのところに出すというところがありますね。

松野 あのころは総務会がうるさかった。いまでもうるさいけれど、総務会というのが一番の政争の場所だった。吉田さんのときの総務会はそのような場所ではなかったんだ。それはなぜかというと、総裁選挙をやるようになってから、負けた組が総務会を中心に党内攻撃を始めるようになったからだ。総務会の人選というのは主流・反主流で争いが激しいんだ。そこで勅撰議員を七名か何か必ず置くようになっていた。

伊藤 そうですか、首相が指名できるんですか。

松野 指名できる。ところがその七名の取り合いが、主流・反主流であるわけだ。

伊藤 七名は自分の方で勝手に選べるわけではないんですか。

松野 そんな独裁は許さんぞ、というわけだ。だから主流・反主流で三対四ぐらいで取り合いになる。そうすると総務会の全員の分布が決まるわけだ。それが大変だ。

伊藤 ほかの総務はどうやって選ぶんですか。

松野 ほかの総務は地区で選ぶんだ。地区で選ぶが、地区といっても話し合いですから、そこにも主流・反主流があるわけだ。だからなるべく反主流は、総務会の多数をとることに猛進するわけだ。各地方にも主流・反主流があるから、そこで争ってくる。それは代議士二十名に一名ぐらいだ。九州が四十名なら二名、四国が十名なら一名とか、四捨五入したりして、その地区で割り振る。その地区が主流・反主流が争って選ぶわけだ。

伊藤 じゃあ二人いれば、主流と反主流が一名ずつとかいってやるんでしょね。

松野 三人のところはどうするか、ということになる。そういうことで、総務会が主流・反主流の闘争の場になってしまふ。

伊藤 松野先生はどういう総務会なんですか。

松野 私は主流派のときには指名総務。勅撰じゃなくて指名だ。

伊藤 まあ、勅撰ということはいいですか。諭えていえばそういうことですね。

松野 主流派のときは指名総務、地方のときは九州から選ばれるわけだ。

伊藤 だいたい総務である時期が長いわけですね。

松野 長いんです。

伊藤 総務会でもなんでも、長年やっていけば自分の蓄積がありますから、発言力が大きくなるでしょう。

松野 やはり蓄積ができる。総務会というのは、党内の主流・反主流の闘争の場なんだ。いまでもそうだ。だから抵抗勢力の土俵は総務会なんだ。

伊藤 でもいま小泉さんは、総務会をパスしようと思ってるんじゃないですか。

松野 総務会をパスしようと思ってる。それで金曜日に財政なるとか懇談会というのをつくって予算の枠をそこで決めようとしたところが、総務会が、それは駄目だといって明日までに延ばされた。明日は実は私の主催で、毎年忘年会をやるんです。そのメンバーが、小泉、平沼「越夫」、麻生「太郎」、鳩山「由紀夫」、羽田「孜」、鹿野「道彦」、六人私は毎年集める。今年で五回目だ。小池 閻鍋グループですね。

松野 そう、『週刊朝日』で閻鍋グループ。明日やるんです。小泉はもちろんな出るといつてきたけれど、麻生と小泉がいまちょうどあれだから。明日は「小泉総理といわずに、小泉君で行こうじ

ゃないか。鳩山代表と言わずに、鳩山君で行こうじゃないか、たまにはそれも面白い、一日ぐらい地獄の釜の蓋も開くんだから、一切抜きでいこうじゃないか」と言つて、話をさせようと思つている。

伊藤 議会の中でも「君（くん）」じゃないですか。

松野 「君（くん）」だ。だから「総理の肩書きを捨てて話そうじゃないか」と言おうと思つているんだ。

■昭和三十九年党総裁選挙

伊藤 その次ですが、「昭和三十九年四月二十五日に」「藤山「愛一郎」氏の動静を佐藤に連絡」というのは――。

松野 総裁選挙です。

伊藤 もう総裁選挙がだんだん近づいてきたということですか。

松野 近づいてきた。

武田 この年の一月十日のところで、総裁公選規定を改正しようという動きがあつて、佐藤派と藤山は一緒になつて戦うような文脈があります。

伊藤 この前の話だと、みんな藤山に行つたわけではないというお話でしたね。

松野 ほとんど池田「勇人」のほうに来た。藤山に行つたのは少数なんです。私とか小泉純也とか、南條徳男とか、江崎真澄なんというのが藤山に行つたんです。

伊藤 なんてそういうふうに分かれるんですか。

松野 岸「信介」さんが藤山を政界に入れるときに、「将来君がひとつやってくれ」という誘いの言葉で藤山さんが外務大臣になつたわけです。そのことで岸さんは藤山にしたかった。池田・佐藤の前に。それで「藤山のためにやってくれんか」と私などは岸

さんじきじきに言われたんだ。私も岸内閣で大臣になっていきますから、岸さんの言う通りにしたわけだ。それは岸さんが労働大臣にしてくれたんだから。その恩義で私は藤山についた。そうしたら、小泉純也も岸さんに頼まれて来る。江崎、南條というような組が二十人ぐらい行ったでしょうね。

伊藤 それは佐藤派の—。

松野 もともと岸だから、佐藤系、岸系が一緒ですね。

伊藤 それでいいわけですか、佐藤派としては。

松野 佐藤派としては、どちらかというところと池田ですね。

伊藤 池田を推すということを決めているわけでもないんですか。

松野 決めているわけでもない。池田に行った代表が田中角栄です。田中はそのときに池田と組んでいたから、次のときにすぐに大蔵大臣になった。私たちは藤山に行き、田中は池田に行った。そのときは石井光次郎さんも出たはずだ。

伊藤 先生は石井さんではなくて—。

松野 「私は」岸さんのおかげで藤山に行った。石井さん「の派」はそのときはもうやめていた。その前までは石井派でした。

伊藤 この時はもう佐藤派になっていたんですね。

松野 そのときはもう佐藤派に行っていた。その経緯は入閣問題なんだ。入閣のときに、石井さんは坂田道太を推薦して、私を推薦しなかった。それで私が怒って、「私を推薦しないなら佐藤派に行く」といって佐藤のところに行った。それで佐藤の推薦で労働大臣になったわけだ。だから石井から佐藤に行ったのは入閣の問題でした。石井さんは、一人の人選で坂田を推薦したから、坂田が閣僚になった。私を推薦しなかった。それで私は佐藤派に行つて、佐藤の推薦で総務長官と労働大臣になった。そういう小さな椅子争いでしょうね。いま考えればどっちでも同じことですね。

伊藤 大臣になるということは大事なことですからね。

松野 選挙民も、早くなるかならないかということがあるから。

伊藤 四月二十七日に、佐藤さんから新政策の説明を受けるというの、「文春の為なり」とあるけれど、文春に佐藤さんが何か書いたのかな。

松野 書いたかもしれませんね。岸内閣以後に佐藤派ができたんですからね。岸さんのときまでは、佐藤は無所属だったから。

武田 その記述は一行で、「松野頼三に新政策を説明する。文春の為なり」ということです。

松野 そのとき私は、新政策研究をさせられたことを覚えている。それは将来の佐藤内閣に向かつての新政策だ。佐藤内閣ができたときのために新政策を勉強してくれといわれた。

伊藤 それを文春に発表することかな。

松野 そうでしょう。佐藤内閣の新政策をさせられた。私もその原稿を書いたから、一緒に突き合わせたんでしょうね。そういうことがありました。

武田 ちょうどこのころ、「Sオペ」といわれる佐藤オペレーションがありました。楠田「實」さんとか愛知「揆一」さんとかですが、それとは別ですか。

松野 いや、一緒です。愛知もいました。愛知とか橋本登美三郎とか私とかが、佐藤内閣に対する政策研究をしたわけです。

伊藤 いやいよ選挙が迫ってきたんですね。

松野 だいたい私は農業のことを受け持って、愛知が財政とか、だいたいパートを決めてやっていました。あのころの農業はまだ食糧増産の時代ですからね。だから、わりに単純でした。いまのように国際化はなかったですからね。

武田 「昭和三十九年」五月二十八日のILO問題では、灘尾弘吉に連絡するようにと、松野さんが佐藤さんに指示していますね。

松野 灘尾弘吉はもともと内務省ですからね。内務省が労働省になったんだ。社会局が厚生省になって、土木局が建設省になっ

た。労政も内務省に入っていた。たしか、灘尾がその課長をやったことがあるのではないかと思う。内務省時代です。

武田 その直前の五月七日には、増田さん、松野さんから電話があったという記述があります。これもやはりILO関係なんですね。それで次の二十八日には灘尾さんに連絡したほうが良いというような文脈でしょうか。

松野 「灘尾は」内務省時代の労働課長をやっていたのかもしれない。

伊藤 これはさつきからつながっている、ILOを促進するという話ですね。

松野 促進するというほどではなかったですね。あまり自民党は促進ではなかった。社会党が促進だ。これは労働権の拡大ですから。自民党はILOをどうしようかと思っていた。ただ、批准をしなければ弾圧に見えるでしょうね。そのとき一番もめたのは、国家公務員を入れるか入れないかということです。それがILO問題の焦点だった。結局、国家公務員は入れずに、政府系のものだけにしたはずだ。その切り離しが一番もめましたね。公務員はILOに入れなかった。

伊藤 ストライキ権の問題ですね。

松野 ストライキ権の問題です。

伊藤 その次は、「六月十三日」時事放談のテレビを見学ですか。

武田 「小汀「利得」、細川「隆元」、唐島「基智三」君のテレビを見物」。一緒に行かれたんですね。

松野 あのころ、唐島というのがよくやっていた。

伊藤 何か佐藤さんは時事放談が好きで、しょっちゅう見ていますね。

武田 六月二十三日には実際に佐藤さんが出ていらつしゃるんですね。

伊藤 いやいよ選挙が近づいてきたということかな。

松野 要するに総裁選挙を目標に、一所懸命顔売ったりして、間口を拡げていましたね。そういうことには佐藤は非常に周到な男だった。抜かりなく各方位に。

伊藤 その次は、日米海底電信電話開通ですか。

武田 それは六月十九日ですが、「この日、日米海底電信電話開通で、ジョンソン大統領と池田首相の記念通話があった。田中蔵相と今後の運び方を相談。之を中心にして保利、松野、橋本、郡等々と協議する」という記述があります。

松野 郡祐一は参議院代表でした。

伊藤 これは何を協議したんでしょうね。

松野 総裁選挙の体制、仲間選びということですね。

武田 これは日米海底電信電話開通とは関係ないんですね。

松野 それはもうどっちでもよかったですね。それは総裁選挙です。参議院でどうするか、個別に誰をどうするか。そういうときには、友人、親類、縁者まで選び出すわけだ。そうすると、案外つながりがあるんだ。情にものを言うわけではないけれど、選挙と同じように、あれの嫁さんはどこから来ているかとか、そういうことまで拾い出さないと。人の心を動かすには、政治ばかりじゃないんだ。故があると、それを理由に動いてくれるんだ。「なぜ君は向こうに行ったんだ」「いや実は家内がその家から出ているので」という言い訳をしてくれるわけだ。それによって動きはせんけれど、エクスキューズしてくれるものもある。そういうことで、代議士の家系図みたいなものを作らなければ総裁選挙はできないんだ。

うっかりその前で、むかし高橋是清はどうだとか言うと、その孫が親類にいたら大変なことになる。人の前で悪口を言えない。いや、あの人は偉かったと言えはいいが、あれはつまらんといいのは、相手によって言い方が違う。普段は何でもないが、総裁選挙になると、それを理由に敵味方の溝を深める。総裁選挙になる

と、みな褒めなければいけない。しかしうっかり嫌いなやつを褒めてはいけない。だから嫌いか好きかまで知らなければならぬ。運動員は微妙なものです。

そのうえでお届け物、郷里の土産を届けたりするわけだ。池田勇人が得意なのは広島菜だ。広島菜の漬け物が届くうちには、親交を深めているわけだ。私のところにも、その頃は来ていたんだ。総裁選挙を境に来なくなった。池田が当選してから、ばったり来なくなった。それまでは毎年来ていた。

伊藤 ちゃんと印があるんだ。

松野 もう私が駄目だと思ったら、ほんとうにばったり来なくなった。そういうことで、総裁選挙と簡単に言うけれど、運動員となると大変だ。郡は参議院、それで打ち合わせをしながら馬鹿な話をする。だから半年ぐらいいは準備した。話の持つて行き方が違う。そんなことばかりやっていた。

武田 七月二日には、松野先生が大野木秀次郎、加藤常太郎と。

松野 大野木は参議院、加藤は衆議院ですね。それは私が二人を、佐藤に引っ張ってきたんです。そこで佐藤支持を決めたわけだ。

武田 「完全にその票獲得。同志数人ある由」。

松野 その通り。

伊藤 これはどういう因縁ですか。

松野 加藤常太郎は親しくしていた。三木派でしたからね。その代わり必ず大臣にするという約束をして連れてきた。

伊藤 約束は実行しましたか。

松野 いや、だいぶ遅かったので機嫌が悪かった。この次、この次と言って、二、三回待たせたから。

伊藤 たくさん手形を発行しているだろうから。

松野 だから友情を壊しそうになった。

伊藤 いまのは加藤さんのお話ですか。

松野 加藤常太郎で、いまはその息子「女婿の大野功統氏」が代

議士になっています。

伊藤 大野木さんの方はどうですか。

松野 これは参議院でしたから、もういません。

伊藤 大野木さんとの関係は。

松野 大野木さんは、私の父が参議院にいて参議院議長をしていたから、非常に親しかったわけですね。年中、おやじのところに来ていましたから、顔見知りだった。

伊藤 そうやって票を獲得していくわけですね。

松野 そうやって行くんだ。それには、急に一日ではできませんよ。飯を食ったり、いろいろなことをしながら。代議士にもなかなか格式があるから。

伊藤 それでいろいろやっておいて、最後に佐藤さんに。

松野 佐藤に会わせて、じゃあよろしく、ということになる。それまでタダではできないから、運動費を佐藤からうんともらう。運動費を取らなければ、飯を食いに行ったりおつき合いをしたりするんだから。

伊藤 これで二票ですね。

武田 プラス同志数人ですね。

松野 少なくとも五、六回は飯を食っていますよ。そういうときは困ったことに、いまの小泉みたいにそば屋というわけにはいかないんだ。料亭でも格式があつて、本人の好きな料亭に行かなければいかんわけだ。

伊藤 どこが好きか知っていなければならぬじゃないですか。

松野 それは知らなければ駄目だ。どの芸者が好きかまで知らなければ駄目だ。それが料亭政治でしょうね。それからその料亭の女将がまたうるさいんだ。料亭の女将は政治家ですから、その人が気に入ると、親分に取り次ぐわけだ。大野伴陸なんていうのは料亭に決まっていたから、その女将に食料を持っていったりしているいろいろ機嫌をとっておくと、その女将が「松野さんはなか

なか気が利く」と褒めてくれるし、気が利かないと「あの人はあ」と言われる。その女将と大野は毎晩会っているんだから、すぐ通じますね。料亭の女将も、「金田中」は誰、「かわさき」は誰、柳橋でも「柳光亭」は誰、と決まっているんだ。だから料亭の女将も、政治家の派閥みたいなものだ。そこに来るのはその派閥に決まっているんだ。赤坂に「さかい」という料亭があって、益谷秀次は「さかい」だ。もう決まっています、派閥の事務所になっているんだ。そこに行けば毎日会えるし、毎日飯を食ってもタダだ。

伊藤 松野さんにはそういうところがあるんですか。

松野 私はとうとうないうちに。そのうちにもっと進むと、料亭の女将が彼女を見つけてくれるんだ。料亭政治はそこまで行くんです。だいたい当選三回ぐらいして、多少金があるなと思うと、向こうの女将が「松野さん、いい娘がいますからどうですか」といって、ちゃんと芸者まで世話をしてくれる。「あの娘には月々二十万ぐらい小遣いをやってください」という。

武田 金額まで指定があるんですね。

松野 金額もちゃんと言う。交渉してくれるんだから。それで、床入れまで世話をしてくれる。それが徹底した料亭政治、閨房政治だ。それは私たちの時代まであったんだ。

伊藤 それがだんだんなくなってくるわけですか。

松野 それがなくなつた。料亭そのものがなくなつたし、政治資金規正法で政治資金がうるさくなつたからだ。その頃は贈収賄でも第三者贈賄というのはありませんでしたから。だから自分の子分を建設大臣に押し込むと、その親分が土建屋から政治献金を取り上げるわけだ。大臣はもらわないんだから、第三者収賄だ。だからこちらはいくら取っても収賄にならない。それが第三者収賄というので、いまは刑法で第三者収賄も贈収賄に入ってしまう。入る前ですから、親分はなるべく利権の多い大臣に自分の子分を入れる。今度は業者を集めて、政治献金を強要できるわけだ。そ

れはします。そういう慣例だった。

そこで派閥の親分は、自分の子分を大臣に入れたいわけだ。建設大臣とか、郵政大臣とか。郵政も利権が多いんですよ、電線があるから。電線というのはたいへんなものです。それから機械。郵政大臣、運輸大臣、建設大臣。運輸は交通業だから。厚生大臣とか文部大臣はあまり利権がない。文部大臣も多少はあるでしょうね、学校建築があるから。農林大臣も農業土木がある。

伊藤 だけど小さいですね。ほかの省庁に比べると。

松野 それはやはり建設大臣がでかい。建設大臣にするのが、土建屋の焦点だ。いまはそのときと変わったから。

小泉は若い時代にそれを知っているから、派閥を取らないと言い出した。派閥を取ると、派閥の長がその利権のボスになりますからね。それが待合政治、料亭政治の華やかなときだ。私の時代も、途中まではそれでした。料亭を回ることが多い。派閥の事務所は料亭ですからね。昼は派閥の事務所、夜は料亭がその事務所になる。行く場所が決まっているんだ。だからあの料亭に行つたというだけで、あいつは派閥が変わつたということになるわけだ。

伊藤 佐藤さんはどこなんでしょうか。

松野 佐藤は赤坂に一つありましたね。しかしそれほど激しくなかった。佐藤の前の大野、益谷、その時代が激しかった。林譲治とか、その時代は料亭に決まっていた。また議員会館というのが昔はなかったですからね。だから料亭が、議員会館と派閥の事務所なんだ。料亭に泊まって出てくる政治家もたくさんいましたよ。

武田 池田さんはどうなんでしょうか。

松野 池田は築地と新橋の方の料亭だった。吉田さんも新橋でした。吉田さんは「こまつ」だったな。みんな料亭の一つはあった。料亭を持つようになったときにやと派閥の長になれるんだ。佐道 三木さんにもあったんですか。

松野 三木さんはなかった。三木事務所はあったけれど、料亭はなかった。それで料亭政治打破、金権政治打破、政治資金規正法を唱えていたんだ。三木はあるわけがない。

伊藤 松野さんは三木のために一所懸命やって、自分の楽しみもなくなった(笑い)。

松野 池田、佐藤まででしたね。田中まではあった。田中は「千代新」ですね。三木からなくなったでしょうね。三木、福田、大平になると、政治資金規正法が三木のときに通ったから、非常に厳しくなった。保利茂は新橋にありましたね。そこも私は年中行っていた。

武田 多くの料亭は、もうつぶれているんですか。

松野 もうゼロですね。政治資金規正法ができたときに料亭もつぶれましたね。産業界は昔はオーナー社長が多かったから。いまは雇われ社長ではないけれど社内社長ですから、接待費が自由に使えないんですね。政治献金もできないですね。結局、酒で言えば澱(おり)みたいなものが料亭に行っていたんだ。澱とか溜まりがなくなると、やはり料亭は寂れますね。ある意味では潤滑剤であったでしょうな。

伊藤 河野一郎さんの周りにいたような実業家たちはみんなお金を出したでしょう。平塚さんとか。

松野 日ソ漁業の平塚常治郎とかね。それから永田ラッパ「永田雅一」とか、萩原「吉太郎」とかね。駆逐艦だ。こういうのはほんとうに自由に使っていましたね。それが鳩山内閣の時代に河野が実権を持っていたのはその力だ。それで子分を養い、その中に中曽根「康弘」とか園田直がいた。河野派だから。

伊藤 だから河野派のそういう人脈は中曽根さんが引き継いだんですね。

松野 引き継いだんですね。しかし中曽根も河野一郎みたいな金の集金はあまりなかったですね。多少はあったけれど。もちろん

引き継いだ時にはありました。しかし三木の政治資金規正法以来、出す方が出せなくなりました。政治資金規正法は、出す方が出せなくなるんです。こういう法律がありますからというところ、向こうも出したくないんだから、なお出さなくなるでしょうね。

伊藤 出したいものはどうですか。

松野 出したいものは、政治資金規正法を抜きにして、黙って出すでしょう。だけどそれは非常に危険な毒饅頭かもしれない。いまはあまりないですね。出す方の会計がうるさいから。

伊藤 七月三十日の記事で、北海道タイムスと防長新聞の記事掲載のために佐藤とともに写真撮影というのがありますね。これはなぜ、北海道タイムスと防長新聞に松野さんが登場するのでしょうか。

武田 七月三十日の記述を読みますと、「松野頼三と写真をとる。北海道タイムスの為記事及写真、防長新聞亦同様」となっています。

松野 私の写真の顔写りがよかったですね。その時代は。田中角栄よりも写りがよかったですんじゃないかな。

武田 たしか『佐藤日記』のそのときの口絵、表紙の写真が二人の写真ではなかったですかね。

伊藤 別に北海道とか山口に関係があるわけではないですか。

松野 関係ありません。ニュースの話ではなかったと思う。

武田 その次「昭和三十九年十月十八日」は、「此の朝頼三君から電話ありて、二女と塚田徹君の婚約の報あり。両君打揃って挨拶に来る」。

松野 私の娘が塚田徹という代議士と結婚したから、その仲人を頼みに行っただけです。佐藤栄作が仲人でした。佐藤栄作は総理になつてから「一切仲人はしない、宴会も出ない」と宣言したんです。私の塚田の話は、総理になる前に約束したので、それはとうとう出ました。いまのキャピトル東急で、それだけは仕方がない

ということでもやりました。その約束です。その後、総理になって
いますから。

伊藤 もう一ヶ月後ぐらいに総理大臣になっています。それは約束
したからしょうがないということですね。渡辺良夫さんの通夜
に行くというのが十一月四日ですね。

松野 これも長い間の佐藤と私たちの仲間で、新潟の男で新聞記
者上がりの面白い男でした。明るくて豪快な人だった。

伊藤 瀬戸山「三男」さんも仲間ですか。

松野 瀬戸山は暗い、根暗の男だった。渡辺は明るかった。渡辺
良夫が初めて大臣になったときは喜んで、喜んで。モーニングを
着るわけですね。モーニングを着るのに、チョッキを着てモーニ
ングを着て、玄関まで出て、上着を忘れていた。それをみんなで
笑うんだが、それぐらいあわてて、喜んでいた。すぐに来いと言
われたので、急いでいたんだ。チョッキは着たけれど、上着を着
ずに玄関のところまで来たといって驚いた。それぐらいあわてた
んだ、嬉しかったんでしょね。それが逸話になっている、「お
前、上着なしでモーニングを着てきたんだな」といって。明るい
男でした。いまでも印象に残っています。

伊藤 やはり佐藤派なんですね。

松野 ずっと佐藤派です。瀬戸山とか二階堂「進」なんかが一緒
だ。二階堂、瀬戸山、渡辺、田中角栄、私、保利、愛知なんてい
うのは、だいたい同じ当選回数です。その仲間でした。

■第一次佐藤内閣の成立

伊藤 さて、それで佐藤内閣が成立するわけですね。

武田 松野さんが登場してくるのは「昭和四十年二月十二日の
『佐藤日記』の記述で」、「昨日の小委員会初まる。松野委員長か」

ということでも、これは防衛委員会でしょうか。佐藤さんが予測し
ているので、だいたいそれで決まるという情報を受けているのか。

松野 それは三矢問題小委員長だ。そのときの大臣が小泉純也だ。
私は小委員長になって、小坂「徳三郎」とか大平「正芳」という
のが小委員で、社会党の岡田春夫とかがいた。私は三矢事件小委
員会というのを十回ぐらい開きましたね。それでどうとう予算委
員会がストップしてしまった。それは佐藤内閣ができてすぐです。

武田 これは佐藤さんからの指示ですか。

松野 佐藤から、「いや、君やれ」と言われた。それで佐藤内閣
のときの予算委員会が動かなくなった。まるで大事件のように岡
田春夫がすっぱ抜いた。

伊藤 あれで岡田さんは有名になったんですね。

松野 ちょっとした防衛庁の中から引つ張り出して、上手に演出
したんだ。内容は大したものではない。演出の効果だ。みんなが
あつと驚いた。なに、調べてみれば、一少佐の研究ですよ。それ
がいかにもソ連に向かって作戦行動の秘密文書だというんだか
ら。

有馬 あの当時の新聞の言い方は、「三矢問題」ではなくて「三
矢作戦」でしたね。

松野 それは図上演習で、ここが攻められたらどうするか、こ
こが攻められたらどうするとやっていたもので、それが岡田につ
かまって、まるでそれがソ連との戦争準備作戦のように言われた。
演出が上手だったんだ。だんだん小委員会で調べてみると、一少
佐の研究論文だということだ。私はその功績で、そのあとで防衛
長官になったわけだ。

佐道 最初に岡田さんは予算委員会をやったわけですね。

武田 二月十日ですね。二日前です。

佐道 そこでゴタゴタして收拾がつかなくて、小委員会というこ
とになって、先生が委員長になったわけですね。

松野 小委員会をつくって、予算が上がるまでに報告しろということ、予算が上がるまでに報告をした。調べたら、それほどの大事件ではなかった。大事件ではないということを調べるだけの委員会でした。それを、毎日毎日、十回ぐらい開きました。そのときの官房長が海原「治」だ。海原も毎日来ていた。

佐道 そのときの「海原氏の」ご印象はいかがでしたか。防衛庁長官になられて、深くお知りになる前ですね。

松野 要するに、制服の悪口ばかり言っていた。「制服の馬鹿どもが」と私たちの前でもさかんに言っていました。制服組を非常に軽視していましたね。

伊藤 この三矢問題でも、ですか。

松野 「制服のやつは馬鹿だ」とか、「制服のやつはろくなことをしない」とか、制服組を非常に卑下した感じでした。私はむかし軍人だったから、少なくとも六年間軍服を着ていたものだから、あまりいい印象を持たなかった。

伊藤 やはり相手をよく調べなければなりませんね（笑い）。

松野 調べなければいけない。私だって軍人で、六年いたんですからね。昭和十六年から二十年までまる五年いて鍛えられたんだから、海原があまり軍人を馬鹿にするから、「お前なんだ、行きもしないで」と言いたかった。

伊藤 いや、行ったんですよ。彼も軍人なんですよ。

佐道 陸軍の主計大尉です。

松野 私は海軍だから、あか抜けしていたんだ。やつは軍人、制服組を非常に軽視していた。なんでそんなことを言うんだろう、というぐらいだ。

伊藤 二月十八日に、松野さんが福田派一同を佐藤さんに仲介するという記述があります。

武田 福田派一同を、松野さんが佐藤さんに引き合わせたとなっていますね。

松野 そのころ私は各派を全部呼んだんだ。それで佐藤を各派に会わせただ。三木派も、全部だ。各派だいたい十回ぐらいだな。

伊藤 どういうところで会わせるんですか。

松野 ニューオータニ。だいた二十人ぐらい。

伊藤 各派の幹部ですか。

松野 いや、各派に呼びかけて、先方が何人来ると言うから、それに合わせた。

伊藤 それぞれですか。

松野 それぞれ。各派に、佐藤に会うけれど出てくれるかという、出るよという。おれのところはだいたい十二、三人だとか、十五、六人だと言ってきますから。だから私は十日間ぐらい、それを十回ぐらい続けました。

伊藤 各派を押さえていくということですか。

松野 撫でるためだ。その担当を私はやってた。

有馬 普通そういうことはするものですか。

松野 しません。

伊藤 効果はあるんですか。

松野 やはりありますね。直接会って話すわけですからね。

佐道 これは松野先生が、そういうことをした方がいいといっってやったわけですか。

松野 私が主催した。こういうふうにするから、佐藤に出てきてくれと言った。それで十回ぐらいやりました。ほとんどニューオータニだった。十二、三人から、多いときは二十人ぐらい、各派の都合で集めました。

武田 このころ佐藤さんは「元老会議」と言っているんですが、党内の実力者会議を開こうという構想があったんですが、それに松野先生が関係しているんですか。

松野 それと同じこと、いまの話と同じ並びで、元老、年寄りも入れると言って、年寄りの灘尾とか増田甲子七とか、そういう元

老を呼んだ。それはその会合の一つです。各派の会合と、元老会議を私が召集した。みんな、ほとんど来ましたよ。

武田 二月十日の記述で、佐藤さんが福田越夫と会って、「これも元老会議のメンバーにしなければならぬか」という記述があつて、松野先生が福田派一同を会わせるという流れになつていますね。

松野 まだそのときは福田派は小さかつたんです。佐藤派の十八人が入つて福田派になつたんだから、そのときは小さかつた。まだ三木派ぐらいの大ききだつた。私が福田の方に行つて、福田派ができたんだから。

伊藤 そうですか、まだこのときは小さな派だつたんですね。その次に早川「崇」さんが出て来ますね。

武田 そうですね。医療費の問題などで、これは「松野氏と早川氏が佐藤を訪問したのは」もしかしたら別々かもしれません。

松野 早川崇とは一緒に行きました。親しかつたから。

伊藤 医療費の問題というのは、医療費の値上げかなにかでしようね。

松野 そうでしょうね。

伊藤 それからILOの後始末といつたら、だいたい厚生・労働関係ですね。

松野 いまでもそうだが、医師会というのは自民党の背骨ですからね。医師会は武見「太郎」がつくつたものだから。いまでも医師会は強いけれど、一種のわがままでしようね。医師会はなかなか改革に手が着けられない。ことにあそこは団結が強い、資金が豊富、しかも地方の集票としては、病院が一つあると二百票ありますから。職員だけで二百人ぐらいいる。患者に働きかければまだ増える。医師会は、診察室に推薦する候補者の看板をかけるんだ。だから患者がみんな見る。だから二百票の従業員プラス波及力を考えると、病院一つで大変なものだ。だから自民党には、

医師会に頭が上がらない代議士が多いでしょうね。医師会が動いたら、自民党の人には一万票ぐらい影響するでしょうね。それがまとまれば、創価学会より医師会の方が強いでしょうね。医師会の勢力は全国にある。それが医療費をもつて、健康保険を牛耳るんだから。これは自民党としては手が着けられないでしょうね。かつての総評みたいなものだ。

池田大蔵大臣のとき、医療特別措置法というもので医療の中の二八%の所得は免除だつた。所得の中の二八%は免税なんだ。これを池田大蔵大臣が外そうとして、党内で大変な喧嘩になつた。池田でもなかなか手が着けられなかつた。そのときに池田勇人は、全国の個人の所得番付を持つてきた。九州の所得番付の一番から八番まで医者だつた。全国でそうなんだ。「それ見ろ、何が問題なんだ」とやつた。これには医師会も困つた。所得番付だから正確に出てくる。九州は十人のうち八人が医者だつた。さすがに医者もその表を出されたら困るものだから、やつとその二八%をある程度妥協して、変えたんでしようね。その代わり、必要経費を上げてやるのかいいうことをした。初めは所得の二八%が免税だと特別措置法に書いてあつた。それを廃止した代わりに、必要経費を見るといふような行政措置で妥協したでしょうね。今度の診療報酬を下げるということは一。

伊藤 下げるといふても、具体的な数字があるわけではないですね。

松野 まあ、下げると書いたんでしようね。

伊藤 三方一両損ではなくて、たぶんあれは損にはならないんだ。松野 小泉も手が着けにくいでしょうね。医者は患者をもつていから。治療の単価というのはわからないですからね。技術料ですから。その代わり、徳洲会の徳田虎雄みたいのもおるけれど、これだけは困つた。技術料をいくらに評価するか。盲腸を手術したらいくらかといわれても、これは困るな。生命を預かるものだ

から、なかなか診療報酬は難しい。そのころです、早川と行ったのは。早川は厚生関係で、どちらかというと正論派でした。あれは確か、医療費を抑えて自由診療にしろと言っていたな。ある一定の単価を決めて安くして、それ以上は自由診療にする。それは患者と医者との契約だ。

伊藤 相対（あいたい）にするわけですか。

松野 そうすると、いい医者のところには患者が行くだろう。患者が自由に選べる。いまのようだと、どこに行っても同じだ。駅弁医療と呼ばれる。そういう感じでしたが、なかなかそれも、論は良しでも実行は難しいですね。

伊藤 医師会は何んでも絶対反対だから。

松野 医師会は反対なんだ。自由診療も個々には賛成なんだが、医師会となると反対になるんだ。個人の医者は賛成が多い。自分は名医だと思っから。しかし医師会で会議をすると駄目なんだ。

伊藤 いや、名医だと思わない人もたくさんいるでしょうから、客が来なくなったら困る。

松野 そのときは、そんな話を早川とした。早川は自由主義的な考えでした。

■防衛庁長官に就任

伊藤 それで改造内閣で防衛庁長官になられますが、組閣のときに大臣という話は――。

松野 なかなか私のところに来ないんだ。決まらないんだ。私は総理大臣室にいたから、「今度私はどこの大臣にしてくれるんだ」と言ったら、佐藤は黙っているんだ。「松野、どうしても年寄りにやらせたいから、一回待ってくれんか。椅子がない」という。「椅子がない」といって、椅子は前から決まっていたんだ。私を入

れないのなら入れなくてもいい。佐藤内閣のあいだぐらい、別に大臣にならなくてもいいよ」と私はえらい剣幕で言った。「それならいいよ、どっちでも。今度しないのなら、この次もいらんないよ」と言って私が怒って出ようとしたら、「おい松野、ちょっと待て、ちょっと待て。わかった。入れる」と言っで、それで防衛長官に入れた。

伊藤 それは改造のときでしょう。

松野 改造のときですよ。私は三矢をやっていたから、当然防衛長官に決まっていると思っっていた。それなのに「年寄りを一人どうしても入れなければいかんから、一回だけ待ってくれ」という。「二回待つのなら、二回待つても三回待つてもいいから、私はメンバーから外してくれ」と言っで、私がドアから出ようとしたら、「ちょっと待て、ちょっと待て」と呼び止めて、「わかった」といっで、すぐに防衛長官にしました。それぐらいのことはね。

伊藤 そうですか。大臣になるためにはそれぐらいやらなければ駄目ですか。

松野 それぐらいはね。

佐道 労働大臣もなさっでいて、佐藤首相との関係とかいろいろなことを考えたら、防衛庁長官というポストは三矢の小委員会の流れからしたら、わからないことはないんですが、ポスト自体としては防衛庁長官ではなくて、もうちょっと違うところが、というお考えはなかつたんですか。

松野 私は農林大臣だと思っっていた。

佐道 そのあとにはなられますね。

松野 防衛庁長官のあと、当然農林大臣になったんです。私は予算委員と農林委員をやっていた。そして三矢で防衛小委員会をやったから、どちらかだということは決めていた。農林大臣になるか防衛長官になるか、自分で決めていた。行ったら、「ちょっと待て」と言われたから、私はブツとして、「一回待つのな

ら、二回待っても三回待ってもいいよ。佐藤内閣のあいだおれは大臣にならなくてもいい」と言った。その程度にしかおれを見ていないのかという腹があったものだから、総理大臣室のドアを開けて出ようとしたら、「おい松野、待て」という。「わかった、大臣にするよ」という。だから今度は「ありがとうございます」といってぺこっとお辞儀をして帰ってきた（笑い）。それは二人だけの現場でしたからね。

伊藤 そういうときは見ている人はいないわけですか。

松野 いないけれど、そういう状況だった。それで私は、なつてから威張っていたんだ。

伊藤 ここに「閣議に欠席」というのことは、なんでわざわざ書いてあるんだろう。

松野 閣議に欠席したことがありますか。

武田 防衛庁長官になられて最初の閣議でしょうかね。六月二十五日です。

松野 それはなぜだろう。

武田 「松野と中村（寅「太」）の二名」、閣議に欠席と書いてありますね。

伊藤 滅多に閣議に欠席ということは書いてないけれどね。

武田 そうですね。話が戻りますが、周山会、そのころは溜池クラブですか、そのときにも松野先生が欠席されて要領を得なかったというような話があるんですね。

伊藤 別段、むくれていたわけではないですね（笑い）。

松野 佐藤とはなんべんもぶつかって喧嘩をしたことがありますよ。

佐道 いままで覚えておられないかもしれないけれど、何かあったのかもしれませんがね。

松野 ずいぶんありますよ。

佐道 わざわざ書き留めているんですからね。

松野 佐藤とはほんとうになんべんも喧嘩したことがある。「なに言っているんだい」という感じでね。それは私の方が当選一回上なんだ。

伊藤 兵隊の位でいうと一つ上なんですな。

松野 兵隊の位でいうと、縫糸の数はこつちが多いんだ（笑い）。もう一つは、私の父のところ、年中佐藤さんは来ていましたからね。親しかつたから、喧嘩できる仲だったことは事実です。保利とも仲がいいだけに喧嘩した。それは親しいから喧嘩できるのであつて、田中とは喧嘩したことがない。喧嘩したらそれで終わりだから。喧嘩したら、お互いに終わりだとわかっている。親しいやつだと、今日喧嘩しても明日また会えばいいと思つていふ。

武田 松野先生が入閣される前、五月二十六日の日記に、国防懇談会が官邸で開かれて、「池田正之輔、保利茂、個別に人事につき意見開陳。松野頼三亦然り」という記述があつて、それがちょうどいま入閣するときぐらいの話でしょうかね。

松野 そうです。池田正之輔。

武田 国防懇談会の席上で、人事についての意見があつたんでしょうか。

松野 池田正之輔というのは岸派だったけれど、佐藤栄作のところにあとから入つてきた。それで佐藤の選挙を一所懸命応援した男なんだ。おそらく池田正之輔をしたかつたと思う。年が多いですから。それは私もだいたいわかつた。

伊藤 親しい間柄だから、ちよつと待つてくれという感じなんですな、きつと。

松野 私は三矢でこれだけ功績があるのに、何を言っているんだ、という感じでした。その前に、私を官房長官にするかと思つたら、橋本登美三郎にした。「佐藤は」橋本とは無所属で一緒におつて、「苦労させたから今度はトミにするからな」「ああいいでしよう」ということで、私をしなかつた。その次にもう一度、閣僚を待つ

てくれと言ったから、私はムツとしたんだ。いい加減にしろということだ。

■ 椎名外相不信任案と牛歩戦術

武田 ちょうどその次の日ですか、山一がつぶれるんですね。

伊藤 ちよつと飛びますが、十一月「九日」の記述は何ですか。

武田 これは椎名「悦三郎」外相の不信任案のときの、牛歩戦術を使って徹夜国会になったときに、「議事す、まず、坂田、福田、石井、永山、松野等、次々に提案の予定」というような記述があります。松野先生が中心というわけではないんですが、お名前が出てくるので。「椎名外相不信任「任」案出る。議事す、まず、坂田、福田、石井、永山、松野等、次々に提案の予定。当方結論を急ぐも牛歩戦術、演壇占領等不法、議事妨害で徹夜国会に入る」という記述です。

松野 それは牛歩で、何か方法がないかということだった。それはおそらく議場内での話です。

伊藤 議事提案というのはどういふことですか。

松野 それは緊急動議か何か出して、相手の牛歩を止めようじゃないかということです。牛歩を止めるために新しい議事提案をして、牛歩をうち切れということだ。牛歩打ち切りの議事提案を出す。ただ牛歩をしているあいだは出せないんだ。牛歩が終わって、次の牛歩のときに禁止を出そうとした。牛歩の経過中は駄目なんだ。牛歩が終わったとき、次の牛歩は禁止だという緊急提案を出そうというわけです。それを出して、牛歩をできなくしたんですね。時間制限をした。牛歩を二十五分とか。

小池 一人、ですか（笑い）。

松野 二十五分すると、そこで閉鎖するからあとの人は投票でき

ないよ、という時間制限をするわけだ。牛歩の時間制限だ。牛歩とは書いてないけれど、投票の時間制限の緊急動議を出してそれを可決すると、その次は二十五分のあいだは投票しようがしまいが構わない。二十五分は難しいから、四十五分ぐらいにしたんじゃないでしょうか。与党も入れますからね。普通どどん回っていくと、だいたい十五分なんです。だから四十五分ぐらいに私は決めたと思う。そうすると、四十五分経てば閉鎖して、あとの投票は無効になる。

小池 与党から入れていくわけですからね。

伊藤 牛歩が始まったらできないですね。

松野 始まったら、それが終わるまでできないんだ。牛歩をやっているときに、次の議事は出せない。だから出しておくけれど、採決は「牛歩が」終わらないとできない。

伊藤 このころは、まだ徹夜国会とかいろいろありましたね。

松野 あった、あった。あれも野党としては一つの戦術でしょうね。その体験をしたから、こんにちなくなつたんだ。やはり理論も大事だが、経験と体験の方が民主政治を良くするんだ。良くするには、そういう経験を踏まなければ直らない。東大争議なんてとんでもないことをやつたけれど、あれをやつたから、それがなくなつたんだ。あの馬鹿さ加減がわかつたから、やらなくなるんだ。一回経験した方が政治は早い。いくら理論をやつても駄目だ。

伊藤 いや、みんな体力が落ちたんじゃありませんか（笑い）。

松野 体力も落ちたかもしれない。

小池 そういえば、PKO法案のときに牛歩をやりましたね。

松野 やつたけれど、あまり徹底してできない。

伊藤 というより、評判が非常に悪いわけですね。

佐道 徹夜にならなかつたですね。

小池 徹夜にならなかつた。十二時には終わりましたね。

松野 野党の新しい戦術がないんだ。牛歩も駄目、乱闘も駄目、

やることがないんです。審議拒否も限界でしょう。審議拒否をする、向こうが単独採決をするからね。だからいま、戦術がないんだ。そのうちにやったのは、演説を長くしたことがある。本会議場で、一人四時間ぐらい演説したことがありますよ。何をやるのかというと、その法案の速記録を読むんです。「大臣登壇、誰々質問」といつて、質問の内容を細かく読むんだ。それでまた大臣答弁を読むんだ。また誰々質問。その速記録をこまごまと全部読み上げると四時間ぐらいかかる。そういう演説による妨害もやりました。速記録をゆつくり読むんだ。ときどき読み違えると、また元に戻って読むんだ。「お前そこは二回ぐらい読んだんじゃないか。まるで蓄音機みたいだ」といったが、それで四時間というのは大変だ。

伊藤 演説は議運で時間を割り振っているんじゃないですか。

松野 割り振っても、割り振りは関係ないんだ。やってもいいんだ、時間制限がなければ。割り振りは審議上の問題だ。議事運営のときは、動議で決めなければいけない。議会で決めない限り、割り振りは関係ない。そのときは野党質問何時間と決めない限りは、何時間やつてもいい。それがちょうどイギリスの演説だ。

「電話のため一時中断」

松野 いまちよつと、鳩山代表が心配して電話をしてきた。

伊藤 何を心配しているんですか。

松野 いや、友愛精神でやりなさいと。

伊藤 なんの意味だかよくわかりませんが（笑い）。

松野 そのうち出てくるでしょう（笑い）。

伊藤 次回にわかりますか。

松野 ちょうどいまのようなことが議会ではあった。私はその知恵をつけたわけではないけれど、イギリスにあるんだ。三日二晩演説をしたことがある。野党の戦術として、言論は許されるといふんだ。言論の府は言論を許す。その人は記録では三日二晩演説

したという。アイルランドとイングランドの反対演説。アイルランドの代表者です。三日二晩といって、便所とか飯とかどうしたか、それは知りません。とにかく続けることができるというんだ。これは野党に許される、言論の府の妨害戦術として合法だという記録を私は読んだ。その話を私は聞いたから、これはちゃんと時間制限をしないと、許されているんだ。それを許さなくするには、議会で議決しなければならぬ。私はそれを議場で佐藤に話したことがある。私は前からその話は聞いていた。野党が妨害することは、演説するしかない。これは言論の府だから、言論を封殺することはいけないと世論はいうでしょうね。しかしあまり長く速記録を読み返したりするのはどうか。

伊藤 そうですね。内容があればね。

松野 内容があれば、世論は聞くだろう。たしか二晩三日と書いてあった。

伊藤 それはアイルランドとイングランドの戦いの歴史でもある。

松野 百年戦争だから。そういうことが記録に残っていたから、そんな話を佐藤にして、言論を封殺することは駄目だよ、しかし時間制限をすればいいと言った。

■農林大臣に就任

武田 そして松野先生は農林大臣になりますね。

伊藤 農林大臣の就任のときはどうだったんですか。

松野 農林大臣の就任のとき、私はまだ若くてわがままだった。事務次官に辞表を持ってこいと言った。

伊藤 なったときですか。

松野 なった途端に。「次官は」「何か私は悪いことをしたでしょ

うか」と言うから、「そうじゃない。まずおれに人事権を自由にさせるために、まず君が辞表を持ってこい」と言っ、二日、三日もめたんだ。

伊藤 いまの田中真紀子と同じだ。

松野 それが佐藤の耳に入っ、佐藤が「お前、何か妙なことをしているんじゃないか。どういう意味なんだ」「人事権を私が掌握するために、私はまず事務次官に辞表を持ってこいと言っ。事務次官のクビを切るという意味ではない。代表して恭順の意を示せという意味だ」と言ったら、佐藤が「馬鹿なことはいい加減にしろ」と言っ。ちょうど田中真紀子がやっのを、私は四十年前にやっていたんだ（笑い）。

佐道 田中真紀子の悪口は言えませぬ（笑い）。

松野 それは農林省に派閥が多くて、伏魔殿だったからだ。

伊藤 省内の派閥ですか。

松野 省内だ。

武田 どういう派閥ですか。

松野 それは族議員に盲従しているわけだ。いまでいえば「外務省における」鈴木宗男とか。どの局長は誰、どの課長は誰と色分けできるぐらい、議員と癒着している。畜産になるとどの議員、林野になるとどの議員、みんな農林省の各局が議員を養っているみたいなんだ。激しいんだ。だからそれを断ち切りたかった。全部一新して、たらい回しに人事をグルッと回そうかと考えたんだ。林野を農地に、農地を漁業に、ということを私は考えたものだから、その前にやっただけだ。事務次官が悪いわけではない。そうすると、省内みんな私の言うことを聞くだろうと思っ、事務次官に言っ。三日ぐらい事務次官は持ってこなかった。そのうち、佐藤にそんなことを言われたが、一週間ぐらいしたら持ってきました。それで私はそのまま一日預かって、「これは君を退任させるためにやっただけじゃない。省内の掌握をするためにやっただ

から」と言っ。それがわかったから持ってきたんでしょね。持ってきたから、私は返したんだ。そんな芝居もやっ。田中真紀子みたいなことを、私もやっことは仕方ない。機密費はなかったですけどね。それぐらい農林省は伏魔殿だった。

伊藤 先生も農林族ですからね。

松野 だからみんな知っているわけだ。

伊藤 先生はどこつながついていたんですか。

松野 私はわりにみんなを見ていたけれど、彼らに斡旋させて献金させたことはない。政治献金のルートをつくって代議士に結びつくんだ。役人は贈収賄はせんけれど、この議員に献金しなさいとか言うわけだ。製粉業者には粉の問題、水産業者もある。小さい業者があるんです。そうすると課長がその業界を集めて、この問題はなんとか代議士にお願いになったらどうですか、という。そうすると政治献金をつけて、持っていくわけだ。そういうのを私は見ている。私もいくらかもしれないが、見ているから、農林省はよくない。私もその一員だったか、それを切りたかったわけだ。それはいろいろ小さなルートがあるんです。まず製粉業界、水産業界、畜産、酪農、ミルク、蚕糸・養蚕、糸、案外あるんです。いまはもうみんな斜陽産業ですが、あのころは食糧増産の時代だ。いろいろ小さな業界があっ、利権のルートがある。

伊藤 そうすると、農林族は必ずしもまとまっっているわけではないんですか。

松野 糸のようなものでしょう。糸としてはまとまっっているけれど、全部が融和していない。糸なんだ。糸は引つ張れば全部バラバラです。それが農林族だ。融和じゃない、糸なんだ。だから畜産と酪農は別だ。そのころは食糧増産の時代で、酪農組合と明治・森永との争い。それから小さな争いがほうほうにある。それは資本農園と個人組合が相対立していますね。その争いとかね。

それから飼料、いろいろな小さな業界が糸のようにつながっている。その糸を手繰っていくと固有の代議士が出てくる。それを切りたかったわけだ。

伊藤 切れましたか。

松野 なかなか切りません。みんなまとめておれのところを持つてこいと言いたいけれど、そうもいかなかった(笑い)。

伊藤 また田中真紀子だ(笑い)。

松野 大臣はそうはいかないね、公務員だから。農林省の役人は、外務省のような機密費をどうこうするというのは少なかった。農林省の役人は、飲み食いは業界と多かった。その話の中で代議士を推薦するわけだ。そうすると、その代議士がその予算を一所懸命やるわけだ。乳価を上げるわけだ。コメになると米価を上げるわけだ。そういう雇われ代議士が多かった。それを切りたかった。私もその一人だった。林野になると井出一太郎が林野組合の代表だ。野原正勝とかね。それから松浦東介なんていうのもいまして、これは単作地帯の代表とかね。地域代表、業界代表、これが農林省なんだ。小さいものに区分けされている。

伊藤 水産なら水産でボスがいますね。

松野 それは鈴木善幸だ。水産だつて一緒になるけれど、その中はバラバラなんだ。それが予算を争うわけだ。農林省がよくなつたら、林野庁が足りないという。今度は農地が足りないという。農林省の中の争いが激しいんだ。いままでより、抜いた、抜かれたといつて、予算が必要かどうかではないんだ、予算の獲得の方に忙しい。林野、水産の公共事業のバランスがどっちが多いかとか、港湾はどうだとか、中はバラバラだ。外に向かつては一緒だ。

伊藤 耕地整理なんていうのもかなり大きいんですか。

松野 大きいですよ、農業土木だから。それは土建屋だ。農業土木も相当なものですよ。それは耕地整理だ。もちろん大きな鹿島とかそういうところは行きません。小さい土木屋がたくさんある。

ほとんどローカルでしょうね。県内の建設業者はほとんど農業土木だ。大きなものはゼネコンが来ますからね。農林省は小さな何々組というのがたくさんある。

佐道 でも地域にしたら大きいでしょうね。

松野 地域はそれで飯を食っている。一つの村に農業土木は八つぐらいあるでしょうね。道路をつくったり、畦道をつくったり、小さな工事がある。地方では農業土木で食っているところが、その町村に八つぐらいはある。

■東南アジア訪問

武田 先生が農林大臣をやられているときに、東南アジアに行くというお話があったようなんですが、ご記憶ですか。「昭和四十一年」十一月四日、「尚松野君の東南アジア行きの場「合」は田中行管を代理とする」。

松野 ああ、ありました。それはオリンピック招致か何かだ。三木武夫が外務大臣で、三木さんがカンボジア、私がラオス。たしかオリンピックの何かだ。

武田 でも東京オリンピックは前の年ですね。

松野 終わっていますね。何かの招致で行ったんですよ。

小池 国際会議ですかね。

松野 国際会議、何か東京でやるので、手分けをしていったんです。私はタイとビルマとラオス。三木さんがカンボジアとベトナム。何かの会議だった。

武田 ベトナム戦争は関係ないですね。

松野 関係ないです。招待状を持っていった。そのときカンボジアはちよつと危険でした。危険なところは三木さんに行ってもらおうや、と言って、私はラオスに行った。ラオスは、三階建て以

上のビルがないところですからね。ホテルだって二階だ。蚊帳が引いてある。それで部屋の中にはヤモリがいる。二階建ての木造の建物で、これがラオスかと思つたが、いまでもそうでしょうね。大臣が行つてもそういうところですからね。

伊藤 一流ホテルなんでしょうね。

松野 それが一流ホテルだ。そのときに、ベトナム戦争がぼちぼちあつた頃でしょうね。

佐道 一九六六年ですから、北爆が始まるころですね。

松野 始まる前だつたと思う。ラオスからの飛行機がホテルから見えるんですが、米軍の運搬の飛行機が何十杯も飛んでいた。それは援助でしょうね。なんだ、戦争でも始まるのかという印象がありました。だからカンボジアは危ないから三木さんに行つてもらつて、私はラオスに行つたのを覚えてる。

伊藤 その前に、醤油値上げ問題についての指示を受けたということがありますね。これは大問題ではないから、覚えておられるかどうかわかりませんが。

武田 佐藤総理の記述では、松野大臣は「すぐに走り出すので非常に頼りになる」ということですね。

松野 すぐに承知しましたというから、わからずに承知したんじゃないかと思う。

武田 「すぐに走り出すので非常に頼りになる」。ほかの大臣はなかなか動きが悪かつたんでしょうか(笑い)。

松野 すぐにハイと言つて、承知するものだから。

伊藤 でも醤油値上げなんというのは、自由ではなかつたのかな。

小池 統制の流れがあつたんじゃないですか。

武田 どうなんでしょうね。一応、醤油問題について指示ということで、ちよつと調べてもらつたら値上げ問題であるという。

松野 誰か佐藤が頼まれたんですね。

武田 そうかもしれないですね。

松野 あまり印象に残っていません。

■選挙制度調査会と政治資金規正法

武田 それから後は、昭和四十二年になると、選挙制度審議会の話と、政治資金規正法の話で、ほとんど報告を受けたとか、昼食を取るといふ記述ですね。

松野 昼食をとるためにその議題を持つていつていたんです。それで大臣を辞めてから、選挙制度調査会を「松野、やれ」と言うんだ。私は「もう、そんなのはいやですよ」と言つたら、「君はわからんな。選挙制度調査会長としておれに会いに来ればいつでも会えるよ。パスポートだと思つてやれ。報告はなくてもいいんだ。パスポートがないと来にくいぞ。松野がただ飯を食いに来た、では困るから、選挙制度調査会長をやつて、選挙制度調査会の報告をしに来い」ということで、私はやつた。年中選挙制度調査会の報告といつて、昼飯を食いに行つてた。そのうちに答申が出たんだ。第六次審で出たんだ。与党内は全部反対なんだ。

伊藤 選挙制度というか、政治資金ですね。

松野 政治資金だ。与党は全部反対。それで私はどうとう案をつくつて、内閣が提案したんだ。私が質問するわけだ。与党質問だ。

武田 「昭和四十二年」十二月十一日にありますね。

松野 そこで長々と与党質問をするわけだ。結局それは、法案を引き延ばすための質問なんだ。答申が出たんだから、世論のためには出さなければならぬ。出すには出すが、通したくない。そこで長々と与党質問で引き延ばして、結局その法案はつぶしてしまつたんです。要するに妨害与党質問だ。別に予算には関係ないから、日にちは構わない。結局私が代表質問をしたのは、二時間ぐらい延ばすための質問だつた。

武田 はい、「午前中二時間行ひ」となっていますね。

松野 そうなんだ。延ばすために、私の知っているあらゆる範囲を話しながら、「そうですね」とか言つて、八百長質問の最たるものだ。妨害質問というわけにはいかないから、引き延ばし質問をした。それですね。

武田 それから昭和四十三年一月十一日には、塚田十一郎氏を参議院の立候補で公認するようにと、松野先生が佐藤さんをお願いして、佐藤さんはそれは絶対にしなないと拒否したという記述があるんですね。ちょうど新潟県の知事を辞めたぐらいのときですね。松野 塚田十一郎は辞めるときに、県会議員に選挙運動費を配っていたんだ。それが選挙違反になった。だから、選挙違反で辞めたものを公認できないというんだ。それで結局、塚田は無所属で出て当選したはずです。公認してくれと言つたら、公認は党規にあるじゃないか、選挙違反で辞めたものは駄目だということ。そのことを頼みに行ったことを覚えている。結局無所属で出て、あとで自民党に入ったはずですが。当選するのならいいじゃないか、そんな感じを私は持っています。

十一郎は塚田徹のおやじでしたからね。私の娘婿が塚田徹だ。塚田十一郎とは、岸・吉田の頃は一緒でしたからね。十一郎は私よりも一回早く当選している。水田三喜男とかね。これも郵政大臣までやりました。吉田内閣で大臣をやった。なかなか政治家には、親類、因縁があるから。

■米価問題・昭和四十三年党総裁選挙

武田 あとは、昭和四十三年、次の総裁選の話ですね。

松野 次の総裁選は三木武夫が出ました。

伊藤 その間に米価の問題があるでしょう。

松野 米価はいつも、農協が値上げ、値上げでした。麦価と米価が、農林省では一番関係団体が多いですね。

伊藤 農協というのが、さっきの医師会ではありませんが、非常に強い圧力団体ですね。

松野 農林関係では、医師会に負けないのが農協だ。これは強い。農協職員は二十五万人いますからね。自衛隊員と同じ数だけいるんだ。その職員はみんな農家の次男、三男です。そこは農協が中心で農民が軽視されていると言われても、我慢するのは、次男、三男がみな農協に入っているからだ。農協は次男、三男の就職口になっている。またそれに関連したものが肥料や運送や倉庫業、みんな農家でしよう。だから農協は農村を牛耳っている強いパイプなんだ。非があつても、それを叩くやつがない。非はみんな認めている。しかし叩くことができない。いまの農政の大きな問題は農協でしょうね。

伊藤 いまでも農協はそんなに大きな力ですか。

松野 いまでもそうだ。それから倉庫にはコメがたくさん溜まっているわけだ。倉庫業で農協は稼いでいる。コメがいっぱいできれば倉庫業では稼げない。コメはいっぱいにする、倉庫料は取る。そのコメはダンピングで安くする。コメの古いのは餌として売るんですよ。餌で売るときは、買い上げるときはトン十二万円ぐらいで買い上げる。餌にするときは、トン二万以下、一万五千円ぐらいにしかならない。大変無駄なことをしている。外国に売ればいいが、日本のコメを買う国は世界中にありません。救援米として安く売ろうじゃないかというのが北朝鮮だ。あれは政府で贈与だから、案外北朝鮮にコメを売ることも農林議員は賛成なんだ。

伊藤 あれは売るんですか。

松野 いや、援助です。タダです。援助金として予算に計上して、それを農林省が受けとつて、農協のコメを買うわけだ。それで北朝鮮に援助するわけだ。北朝鮮は払いませんから、政府が援助す

るわけだ。

伊藤 そうか、それで北朝鮮への援助を農林議員は賛成するんですね。

松野 だからほかの国、バングラデシュなんかは援助することにも賛成なんだ。今度おそらくアフガンにも、コメの援助なら賛成でしょうね。しかし十二万のコメなんかいらねえんだ。向こうは一万円ぐらいのマイスとか雑穀の方がいいわけだ。麦なら二万ぐらいでしようね。おそらくアフガンにはコメの援助をしようというでしょう。バングラデシュに、コメで在庫をなくしようとすることがあるんです。それはあまり喜ばないんだ。あんなコメを食べつけていないんだ。それは小麦粉の方がよっぽど喜ぶ。コメは粉にして食べるんでしょうね。パンみたいにして。これだけはべらぼうにコストが高い。

伊藤 二回目の総裁選挙は、佐藤さんの場合はほとんど問題なしでしたか。

松野 問題なし。たしか対立候補は三木さんだけだと思う。三木は佐藤に三回とも出ていますからね。もちろんいつも百票以下です。それでも三木は毎回出ましたからね。選挙対策本部をつくって、選挙対策を一所懸命やるんです。

伊藤 やるんですね。佐藤さんは熊本の代議員と松野さんの仲介で面会したという記述がありますね。

松野 それは代議員がおりますからね。たしか代議員が一票ずつあったと思いますね。もちろん勝負は最初から決まっていたが、三木に百票以上取らせるなどか、そういうかけ声がつまみにか出るわけですよ。

伊藤 かけ声をかけておかないと、ずるずると行ってしまう。

松野 ずるずる行ってしまう。

伊藤 「昭和四十三年」十二月二日の「松野氏、改造後初の挨拶」というのは何ですか。

武田 これは「松野頼三、宮沢夫妻、鈴木貞一君等來客多い。改造した様な気になる」ということですね。このとき松野さんが挨拶に来たということでしょうね。

伊藤 先生は第二次改造内閣のときは――。

松野 私はそのときは選挙調査会長でしようね。

小池 辞められた、ということでは挨拶に来られたということですか。

伊藤 その前に辞めているんですね。

松野 何か遊びに行つたんでしようね。

伊藤 また大臣にしてくれなかつたな、とか言つたのでは。

松野 私はもうそれきり入閣は希望しなかつた。佐藤内閣では一切希望しなかつた。私はあまり大臣は好きではなかつた。格としてならないといけないからなつただけで、その後一回も大臣にしてくれということはありませんでした。だから私は佐藤内閣のそれで終わりです。幹事長にしてくれということは言つたけれど、大臣にしてくれといった覚えはない。

小池 それはなぜですか。

松野 あまり好きではなかつた。私はあまり大臣というのは好きではない。三役にしろ、といった。

伊藤 元大臣というのは一応の格だから。

松野 仲間が大臣をやるのなら自分もやるということで、二回やればそれでいいと思つた。あとは入閣は、どちらかという辞退の方だった。

佐道 党務の方が――。

松野 党務の方が好きだった。私は党務が好きで、大臣は好きではなかつた。ちつとも自由というか、楽しみがないですね。間口が狭い。その所管以外に物を言えない。言えばほかの大臣に傷がつく。

伊藤 相討ちになる。

松野 通産省のあれはよくないね、と言ったら、通産大臣の悪口を言っているみたいでしょう。批判ができないんだ。党におれば、何を批判しても自由だ。

伊藤 さて、どうしましょうか。二時になりました。

佐道 昭和四十三年が終わったところで、ということにしましょう。

伊藤 今度は四十四年からにしましょう。四十四年は大学紛争ですから。

松野 もう十四回ぐらいいやりましたね。

小池 まだまだです。

松野 ずいぶんあなた方と長いおつき合いをいただいて光栄ですが、私が生きているあいだは—。

伊藤 あまり時間を気にしないでやっていきましょう。次は来年の一月ですね。

小池 一月は大学入試のセンター試験とがありますからね。一月十九、二十日です。

松野 入試センター試験に合格すると、それで大学に入れてくれるんですか。

小池 そのあと二次試験があります。

松野 一次試験はそれで済み。

有馬 まあ一次試験に相当するんですね。

松野 何点取ったということがわかるんですね。

小池 それで行ける大学が決まってしまうです。

松野 それで行く。あれは受けなければ駄目ですね。

有馬 国立はそうです。ただこのごろは、私立大学もたくさんセンター試験を採用しているんです。私立大学によっては、センター試験の点数だけで入れてくれるところもあるんです。

伊藤 それは一部を入れるんですね。

有馬 いえ、いろいろあるんです。自分の得意な科目二つ分だけ

いとか。

松野 じゃあ官立の大学に行くには全部受けなければ駄目なんだ。

有馬 駄目です。

小池 これから試験制度も変わるでしょうけれど。

松野 何万人ぐらいい受けるんですか。

小池 七十万か八十万ですね。

松野 その中で、三分の一ぐらいい入りますか。あれは機械で採点するんですね。○×式みたいなものですね。

有馬 塗りつぶしです。

政局関連年表

「三矢研究関連年表」

一九六三年二月一日

防衛庁統幕会議、「三矢研究」開始
(六月三十日)

一九六五年二月十日

衆議院予算委員会で防衛庁統幕会議の「三矢研究」問題化。社会党岡田春男議員が、昭和三十八年度統合防衛図上研究実施計画(三矢研

究)について政府を追及したものを。三月三日
社会党岡田春男議員、二月十日に
ついで「三矢研究」について政府
を追及して五項目の資料提出を要
求。政府は拒否。

九月十四日

防衛庁、三矢研究に関連し秘密保全不適切で二十六人を処分(注意・訓戒・訓告等)と発表。

松野頼三 オーラルヒストリー

第15回

[2002年1月16日15:00~17:30]

『佐藤栄作日記』と松野頼三 (3)

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員)

(於：松野頼三事務所)

■現在の政局の動きなど

伊藤 ……いろいろなことがありますね。

松野 あるんですよ、一ヶ月でね。来月はもつとあるかもしれん。今年が多いんですよ。みんな去年のことを忘れてるんです。去年の今ごろはKSD事件です（笑い）。

小池 ありましたね。

松野 あったでしょう。それから森「喜朗」内閣の森おろし。みんな健忘症で、去年のことを忘れてる。不思議なものです。

伊藤 そうですね。小泉「純一郎」内閣ができたなんていうのも、もうずっと昔のような感じがしますね。これは本当に不思議です。

松野 加藤「紘一」の乱があつて、今年有加藤の事件だ。鹿野「道彦」はかわいそうです。あれは冤罪だ。問題のあれ「業際研取締役、口利きで逮捕され、元鹿野氏秘書と報道された尾崎光郎」はもともと茨城の北沢直吉の秘書で、それで失業したから、鹿野が雇ったんだ。「市長が逮捕された」石岡市は茨城県だから、北沢のルートなんだ。鹿野には関係ない。新聞も「元北沢秘書」と書かなければいけない。鹿野の事件ではない。鹿野は山形です。北沢が茨城県なんだ。だから私は、新聞がちよつと軽すぎたと思う。元代議士秘書というけれど、その時は茨城県だから北沢の名前を出さなければいけない。鹿野はちよつとかわいそうだ。しかも「尾崎は」鹿野が自民党の時の秘書で、鹿野が民主党になった時に秘書は辞めているんです。

伊藤 そういう事情は全然書いていないですね。

松野 鹿野が民主党に行った時は、彼はそこで辞めたんだ。だから彼は、自民党のときの鹿野の秘書であつて、民主党の鹿野の秘書ではないんだ。細かく言うと、ちよつと正確さを欠く。加藤の「事務所代表・佐藤三郎」は現職なんだから。しかも代表だ。あ

れはたしか加藤の弟が昔やっていたんです。それでは能力がないから、彼を代表にしたわけだ。これは本物だ。

伊藤 これは、やはり責任問題になるんでしょうね。

松野 なりますね。それは当然だ。その金は加藤紘一の政治資金の中に入っているんだからね。鹿野には一銭も入っていない。私の秘書のヒライというのは、もう八年前に辞めさせたけれども、彼が何をしているか私は知らない。彼が仮に金儲けしていたって、私のところへ一銭も持ってくるわけではない。私のほうがやることがあつても。鹿野も同じですよ。片一方の加藤の方は、金を集めて、それを加藤の政治活動に使っているんだから。政治活動に使っているのか、個人的に使ったか、それは知らない。それでもこれはちよつと違う。やはり加藤の乱から、加藤事件になつた。去年「二〇〇〇年十一月」は加藤の乱、今年有加藤事件だ。

伊藤 これは致命傷ですか。

松野 致命傷でしょうね。加藤の派の十五名の議員はちよつとね。

伊藤 迷子になりますね。

松野 迷子になるし、資金が大き過ぎますね。

伊藤 迷子になったらどうなるんですか。

松野 みんなよそへ入つて、知らんというでしょう。それは人情は薄いものですよ。政界の人情は紙の如いですよ。またそれなれば務まらない。人情に頼っていたら政治は無理だ。

伊藤 それはそうですね。心中する以外になくなっちゃいますね。

松野 そんなもの「人情」はもう関係ない。おそらくもう加藤にものをいうやつはいないでしょうね。加藤派の十五名がどうするか。

小池 元の宏池会と一緒になりますか。

松野 ならない。

伊藤 なれないんですか。

松野 なれない。

伊藤 そうですか。だって、その派だって人が欲しいでしょう。

松野 ある程度は堀内「光雄」派に行ったりね。堀内派のほうが近いでしょうね。片方の河野「洋平」派とは喧嘩して分かれましてからね。喧嘩別れだ。宏池会、堀内のほうとは喧嘩別れじゃないから、堀内派のほうへは行くでしょう。

伊藤 闇鍋会の記事が出たでしょう。あれは「週刊朝日」に掲載されたぐらいしか喋っていないわけはないでしょう。

松野 もっともっと、あの十倍ぐらい喋っています。あれは公平に出している。公平に、各代議士が出ている。

伊藤 誰がそれをやるんですか。

松野 記事ですか。それは録音しています。一時間半録音してある。録音して、あとで編集するんです。

伊藤 それを削ったりするのは記者ですか。

松野 もちろん記者だ。週刊誌ですから、ニュースはなるべく削る。差し障りのない人間紹介というという意味なんです。人物紹介、人間紹介です。

伊藤 だから、あまり危ないことは出ないでしょう。

松野 ええ、出さない。

伊藤 そのテープは誰が持っているんですか。

松野 「週刊朝日」が持っています。

武田 先生のところには、速記も来ないんですか。

松野 来ない。私も読まないから。ただ喋ったことは知っていますからね。「週刊朝日」が一時間半の録音を全部保存しているはずです。録音しても、記者は速記する暇がないから、録音したものを全部聞いて、あとで原稿を起こすんです。

伊藤 それで、今度はこういうふうにしていいですか、という確認はあるんですか。

松野 いちおう向こうが原稿を持って来て、「これでどうでしょ

う」というから、「この人の発言が少ないから、こっちにしてはどうか。だいたい紙面での発言量は同じぐらいにした方がいいぞ」とかいう。

伊藤 これはちよつと危ないからやめろ、とか。

松野 そうでもなかった。しかし案外みんな興味を持ちまして、何を喋ったんだという。それでみんなが想像して、こんなこと喋ったのかと思う。その答えがここに出てくるなんていうことは、みんなわかる。非常に興味を持った。

ただ若い代議士は驚くべきで、「こんな話しかしないんですか」と聞くんだ。若い代議士は、もつと政治の話をしていると思っ

ているんだ。

伊藤 いや、しているんですよ、実際。

松野 いや、しているけれども（笑い）。しているけれども、若い代議士は「あなた方はこんな話ばかりしているんですか」というから、「そうだよ。政治の話なんてどこだつてするんだ。ここは人間的な話をするんだから、かえつていいんだ」と言うのと、「そんな親しいような話をしてるんですか。私たちはいつも議論ばかりしていると思つていた」と言う。だから、「議論でそういうふうにならばやるのは素人だよ。玄人になったら議論はしないんだ」と言つたんだ（笑い）。

それで、いまの一番小泉の弱いところは経済なんだ。このあいだある席で、小泉にも聞こえたと思つてくれども、「小泉は経済は駄目だ」と言つた。なぜ駄目かという、金に執着がないからだ。金に執着のあるものが経済は上手なんだ。

伊藤 じゃあ三木「武夫」さんは駄目ですか。

松野 駄目。池田勇人、田中角栄。池田は株屋で、田中は建設業で、執着があるから政策を一所懸命やる。その代わり、やはり掴むからね。掴むことも計算に入れないといけない。料理人は、つまみ食い禁止したら料理はできないよ。

伊藤 それはもつともだ。

松野 そうだ。つまんで味見をしないと名料理人にはなれないんだ。ただ、問題は限度だ。お客より余計食つたら駄目だ。本当に試食、味見という程度なら世間も許す。そこが問題だ。田中角栄は味見をしているうちに腹一杯食いやがった(笑い)。味見までは認められる。小泉は味見もしないから、いい料理ができるわけがない。だから、小泉は経済政策が駄目だ、とはつきりおれは言う。駄目な時はどうするのか。吉田さんは経済が駄目だ。この人も味見もしない人だ。もう何もしない。そこで雇ったのが一萬田「尚登」と池田だ。一萬田と池田に全部任せた。

伊藤 でも一萬田さんと池田さんはいぶ違うじゃないですか。

松野 違います。一萬田を先にして、池田はあとからだ。それで一萬田が池田を使った。それで「吉田」本人は議会答弁もほとんどしなかった。経済はというと、「大蔵大臣に答弁させます」といつて、ほとんど本人は答弁しないんです。それでも総理大臣は済むんです。だから、できれば今度も小泉は経済問題は。あなたなら誰を推薦しますかと言われれば、党内では私は麻生太郎だ。部外からなら官僚の榊原「英資・元大蔵省財務官」だろう。これならユダヤ人に負けないだろう(笑い)。

武田 がめつい、ということですね(笑い)。

松野 ユダヤ人に負けないから、おれなら榊原だ。民間人からなら、これもユダヤに負けないトヨタの奥田「碩・会長」だ。奥田か榊原か、党内なら麻生太郎。麻生は実務ではやっていける。経営者だ。青年商工会議所の会長を長年やってた。これは人望がある。この三人だな。この三人なら、私は小泉が任せても間違いないと思う。

竹中「平蔵」というのは評論家で、経済を自分でやっていない。自分でやっていないと無理だ。損をしないんだから。損をしないから痛みがない。実務をやった者は、損得の火傷をしている。奥

田も、トヨタが悪かった時があった。麻生も、いい時も悪い時もあった。炭鉱だつて良かったときもあった。だから火傷をした者は身に付いている。竹中なんかは損をしたことがない。喋っているだけだ。本当の真剣味が無い。自分の学論だけを守ればいいんだからね。だから時世に合わないんだ。

伊藤 そうかな。学論だつて守っていないじゃないですか。

松野 学論もずいぶん変わってしまったっているね。要するにマスコミ受けのする評論を常に行っている。この前の評論と、今度の評論と違うんです。平気だ。堺屋「太一」も違うんだ。そのようではとても駄目だ。せめて学論を曲げないでくれる学者ならいいと思う。「曲げなければ」いつかそれが正しくなる。右へ行ったり左へ行ったりするなら、評論家以下だろうな。私は、何も曲げないでががが言ってくれようがいい。

しかし私たちは大学の時にはずいぶん乱暴な憲法を教わった。コイケという慶應の憲法学者に、「天皇は神聖にして侵すべからず、天皇は神だと思えばこの憲法はわかりやすい」と教わったものだ。旧憲法ですよ。神聖にして侵すべからずというのは、神だと思えというんだから、まるで伊勢神宮の直系が憲法に書いてあるような感じだった。しかし戦争が終わったら、コイケさんの本は誰も買わない。いまは一冊もない。

伊藤 法律というのはそうですよ。憲法が変われば、前のものは全然使えない。

松野 なんとか本を焼いたという通りで、やはり焼かれてしまうんだ。それから最近、自叙伝をよく送ってくる。私の友達のヤナセ自動車の社長の梁瀬「次郎」が、本を発行したといつて送ってきた。それを見ると、全然自分と違うことが書いてあるんだね(笑い)。本というのは便利なものだということがわかる。人を敬わなければいけないなんて「梁瀬氏の自叙伝に書いてあるが」とんでもないことで、それが本人の署名入りの本なんだ。私はその

本を見て、本の認識を間違っていたと思つた。改めないといけない。本というのはこんなに自由自在に書けるものかと思つた。歴史の本でも自叙伝でも、それからオーラルヒストリーでも、もう好きなことをやっている。全部これは誰のことだと思ふ。梁瀬の本を見て、私は本の認識を改めた。自分とは反対のことを書いているんだ。多少自分のことを書いて脚色するのはいいけれども、この男は裏を書いているんだ。一万円札の裏を見せて、これは一万円だといつて出すようなものだ。文章とか本とか、事実とか歴史とか史実というものは難しいものだな。真実を求めようと思ふと間違ふんだ。

伊藤 難しいですよ。それは字面を見ていたら駄目です。でもすぐ見破られるようなものではね(笑い)。

松野 あなたたちに今日お会いするから、おととい本を送つてきるので、それを読んだことを今日は言わなければいかんと思つた。本とはこんなものなのか、と。

伊藤 だけど人間というのは、自分認識と、その人を客観的に見たものが全く違つてることがあるんですね。

松野 ある。それ「梁瀬氏の自叙伝」なんか、もう全部違つてゐる。

伊藤 だから、人間というのはこうしなければならんとかいつて、自分では絶対そうしていかない人がいる。

松野 人間って複雑なものですな(笑い)。本当に人間は複雑怪奇というが、また知恵があるからいけない。知恵がない動物なら、まだわかりやすいんだ。けもの道だから。人間は知恵があるから、それを隠す。

伊藤 騙される。僕ら歴史学者だつて騙されるんですよ。

松野 歴史なんていうのはどが本当かわからんですね。

伊藤 ええ。このあいだもステイネットの「真珠湾の真実」という本が出ましたが、あれに騙された人がいるわけですから。

松野 本当だ。いろいろなことを見てみると、歴史は騙されながらできていくんでしょね。その時代、時代によつて。

伊藤 松野先生だつて、いろいろ人を騙してー。

松野 それは騙すこともある。騙すことのほうが多いでしょうね。しかし、騙していくうちに、いつのまにか自分も騙されるんです。だから、結局真実が出るかもしれない。騙して騙しているうちに、いつのまにか自分が騙されている時に、案外真実がどこかにポロツと出ているんだ。全部が真実でなくても。

伊藤 そうそう。だから、やはり深く読まないで駄目なんです。松野 私一年近くお付き合いしているうちに、随分騙したところもあるけれども、真実のところもだいたいありますから(一同笑い)。

伊藤 それでいいんです。まるつきり嘘でなければ(笑い)。

小池 その梁瀬の本よりはいいかもしれません。

松野 梁瀬の本はひどい。

■ FX問題

伊藤 今日は昭和四十四年から始まります。いちばん最初に「佐藤日記」に出てくるのが五月二十四日ですね。FX問題です。ちよつとその日の記述を読んでください。

武田 永田雅一君が佐藤のところに来て、「FX決定に當つて商社と松野頼三君や岸事務所の中村「長芳」等が問題を起して居たが、児玉警士夫に話しておさめたから安心して下さいとの事」。佐藤は何がなんだかよくわからないけれども、「御礼を言つて別れた」という記述です。

松野 その時に、佐藤宛に児玉から手紙が来ていた。その手紙を私にくれまして、佐藤は「おれにはわからん。こんなの来ている

よ。松野がどうのこうのと書いてあるぞ」と言った。それは抽象的な文句で、松野がFX決定についていろいろ工作をしているようだから注意してくれというような文面だった。佐藤ももちろん読んで、「おい、松野こんなことが来ているぞ、いいのか」と言う。「はい、わかりました」と言った。その中に、岸の事務所の中村というのが出ている。その手紙のことでしよう。手紙は郵便で来たのか、永田が持って来たのか、それはわからない。ですけど、その手紙を私にポツとくれました。

伊藤 この問題は、この前お話になったことですね。

松野 その時には、日商岩井が特約している飛行機と伊藤忠が特約している飛行機の機種が二つあった。どちらを選ぶかによって伊藤忠と日商岩井の商売が決定する。その問題です。これは長いこともめました。私の前からもめていたし、私もどうとう決定する暇がなくて、次の増田「甲子七」さんが決めた。私のときは調整期間でした。そこるところに、このあいだの海原「治」が出てくるわけだ。

伊藤 これはなんで永田さんが出てくるんですか。

松野 わからないんです。永田のことは初めて聞いた。永田と兎玉というのはやはり近かつたんでしょね。佐藤のところへ兎玉が行くよりも、永田のほうが「佐藤に」近かつたんでしょね。永田というのは河野「一郎」に近かつたんだ。

伊藤 そうですね。河野さんのスポンサーですからね。

松野 それで河野が失脚すると、サツと佐藤にくつつくでしょうね。そういう人が政商には多いんです。権力のあるものにはサツとつくけれど、失脚するとサツと退く。そういう政商的な人は誰にも保険をかけておく。

伊藤 一つということはないわけですね。

松野 一つではない。この人は十、この人は三、この人は二というふうに、みんなに分けておくんだ。小針「暦二」さんというの

が政商で、この人も同じです。常に次の権力者になる者にも三ぐらいは保険をかける。また現在の人にもかける。だから五、三、二ぐらい、みんなに保険をかけておく。

伊藤 それでは松野先生にもコンマ幾つぐらいはー。

松野 私もコンマ幾つぐらいはあったんですね。

伊藤 もうちょつと多いですかね(笑い)。永田さんとはー。

松野 永田なんかとは親しくなかった。私はどちらかというところ、三菱系が非常に高く評価してくれた。三菱重工あたりが非常に私を高く評価して、是非将来応援したいと言っていましたね。

伊藤 三菱は戦車をつくったりしていますからね。

松野 いろいろやっていますね。でもさすがにああいう大財閥になると露骨な政治献金はしないんです。

伊藤 上手なんですか。

松野 上手だ。不思議なくらい、ああいう大財閥はさすがに一千万、二千万なんていう献金はしない。常に盆暮れに百万ぐらい。それは危なくない程度に長くお付き合いしたい、政治資金規正法の範囲内ぐらいで長くお付き合いしたいということだ。それが大財閥の長持ちするところだ。新興財閥は一挙にドーンとやる。それで事件になる。三菱は長く私とつき合うけれども、金額は常に政治資金規正法の範囲内ぐらいで、百万以上はもらったことがない。その代わり、長くいつまでもつき合いをするんですね。

伊藤 日商なんかはどうですか。

松野 日商はちょっと特殊でしたね。日商はやはり新興財閥に近かった。

伊藤 でも、やはり松野先生あたりを取り込んでおきたいという企業といえますか。

松野 それは一番、今でも気持ちよくお付き合いできるのは三菱系ですね。さすがに財閥ですね。

伊藤 穏やかにやるわけですね。

松野 穏やかな紳士つき合いだ。金額も、こつちも一千万ぐらい欲しいと思うけれど、百万しか出さない。こつちが言うようなものは、向こうはつき合わない。黙ってありがとうというぐらいいだ。だから、百万以上はないでしょうね。その代わり長年、五年でも十年でも、政治資金規正法範囲内なら危なくないから、お付き合いでできるというやり方です。

伊藤 面白いですね。

松野 それが財閥のいいところだな。政友会・民政党の時代の三井・三菱もそういう感じがありましたね。事件にならない程度にやる。それはお互いの損だから。

伊藤 あれもお互いに、民政党と政友会にそれぞれ保険をかけていたわけでしょう。

松野 かけていたけれども、やはり七・三でしょう。三井には政友会がやる。三菱には民政党でしたね。これはほとんど七・三ぐらいでしょうね。やはり財閥というのは、そこに落ち着きがある。新興財閥はそれを飛び越えようと思うんだ。それで事件が起こる。落ち着いた会社でないと危ないですね。やはり無理をする。体力に合わない商売をしようと思うと、体力に合わない危険な献金をする。それが結局、いつかは事件になるんですね。

伊藤 今度は日立「製作所」なんていうのが出てきましたからね「業際研口利きの事件」。

松野 日立は地元だからでしょうね。地元だから取りたかった。

伊藤 ほかに取られたくなかったんでしよう、言ってみれば。

松野 地元だから、もう少し上手にやればよかったですんじゃないかと思うが。

伊藤 だけれども、ああいうものは内部告発みたいなものがなければ、なかなか出ないでしょう。

松野 内部告発もあるでしょうね。それから一番告発の多いのは、相手方ですよ。

伊藤 相手ですか。

松野 競争相手だ。競争相手が一番わかる。

伊藤 競争相手の会社に自分のスパイを入れておくというのもあり得るんですね。

松野 あるんだ。それから、もう一つは内部告発。内部の勢力争い、局長争いとか、役員争いがあるでしょう。それから相手方との内通、これが多いでしょうね。アメリカも多いらしいですよ。その会社がガラツと変わるといふんだから。

伊藤 アメリカの政権と同じですね。

松野 ガラツと変わる。役員が全部替わると同時に、またひっくり返ることも早い。あの事件もアメリカのSECから出たんですよ。SECの中の争いが、そこに出てきた。日本の日商岩井と伊藤忠の争いと同じように、アメリカでも争いがあるんだ。

伊藤 だからあの時は、日本だけではなくて世界でしょう。アメリカは特に内部告発することが正義だといふんだから、怖ろしい国です。

伊藤 その問題はこの前お話しただきましたので、だいたいのはことはわかりました。

松野 一つの過程として、そういうことがありました。しかし、それは何も結論はなしでした。

■大学臨時措置法案の成立へ

伊藤 それで、今度は「昭和四十四年」六月、七月の『佐藤日記』に大学立法の問題が出てきていますね。

松野 文部大臣が坂田道太でしたね。

伊藤 そうですね。大学立法問題について佐藤さんと松野さんが

重宗に言ってきました。「佐藤が心配しているけれど、これは通すでしょうね」と言ったら、「大丈夫だ、期日までに必ず通すよ」と言った。

武田 それで八月三日に措置法が成立するんですけれども、八月一日には、松野先生と橋本君、これは橋本登美三郎ですか、「松野、橋本君等も協力して重宗、安井両君の決意を促がす」とあります。

松野 登美三郎だ。それで臨時国会だから、会期の延長問題があるものだから、早く期日までに通さないといけない。それで私と橋本トミちゃんの二人で交渉に行った時に、重宗は非常に気持ちよく「大丈夫だ、通すから」と言った。

伊藤 安井は安井誠一郎ですか。

松野 誠一郎です。「誠一郎ではなく安井謙」。議長が早くやらないと、一番困るのは会期があることだ。会期内に通すか通さないかは議長の決心なんだ。議長がどんどん急げば、早く通す。議長がぐずぐずいうと継続審議になる。議会の中では議長の権限は最高です。法案の内容は議長には関係ない。通すか通さないかということは議長なんだ。だから議長は法案の内容には触れてはいけないんだ。ただし、通すか、通さないかは議長のあたりでほとんど決まる。

伊藤 そうですか。

小池 日程の組み方によるんですか。

松野 組み方よりも、議長がやはり自分が早くやれという、議運が早く日程に上げるでしょうね。

伊藤 議長にその発言権はあるんですか。

松野 あります。やはり影響は強いんです。いくら議会でやってきても、議長がうんと言わないと議題に上らない。本会議に上げる権限は議長ですからね。それで、重宗がぐずぐずする。重宗というのは、佐藤を同僚ぐらいに思っている。おれは佐藤の子分じゃ

ない、という意識があるんだ。岸は尊敬するけれど佐藤はおれより後輩だ、という意識があるものだから、佐藤が言っても、なに言っているんだと思う。そういう上下の意識が強いんだ。だから佐藤も心配なんだ。重宗はちよつと変わったやつだから、と思っ

武田 『日記』を見ると、すごく心配していますね。危ない、と思っ

松野 うん。「重宗は」岸は尊敬するけれども、佐藤は自分の弟分だと思っ

武田 それでは、これは「佐藤が」松野先生に頼んだ形ですね。

松野 そうだ。頼まれて行ってくれという。

伊藤 じゃあ、やはり重宗さんは、「松野氏の」お父さんの一。

松野 私のおやじの後継が重宗だ。私のおやじが「参議院の」議長だった。その後継が重宗だ。重宗とはおやじの関係で年中会っていた。

伊藤 それで頼まれるわけですね。

松野 おやじが重宗を議長に推薦したようなものですからね。だから私はそのころから非常に親しい。「大丈夫だよと言っけれど、佐藤が心配しているよ」と言うと、「あいつには心配させておけ」という口調だ。それで岸からも言わせたりして、佐藤が心配している。期日があるものだから、せつかく衆議院を苦勞して通したのに、この国会を通らないとまた継続審議になる。そうしたらどんな事態が起こるか。

伊藤 そうですか。やはりそういうのは重宗さんの自己顕示とい

松野 参議院議長の権威を示したいんだ。「佐藤はそれを」示されたら困るからな。しかし参議院議長の権威というものを守って

いる。総理がいくら言っても、おれはお前の子分じゃない、参議院はおれの権限だという。それはどこでも縄張り争いがありますからね。

武田 そのころは参議院は元気ですよ。

松野 そこが人脈というのか、なかなか理論にならないものがあるわけだ。人間社会だからね。

伊藤 どうせ、これは通すつもりなんでしょうけれども。

松野 期日が心配なんだ。期日は議長が決めるんだから。

伊藤 通すつもりなんでしょうけれども、やはり佐藤さんを心配させてから、やるわけですね。

松野 佐藤が頼むと、おれはお前の子分じゃないという。国会は国権の最高機関だと憲法に書いてある。

伊藤 あれもちよつと変な条文ですがね。

松野 内閣はその下だというんだ。

伊藤 やはり佐藤さんはそういう人脈を知っていて、松野さんに頼んだんですね。

松野 それから重宗の性格を知っているから、怖いんだ。性格も全部知っていますからね。

武田 あと大学立法問題で活躍しているのが田中幹事長ですね。

松野 田中角栄ですね。田中角栄は大学関係は一所懸命でした。

どちらかというところ、もつと強いほうだった。各国立大学の学長を文部大臣の任免にしろというほうだ。

伊藤 でも、とにかく通すということについては一所懸命やっていたんですね。

松野 一所懸命だった。

伊藤 だけれども、この大学立法でいっぺんに大学紛争が終わりですからね。

小池 終わっちゃいましたね。

松野 これで終わりましたね。だからこれは大事な法案だった。

内容は大したことがないけれども、これを通すか通さないかで大変な影響がある。それでまた学園紛争が起こり得る。

伊藤 とにかく、あれで大学が廃校になったら大変だと思つて、みんな必死だったからね。

松野 教育の中心になるような文部大臣はいませんよ。坂田が言うように、それはいいない。文部大臣が任命権をもらったって、任命権者が取捨できない。そんな能力のある文部大臣はいない。それは各学校自身に任せるしかないんだ。

■ 日米安保の自動延長と川島正次郎

伊藤 その次は「昭和四十四年」八月十四日に、佐藤さんが渡米・日米安保条約等、治安上の対策を松野らと話し合うという記述ですが、この「松野ら」は誰ですか。

武田 田中伊三次さん。これは日米安保が七〇年に十年の任期が切れて、ちょうど七〇年問題だと言われて学生運動、革新陣営がずいぶんやったんですが、その問題を佐藤が松野先生に頼んでいるという話です。それで、田中伊三次さんと川島正次郎ですね。

松野 田中伊三次はたしか委員長をしていたと思う。安保問題かになにかの委員長をしていた。それが田中伊三次だ。京都出身で弁護士になった男で、私よりも先輩ですよ。苦学した人だ。

小池 いつも蝶ネクタイを締めていましたね。

松野 蝶ネクタイで、若いころは大道香具師までしていた。「皆さま、お集まりください、お集まりください。この本を買って頭が良くなる。ここにハンケチがある。このハンケチから、そのうち蛇を出してみせる。さあ」といつて本を売っていた。ハンケチから蛇が出ないうちにもう終わっちゃうんだ。へびが出るというから、みんないつ出るか、いつ出るかと思う。そのうち「頭が良

くなる本」というのをみんなに売る。売れたら、もうそれで帰っちゃう。蛇が出ないはまだ。それぐらい堂々として弁舌さわやかなんだ。弁舌さわやかで、社交も話題も、それは見事なものだ。本当に大道香具師そのものだ。面白い男で、私は変わり種が好きだったものだから、田中伊三次とは特に親しかった。

何回も受けて弁護士試験を通ったんですよ。偉いものだ。苦学して弁護士試験を通った。だから、その安保問題の時になかなかよくまとめた。与党も野党も、上手に本日も嘘も取り混ぜてうまくまとめる男でした。

伊藤 この「安保条約の」自動延長は非常にうまくいったわけですよ。

松野 田中伊三次がその弁舌で、野党にも蛇が出る、蛇が出るといつて、通しちゃったんだ。通ったあとでは蛇が出なかつたんだ(笑い)。蛇が出る、蛇が出るといつて、出ないまま通しちゃうんだ。それはいまだに蛇が出ない。

伊藤 これは佐藤さんは渡米する計画ですか。

松野 そうです。

武田 そうですね。ニクソンとの首脳会談です。

松野 だから、「安保条約の」継続をやつていかないと、渡米しにくいわけです。

伊藤 治安上の対策というのは、また出かける時に、反対運動でバーツとやられるからですね。

松野 それが通らないと、やはり反対運動が激しくなるでしょうね。

武田 『佐藤日記』をみると、その日、同じ記述のところに、東京の都知事選の候補の選定の話があつて、川島正次郎さんは最初のころは東京都知事の候補にも挙げられていたんですね。

伊藤 川島さん自身「が都知事選出馬候補」ですね。

武田 川島さん自身がです。そういう話をしていて、賀屋興宣さ

んなんか最初も拳がつている。そういう文脈でなにかその話が終つて、そして松野先生と渡米の話をしたりする、というふうに変つていく感じですね。

松野 私も、もちろんやる気はないしね。

伊藤 場所は書いてありますか。

小池 場所は官邸です。

松野 田中伊三次は官邸に行つたと思う。田中伊三次は佐藤派ではなかつた。あれは石井「光次郎」派でしたね。

伊藤 でも、この時点では石井派はほとんど消滅だつたと思ひます。

松野 無派閥でしょうね。サカトミヒサノブとか。

伊藤 田中伊三次さんはやはり力があつたんですか。

松野 自力でやる男でしたね。金集めもほどほどでした。そんな大金を集めるわけではない。でも、そういう意味では京都に支持者がいました。都から出てくる。それは蛇ぐらい出すんだから。

武田 川島さんも、ずいぶん人気が出てきますね。

伊藤 川島さんは、かなり佐藤さんを頼りにしているんじゃないですか。

松野 「川島は」岸さんと非常に親しかった。戦前派ですからね。

川島は鳩山派だつたから、鳩山の時の幹事長としてね。そして結局岸さんの時も幹事長をしましたかね。

小池 あの「鳩山内閣の」時は岸さんが幹事長ですね。岸の時に川島さんが幹事長ですね。

松野 相当豊かな男で、資金面では安定していましたね。

伊藤 京成とか。

松野 やはり、スポンサーがもう決まっているから。慌ててスポンサーを拾い歩く者は目立つけれども、川島はほとんどスポンサーが決まっていたから、動かなかつたです。

伊藤 千葉の京成電鉄とか、あの辺ですね。

松野 たしか専修大学も何かありましたね。

伊藤 それもありましたね。

松野 専修大学の最高顧問か何かしていた。だから、専修大学をほうぼうにつくって歩いていましたよ。熊本にも専修大学の高校をつくった。川島さんがつくったんです。それで年中熊本に来るんだ。何しに来たんだというと、専修大学のことなんだ。

伊藤 先生よりずいぶん先輩でしょう。

松野 上です。私の父なんかと一緒にです。

伊藤 「川島さんの」名前が出てくるときに、「松野先生の」お父さんの名前と一緒に出てきますね。

松野 私の父の仲間だ。私の父の後輩ぐらいでしょうね。それで熊本へ来て、芸者が好きですね。とうとう熊本の芸者を東京へ連れて行っちゃった。あれと思ったが、専修大学ができたころだ。芸者も東京へ行った（笑い）。どっちを作りに来たんですか、といった。

伊藤 やはり、英雄色を好むほうですか。

松野 そうですね。

武田 奥さんを早く亡くされて、独身になったんですね。

松野 亡くなったんです。あのころは英雄色を好むといっても、二号さんがいることは当たり前だったんだ。奥さんのほかに二号さんがおることが普通なんだ。大将というのは、常に替え馬を一頭持って歩くものなんだ。馬が倒れたとき、次の替え馬に乗らなると戦死する。だから、常に替え馬を持つことが常識だった。というのがいまの二号なんだ。ことに男子、戸主ということになると、どうしても男を生まないといけない。だから、女の種の時は、男を二号に生ませることは当たり前でしょう。そういう一つの伝統があった。戦前派の人は当たり前なんだ。二号を持っているからといって不倫じゃないんだ。当たり前なんだ。

武田 子孫を残すためには。

松野 そう。不倫とは違うんだ。いまのやつは二号まで持てないから不倫をするんだ。片一方は不倫じゃないんだ。自家用として二号を持つんだ。

武田 僕はもう男の子がいるから、二号はいらないです（笑い）。

小池 それは、何が起るかわからないから。

松野 そういうことで、川島というのは、おやじの関係で親しく何でも馳走になります。悠々たる人ですね。あまり演説は好きじゃなかった。

伊藤 川島派というのがありましたね。

松野 ありました。この人は演説する人じゃないんだ。演説を壇上でするのはあまり好きじゃない。要するに根回しをする人ですね。

小池 川島さんは岸派から分かれるんですよ。福田「越夫」派にはならなかった。

松野 「川島派には」年寄りが多かったんですね。

伊藤 だいたい派閥の分かれというのはそうなんですね。

松野 そうなんです。個人の因縁が強いんですね。

伊藤 だから後継者が若い人だったら、それより年上の人たちがだいたい別派をつくるんですね。

松野 別のものをつくる。若い者の下に付くものか、あいつの下に付くものかという感じでしょうね。

伊藤 「川島の場合は」福田の下に付くものか、ということになるんでしょう。

松野 重宗みたいなのは、佐藤の下に付くものかと思う。岸の下にならつくけれども、という権威を持っているわけだ。我が強いというのか。

伊藤 もつとよくいえばプライドですね。

松野 英語でいえばプライドですかね。

武田 この時期の『佐藤日記』を見ると、川島さんはよく田中と

一緒に出てくる。でも田中に近いのかというと、決してそうでもない。反福田であればいいのかもしれない。わからないと思うんですね。

松野 この人はどれかわからなかった。この人は福田だか田中だかわからない。いつも飄々としていた。一人で小唄でもつぶやいていてね。

伊藤 この人もどこかに巢があったわけでしょう。

松野 ああ、巢があった。巢は二つぐらいあったでしょう。巢のないツバメはいないんだから（笑い）。そんなことを思い出しませぬ。

■ 軽井沢と別荘

伊藤 次の「車中談」というのはなんだろう。

武田 これはわからない記述ですが、「昭和四十四年八月二十五日」「六時五分発軽井沢で帰京、東京駅。車内で勉強の予定の処、松野頼三君につめかけられ、車内では読む事が出来ずもち帰る」。だから、このころ総選挙もありますし、ニクソンとの首脳会談もあるし、何かいろいろな話を持って行ったんですね。

松野 何か政策の話を書いた。

伊藤 この車中というのは、軽井沢からの車中ですか。

松野 軽井沢からの車中です。たしか、汽車の中で佐藤をつかまえて、私の書いた政策の原稿を渡したように思う。

伊藤 そうしたら、軽井沢まで行ったわけですか。

松野 私のうちも軽井沢だったから。だから、ちょうどその汽車に乗っていた。私も軽井沢に行っていた。

伊藤 別荘ですか。

松野 別荘です。軽井沢にはあのころ。

伊藤 それはお父さんの時代から。

松野 おやじの時代からの別荘がある。いまでもまだあります。

伊藤 軽井沢は、夏みんなあそこに行くじゃないですか。

松野 政友会が百人ぐらいで離山（はなれやま）の下に山ひとつ買った。犬養「毅」さんから、もういろいろな代議士で、そこを一円で分譲した。

伊藤 では、近所隣、みんなそういう系統なんですね。

松野 政友会村だ。

伊藤 それは知らなかった。

松野 それが離山の下です。いまでもまだ。もちろんいまは残っている人は少なくなりました。そこを一円で私のおやじも五百坪買ったんだ。

武田 佐藤さんの別荘も。

松野 佐藤さんの別荘は、もつと上で町違いです。あれは三笠です。私の別荘の町は離山。

伊藤 鳩山「一郎」さんは。

松野 鳩山さんは、もう一番いいところだ。雲場の池で水源地だ。あそこは発祥の地ですね。それと細川のところ、鳩山、いまでいうと鹿島、このへんがやはり水のあるところで、水のある別荘地のほうがいい。水のないところの別荘地は二級で、水のある別荘地は一級です。やはり人間は水がなければ住めない。世界の歴史では、みんな川の横に都市ができるでしょう。だから、別荘の中に水があるということは最高なんだ。

伊藤 中曾根「康弘」さんの別荘は。

松野 中曾根さんの別荘の横に小さい川があります。佐藤のところにもあります。小さい川が流れている。やはり川に沿っている別荘はいいところでしょう。離山には、あまり川はなかった。坪一円でしたからね。坪一円で二万坪か三万坪、みんなで一円で分譲して、政友会村をつくった。その残骸が残っている。

伊藤 ホークタイガーみたいなものだな。夏になったらそこで政友会のいろいろな。

松野 そういうことです。そこに行かないとまた具合が悪いものだから、みんな行きました。あのころはそういうことが一つの。

伊藤 そういうことを伺っておかないと、なんで車中なのかかわからないですね。

松野 政治家は昔は豊かだったけれど、いまはね。

武田 そうですね。でも、いまの政治家にもだいたい別荘はあるんですか。

松野 少ないでしょうね。若い人が多いから。若手の勉強家は、やはり金ヘンに向いていないかもしれない。

〈松野氏に電話、そのあいだに壁に掛かっている最新の闇鍋会の写真を発見〉

伊藤 あの「壁に掛かっている」写真は、このあいだの闇鍋会ですか。あれはどういう席順で並んでいるんですか。

松野 あの席順は、私が真ん中で威張っている（笑い）。

伊藤 それはわかりますけれども。

松野 私が威張っているもんだから、みんなそのへんに並んで座るんですよ。

小池 党内席次みたいな形ですね。自民党と民主党でね。

松野 そうですね。まあ、私は一番早く行って、小泉が来たから、「君、こっちへ座れよ」といって隣に据えて、それから麻生が来たからその隣に座って、それから鳩山が来たから、「じゃあ君は

「小泉と」向き合って座れ」といって勝手に決めただけだね。

小池 でも、闇鍋会があると、当然それに伴ってやつかみみたいなものもあるんじゃないんですか。なんでおれは入らないんだ。入れてくれと。

松野 あります。でももう五回やっていると、途中で入れるわけにいかない。どうも最初に決めたものだから。

武田 そもそもはどういうきっかけで始められたんですか。

松野 やはり将来、ものになりそうだなと思って、質のいいのを選んだわけだ。

武田 見事に皆さん活躍されていますね。

松野 見事に伸びたでしょう。

伊藤 五年前だったら、小泉さんというのは。

松野 ただの人だ。まだ厚生大臣になってないんだから。橋本内閣の前だから、本当に誰も注目していない。

伊藤 ずっと話が進んでいって、最後のほうにいったら、闇鍋会の話も記録に残しましょう。

松野 これは私は本当によく人間を選んだと思うね。このあいだの話はどこにも出ていないが、「来年生きていたら、またやるからね。また小泉君のあとは、この中からどうせ総理が出るんだから、そうしたらまた続けようかね」という話をしているんだ。どうせ小泉君のあとは、この中から総理が出るよと言った。

伊藤 鳩山は小泉にエールを送っているといって、民主党の中ではいろいろうるさいことを言っているでしょう。

武田 松野先生のこの会がきっかけで。

松野 また、小泉も鳩山をかわいがるんです。目の前で。小泉が「党内でゴタゴタしているけど、鳩山君、きみ大丈夫か」「いや、大丈夫です」「そんな党内でガタガタしたら駄目だぞ。力はいつでも貸すから」なんて言っている。録音に入っているんです（笑い）。

伊藤 それをやはり出したらまずい（笑い）。

松野 本当に録音に入っている。小泉が鳩山を弟みたいに、本気で言っているんだ。それは出せないんだけれども、そういうこと

があそこに入っているわけです。だからどうしても、さてとなる

とそこにボロツと人情がわくのは当たり前だ。

伊藤 それはそうですね。人情だけではないでしょう。

松野 政治の中で、そういうものは悪いことではないんです。

伊藤 人情の問題だけではないですね。

松野 「いつでも一緒になるなら、なつてもいいよ」なんて言う。鳩山が「一緒になるうか。でも自民党じゃ困るな」とか言うんだ。そんな話をしている。

伊藤 民自党ですね（笑い）。

松野 両方で新党をつくれればいいじゃないか。だって話は出ているんですから。とても危なくて出せない。それは録音じゃなしに、とっさに出るものだからね。人間としてとっさに出るものだ。「君と二人で手を握ってやればいいし、何かそこで政治ができるなら」とか、フツと言っちゃまうんだ。

小池 でも本音なんでしょうね（笑い）。

松野 そういうことがこの閻鍋会の特徴なんだ。

伊藤 面白いですね。

松野 それで麻生には、「麻生君、意見があるけれども、あまり先に言うなよ。どうせ君とおれは意見が違っていることはわかる。経済政策で。世間に出る。ほどほどにしておけよ」なんていう。そうすると麻生が、「そういつても、このままあなたのやっていうことでは危なくてしようがない」「大丈夫だからついてこいよ」なんていつている。そういう話が出ています。そういう会合だもんだから。とても発表できない。外で発表してもいいものだけが発表してあるわけだ。できないところだけは発表していないわけだ。だから本当かというと、あれが真の政治じゃないかと思う。他人はよく怒るけれどもね。

伊藤 閻鍋会がああいうメンツであるということだけで、もう十分にアピールしているでしょう。

松野 この会は、派閥も政党も地位も抜き会だからね。これはもう本当の裸の代議士、裸の政治家としての話だよ、と先に言明してあるから。

伊藤 民主党の左派系の人はいいいでしょ。

小池 全員、元自民党ですからね。

松野 自民党しか入れていないんだ。元自民党なんだ。それで入れた。どっちも知っているというのはそれしかないんですよ。

伊藤 旧社会党の人で知り合いで親しい人はいいですか。

松野 やっぱいいですね。民社党にはいましたね。春日一幸とか、佐々木良作。特に佐々木良作は同年で親しかった。確か満鉄かなにかに行っていた男です。これは特に親しかった。春日一幸も親しかった。

伊藤 春日節ですね。

武田 「理屈はあとから貨車で来る」という（笑い）。

松野 今度の小泉のテロ対策法なんてそうですよ。あれは憲法論議を先にやっていたら駄目だ。憲法論議は、あとから説明して解釈すればいい、ということをやったね。あとで憲法論議は一所懸命法制局がくつつけただけだ。やはりああしなければ政治は進まないでしょうね。法律論をやっていたら無理です。理屈はあとから来る。

小池 憲法ができた時にテロの話はなかったことですから（笑い）。

松野 あんなテロはなかった。安保条約にも「テロの想定は」ない。だから、新しい時代、時代で、小泉が国民の人気があるからできたんです。「支持率が」四〇%や三〇%ではできない。

伊藤 いままでの歴史で考えても、四〇%でも五〇%でも大変な人気ですよ。それが八〇%とか七〇%とかといっているでしょう。

小池 きのうでもNHKで七九%ですからね。反対が一%しかないんですから。

松野 どんどん減っているね。

小池 でも、自民党は三三%なんです。

松野 それは抵抗勢力がね。やはり時代がもう少し。一度飯食

おうといつて、昔「直人」を呼び出して、君はどんなことを考えているんだという話をしたら、まあいろいろなことを言っていた。そこで一番大きな違いは、小泉内閣では解散できないので、次の内閣が解散になるだろう。小泉はそれで引き降ろされるだろう。それから、アメリカは手を振り上げたけれど、降ろしようがなくなつて困るだろう。日本もそれにくつついていくだろう。昔はそんな感じてした。そう思わんがね。このテロは三年、四年続くよ。このままぐずぐず続くだろう。小泉は解散しなければ辞めないよ。解散は必ずするよと言った。この二点が違うものだから、政治観が違う。よくよくみたら、あれは加藤紘一と組んでいたんだな。それで加藤紘一は、小泉「森の間違い」が辞めて自分になる、そのあとで解散をするんだと思つた。その加藤のラインが昔なんだ。伊藤 それはもうダメじゃありませんか。

松野 鳩山のライン、私のラインが鳩山なんだ。加藤と組んでいては駄目だ。

伊藤 加藤は「闇鍋会のメンバーには」選ばなかったんですね。松野 選ばない。加藤は初めからこのメンバーにいない。この次にいっぺん入れようとしたのは塚原俊平です。これは入れようかと思つた。

伊藤 塚原というのは、茨城じゃなかったですか。

松野 いい「政治家」ですよ。死にましたけれども。塚原俊平をここに入れていいかなと思つた。将来魅力があるから。しかし若死にでした。これももつたない男で、議論も強かつた。落語研究会だったから、ユーモアもあるし、人に好かれるしね。

伊藤 人に好かれるというのは大事なことですね。

松野 好かれるやつほど短命なんだ。

伊藤 それはまずいですね。

松野 惜しい人間はみんな早死にするんだ。この野郎、と思うのが長生きするんだ。

伊藤 いや、松野先生もずいぶん長生きですね。松野 人を食つて、嘘ばかり言っているから（笑い）。もうひとつは、きのうテレビで西陣の名工というのをやっていました。百歳。いま最後の織物をしている。一番長生きの秘訣は何ですかと言われて、若い女ですと言っていた（笑い）。

私も同感なのは、二十一日間断食するという修行僧が私のところにきて、私も二回やりましたという。おそらく二回二十一日断食した修行僧は少ないと思う。「私は二十一日を二回やりました。はじめはおしっこ以外、空腹が苦しい。そのうちに真ん中ぐらいになると、頭が朦朧とする。それからそれを越すと、最後に出てくる煩惱は女だ、性だ」という。生きようというのと女とが、交錯して頭の中でぐるぐる回る、それが一番きつという。それを終わると、あとは、楽園を蝶々が飛んでいる。あとの二日間も蝶々が飛んでいるようで気持ちがいい。その時は、もう死の一手前まできているんだ。だから死の一番最後は性だ。女の問題です。それにいままでのたくさん女の女がたくさん出てくる（武田死にきれないんじゃないですか）。一人が笑つたり、泣かせたりして、自分の頭の中を走る。それが最後で、それを終わると、あとは蝶々が飛んでいるみたいだという。だから最後の煩惱は性だ。もう自分の知っている女も知らない女も出てくる。

そういうと、成田山の由来書の中に最後に悪女が出てきて、「もう修行はやめなさい。もうそんなことはせずに、私と一緒に遊びましょう」というという話が出てくる。それと同じことなんだ。修行僧が言つたのは、自分の知っている女が知らない女がわからないけれども、最後には女がぐるぐる頭の中を回っているということだ。それこそ煩惱というものだ。そうすると、百歳の人も、成田山もその修行僧も同じことを言う。最後に死ぬ一歩前は女が出てくる。あなた方もたくさん出てくるのできつと困るよ。それが煩惱だ。最近ではみんな煩惱が多いからね。

伊藤 やはりそういう関心がなくなったら終わりですね。

松野 それからいまの人の違いだが、昔は女性の議員が少なかった。だから、どんなに代議士の控え室で猥談の話をしているも、みんな笑って過ごせた。いまはできないだろうと思う。女性の議員がいるから、そんなことをいえばすぐセクハラだと言われる。なにか世間に婦人問題で訴えられそうだね。それで私は、かえって和やかさがなくなっているんじゃないかと思う。

伊藤 みんな萎縮していますね。

松野 萎縮しているんです。明るい話題が出ない。

■第三十二回総選挙・第三次佐藤内閣成立へ

伊藤 さて、いよいよ選挙です。

武田 これは「昭和四十四年」十月十七日です。「松野頼三君がやって来て、解散はいつかと遠廻しにきいて来た。勿論話してくる「ぬ」と知りながらの質問故、随分テレ臭く聞いて居た。仲間に頼まれての事ならん」ということなんです。佐藤さんも理解なさっているから、非常に面白い記述だと思います。

松野 解散の話はするわけがないけれども、その本心を聞かなくても、冗談でも聞きたかった。「しないよ」という。本当のことはわからないんです。佐藤でもわからない。わかったらいいけれども、「おい、佐藤が解散するんじゃないか。聞いて来いよ」というわれわれの悪童たちの話があるから、それを伝えたただけ。そんなことをよく記録していますね。

伊藤 しかし情景の描写がうまいじゃないですか。

松野 確かにそういうことだ。

伊藤 それで、結局その年の十二月二十七日に総選挙があるんですね。

武田 それで三百議席を取るんですね。原敬以来の大勝です。

松野 大勝利だ。

伊藤 七〇年安保の大騒ぎの中ですからね。それで第三次佐藤内閣ができて、それで、松野さんは、塚田「徹」さんの落選を報告に来たということですか。

武田 この記述でもうひとつあるのは、この一月十七日の記述なんですけれども、「松野頼三君が組閣にはづれてから初めてやって来る。塚田徹君も落選。今度は縁儀「起」の悪い年にならねばい、がと思ふ」という記述なんです。だから、松野の先生は何か閣僚候補に挙がっていたのかなあ。

松野 いたんですよ（笑い）。

伊藤 第三次「佐藤」内閣の時ですか。

松野 うん、建設大臣に。

伊藤 そうですか。

松野 それで坪川「信三」がなった「坪川は二次佐藤二次改造（昭和四十三年十一月）の時、第三次は根本龍太郎」。

伊藤 建設大臣にならなくてよかったですね。危ない。

松野 それも面白いことなんだ。保利茂と坪川と塚原「俊郎」と私の四人で、組閣の二日前に会った。保利茂はたしか官房長官だったかもしれない。保利茂は坪川信三をしたいわけだ。長い間、民主クラブの時から一緒にいた。あれは犬養健と途中から入ってきたんだ。民主クラブから一緒にいる坪川信三は、当選回数は私と同じくらいだ。それを一度大臣にしたいわけだ。それで、保利は佐藤と一所懸命交渉したけれども、佐藤がどうしても聞かないで、だいたいこんな名簿だということがわかったわけだ。もう二日前だ。

そうしたところが、保利茂が私に「今日、頼ちゃん、ちよつと飯食おうや、昼」といって、坪川と私と塚原と四人で飯を食った。その時に保利が妙なことを言うんだ。「もうあさって組閣だなあ。」

どうだい、頼ちゃん。佐藤に電話してくれんか。坪川がかわいそうだから」「おれが電話したってしょうがない。保利さん、あなた行ってこいよ」「おれじゃ駄目だ。あなたが電話してくれ」という。

それで私が「坪川がかわいそうだから入閣させてくれ」と佐藤に電話する。「おい、松野、本気でいうのか」「うん、本気だよ。坪川がかわいそうだから」。そこで松野と坪川を入れ替えた。だから、私が電話しなければ駄目なんだ。それを保利は知っていた。小池 先生は知らなかったんですか。

松野 私はうすうす知っていたけれども、確定とは思っていない。どこかに入ることになっていた。だから、私が入っていたところを、私が辞退して坪川になった、ということになった。だから私が電話しなければ駄目なんだ。それを保利は先に読んでいたわけだ。そのとき佐藤が、「おい、松野それで本当にいいのか」と言った。まさかいまさら、それは駄目だとは言えない。その時私が入っていたことがわかったんだ。それは建設大臣だった。

だから、私に電話しろと保利が言うわけだ。自分じゃ駄目だということだ。私本人が、その時入っていたことを悟る。「お前それでいいのか」と言うから、言った手前、いやとは言えないね。「いいですよ」という。そこで入れ替えた。それでそのことを書いた。

武田 「縁起の悪い年にならねば」というのはなかなか含蓄ある言葉ですね。

伊藤 その塚田徹が落選したということは、なんですか。

松野 塚田徹は、私の娘婿です。

伊藤 そうですか。それで落選を報告に行ったわけですか。その塚田さんはどこですか。

松野 新潟です。塚田十一郎という知事がいて、その息子です。私の娘と結婚した。

伊藤 あとで当選しましたか。

松野 初め三回当選したけれども、その後当選しませんでした。その仲人が佐藤栄作です。

伊藤 それが、この前おっしゃったことですね。

松野 そう。それで報告に行ったわけですね。それで選挙調査会長になる。

武田 「昭和四十五年五月十六日」「松野頼三君から選挙対策委員会の決定の模様を連絡に来る」。

松野 それで選挙調査会長になって、ずっと私はいたわけです。その決定は大したことはないんです。ただ、政治情勢をよく話をしにいくだけです。その選挙調査会長を私は四、五年やっていたはずだ。

武田 これは選挙対策委員会ですか。

松野 選挙対策委員会か。

伊藤 ここはこれと「選挙対策委員会と選挙調査会」同じかな。

武田 たぶん次の年の参院選の選挙対策を一年前からやっていたんじゃないですか。

松野 そうかもしれないですね。

伊藤 選挙対策委員会というのは、候補者の選定なんかまで関わりますか。

松野 そういうことです。選定というとおかしいが、だいたい数を見て、要求があると、この人は強い、この人は弱いとかやる。

伊藤 でも、だいたい各県連がー。

松野 県連が推薦してきますけれども。

武田 記述も、「東京、神奈川、大阪の三都府県は増加、之に対し栃木、群馬、岡山は減と云ふので、減は困難、増加のみきめるべきか、今日の処は発表はさし控へる」。

伊藤 後任問題ですね。

■ 渡米・ロックフェラーと会談

武田 そのあとに松野先生が出てくるのは、外遊問題です。ロックフェラーにお会いになつてゐる。そのお話の一番最初が「昭和四十五年」七月三十日。「久しぶり松野頼三君が来て外遊したいと云ふ。別に問題はない」。実質的にまあよい、という話でしよう。

次に八月十四日に渡米の挨拶に来て、「種々話の進め方やその他の注意事項を話す」。それでアメリカに行かれて、九月二日に「松野頼三君も帰へつてきたが、ロックフェラーに御馳走になつたと云ふだけ。何れ更めて会はねばなるまい」という記述があるんです。

九月二十八日になると、松野先生がもう一回来て、「松野頼三君の米からの帰国報告。シャピロUPIモスクワ支局長と約二時間対談、なかなか面白い」。この記述もちよつとわからないところがあつて、このシャピロという方が同席されていたのか。

松野 いや、同席しません。

武田 じゃあ、松野先生が会つたんでしようか。

伊藤 この渡米の話は、この前伺つていないと思ひますね。

松野 渡米は別にどうということなく久しぶりだった。ロックフェラーが会うというから会いに行つた。

伊藤 ロックフェラーとはどういう関係ですか。

松野 ロックフェラーは私は全然知らなかつた。誰かの斡旋で、ロックフェラーにひとつ会えという。じゃあ、行こうかといつて行つただけです。別にただ、飯を食つてさかんに日本の安全保障を言つていました。「核反対というのはおかしいじゃないか。アメリカ核の傘をかぶつていながら、アメリカの核基地を置かないというのはどういうわけだ。アンブレラには柄があるじゃないか。

柄は日本で立てなければ傘にならないじゃないか。どうして核基地に反対するか。核は容認しておいて基地を反対するのはおかしい。アメリカの核に入つてゐるだろう」「入つてゐる」「じゃあ傘を立てるのは当たり前じゃないか」という。核基地反対の佐藤政治に対する批判だった。核持ち込み反対と言つていたから。「そのくせアメリカの核には入りたくないというのは理論の矛盾だ。アメリカ人はわからん。核はいらぬというのならいい。アメリカの傘には入る。しかし基地は反対。それはおかしいじゃないか」ということをさかんに言つていた。

伊藤 何か懸案があつて行つたというわけではないんですね。

松野 それはありません。

伊藤 遊びに行つたわけでもないでしょう。

松野 そうですね。その時は誰と一緒に行つたかな。四、五人で行きましたかね。

伊藤 お一人ではなくて。

松野 ええ。なにかほかのグループが一緒に来たんだ。

武田 佐藤さんのほうでも、いろいろな話の進め方やその他注意事項を告げるということです。

松野 そんな話はどういうふうに言えればいいですか、ということ。核反対は、核基地反対だけ言つてこいという。注意事項はそれだけ。非核三原則。あれも思ひつきで考えたんだ。要するに看板として出したんですね。それがいつまでも非核三原則として生きちゃつた。佐藤内閣では非核三原則だけれど、次のものが踏襲するかどうかは、その時期、その時期でいいのであつて、かつこいことをやつたものだから、福田や中曽根まで、必ず瀬踏みをさせられた。三原則を守るかと。

伊藤 なかなか守らないとは言いいくいでしょね。

松野 言いいくいでしょね。あれは佐藤は自分の内閣だけ、と言つてゐるんです。「私の内閣ではこの政策を守ります」と言つ

たのに、佐藤も将来のことを考えて遠慮していた。あの時、明らかに私の代では核三原則を守りますと言ったんだ。

伊藤 それは駄目なんですよ、だいたい。これは前例にはいたしませんという話をしたって、前例になるんですからね。

松野 ああいう政策はそういうふうになっているんです。

武田 このころ問題になっている日中貿易なんかも、吉田書簡はまさに前例にしませんといったのに。

松野 いつまでもそれを持ち出すからね。情勢が変わっていることは抜きにしてね。

伊藤 この時はもっぱら社会党はワーワーとやっているわけですよ。

武田 この時期よくアメリカに行っているのが若泉敬さん。だから、松野先生もそういう関連のことです。

松野 いや、そんな大したことはなかったです。若泉敬は年中行っていましたね。あのころ「佐藤は」若泉敬をよく使っていた。

伊藤 先生と若泉さんは接点がありましたか。

松野 あまりない。私はあまりあか抜けした人とはつき合いがなくて、泥臭いほうばかりだった。

武田 若泉さんはわりと右翼っぽいというか、国士っぽい人ですね。

伊藤 あれは国士みたいな感じでしょう。

松野 京都の何とかいう大学ですね。

小池 京都産業大学の教授ですね。

松野 もうひとりおったでしょう、京都に。もう亡くなったかな。

伊藤 高坂さんですか。

松野 高坂だ。高坂とは何回か討論しましたね。

武田 高坂正顕ですか。

松野 政治学者の高坂正堯ではないですか。

武田 正堯のほうだ。よく討論しました。よくテレビにも出て

ましたね。

伊藤 話は合うでしょう、この人は。

松野 合う。だって右のほうだから。

伊藤 この年はそんなところですね。

松野 いま、しかし世相が左だから、右の学者のほうが受けま

よ。世相と反対のことを言う方が受ける。

伊藤 いや、そうじゃなくて、大学とか学会とか、そういう狭い

社会にいきますと、とにかく圧倒的に左派が優位ですからね。

武田 いま、元気になっているぐらいじゃないですか。

松野 左派が、ですか。そうですか。われわれにはわからないな。

小池 政界では逼塞しているし、小さくなっているけれども、学

問の世界では、けっこう元気ですね。

伊藤 われら少数派なんです。

小池 絶対的少数派ですね。

松野 じゃあ、世間と違っているのが学会だな。

■統計・数学を学ぶ

伊藤 とんでもない学会だ。それで、次の昭和四十六年「一月二十八日」ですけれども、これは佐藤さんに褒められている話です。武田 これは予算委員会の審議が始まって、「松野頼三君が三時間に互り質問。主として答弁に立つ。内政では農政、米の問題や物価と野菜の問題、中国問題、主として中共の問題、沖縄返還交渉の問題から公害の問題等、当面する各種問題ととり組む。なかなかよく勉強しておる様だからほめておいた」。

松野 これは佐藤に褒められるんだから、大した質問はしていないということだ。答弁者に褒められるんだから。答弁者に褒められるようでは、大した質問をしていないという証拠だな(笑い)。

伊藤 だけど佐藤さんは、ほとんど褒めていないですよ。かなり質問に対しては厳しいですよ。だいたい駄目、つまらん質問だ、という。

小池 『日記』であまり褒めているところはないですね。

伊藤 『日記』で褒めているのは、松野さんと民社の竹本「孫二」さんです。

武田 質問で褒められているのは、竹本さんと、松野さんです。

松野 大した質問はしなかったと思うがな。

伊藤 よく勉強されました、と言っている。

松野 あのころは、一緒にやっていると池田勇人が馬鹿にしてね。「おい松野、統計はそうなっていないよ。統計はこうだよ。エンゲル係数だって、君、いまは三十二だが、そのうち十二、三になるよ。何を見ているんだ」と馬鹿にしゃがるんだ。腹が立って、腹が立って、何を言ったって勝てない。そこで、全部の統計を丸暗

記した。日銀の短観から、政府の統計から、労働統計、貿易統計、財政統計、統計というものを全部丸暗記した。一ヶ月間、学校の試験みたいに。それでその次に池田が言った時、「それは池田さん、去年の統計で、今年はどうなっていますよ」と言った。ギュッと睨みつけるんだ。それから物を言わなくなった。その統計でぎゃふんとやる。

池田の答弁を見ていると、全部数字でごまかすんだ。野党も。それは彼らも覚えている。ところがやつこさんも去年の統計で、今年の統計はだいたい覚えていてくれるけれど、そこまで正確に知らない。「それは池田さん、去年の統計で、今年はどういう数字ですよ」と言うと、きつと睨みつけた。それから私の言うことに耳を傾けるようになった。そのころは一所懸命勉強しなければ、会議に出て馬鹿にされるんだ。また、あれが小馬鹿にしゃがってね、お前、慶應ぐらい出やがって、なんていう顔している。あれだつて落第ばかりしていたくせに。

やはり役所に行くと、東大出だと一番代表的なのは宮澤「喜一」。大蔵省に挨拶にいくと、「君どこ?」「東大です」「東大のどこ?誰に習ったの?」なんて言っている。それで成績を聞いてね。東大じゃなければ駄目なんだ。慶應だというと、あとはそういうことを聞かないんだ。「ああ慶應、ああそう」それで終わりなんだ。東大というと、「どこを出たの。教授は誰だったの。成績はどうだったの」と聞くという。あとの私学は「ああそう」で終わりなんだ。それが大蔵省の慣例だ。だから、慶應だと「ああそう」といって、私がいくら言っても相手にされない。その中でもがいて勉強するには、ぎゃふんと言わせなければ駄目なんだ。それで、私はあの時代の統計数字を覚えた。いまでもわずかながら覚えているけれどもね。もちろん「数字は」変わっているけれど、系統、傾向はいまでもだいたいわかるわけだ。あのころ、四十歳ぐらいまでは勉強した。

伊藤 しかし三時間質問するというのは、相当勉強していかないといけないですね。

松野 まあそうですね。でも大したことはない。三時間ぐらいなら、いろいろな統計数字を知っていたから、経済のこと、貿易のことを言う。私は外交が一番駄目だったな。外国へあまり行ったことがない。それから語学ができない。

私たちが一番悪かったのは、鎖国でしたからね。戦時中は、海外留学・海外旅行はできないんだ。私が大学生のころ、昭和十六年から二十年まではできないんだ。できるときはいちいち許可を取らなければいけない。海外出張許可みたいに、文部省かどこかで許可を取らないといけない。それはなぜかという懲兵制度があるからだ。徴兵期間のあいだは海外へ出るときは許可を取らなければいけない。徴兵義務が全国民にかかっているんだから。だから、海外に行くときは、どこの学校へ行くとか、どこへ行くとかいちいち許可を取らなければいけない。だからなかなか行きにくい。うっかりソ連なんか行くと、おまえ共産主義者だろうなんて言われるしね。

伊藤 まあ、ソ連に行つても面白いことはないと思いますが。

松野 そうですか。そんなに褒めてあったんですか。私は、まあ三時間もよく質問しましたね。

伊藤 そんなにしょっちゅう質問しているわけではないでしょう。

松野 いや、だいたいしています。あとは政治資金規程法、佐藤内閣で政治資金規程法を出して、三時間質問しました。それは妨害質問です。通さない質問をするわけだ。出さなければいけない。出して、通さないんだ。

伊藤 これは違いますよ。

松野 これは違います。これは予算委員会だから。予算委員会では私はずいぶん質問しています。予算委員会の質問は私は多い。

伊藤 じゃあ、松野先生は論客のほうなんですな。

松野 まあ、しゃべることは得意ですね。図々しく喋るほうはいいけれども、ものを書くほうは駄目ですね。文章にして原稿を書くことは駄目なんだ。喋るほうはしゃべれる。

伊藤 でも議員さんの中には、議員のあいだ、ほとんど議会で発言していないという人だっているでしょう。

松野 おります。

伊藤 委員会なんかで、自分に直接関わるような問題は質問するでしょうけれど。

松野 私は予算委員会での質問、それから政治討論会が多かったです。NHKの日曜討論は私が佐藤内閣では一番多いでしょうね。

伊藤 あれはどういう人が出るんですか。

松野 NHKで選んでくるんです。向こうで選ぶ。あるいは幹事長が推薦したりする。佐藤内閣が一番多いのは私でしょう。松野出てこいといわれる。外交でもなんでも、もちろん出て行くときは、ベトナム問題というと外務省で聞いてから行くんですがね。ベトナムに行つたこともないし、カンボジアのことも知っているような顔をしてしゃべっているだけだ。

伊藤 やはりそういうスタツフがいないと困りますね。

松野 それを呼んで、二時間ぐらいレクを聞く。こつちから質問する。私はこのごろ調子のいいのだけを聞いたね。そこだけ答える。ベトナムはどんな国かぐらい覚えていないとね。民族はどんな民族か、聞いていなければわからない。それは外務省から聞くのが一番いいですね。

伊藤 まあ、担当課長からでも聞けばいいでしょうね。

松野 課長ぐらいがいいんです。局長は駄目。課長じゃないと駄目だ。局長になると、もうその課にいない人は駄目ですから。アジア課にいたものは詳しいけれども、フランスに行ったやつが局長になつても何もならない。

ひとり大使になってアフガンに行ったのがいるんです。終戦後

すぐ、吉田内閣の時、アフガンというところに行くんだという。「アフガンというのはどこだ」「インドの少し上「北」だ」「なんでおまえ行くんだ」「臨時大使館ができるから行くんだ」という話でした。その時はアフガンの名前を聞いた。砂漠だそうだと。ゴルフ場はあるかというところとゴルフ場はあるんだと。しかしグリーンは絨毯が敷いてあるそうだと。

武田 全部バンカーじゃないですか。

松野 フェアウエーは芝で、グリーンは絨毯。そこで芝が植えられないから絨毯を敷いている。絨毯のほうが安上がりなんだ。そこでやるんだという。お前、えらいところへ行くなあと言ったが、その時アフガンという名前を聞いた。どんなところか。いま見るとなるほどひどいところだ。それで日本より広いんだからね。アフガンという名前を聞いて、あの大使で行ったやつ顔を思い出した。一年ぐらい行ったんでしょね。

■第九回参議院選挙と台湾訪問

伊藤 さあ、いよいよ参議院選挙です。

武田 これは、「昭和四十六年」五月二十九日の記述なんですけれども、「松野頼三君が久しぶりに顔を見せる。馬鹿ばなしが半分ばかり続いたが、大事な事は参議院選挙。二人当選は仲々むづかしいらしい」という記述です。

松野 熊本の事情を話しに行った。

伊藤 この時は選挙対策委員長ですね。

松野 熊本の二人当選はなかなか容易じゃないよという。

伊藤 この二人当選というのは、熊本の話ですか。一般的にこれを読んでみると、二人区で独占は難しいという意味なのかなあと

思ったんですが。

松野 熊本も二人なんです。二人当選はなかなか難しいよ、という話です。

武田 そして今度は台湾に行く話です。これは前にも伺ったような気がしますね。これは帰国してからの記述ですね。「昭和四十六年」八月三十日です。

松野 メモして帰ってきた。

武田 「蒋介石総統の国連対策を張群氏と三人で話合つての帰国談。勿論オフレコで、このまゝなら二つの代表態度を了承か。但し安保理事事国の件は一寸デリケート」という話です。

伊藤 結局台湾を国連に残して、代表権だけ中国、大陸のほうに移すということですね。

松野 そういうことです。

伊藤 それじゃあいやだ、ということでも台湾が抜けたわけですね。でもだいたい感触としては、それで台湾もいちおう納得する。

松野 その時は佐藤は台湾に投票したんです。外務大臣が福田赳夫。佐藤が投票したら、議会では早速「先見の明がない。なぜ台湾に投票したんだ。なぜ中国に投票しなかった」と盛んに弾劾演説をやっていましたよ。福田はどっちにするか、佐藤に一任していた。

伊藤 台湾の感触はだいたい、中国の国連加盟はある程度やむを得ないということですか。

松野 やむを得ない。台湾はもうそれを機会に国連から抜けたんです。佐藤は台湾支持に投票した。しかし数は一三〇票に三〇票ぐらいで、もちろん台湾が負けた。

伊藤 負けたからといって、あの時脱退しなければ、残る可能性はあったわけですよ。

松野 残る可能性は、あの時はなかった。それは代表権を取ったものが残って、代表権のないものは国連に入れない。中国はあの

時入ってなかった。代表権と同時に入った。だから中国が入って、台湾が抜けたんです。

小池 台湾が二国論をとればよかったです。

松野 どちらの国も二国論をとらなかつた。

小池 台湾も光復をねらっていたわけですから。

松野 中国も一国論、台湾も一国論だから、どちらかしか入れない。

伊藤 佐藤さんの考えは二国論なんじゃないですか。

松野 佐藤は、二国論までの見通しはなかつたです。台湾に自分の気持ち、長い間の恩義を伝えるつもりで、「台湾に」入れたわけです。二国論はどちらもとらなかつたんだ。

小池 可能性として、二国論はなかつたと思います。

松野 だから、加盟か脱退か、なんだ。

伊藤 この年にベトナムに行かれた話も、確か前に伺ったような気がしますね。

松野 しました。沖縄返還の問題です。

■昭和四十七年・勤続二十五年表彰

伊藤 そして四十七年「一月十四日」に入って、新年のご挨拶ですね。

武田 新年のご挨拶はほとんど毎年。

松野 自宅です。世田谷の淡島の自宅に毎年たいてい行きました。

伊藤 行くと、いろいろな人がたくさん来ているわけでしょう。

松野 いろいろなのがある。佐藤派がほとんどで、三十人ぐらい来ます。

武田 この年は、このあいだ亡くなられた萩原吉太郎さん、北炭夕張ですか。あれが新年の挨拶に来ていますね。

松野 あの人は会ったことがあります。

武田 「石炭が駄目なので気の毒」と書いてあります（笑い）。

松野 その時は、もう石炭はほとんどやめていましたからね。

伊藤 この人も河野派のスポンサーの一人でしょう。

松野 河野派だ。永田と一緒にだ。萩原と永田が河野派のスポンサーだった。だから中曽根なんかも親しかったです。

伊藤 中曽根さんは、ある程度それを継承しているんですね。

松野 継承している。

伊藤 そういうところには、ちよつと手を突っ込めないでしょう。

松野 突っ込めない。向こうも言わないし、こっちも言わない。

伊藤 そういふのは仁義ですか。

松野 まあ、どうせ言っても大したこともしてくれんし、頭を下げるのもいやだということだね。あまり釣れないところに糸を垂らす必要はないんだ。やはり、相手方のところに行くのはいやですね。

伊藤 それはかなりもう世間周知のことですね。

松野 周知です。また、馬鹿にされますからね。やっぱり権威を保たなければね。プライドもあるからね。あれの風下に座るか、という感じがするわけだ。クラス会でも、あいつの下には座りたくないという。クラス会の席順でもあるでしょう。席順はどうでもいいが、あいつより下には座らんですね。

伊藤 この二月「十七日」の党内情勢の話は、何か具体的なことが書いてありますか。

武田 「松野頼三君が顔を見にくる。動静さぐり。落ちついておるので一寸意外な顔をしてた」。このころ、もう田中と福田の争いも激しくなつたところで、そういうことなのかな、と思います。落ち着いておるのちよつと意外な顔をしていたというのは。

伊藤 落ち着いているというのは、佐藤さんでしょう。

武田 佐藤さんが落ち着いているということですね。

伊藤 もっと慌てているかと思つたんでしょね。

松野 田中がもう旗揚げをしたあとでしょね。

武田 派閥の動向というのは、その前後の記述を見ると。

松野 それは佐藤派が田中派に移行するか、注目の的だった。たしかあの時は佐藤派が九十人ぐらいいましたからね。田中はその九十をまとめて行きたかったが、私たち二十ぐらいがこぼれたから、七十になった。その二十が福田に行った。だからそれは、重大な大変なことです。敵と味方、プラス・マイナスが逆になるからね。

武田 その次の日の記述で、「橋本登美三郎君の行動がや、ゆき過ぎがみうけられるので招致して注意をする」というのがありませんね。

松野 その時に行き過ぎが見られるということは、田中のほうに行き過ぎなんだ。佐藤の意思は逆で、福田に決まっているわけだ。行き過ぎということは、田中に深入りし過ぎることだ。官房長官の竹下にも注意した。「お前、官房長官のくせに、行き過ぎるな」と。だから、佐藤は私と同じように福田にやりたかった。どこを見ても、その意思が見える。福田とは書いてない。行き過ぎということだ。橋本トミは田中に深入りしていたから。

伊藤 田中派がかなり大きく取り込んで、佐藤さんは、かなりこれは大変だということだ慌てているわけではないかと。

松野 私も、「佐藤は」慌てているんじゃないかと思つて行ったけれども、佐藤は、まだおれの威厳はある、おれの権威は大丈夫だ、というような顔をしていた。田中に取られるものか、おれがひとこと言えば大丈夫だ、というような自信を持っていた。それが心配だった。大丈夫ですか、田中にみな取られませんかというのが私が心配していたことです。佐藤は、なに、田中がなにか言つたって、おれがひとこと「こつちへ行け」といえば全部まとまるんだという。その偵察に私は行つたわけだ。その時は実際は、

もう田中の毒が回っていましたけれどもね。

武田 「昭和四十七年三月七日」松野先生二十五年勤続表彰。園田「直」さん、中曾根さん、田中角栄、成田知巳、勝間田清一、佐々木更三、小平久雄で、「今回から夫人も招かれて二階から見下してた」。

松野 議場の二階から。傍聴席。十三人いました。

伊藤 二十五年勤続ということになると、そんなにたくさんはいないわけですね。

松野 そうですね。当選十回。二十五年で、「当選一回で」だいたい二年半ですから、十回以上ですね。第一回生は百三十人いましたから、ちょうど一割になったんですね。

伊藤 もう、二十五年の表彰を受けるぐらいになると、中堅もいところでしょう。

松野 もうみんな大臣ぐらいいつています。

伊藤 大臣にいつていますよね。

松野 一回か二回は出ていますよね。しかしその時の園田も亡くなった。鈴木善幸が一緒です。鈴木善幸と中曾根と私と三人。あとは倉石「忠雄」も小平も佐々木良作もみんな亡くなって、与野党を通じて「生き残っているのは」三人ぐらいでしょう。

伊藤 いまですか。

松野 いま生きているのは、私と中曾根と鈴木善幸、そんなものだ。桜内「義雄」はもうちよつとあとですからね。

伊藤 善幸さんなんかとは、お会いになることはありますか。

松野 たまに会います。

伊藤 お元氣そうですね。

松野 お元氣です。

伊藤 お話を伺つたら面白いだろうな。鈴木善幸さんなんていうのは、もともと自民党じゃないでしょう。

松野 もともと社会党です。第一回当選は社会党です。

武田 総務会も非常に長いですよ。

松野 社会党から、平野力三なんかと一緒に社会革新党で出る。すぐ三年ぐらいで分裂して無所属に行つて、それから自民党に来た。平野力三の派ですよ。西尾末広とか。

伊藤 西尾末広と平野力三は悪いでしょう。

小池 仲が悪いですね。平野問題ですね。

松野 西尾はむかしは右派だったでしょう。もともとは一緒ですよ。

伊藤 でも、仲が悪いんですね。

松野 片山内閣で大喧嘩をした。

武田 このころ、保利茂さんが病気になるたんでしょか。

「三月八日」「内所にすればするで、どこからとなく問題が起る。慈恵大入院は今やかくせない」。

伊藤 やはり政治家の病気というのは、大変なことです。

松野 うん。選挙の時に病気というのと、もう投票しませんからね。あの人が長くないぞ、なんて言われて。よく選挙中にデマ放送で

「倒る」なんているのを出すんです。選挙の最中、投票三日ぐらい前に、わざと「〇〇候補者倒る」なんていうことを紙に書いてばらまくんだ。誰がまいたかわからないように。選挙違反ですよ。

「〇〇倒る」なんていうと、あの人が病気で倒れたなら、投票したつて無駄だということになるでしょう。そうすると入れなくなっちゃうんだから。一番のデマ宣伝は、病気になるって倒る、というやつだ。

伊藤 効果があるわけですね。

松野 死んだと言わずに、倒れるなんていうのが一番いい。それが一番のデマ宣伝の常道でしょうね。

小池 いまでもありますよ、投げ込みで。

松野 どこでもよくある。最近是有権者も利口になって、そんなデマだということを見込むからね。

伊藤 先へ行きましょう。「昭和四十七年六月十五日」内閣不信任案ですね。

武田 もう総辞職する寸前です。社会、公明、民社の三党共同提案で不信任案が出されて、松野先生が反対討論をして、その結果、一五三対二六七で反対が不成立。「消極的に信認を得た事になった」。

松野 私があの時もひとこと証言したんですね。

武田 参議院では、重宗さんも辞められているのかな。

伊藤 松野先生は案外いろいろこういふ討論や質問をされているんですね。

松野 佐藤内閣ではよくしていました。

武田 「参議院はいろいろの説があつたが開かれる事なく無為に一日を過す」といふような記述があります。

松野 不信任ででしょう。

伊藤 なかなか衆議院の問題と参議院の問題とは、難しいんですね。

松野 参議院が、やや主張する。自分たちは二院だから、二院の存在意義を示さなければいけないという与野党の意識がある。衆議院のコピーじゃないぞという意識だ。だから、衆議院をやつて参議院でやると、コピーみたいになるから、一日延ばしたりね。そういうのは与野党を通じてあるんです。参議院不要論が出る。参議院の存在を示すことも必要でしょうね。

伊藤 それで、その後、七月六日に佐藤内閣が総辞職をして、翌日田中内閣が成立する。田中さんの内閣になれば、松野さんは干される。

松野 一切出ません。

伊藤 一切ですか。党内も。

松野 党内も、一切なし。

武田 あとは佐藤信二さんの件で松野先生が、時々名前が出てき

ます。

松野 佐藤のところへたまに行くようになる。そのときは福田でやって負けましたからね。だいぶ負けた。

伊藤 あとは、信二さんの選挙ですか。

松野 参議院で、佐藤信二は全国区だから、熊本で私が応援したんです。そのことです。

伊藤 なにか絶えずそのことを。

松野 初めての選挙ですから。全国区の参議院選挙だから全県からとるわけです。そこで熊本のをよろしく頼む、ということです。

伊藤 これはなんですか。昭和四十八年三月五日の仏国無名作家展に出席して、松野氏も出席したというのは。

武田 これは佐藤さんが展覧会に行ったら、松野先生もそこにいらっしやったということですね。

松野 なんですか。

伊藤 フランスの無名の作家の展覧会です。

武田 四十八年三月五日です。「川部君が開いた」と書かれています。

松野 ああ、わかった。川部「美智雄」は、岸さんの通訳をやった人で秘書です。秘書兼通訳の川部が画商をやっていたんだ。そんな本物の画商じゃないですよ。輸入です。日本館というレストランをパリとデュッセルドルフにつくった。デュッセルドルフには日本の大きな商社が二百社ぐらいある。その二百社を集めて、みんなに金を出させて、日本館というものをつくらせた。それを今度はパリで、やはり二百社ぐらいあるから、一つの会社に三百万ぐらい出させて日本館をつくって、そこで日本人クラブをつくった。名前は日本館です。それは岸さんの名前を借りてみんなから集めた。川部がその社長だ。それでフランスの日仏交流のために無名の画商を連れてきて、展覧会をやるから私に来てくれとい

う。佐藤も来ていた。

武田 岸さんも来ていましたね。

松野 だいたいそのころは十万から三十万ぐらいの新進作家です。これを買って持っているとそのうちに値が出るから買えという。川部が日本館の関係でフランスの若手の画家を売りに来たんですね。

武田 佐藤は、「小生は単にひやかして買わずに帰宅」と書いてあります。

松野 私は買ったんですよ、十万ぐらいのを。どれでもいいから十万ぐらいの絵をくれといって、向こうがくれました。金だけ十万だと言って、絵もわからんから、「どれでも選んでくれ、高くなりそうなので」と言ったんだ。

武田 高くなつたんですか。

松野 風景の油絵で、フランスのコートダジュールの絵を私は十万で買った。これは三十万するけれども、十万でいいなんて言われて、義理で買って帰った。

伊藤 高くなりましたか。

松野 いやあ、もう駄目ですよ（笑い）。川部というのは、岸さんの通訳をしていた。私が岸さんと一緒に外遊した時に世話になった。それはもう亡くなりました。中村と川部が秘書です。中村のほうが古かった。

伊藤 川部さんというのは、どういう人なんですか。

松野 川部はアメリカに留学して、苦学して勉強して、岸さんのところにはだいぶ古くから出入りしていましたね。

伊藤 たしかニューズウィークのパケノンとか、ああいう人たちと関係があるんですね。

松野 あります。通信をやっていた。

武田 川部さんですか。ハラカツさんという方じゃないですか。川部さんのほうですか。

伊藤 川部さんです。

松野 川部はアメリカとの通信の往復をしていましたよ。こちらからレポートを出すと、千ドルくれるとか。何かそういうレポーターみたいなことをやっていた。それは岸さんの人脈があるから、向こうは高く買う。岸内閣の背景があるから、川部がレポーターみたいなことをやっていた。よくレポートをニューズウィークなんかに送っていましたよ。いくらくくれるんだと言ったら、千ドルくれるんだと言っていた。

伊藤 アメリカに岸さんを売り込む時には、川部さんも相当活躍しているんですね。

松野 そうでしょう。いろいろルートがあるからね。

武田 編集者かなにかの方ですか。

松野 編集も出版もしていました。レポーターです。レポートの出版をしていました。出版というか、会員を集めて通信みたいなことをしていた。器用な男でしたよ。

■昭和四十九年・チッソ問題等

伊藤 四十九年四月六日のチッソ問題というのは、何だろう。

武田 その前に四十八年十月十八日は、ちょうど先生のお父様の命日で、ちょうど佐藤さんが熊本にいらっしやっただけですね。

伊藤 これは選挙のことですか。

武田 そうです。選挙のことです。そして先生に花を手向けてくれというふうに依頼するんですね。

松野 選挙か何かやっていたんじゃないかな。

伊藤 これは信二さんの選挙ですね。

松野 そうでしょう。それで、たしか花をあげてくれといった。あそこは墓があるから、墓のほうに花をくれた。

武田 先ほどのチッソの問題ですが、松野先生が、「田中直正君が水俣のチッソの問題ととりくむと云ふ。松野頼三とは連絡ずみと云ふ」と書かれています。

伊藤 日笠の、水俣のあの問題ですか。

松野 そうです。

伊藤 この時も問題になったんですか。

武田 もう終わっていませんか。それで園田さんとか坂田道太さんなんかに連絡はしている。

伊藤 かなりその問題の解決のために取り組まれたわけですか。

松野 あまり取り組まなかったですね。ちょっと古い話だね。その人は宮崎の本社の人だった。要するに県から金を出してくれというわけですね。県は国が金を出すなら出すという。チッソが破産するものだから、チッソが負担する金を県が立て替えて貸しながら、経営継続をして稼がせて回収するというわけだ。

伊藤 つぶれちゃったら、もう何もできないですからね。

松野 つぶれたら、もう何もない。県から金を出させてくれという。県は国が保証するなら県債を出すという。国が保証するかどうかという話をさかんにしていた。それを大蔵省に話したら、保証するとは言わんが了解するという言葉だった。保証ではなくて解みたい言い方だった。だからいまでも県債はたくさん残っているんですね。一部は国で肩代わりしてくれたけれども、まだたくさん残っている。

伊藤 県債ですか。

松野 県債です。

伊藤 だいたいもう時間もなくなっています。『佐藤日記』もだいぶ終わりに近づいたんですが、まだちょっといろいろあるんですね。

松野 何がありますか。

伊藤 「昭和四十九年」五月二十四日の藤井一雄の件というのは――

武田 これは謎なんです。「藤井一雄君。一寸まだ山師的な処がなほらない。松野頼三君へ頼む様にと指示する」、これは全く何のことかわかりません。

松野 藤井一雄という人間は、佐藤のところを年中出入りしているんです。山師みたいだね。まだ生きていますよ。

伊藤 熊本の人なんですか。

松野 いや、そうじゃない。山口じゃなかったかな。

伊藤 それをなんで松野さんに頼むんですか。

武田 そうなんです。これが全くわからない。

松野 私に頼めと言ったんでしょう。

武田 藤井さんが持つてきたものを。

松野 松野に頼めと言ったんでしょう。佐藤から私にとこころに頼んできた。大した用件じゃなかったと思いますね。

伊藤 大きな話ではないと思いますが、何か思い出したら。

松野 藤井一雄のことはだいたいその時の問題でしょう。それは輸入商で、果物の輸入商売でしたから、オレンジとかネーブルとかです。

伊藤 怪しい話じゃないですか。

松野 そのころ、たしか枠の制限かなにかあった。彼は輸入だから、その制限をもう少し広げてくれとか何とかいう話だったと思うんです。オレンジと農産物が競合するから輸入数の制限があった。それをなんとか広げてくれといって佐藤のところへ行っただろう。それで、松野のところへ行っただろう。うと思ふ。

伊藤 先生は農林族だから。

松野 農林族だから。まあ、藤井のことならそんなことだと思ふ。

伊藤 では、もうちよつと先まで。「昭和四十九年」七月十四日です。

武田 これは保利さんから「佐藤に」電話があつて、「現状に満

足らしい松野や園田君の意見を福田君がき、すぎると云ふ。これは事実と思ふが、現状で大臣である保利君と大臣でない松野や園田君では意見が違ふ」という記述です。これは福田さんと保利さんとの関係のことでしょうか。

松野 何のことでしょうか。

武田 何のことかわからないんです。

松野 佐藤内閣ですか。

伊藤 もう終わっています。田中内閣になっています。そこで、保利さんから電話があつたんでしょう。保利さんからの電話の内容は。

武田 福田さんが、松野さんや園田君の意見を聞きすぎる。それに対して保利さんが不満を持っている。現状で大臣である保利さんと、大臣でない松野さんや園田さんでは意見が違ふというんです。

伊藤 保利さんは最後に田中さんのほうに行くわけでしょう。

武田 そうですね。

松野 行く。そのことです。要するに「保利は」田中内閣ができた以上は田中を助けてやるべきじゃないかという意見です。私や園田は、田中なんか長くないから、次の福田構想で進めるべきだといっていたから、政策的な意見が違ふわけだ。

伊藤 先生は、その点では園田さんなんかと一致していたわけですか。

松野 園田は田中を応援していたけれども、田中から好かれなかった。園田はどちらかという和田中を応援していたんです。初めは向こう「田中派」へ行っていたんです。最後はもちろん福田を応援しました。田中からあまり好かれなかった。それで保利は、福田を応援しているけれども、田中と通じていたわけだ。本心は、どちらかという福田より田中が好きだったでしょうね。でも形は福田の応援だった。それで保利はすぐ田中に重要視されたわけ

だ。「保利さん、保利さん」といって、田中もすごく重要視した。それだから、内閣ができた以上、自民党の内閣だから田中を応援するのは当たり前じゃないかというのが保利の意見だった。私と園田は、いくら内閣だって、次のために政策を立てるべきだ、福田政策をつくるべきだという意見だ。田中内閣は長くはないんだから。

伊藤 当時は田中内閣はそんな長期政権になるという見通しではないんですね。

松野 ない。みんな危なかったですね。それも真っ先に金脈という噂があった。もう「総理に」なる前から金脈の噂があった。そこに「文芸春秋」の立花隆だ。

伊藤 だけれども、「田中」内閣が成立した当初は、新聞はワーツと持ち上げたじゃないですか。

松野 大変なものだ。それから石原慎太郎は「君、国を売ったもうな」なんていう論文を出していたしね。あの時の石原慎太郎はなかなかの名文だった。私たちはどちらにしても、あの金の集め方は危ないという気がしていた。いずれにしても、これは長くないぞと思っていた。だから次の準備のために福田政策をつくらうじゃないかという感じだった。

そうすると保利さんは、そんな党内に党をつくるようなことはよくない、党を分裂させるのか、お前たちは、首相が決まった以上、一致してやるべきだ、という意見ですよ。それで佐藤は真ん中で黙っていた。佐藤は黙っていました。

武田 ちょうどそういう田中批判が激しい時に、佐藤さんがノーベル賞を受賞しますね。この記述「十月十二日」も非常に面白いところで、その祝賀のパーティーがあって、先生と園田さんが福田派の会合が成田で行なわれる出発前に立ち寄って、祝辞を述べて、行ったと思うんです。たぶんその時に、松野先生なんか佐藤さんに伝えたと思うんですけれども、「今日の八日会の福田越

夫君の発言は相当はげしい様だ」と書いていらつしやる。だから祝賀と同時にいろいろな情勢が伝えられたんだろうと思うんですね。

松野 成田空港の近くのホテルじゃなかったかな。そこで会合があって、今日は激しいよ、といった。それも前もって打ち合わせしてあったからだ。それは田中内閣に対しての批判をしたんです。

武田 そうですね。実際に新聞の記事にも出ていて。

松野 私たちは終始田中には従わないし、政権も長くはないと思っていた。

武田 この日にちょうど寛子さんの『宰相夫人秘録』の出版記念パーティーをやっていて、目白押しですね。

松野 あの時は加瀬俊一がずつとノーベル賞の工作をやっていた。加瀬がよく佐藤のところに来ていました。私もよく加瀬さんに会ったが、ずつと来ていました。ノーベル賞の問題です。それが問題になって、あれは核を容認していたという。核反対だといって加瀬がノーベル賞を取ったものの、よく見たら核を容認していたんじゃないかというのが、このあいだのノーベル賞の議論だ。佐藤にやったのは間違いだったというような議論が出ていましたね。

伊藤 間違いだなんていったら、ノーベル賞というのは間違いだらけです。

松野 それはそうです。それは加瀬さんが一所懸命やったことは間違いない。

伊藤 やはりああいうものも、そういうふうにはちゃんと運動する人がいかなかったらできないんですね。

松野 それはやはりロビイストがいなければできない。どの社会でもロビイストがいなければできませんよ。

■三木内閣誕生へ

伊藤 そうですね。「昭和四十九年」十一月十八日、「松野頼三君と久しぶり対談」。これは内容は「書いて」ないですね。

武田 ないですね。これは三木内閣ができる直前ですね。

伊藤 それで三木内閣になる。

松野 三木内閣の時は、私は福田を応援した。福田を応援したが、どうも形勢がうまくない。それで佐藤に「椎名「悦三郎」」に会ってはっきり言ってくれ」という頼みをしていた。椎名裁定でしたからね。

小池 椎名と福田というのは、あまりよくなかったのですね。

松野 よくなかった。

小池 椎名も岸の配下みたいな感じで。商工省の時代から。

松野 福田は川島ともよくなかった。椎名ともよくないでしょうね。

伊藤 松野先生は政調会長になられて、すぐ佐藤さんのところに挨拶に行くんですね。「昭和四十九年」十二月二十一日。

武田 中曽根さんと一緒ですか。

伊藤 中曽根さんは幹事長。

武田 「中曽根幹事長、更に松野頼三政調会長等引続きあいさつ」。

伊藤 別々ですか。

松野 別々だった。

伊藤 引き続き、だからね。

松野 いま、中曽根が来たよと言っていましたから。私が後から行ったわけですね。

伊藤 これはどういう意味ですか。十二月三十日のことは。

武田 これは、「福田赳夫君が来る。その後の内閣の模様もさる事ながら、気になる事が多いので気づいたま、注意する」。その

後の内閣というのは三木内閣ですね。「今の処気の毒に思へるのは誰も大所高所から政局を見て注意する人の居ない事だ。岸の兄貴では敵が多すぎるし、安倍「晋太郎」農相ではまだ子供だし、松野にも園田も二人とも癖のある人だし、ほんとに御気の毒と思ふ」という記述なんです。

伊藤 じゃあ、松野先生が三木内閣にくつついたということをおまわり面白くは思っていなかったということですかね。

松野 それは、三木と佐藤は仲が良くないから。

伊藤 ずっと天敵ですからね。

小池 「三木は」総裁選には必ず出てきましたしね。

松野 私が三木に近づいたことを、あまり気に入っていなかった。

伊藤 まあ、それはわかりますけれどもね。でもそのわりには、

いろいろなことを、このあと頼んでいますね。

松野 年中依頼が来ましたよ。

武田 松野先生は頼まれるほうですね。

松野 ほとんど聞いてやりましたがね。

伊藤 まず私学振興の件「昭和五十年一月六日」。

松野 私学振興の予算を増やしてくれという。

伊藤 なんで佐藤さんがそういうことを言うんだろう。

松野 誰かに頼まれたんでしょうね。私学振興予算がその時二千億ぐらいだったのが少し減ったものだから、誰かの教授に頼まれたんではないかね。二百億ぐらいみんな増やしましたよ。

伊藤 防衛庁の食事支給の予算について「昭和五十年一月九日」。

武田 「直ちに大蔵省に連絡し、全時に松野政調会長へ頼む」。

松野 食費が足りないということでしょうね。なにか小さいことみんな電話して、みんなその通りにしましたよ。ほとんどできたはずですよ。

武田 次が平沼赳夫さんの件です「昭和五十年一月十四日」。

伊藤 松野氏に相談となっています。

武田 あと村上勇さんにも佐藤さんに頼んでいるんですね。

伊藤 藤田正蔵というのは、どんな人ですか。

松野 藤田正蔵というのは岡山だ。

伊藤 平沼さんも岡山ですね。

松野 平沼の選挙区です。岡山の地方の財閥で。

武田 つまり藤田さんは、大村襄治を応援していたので、平沼越夫君を支援することは難しいということなんだけれども、松野先生は平沼のほうを応援してくれと言われた。

松野 それがいまの通産大臣の平沼です。慶應の後輩だしね。大村襄治はもういいから、平沼を応援してくれと頼んだ。それで、ここ「闇鍋会」へ平沼を入れているわけだ。あそこ「壁にかけられて写真」に映っているでしょう。

伊藤 平沼さんとは、ずいぶん前からなんですね。

松野 多少魅力のある男だったから。大村襄治はもういいから、平沼にしてくれといった。

伊藤 それから、いよいよおしまいのほうですけれども、首相演説に対する質問「昭和五十年一月二十七日」というのはなんですか。

武田 これは三木さんに対する質問をしたんでしょうね。一月二十七日というのは月曜日なんですけれども、金曜日に首相演説があつて、その代表質問に――。

松野 代表質問だ。施政方針に対する質問を各党がやるものだから、それを私が受けてやったと思います。本会議でね。

伊藤 要するに三木さんの演説に対する質問ですね。ただ、やった、ということだけが書いてある。

武田 そうです。そして最後のものもそうですね。

松野 褒めて書いてなかったらう(笑い)。

伊藤 それは褒めないでしょう。相手が三木さんですからね(笑い)。

武田 いい演説をしても褒めないんじゃないですか。最後「二月五日」が「畜産奨励事業団の肉の放出が主婦連にかたよつておるとの陳情。又、藤田田君も来て殆んど全様の陳情。そこで松野政調会長に電話すると同時に畜産局長「沢辺守」へも圧力をかける」。だから佐藤さんが内閣を辞めてから、わりとこういう陳情がくるんですね。

松野 小世話もしていたんだ。きつと委員会がいろいろなこと頼ってくるから、小さい世話をしていたんですよ、暇なあいだは。きつと委員会が自宅にいろいろ頼みに来るんですよが。

伊藤 やはり松野さんは頼みやすかったのかな。

松野 こつちもいろいろ頼んだから。ご恩返しだと思つて何でも聞いてやりましたよ。批判せずに、「はい、承知しました」と言つて(笑い)。

伊藤 佐藤さんがここでもう亡くなつて『佐藤日記』は「終わり」ということです。

松野 いちおう佐藤も済みましたね。

伊藤 前にお話を伺つたのは三木内閣の話ですから、ちょうどこれが終わったところで、元へ戻ったわけです。また次回よろしくお願ひいたします。

また政局がらみで忙しくなるんじゃないですか。

松野 忙しくなりますね。

小池 三月解散はありますか。

松野 わからないですね。

伊藤 そんなことを聞いたつてわかるわけない(笑い)。

松野 今度、鈴木宗男が議連の委員長になるんだ。抵抗勢力がいよいよ表に立つてくる。いまはフジなんとか「藤井孝男」がやっているんだけど。それが経世会なんだ。それが辞めるから経世会を入れるということだ。内閣は派閥抜きでも、党は派閥で政局によつて決めるという。派閥配分でいけ、党は派閥だ、内閣は

派閥でなくていい、その理論で押し切られたらしい。

伊藤 それはやりにくいことになりますね。

松野 一番とげのあるやつを議運委員長に持つてくるのは、まるで対決の姿勢でしょうね。だから、いまの政局がどう動くか。ことに加藤問題もある。加藤問題はどちらかというところ、彼らは小泉にくつつきたいわけだ。YKKだからね。だから、やや暗雲が出てきつつありますね。特にいろいろ小さい問題が出てくるでしょう。橋本「龍太郎」に献金、誰に献金という小さい問題が出る。これを隠すために、なにか。

小池 橋本の「秘書への献金疑惑」は結構大きいんじゃないですか。

松野 私は橋本のは相当なものだと思う。ことに「総理大臣の」現職のときですからね。あれは岡山の選挙長かなにかなんです。秘書というのは岡山の地元の選挙事務長なんだ。だから元秘書じゃない。いまの選挙事務長だ。

伊藤 それは大きいな。

松野 河本建設ですか、これがほうほうでやっている。また、なんとかいうセイビの秘書が事細かに五年間の日記をつけているというの、馬鹿なやつだね。お茶を飲んだことまで書いてあるというんだから。

武田 そういう方が研究者に必要なんですよ。

小池 あとの人間には重要なことなんです。

松野 検察では日記というのは、案外重要視するんですよ。

伊藤 それはそうでしょう。われわれは歴史研究だって日記が大事なんですから。

松野 日記というのは、犯罪捜査で重要なもの。証言よりも日記のほうが信憑性があるね。

伊藤 それはそうです。だってその時に書いてあるんですから。

松野 日記というのを取られたらちよつとね。

伊藤 いや、取りたかったですね（笑い）。

小池 検察庁よりも先に（笑い）。

松野 それから橋本もほうほうへ出ますからね。このあいだ誰か言ったね、橋本事務所は金がかかるわけだ。岡山に歩いて、橋本事務所の腕章を巻いた若い青年が立っている。「橋本事務所へ行きます」というと、「はい、どうぞ」といってタクシィ券をくれる。結構遠いらしい。帰りはまた「どうぞ」といってタクシィ券をくれるんです。「あれじゃあ一日何百人にタクシィ券を配っているか」といって、もらったやつが驚いていた。「私はわずか五万円ぐらいしか持つていけないのに。何百万持つて行く人ならいいだろうけれども。五万の人がハイヤーで往復するのは、あれじゃあ金がかかりますよ」と言っていた。その事務長が、この間の元秘書だ。

伊藤 それは危ない。

松野 この間あるところで医者のお話が出て、私は慶應の医者に「私はもう慶應病院に入りたくない。死亡報告が一番多いのは慶應病院だ」と言ったわけだ。そうしたら、「それは松野さん、当たっていますよ。慶應というのは出来・不出来があつて、九〇点の医者もいるが四〇点の医者もいるんです。そこへいくと東大は平均していて、あいつたちは勉強しますから、八〇点ありますよ。私だつてどっちかといえば、東大病院に入ります」なんていう。慶應はできるのは九〇点、それから馬鹿もいますから、カネアゲ待みたいなのが時々いるから、それは四〇点ぐらいしかない。平均して東大は安心だ。私だつて病院なら東大に入りますよというんだから。

小池 東大の人が変に左翼だつたりしたら大変じゃないですか。

松野 思想の注射される（笑い）。やはり東大というのは権威があるんです。東大というだけで。

伊藤 病気は治りますか。

松野 目をみはる。「東大のわりにはあれは頭が悪いね」という

意味は、東大のレベルがいいということだ。だから、「慶應のわりには頭が悪いね」とは言わないもの。東大のわりには頭が悪いねとはいう。東大というのはひとつの権威を持っているんだ。どの社会でもそうだ。それは大したものだ。

伊藤 とりわけ大蔵省ですね。

松野 あなた方はなんでもないと思っているけれども、われわれからみると、東大というだけでも。「東大のわりには」ということは、東大は頭がいいということだ。「慶應のわりには頭が悪いね」という言葉は出ないんです。

伊藤 「慶應のわりにはあまりスマートじゃない」とか、そういうことは言いますね。

松野 あいつたちはちよつと勉強しますからねと言っていた。さすがに私たちよりも勉強しますからね、と。だから、東大の医者のほうがいいんです。

小池 医者は勉強よりも手先でしょう。なまじつか遊んでいたぐらいの方が手先が器用でいいかもしれません。

松野 東大というのは、いまはやっぱりひとつのレッテルだ。一同 どうもありがとうございます

政局関連年表

「加藤紘一事件関連年表」

二〇〇一年十月十九日

加藤元幹事長の事務所代表の佐藤三郎が、法人税法違反容疑で元社長らが逮捕された大手芸能プロダクション旧ライジングプロダクションから約一億円を借り入れていたことが判明。

二〇〇二年一月十日

東京国税局が、佐藤三郎の事務所などを所得税法違反容疑で強制調査し、家宅捜索。

二月十六日

加藤事務所前代表の佐藤三郎が一年夏、道路維持管理会社を設立する際の出資金などの名目で山形県内の企業六社から計一億円を集めていたことが判明。

二月二十一日

加藤元幹事長事務所の佐藤三郎前代表が二〇〇〇年、東京都内のマンションを約八千二百万円で購入した直後、元幹事長の後援企業の役員に一億円を転売するとの念書を交わし、役員から先に六千万円を受領していたことが判明。

三月六日

佐藤前代表が集めた不透明な資金五億円の詳細が判明。

三月八日

東京地検特捜部が佐藤三郎秘書を逮捕。

三月十八日

加藤紘一元幹事長が自民党に離党届を提出。

三月二十八日

加藤元幹事長が佐藤秘書から受け取っていた一億円を自宅家賃などに充てていたことが判明。

四月八日

衆院予算委員会で加藤議員の参考人質疑。加藤議員は辞職を表明。

松野頼三 オーラルヒストリー

第16回

[2002年2月19日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

■鈴木宗男と外務省のいとなみ

伊藤 よくまあ、いろいろなことが起こってくるものですね。

松野 この一ヶ月のあいだにいろいろなことが起きていますね。「アッシュが日本の国会で演説している様子がテレビで実況されている」アメリカというのは、まるで「力」が来たようなんだ。繊細なものではない。経済なんていうのは放ったらかしだ。なにか日本の外務省が主体性をなくしているような気がするね。

伊藤 軍隊のない外交というのは、そういうものですよ。

松野 弱々しいね。今度のことは医者でいえば誤診だ。

伊藤 この前の速記録を見ていたら、ちょうど「鈴木宗男さんが議運の委員長になった、これは云々」という話でした。その後、田中外相の更迭から始まって、いまは大変な騒ぎじゃないですか。この一ヶ月のあいだにいろいろなことが起こりましたね。支持率もこの前は七九%とっていたのに、五〇%を切ったのかな。

小池 まだ切っていません。朝日「新聞の調査で」は切りましたけれど、ほかの調査では切っていないですね。

佐道 新聞によって五%ずつぐらいいばらつきがありますね。それでも五〇%前後を維持しています。

松野 まだ世論調査の結果が出る前、田中真紀子が辞めた翌日だったか、自民党は最悪だと思ったから、小泉に「おい大丈夫か」と聞いたたら、「大丈夫です」と言う。「おろおろしていたら、君は主体をなくすぞ」「絶対耐えます」「まっすぐ行きなさい」と言っていた。それで翌日の世論調査を見たら「支持率は」五〇%に落ちていた。私は落ちるだろうと思って、「大丈夫か」と言ったんだ。「君を変えたら小泉じゃなくなるぞ」「大丈夫です」ということだった。

彼が大丈夫ですと言ったのは、外務省の改革をやるからだとい

う感じだった。ところが私の考えでは、外務省「改革」ではないんです。外務省の「革命」を国民は望んでいる。それは田中真紀子でないとできないことだ。改革を望んではいないんだ。外務省の革命的変革を国民は求めている、それは真紀子でなければできない。いくら川口「順子」がよくやったとしても、それは妥協・改善としか見ない。田中真紀子には革命を期待する。そんな印象を私は言ったけれど、本人は、改革は田中以上に川口にやらせるから大丈夫、と考えたんでしようね。たしかに改革案を出しました。出したけれど、ちっとも国民は拍手をしない。一步も下がらずにやっているようですけれどね。そのほか医療問題もそうだ。「下がったら、君は終わりだぞ」と言っておいた。

伊藤 先生は鈴木宗男という人は、全然ご存知ないですか。

松野 知らないことはありません。親しくはない。人間は知っています。三木内閣の時に、さんざん三木に反対をして、私と総務会でやりあつたこともあります。

伊藤 三木内閣のころ、「鈴木氏は」もう総務なんですか。

松野 総務ではない。「私が」総務会長の時「一九七六年」に、私が三木を支持するからといって、二十人ぐらいに取り囲まれて、ワーワー言われたことがある。その代表が鈴木だったことを覚えている。二十人ぐらいで私を取り囲んで、「三木を辞めさせる。これが党の決定だ、世論だ。君はなんだ」とか言って、私を吊るし上げた、その筆頭が鈴木だった。若いわからんやつがこんなことでは国を誤るな、と腹の中で思っていた。

伊藤 あれが、もっぱら外務省の中に入りこんで、勢いをふるっているという一般の評判ですね。

松野 事実でしょうね。外務大臣は一年で替わるので怖くない。役人からみると族議員のほうが怖い。族議員はいつまでも替わらない。少なくとも十年ぐらいは替わらない。族議員のほうが、大臣よりも影響力があるんです。

伊藤 それは外務省に限ったことではないわけですね。

松野 どこでもそうだ。どの役所でも、大臣は一年で替わるけれど、族議員は替わらない。予算を取る時も、それから行政改革でも守ってくれる。族議員のほうが力になる。しかも委員会にいるでしょう。だから毎日顔を合わせているんだ。大臣は一年で替わるけれど、族議員は十年替わらないから、族議員の方を怖れるんです。

有馬 外務省というか外交族の族議員の利権的なバックグラウンドは、どういうものになるんですか。

松野 それはODAと賠償だ。昔は賠償だった。代表的なものはフィリピン賠償。

有馬 例えば鈴木宗男みたいな人が党内で頭角を現してくる時の、初期の取っかかりとか手掛かりとかいうか、それは何になるわけですか。

松野 族議員は、ほか「の省庁」には二十人ぐらいいるんですが、外務省にはあまりいないんです。いないから、鈴木は一名ぐらいで牛耳っている。外務省の族議員というのは、いままでいなかった。利権屋はいたけれど、族議員はいないんです。

伊藤 だけど、ODAは昔からかなり大きな利権じゃないですか。松野 大きいけれど、あまり私たちが手をつけなかった。外国があるんだ。相手国、フィリピンなら東京のフィリピン大使館が問題なんです。日本の利権よりも、向こうの方が上なんだ。向こうはマルコス政権だから、向こうが先にコミットをとるんです。日本の利権屋が取ろうとしても、向こうが横取りする。後進国内閣、政府が替わる度に問題になるのはそこでしょうね。だから、まともなものあまり手を出さなかった。今度鈴木を見ると、相手国にまで手をつけている。日本と外国と共同でなければできない。向こうの政府代表と組んでやっているんでしょうね。だから鈴木宗男の後援会長がそれに入札しているんですね。

伊藤 相手国の政治家とある一定の比率で分け合うということですかね。

松野 そういうことでしょうね。相手国からその業者を選定させるんでしょうね。そのやり取りがなければできないでしょう。

伊藤 鈴木宗男のそういうやり方は前から知られているようなことを言っているけれど、新聞なんかはあまり報じていないですね。

松野 そういうことがありましたね。今度の入札をみると、日本の側で入札すると、鈴木宗男の後援会のやつしか入札に入っていないんですね。あとはどうせ駄目だとわかっていから応じないんだ。だから入札というけれど、本当は指名ですよ。

伊藤 選挙の時に相手候補を降ろさせるといふのと同じだ。

佐道 目のつけどころがよかったですね。人がまだやっていないところに利権を見つけたわけですから。

小池 そうですね。ロシアもそうですし、アフリカもそうですね。伊藤 いままでいろいろ噂があったのに、どうして検察は目をつけなかったんですかね。

松野 検察も、事件が出れば手を着けるでしょうね。検察から手を着けるためには、何か事件が出てこなければならぬ。こちらから告発しない限りは出ませんよ。脱税か何かが出てきて、それが広がった時には検察は出るけれど、告発者がいなければ、検察は気がついていても手を出さないでしょうね。

佐道 政治献金という形で、額を小さくして出しているんですね。本当はそれだけではないんでしょうが、政治献金という形でしか戻っていない。

松野 それは誰かが告発してくれなければ、検察もやりにくい。誰か告発してくれば検察は動くでしょうが、告発してくれないと、検察が不正を取り締まるということは直接にはなかなかやらないでしょうね。

小池 事件になっても亀井「静香」の例のように、許永中と会っ

ても。

松野 あまり検察が出ると、検察ファッショと言われますからね。だから、検察は第二で、事実が出たらやるけれど、出るまでは、自分から指を突つ込むような警察的行為はやらないんだ。

小池 やはり警察との棲み分けがありますからね。

佐道 あまり鈴木宗男さんばかりが叩かれていると、ちょっと行き過ぎじゃないかと橋本派が反発するということがあるんじゃないかと思うんですが、どうでしょう。

松野 検察というのは不思議で、与野党バランスとる。加藤「絃一」のことが出ると、鹿野「道彦」が出る。必ず与野党バランスをとる。

小池 鹿野さんは責任を取りましたね。

松野 鹿野は、まあ大したことないが、かわいそうだ。悪いといえば、加藤の方が悪いでしょうね。加藤は検察も事件にしているから。鹿野の方は、鹿野自身には影響はあまりありませんよ。秘書の給与を「親族企業から」払ってもらったというのは、まあね。私たちはほとんど会社から秘書に給料を払っている。ただその会社が事件にならないからいいわけだ。その会社が事件になると駄目なんだ。その会社が事件にならない方がいい。みんなそうですよ。善意の寄付でしょうね。それが脱税とか何か事件になると、悪意の給付になるわけだ。みなそうですよ。

伊藤 先ほどの話で、松野先生は田中真紀子にだいぶ期待されていたような感じがしますが。

松野 私は改革に期待していた。この女性と長くつき合う男はいないでしょうね。これとは怖くてつき合えない。毒が強い。フグは食いたしというが、それは危ない。だから長くはつき合えない。この時期に私は期待した。外務省に巣食った悪いところの改革をやるには田中真紀子しかない。とても常人ではできない。改革に私は期待した。もう一年いたら面白い。その反面、閣内では飛

び跳ねて悪い。それは私もわかっている。長くつき合える女でないけれど、改革までいいと思っていた。

一番苦労したのは福田康夫でしょうね。それは誰とも合わないんだから。マッターホルンみたいに飛び抜けている山は、誰もそばへは行きませんよ。連峰にはなれない、連山にはなれない。

佐道 今回の田中外務大臣の更迭でよく皆さんがいうのは、去年など田中さんの資質を問うような問題があった時だったらもっと違つただらうに、更迭するタイミングがあまりにも悪すぎたんじゃないかということですが。

松野 今度は、福田康夫が持ちこたえられなかった、お守りができなくなつたんでしょうね。福田は法案を通すという使命があるが、その邪魔になる。おそらく福田がこらえきれなかったんですね。法案がつぶれる。補正予算なんて一週間遅れたってなんでもないんです。役人的には、補正予算が遅れると本予算が遅れるというけれど、そんなのはどっちだっていいんだ。

伊藤 それで理由なんですか。

松野 そのため真紀子に早く片づけろということですね。真紀子がますますそれを遅らせる、それが理由でしょうね。法案を混乱させたという理由で真紀子更迭になつただけだ。

前から溝もあつたでしょうね。外務省のあの事務次官は福田康夫が任命している。真紀子はあれではなくて、加藤「良三」にしたかつたんだ。野上「義二」の任命は福田康夫だから、その時から外務省の官僚は福田ラインについていくんです。だから田中真紀子はますます孤立していた。その争いの中に入ったんでしょうね。

伊藤 いまの構図だと、鈴木宗男はどこに入ってくるわけですか。

松野 鈴木宗男は外務省に入っています。野上事務次官の方に入っています。

伊藤 そうすると、福田康夫とはいいいわけですか。

松野 わりにね。この前、ウズベキスタンに行った時もそうじゃないですか。だから官邸は、どちらかというところと鈴木宗男を使っていたんだ。ソ連でも使える。

佐道 特派大使で行ったんですね。

松野 やつを使っていたんだ。鈴木宗男をいいとは思わないが、使う分には薬味みたいに使えるぞと思っていたことは事実です。ウズベキスタンに親書を持たせたり、森「喜朗」と一緒にソ連に遣ったり、外務省は毒と知りながら使ったことは事実なんだ。小池 ウズベキスタンは中央アジアの大国ですからね。

佐道 特使は、橋本「龍太郎」さんとか森さんとか、総理経験者がやっていたのに、一人だけ鈴木さんが特使で行っているんですね。あれは外務省としては別格ですね。

松野 外務省が官邸の福田に持ちかけて、小泉も使えるなら使え、と言った。そこに私は油断があったと思う。橋本龍太郎が特派大使ですよ。鈴木宗男も特派大使です。冗談じゃない。それから森前総理、これも馬鹿みたいな男で、鈴木に引つ張られて、日ソの四島「返還論」を二島にした。あれなどおかしいですよ。二島返還なんていままでやったことないのに、突如として森になったから二島になった。これは鈴木宗男が官房副長官かなにかで、またソ連との利権屋そのものでしょう。ソ連ぐらい利権に弱い国はないんだ。金がない。公務員の給料でさえ払えない。軍隊の給料も遅配だ。だからなんでも弱いわけだ。そこにムネオ号「九四年に送られた十人乗り四輪駆動車」とかムネオハウス「九六年に援助で立てられた国後島の緊急避難所兼宿泊施設「友好の家」とかをつくる。それも向こうから要請を出させたんだ。その要請に応えて人道援助といつてやっているんだから、もう出来芝居ですよ。やらせそのものだ。向こうから出させて、それを人道援助といつてやる。道の救世主が鈴木宗男だなんて、冗談じゃない。やっている工事はみんな自分の後援会長に受けさせている。国から見た

ら大変なことですよ。

伊藤 福田さんはそれを知っていてやっていたんですか。

松野 知っていて、それがソ連に使えるなら。またソ連が、鈴木宗男だと会うんだ。向こうの外務大臣が日本に来た時、個人で会うのは鈴木宗男だけです。こんな危ない人間は、ラスプーチンそのものでしょう。弓削道鏡みたいだ。危ないけれど、使えるなら使えという感じだった。そこに私は甘さがあったと思う。便利なものはないか切りにくいんです。毎日毎日、庭掃除に来ると、その書生はかわいくなる。だから、出世の道は庭掃除に行けばいいんだ。

伊藤 草履取りの話ですね。

松野 犬が好きなら、犬の散歩だ。これをやっているうちにどうとう入り込むというのが、たくさんいるんだ。古賀政男のところ、古賀一門はみんなそうです。古賀政男のところに行っていた新しいミュージシャンは、みんなあそこの家の草履取りと犬番から出世している。

吉田「茂」さんもそう。毎日、毎日、毎朝玄関に来る代議士がいる。ただ「おはようございます」と言うだけだ。それが広川弘禪だ。毎日来るものだから、吉田さんは「あの代議士は誰だ」というから「広川だ」ということになる。「おはようございます」と言うだけだ。何か特に言うわけではない。「おはようございます」と言うだけで毎日来る。そのうち「おはようございます」、「こんにちは」と挨拶する。だんだん挨拶して、そのうちにあれを幹事長にしちゃったものね。

それは誰でも、偉い人間ほど弱みがあるんだ。強い人間ほど、信長でもそうですが、みんなが遠巻きにして来ない。その時、ちよろちよろ身近なところに来る雀みたいなのがかわいくなる。大きな鳥は来ません。鷹と鷲は共存しない。鷹と雀なら共存する。それがいつのまにか、草履取りから天下を取る。それは吉田さん

の時の広川を見ているとつくづくわかる。大野伴睦は行かない。これは鷹と鷺だから、構えている。広川は雀だから、どっちにも行く。真ん中にいる。その人心の機微はどの時代にもあると思います。私は、いまでもあると思う。

伊藤 鈴木宗男もその伝だな。

松野 それから上手です。私は「鈴木は」小泉に取り入るのが上手だったと思う。だから、小泉には「いつでも一身をお預けします」なんて言う。だから小泉は、その態度を見ていて、鈴木君は潔く自分の一身を預けてくれた、議連の委員長を辞めてくれた、と思っただけでしょうね。そういう意味ではないんです。鈴木は取り入れるためにすべてを上手にやったんだ。

佐道 小泉さんとしては、「支持率が」これほど下がったのは意外だったのではないのでしょうか。

松野 内容が、ムネオ号なんて聞いて、予算委員会で驚いたでしょうね。私はこの前、福岡「政行」という白鷗大学の教授と食事をして話したが、福岡はカンボジアのODAをやって、ほうほうに学校をつくったという。「学校をつくったなら、フクオカ大学でもつくったのか」と私は聞いた。「いやあ、松野さん、私は名前をつけません。アフリカのスズキムネオ橋みたいに名前はつけません」と言った。スズキムネオ橋というのがアフリカにあるというんです。「私は気が付かなかつた。橋にアラビア語で書いてあります。だから、案外気が付いていません」と福岡が言っていた、「私は鈴木宗男じゃありませんから、スズキ橋はつくりません。だからフクオカ大学なんていう名前はつけません。私はそんなおこがましいことはしません」。

福岡はそのときに、スズキムネオ橋といった。そんなもの聞いたことがない。アラビア語で書いてあると、案外その橋を見ても日本人は気がつかないんじゃないですかと言っていた。それで、「サンデー毎日」と「週刊朝日」の記者に、「こんな話があるが、

写真でも撮ったら面白いから、写真でも撮ってみるか」と言ったんです。そうしたらたくさんあるらしい。一つや二つじゃない。鈴木宗男が口を利いたのは、みんなスズキ橋になっっているらしい。写真を撮ると面白い、でもアラビア語で書いてあるという話だよ。

そういうのはどの役所にもいるんです。それを私は怖れている。これは外務省から出てきたけれど、建設省、郵政省、どこにでもある。厚生省もすでに出てきましたね。今度農林省が出れば、また農林族が出てくる。族議員がいるところにすべて問題がある。私も農林族のボスだったからわかる。農林大臣より、私の方が威張っていたんだから。農林大臣なんて誰がなつたつて構わない。役人はみんな私の方に向いているんだから。「大臣は」ほどほどでどうせ替わるんだ。だから農林大臣が誰だつて私は怖くない。最後には私も農林大臣をやりましたけれどね。

伊藤 その時はいいわけですね。

松野 その時は、まあ。そこで今度は私が悪いやつを知っているものだから、悪いやつをクビにしたので大問題になったことがあるんだ（笑い）。知りすぎているから、あいつが悪いとわかっているから、すぐに「おまえ、辞表を持ってこい」といって、大騒ぎになったことがある。農林の事務次官にあした辞表を持ってこいと私が言ったものだから、困ってしまった、すぐ官房長官のところへ行つたんでしょね。佐藤が「おい松野、あれはやり過ぎだ」という。「それじゃあやめましょう」といって、一週間ぐらい保留して、やめたんですね。だから、悪いことを知っているだけに困る。その前も誰が農林大臣になつても怖くない。予算編成の時、それから農林省の行政法案、通す、通さないはみんな私たちが決めるんだ。だから、農林大臣に誰がなつても怖くない。それが族議員の私の体験談です。それがまだ残っているのです、私は啞然としている。それは一昔前の話なんだ。

佐道 いま民主党が、鈴木さんの話で一所懸命批判していますけ

れども、民主党だって、旧自民党系の人がいっぱい行っているわけ、あまり他人のことばかり言っていられないところもあるのではないかと思うんですが。

松野 あるでしょうけれども、いまはもう駄目ですからね。逆の立場で攻めやすいでしょうね。私ならうんと攻める。

佐道 小泉さんの人気は下がったんですが、民主党の支持率は上がらないし、いまひとつ攻め手を欠いている気がします。

松野 なんと言っても本当の人气が生まれませんね。それはひとつは鳩山にも責任があるでしょうね。私もあの時つくづく言ったが、兄弟一緒だとよかった。兄弟で一人前なんだ。それが、邦夫が向こうへ行ってしまった。そのとき私は邦夫に電話で「お前、そんなことするな。二人で一足の靴じゃないのか。靴と下駄と履くよいうなことをするのは、君のためにも兄貴のためにもならん」と懇々と言ったけれども、いくら言っても、本人は半分はわかるけれども、どうも感情が残った。弟のほうが先に代議士に出ている。そこで政治家としては私が上だという。一時はよかったですからね。鳩山は二人揃って助け合っていけば、もう少し人気も出るでしょうが、やはり一つ大きくやりにくいところでしょうね。

佐道 マスコミは、いま三月危機だの四月危機だの、いろいろ言っていますが、可能性はありそうなんですか。

松野 危機がなければ小泉は乗り切れないでしょうね。

伊藤 危機はあった方がいいですね。

松野 あった方がいいんだ。なければ駄目だ。危機があるから、向こうが下がるんでしょう。どちらかというところ、小泉のためには危機がないと難しい。一番困るのは、遠巻きにして危機を避けようとする行為だ。ということとは、「内閣が」法案を出しますね。それをいつまでも与党が延ばすんだ。それが一番困る。否決すれば解散になるでしょう。否決しないで延ばして、修正案でやられると困る。党と政府の真ん中の修正案。それが遠巻きにするやり

方だ。だから本当にいやなら否決してくれば、一つのやり方だ。だから小泉には危機がなければいけない。与党は危機をなんとか避けたい。それが今の状況でしょう。危機になった時は小泉が強い。いまのようにして遠巻きにして危機を回避されると、小泉は弱い。人气が下がるでしょうね。その一点で、いま私が特に彼に注文しているんですが、「猪突猛進で行かなければ、君は人气が得られない。遠巻きにされれば、時間に暗殺されるよ」と言うんです。

世論「内閣支持率」が四〇%になれば危ないでしょうね。五〇%なら解散できるんだ。まだ解散できる。四〇%になるとなかなか解散しにくいでしょうね。小泉の解散は五〇%に上っているからだ。その証拠に、参議院は反抗が弱いんです。抵抗が弱い。弱いのは、半分のものが小泉人気で上がって「当選して」いるでしょう。小泉の洗礼を受けている。衆議院は森内閣「時代の選挙で当選している議員」だから、小泉の洗礼を受けていない。だから一回小泉解散で洗礼を受ければ、抵抗勢力も言いにくいでしょうね。参議院の連中は全員、自分が選挙民に訴えてきたんだから。自党内閣を支えて、小泉内閣を支えて、と言ったんだから。衆議院も「解散総選挙に」なったら、やはり言わざるを得ないでしょう。総裁小泉に反対だと言って出てくるやつは十人もいませんよ。十人ぐらい変人がいるかもしれませんが。十人ぐらいは、自信があるんだ。

私は池田内閣の時に、池田の解散で、「池田と私は相容れない、こういうインフレ政策は大嫌いだ」と言いながら、反池田で選挙をやったんです。そう言い切って当選できる代議士は一割はいません。私はその十人のうちの一人だった。池田内閣反対だった。池田の政策はよかつたんだけれども、態度と姿勢が気に入らない。それで、私は藤山愛一郎を担いだんだから。「池田は」私を馬鹿にしやがったからね。だから、政治には理論もある、正義もある

が、結局感情が入りますね。それから経験だ。実行しなければ駄目だ。

私は池田と喧嘩をして、それが田中との争いになり、やってみただけども、いま考えて良い悪いよりも、やったことの方がよかった。やらないより、やった方がよかったと思う。だから安田講堂も、やらないよりやった方がよかった。やらなければ、いつまでもわからない。やってみて善悪がわかる。だからやった人の方が、かえってああいふことはやるべきじゃないということがわかる。闘争の激しい全学連の連中ほどいま善良な社会人ですよ。だから私は政治というと、やらないよりやった方がいいと思う。悪でもやった方がいい。そうすると、その悪を二度とやらないという反面教師になるでしょうね。

そういうことは私の人生で体験して、喧嘩し、失敗し、叩かれ、軽蔑されながら来たけれど、それを逆にするなら、黙って盲従したより、やった方がよかったです。いつか、それを人に教えられるもの。おれはこういうことをやって失敗したと言えない。失敗もしないものは教えられないもの。何もしなければ教えられない。人生というのは、やったから教えられる。善良なものほど教科書にはならない。悪くても経験したものが教科書になるでしょうね。歴史はそういうものだと思つて、いろいろやってみただから、こうやってしゃべれるんです。

■戦後の政治家評

松野 私もずいぶん、ずるいこと、悪いことを見た。感情、好き嫌いもある。「壁に掛かっている戦後の歴代首相の似顔絵（土田直敏画）を見ながら」「戦後の首相は」二十六人いるけれど、二十六人つき合っているけれども、本当に好きだという人間は五人

ぐらいしかいません。あとは、なんだこの野郎と思う。ろくなことをしていないで、こんな馬鹿がよくなった。竹下なんかにはそう言いたいですね。こんな馬鹿がなったから、こんなになったんだと言いたいぐらいだ。

伊藤 尊敬する方には、三木さんなんかが入るわけですか。

松野 入りますね。やはり吉田の頑固さ、三木の骨太さ・骨の強さ。叩かれても、叩かれても三木は三木だという。これは吉田さんの時から叩かれているんですからね。そうして最後に花が咲く。踏まれても踏まれても、麦の一粒みたいに、それが三木でしょうね。吉田はとにかく頑固で頑固で、やはり国家中心という感じで、信義を貫いた。私がかわいがられたというよりも、尊敬する人間はそんなところですね。

伊藤 福田さんはどうですか。

松野 福田は尊敬はしないけれども、親しめる男です。これは善良でした。要するに、悪いことができなかった。「もう十億出すと、田中に負けないで中曽根を買い戻せるぞ。あと十億あの銀行にいつて菅原に頼んでこい」と言ったら、「松野、そこまではおれはできないよ」と言つたもの。「お前は善良だなあ」と言つた。「いやあ、おれもいろいろ言うけれど、限度を越すわけにはいかない。自分の良心の痛むことは、松野、おれはしたくない」。善良の一言だ。それは田中・福田の総裁選挙の三日ぐらい前です。

伊藤 岸さんはどうですか。

松野 岸さんは、これはもう超越していた。岸というのは、権力を超越して無欲でした。自分が長いあいだ戦犯であった、戦前の自分の行為に対して非常に責任を感じていた。戦後の岸は仏の岸だというふうには、世俗から脱皮してしまいました。それで、せめて最後にできるのが、安保改定だった。これを自分の責任としてやる。世間に向けて何も悪いことをしない、無欲、色気の抜けた岸信介でした。

伊藤 鳩山「一郎」さんはどうですか。

松野 鳩山という人はそのままの、生まれたままのお人好しだった。顔も童顔だったが、こころも童心、生まれたままだ。だから年中、失言ばかりする。その失言が、マッカーサーにピンと来たわけだ、早く日本民族を立ち上げようと民族主義を説いた。マッカーサーの占領政策に支障をきたす。占領政策を批判する。よし、鳩山に何かないかと無理に本か何かを見つけた。それは戦争中の本ならみんなありますよ。その本で追放にしたんだから。これは童顔、童心、そのものでしたね。

それでも池田というのは本当に財政が上手だった。恐るべきほど財政を使う。特にあの人がやったのが、税の特別免除ですね。これは大蔵大臣が決めればいい。これをまた、使うことを使うこと。お医者さんにも使った。輸出業者にも使う。輸出すると特別免除になる。輸入権を与えたんだ。あの時は輸出がなくて、輸入が高いでしよう。だから輸出を一億ドルすると、輸入権を一億ドル与える。一億は損しても、一億ドルが三倍になって利益は上がる。そういう特別免税をやったり、輸出入銀行をつくったりした。開発銀行もつくった。もうめちゃくちゃな金儲けのやり方をしましたね。

また、自分の懇意なところに利権を与えた。株は野村、山一での株の操作。あの人は金融利権が上手だった。要するに土木利権とか公共事業利権ではない。金融利権だから見えななんだ。その一番最後に残ったのが、このあいだの長期信用銀行です。池田がつくったところは一番よく使った。使った抜け殻が残っていたのが長期信用銀行だ。彼の金融利権は見事なものだ。それから株だ。だからわからないんだ。土木利権はすぐわかるでしょう。入札するから。金融利権というのはわからないんだ。中でどう動いているか。それが株の価格に出てくる。だからあの人は株の名人でした。

伊藤 だけれども、日本の高度成長に寄与したんですね。

松野 寄与した。それはみんな金融利権。利権というとおかしいが、金融を最大に使う。いまこそ池田が出てくれば、上手でしょうね。それだけに、また本人も金には執着が強いんだ。たしか大学を出て、すぐに病気をしたのでしよう。奇病だった。

小池 象皮病か何かですね。

松野 三年ぐらい、たしか大蔵省に入ってすぐ入院した。そのあいだ、金がないものだから、寝ながら株をやっていた。それで入院費も、もちろん利益も得た。株には詳しくあった。何がどうするという。私はそれを聞いていたけれど、大臣室へ来ると、「新聞の」一面をスツと見る。あとはスツと株の欄を見る。スツと見ただけで動きがわかる。「大蔵大臣、どうして株の欄を見るんですか」「いや、これは指数だから、おれは見ると責任がある。だけれども、やっちゃ駄目だよ」なんて言うって、やっているんだ。政治家は株に手を出しては駄目だと言うけれど、家族か何かやっていたらばわからない。私たちの時は、株を買うということを政治家はしてはいけないかった。

私のおやじも株をやったけれど、株屋はいつも裏口から、夜しか来なかった。立派な紳士だ。子どもの時、なんだろうと思った。そうしたら、株屋さんは政治家の家に昼間来てはいけないんだという。だから、夜こっそり来る。それぐらい政治家と株というものは、利権のシンボルだ。今はその株のことを平気で代議士が言うしね。政調会長のところに株の価格が表とグラフで出ているのを見ると、ずいぶん世の中、変わってしまったなあとと思う。株というのは裏でやってもいいが、表でやるとはいけないというのが、戦前の政治家だった。池田も戦前だから、株のことは言わない。だけれども実際自分はやっていった。

いまこそ山崎「拓」なんていうのは株のことをさかんに言っているが、知っていて言っているのか、知らないで言っているのか。

ただ、小泉は株のことはわからんと言う。これは本当です。株のことはわからんというのが本当だ。いま池田なら、あんな金融政策はやらなかったでしょうね。私は不良資産とかいうのは、大変な診断間違いではないかと思う。腸が悪いのに胃を切ったようなものだ。不良資産の国費注入が、私は大失敗だと思う。わからないうね。池田ならもつと上手にやっただでしょうね。

佐道 いまの政治家で株のことがわかりそうな人はいますか。

松野 そのあと真似をしたのが、水田三喜男だった。水田は日興證券。野村、山一は池田。愛知揆一が上手でしたね。いまなら、池田は名人、愛知は達人でしょうね。

愛知揆一というのは相互銀行をつくった男です。昔の無尽です。それに「銀行」という名前をつけるのに、銀行は大反対だった。それで「相互銀行」という名で、銀行に「相互」をつけた。それで相互銀行にとっては愛知が終生の恩人だ。あれからずっと相互銀行協会が愛知には終生政治献金していますからね。その代わり、銀行から嫌われる。それから地方銀行も愛知を嫌いましたね。

それから個人タクシー。榎橋渡が運輸大臣の時です。これはタクシー業界が全部反対。運輸委員会は与野党通じて大反対。それは既存の法人タクシーが全部手分けをして与野党に頼みにいったからだ。運輸大臣の榎橋渡ただ一人孤立だ。役所も反対ですよ。それで榎橋渡が二十台かなにかの個人タクシーを許可した。大変だ。それこそ郵政大臣の小泉が郵政民営化をやる以上でしょうね。運輸省も反対、タクシー業界も反対、委員会も反対、それで榎橋渡が個人タクシーを許可した。吉田内閣の末期ではなかったでしょうか「昭和三十四年、第二次岸内閣改造」。榎橋がやったから、個人タクシーはいまは何十万台でしょう。その時は大変だった。もちろん利権にはならなかったけれど。

ときどき、そういうことがある。またエイズのことを考えても、官に対抗してやると、一つの大きなホームランを打つようなもの

だ。下手だとつぶされるんですね。だから榎橋は、そのときは奇人変人だったけれども、やはりやりましたね。小泉は郵政民営化。やはりちよつと変わって、役所に対抗しうる力があるんだ。

伊藤 最近の総理として、やはり小泉は出色だということですか。松野 改革は出色です。ただ弱いのが心配だ。周辺が、彼についているものが弱い。同調者がもう少しね。それは榎橋でも、委員会や役所は表面は反対だけれども、国民には賛成がたくさんいた。だからいま、国民に賛成者はいるけれど、永田町に弱い。いま自民党の中で「小泉賛成者は」三分の一がやっただでしょうね。

まあ、鳩山「由紀夫」を一所懸命応援させてきたけれど、鳩山もさすがに困ってしまった。「民主」党内で、小泉に行くなら、鳩山を降ろすと言いつつ出すものだから。「私は」鳩山にも、「もうあまり近づくなよ」と言っておいた。このあいだ反小泉の激しい演説をしたから、党内は鳩山でまとまった。これで鳩山は九月の党首選挙は大丈夫なんだ。小泉に近づくこと追いつくというんだ。それは当然でしょうね。菅「直人」も反対していた。だからしつかりやれよ、思い切つてやつてごらんと言った。

伊藤 昔も今度は困っているんでしょう。

松野 昔も困っている。だから、小泉には「一本気で行け」とさ。さんざん私も激励しているんだけど、それを変えられたら困る。

伊藤 まあ、変えられないでしょう。

松野 もう変えられないけれども、最後には解散権をどう使うかだけでですね。

佐道 先ほどの先生のお話だと、三月危機なり、四月危機なりの危機がないともたないということは、対決、対決という形で行かなければいけないということですね。

松野 解散しなければ駄目だという意味なんです。解散するチャンスはどうつかむか。向こうは解散させないように遠巻きにする。遠巻きにされれば負ける。解散のチャンスをつかめば、小泉内閣

はあと二年もつ。今年のうちに解散しなければ駄目でしょう。もう解散権を使えないでしょうね。

小池 今度の「医療費負担」三割ですよ。総務会で野中「広務」が党議拘束を外すということを言い出しましたね。そうすると、解散のチャンスが出てくる。

松野 そういうものとしてやってくれて、否定してくれればいいんです。今年の一年、ということとは五〇%支持のあるうちにやらないとできないという意味なんです。解散しなければ、小泉内閣はもう終わりなんだ。短命か、寿命をなげらえるだけで、解散するチャンスをなくす。それには五〇%の世論の支持がなければ駄目だ。五〇%の世論は、今年の春までしかないだろうと思う。この五〇%があるうちになんとか解散のチャンスをつかめ、と私は言っている。それで、めちゃくちゃに三割で頑張ってみたりして、やっているわけです。だけどみんな解散が怖いものだから、公明党なんかすつかり乗ってしまった。

小池 公明党はただ乗りでしたね。一番反対しなければいけない公明党が。

松野 一番反対しなければいけないのが一番最初に乗っている。「坂口力」厚生大臣も辞めると言ったのに！。

佐道 そうですね。いつのまにか。

松野 「公明党が厚生労働大臣に」辞めるなど言って止めたんです。「厚生労働大臣が」辞めれば、「小泉は」もう公明党を切り捨てるつもりだった。補充しない。公明党が辞めれば、もう公明党を閣僚に入れないで、連立を解除する気でいたわけだ。そうすると、解散の！。

伊藤 向こうも察知したわけですね。

松野 察知した。一晩で、あの大臣がとうとう賛成した。

伊藤 そんなことなかったような顔をしているじゃないですか。

佐道 いまの段階で解散すると、民主党も大混乱するのではない

ですか。

松野 民主党も大混乱になるけれど。もちろん民主党が勝つとは思わないけれども、一三〇が、一四〇か一五〇にはなるでしょうね。

佐道 割れるということはないですか。

松野 それはありません。野党はいまのところはありません。あと行くところがないんだもの。土井たか子のところへ行くやつはもういませんよ。

佐道 それはあり得ないでしょうね。

松野 土井とか、あのキャンキャン言う福島「瑞穂」とか辻元「清美」とか、あんなののところに行くやつはいませんよ。あそこへ行くなら、田中真紀子のほうへ行くでしょうね。まだ、多少インテリがある。だから行く場所がない。あとは小沢「一郎」の自由党ですね。小沢のところは不気味なところで、北朝鮮みたいなところでしょうね。ワンマンという意味では北朝鮮の独裁に近い。これはちよつといかんでしょうね。あれは思想的、権力的にワンマンなんだ。あれの言うことをきかないと、すぐ除名になる。あそこに行くのもちよつとね。

佐道 いま小泉さんを出して対決ということで解散ということになったとすると、自民党内も小泉対反小泉という形になるわけですね。そうすると、小泉さんの方も自分の応援団も立てないといけないということになると思うんですけれども、そういうことは可能なんですか。

松野 自民党の中は二つに割れるでしょうね。

伊藤 分裂選挙ですね。

松野 分裂選挙だけれども、自民党という看板はどちらも外さな

いんだ。

小池 昔の派閥選挙みたいなものですね。自民党〇〇派というもので

松野 それで、おそらくその数は半々になるでしょうね。

伊藤 半々になれば「小泉の」勝ちですね。

松野 勝ちです。いま三分の一だから、半々にはなるでしょうね。新人が出てくれば小泉についてくる。また、小泉と言わないとすれすれのところに行かないでしょう。そこで問題になるのは、総理指名のときだ。総理指名で自民党から二人出たときはどうなるか。やったことがありますからね、福田と大平で。

伊藤 今日、話はそこへ行くはずなんです。

■大平内閣成立まで

松野 福田・大平の総裁指名の時、私は、福田が前総理大臣だったから福田でやれと言ったけれども、大平は大平でやるという。そこで福田・大平の問題が起きたわけだ。大平の方はネクストを言うものだから、大平がなんとなしに強いんです。福田はもうすでに過去に見える。大平は新人に見えるわけです。だから新人の方が自然に党内で勢いも強い。福田・大平を比べるのではなく、福田はもう済んだ、今度は大平だという、追う方と追われる方の違いで、どうも弱い。私は大平が大嫌いだから、福田の方だ。

伊藤 先生はその時は干されてはいたんでしょうが、福田さんの方ですね。

松野 やはり福田です。地位は望まないが、友情は変わらなかつたから。それで私は民社党に話しかけた。民社党が議場で首班指名選挙で入れてくれれば、福田が勝つ。それで、佐々木良作と福田で連立を組もうじゃないか。新党でもいい、連立でもいい。それで佐々木良作に私は交渉に行った。佐々木良作とは年は同じだし、当選回数も一緒だ。あれはたしか満鉄の調査部について、わりにインテリでしたからね。それが民社党の委員長です。

それで佐々木良作を赤坂プリンスに呼んで、「おい、ひとつ政界のために党派を越えて行こうじゃないか。福田へ入れてくれ。そうすれば君と連立をする。仮に反対にあった時は新党をつくってもいい。どうだ」といった。佐々木良作は一所懸命考えた。だいたいぶ乗ってきた。最後の指名選挙の朝、「松野君、福田越夫に同盟に行ってもらえないか。同盟にだけ挨拶してくれば、おれたちはいい。バックの同盟は、おれが行くわけにはいかないんだ。私が同盟に行つてそんな話をすれば、同盟が驚く。福田に挨拶させてくれ。そうすればおれは動く」と言ってきた。しかしいかにしても、もう間に合わない。もう首班指名の朝だもの。「いくらなんだって、佐々木、いまから同盟に挨拶していたのでは、それは駄目だよ。投票の朝だから。佐々木、それは無理だ。黙って入れる。あとで同盟に挨拶でいいじゃないか」といったが、とうとう朝になって実現できなかった。それで彼らはどっちにも関与しなかった。あの時は民社が三十人ぐらいいましたかね。それが私は一番くやしかった。

伊藤 もうその前からずっと「福田・大平の」対立があるわけですね。一期で交替するという約束があつたどうか、そのへんはわかりませんけれども。

松野 保利茂が真ん中で入って、一期二年の交替とした。その時も福田より大平の方が実際は数が多かつた。それを無理に福田に押し付けて、そのかわり一期ということ、大平派を宥めた。それは池田の関係もあるし、田中の関係もあるものだから、向こうが多いんですよ。

伊藤 田中派が向こうについているわけですね。

松野 向こうについている。田中の残党もついていてから、どうしても福田の方に来ない。福田・田中で争っているから、田中派の連中は福田よりも大平に好意的だ。また、福田・田中の争いの時に大平派の連中は田中に行っていますからね。だから、どうし

ても福田の方が少ない。それを無理に、福田を先輩としてやらせる代わりに二期二年というのが保利茂の調停案だったんですね。

伊藤 そういう二人が総理をめぐって出るといふときに、例えば福田側では、どういうチームをつくって動くんですか。

松野 まあ、その時はだいたい反田中というところ、保利茂と、要するに私たちグループは福田についていたんだ。田中・福田の争いの構図が、福田・大平との争いの構図になっていきますね。だから向こうが多いに決まっている。田中の体制と大平の体制が一つになった。全部ではないが、そういう流れだ。だから福田が少数に決まっている。同じ数ではありませんけれどね。だから、福田「が総理」の時はなかなかやりにくかったです。実際は少数でしたから。

「福田と」大平とは大蔵省の先輩後輩だ。役人としての位、評価は全然違いますからね。大平は池田の玄閣番だったんだから。大蔵省の役人の中では秘書官上がりです。官僚秘書だった。信濃町の池田のところに行くとき毎朝、大平が玄閣にいましたからね。玄閣番みたいにしていた。代議士の時は、行くと必ず大平がいて、「やあ、いらっしやい」という。それで、池田の部屋へ案内してくれた。毎日行っていた。その時、黒金「泰美」、宮澤「喜一」もいたんです。黒金、宮澤は、池田は非常に大事にした。ことに宮澤を大事にしましたね。黒金も大事にした。黒金もわりに秀才だった。宮澤もよかった。池田が一番大事にしたのは、宮澤ですよ。

伊藤 それはやはり秀才好みということですか。

松野 自分より頭がいい者には頭を下げた。ことに宮澤は英語だ。池田は「エケチット」と言うんだからね。「エケチット」ぐらいしか池田は知らなかったんだ。それで宮澤に対しては「宮澤さん」ですよ。

伊藤 そうですね。アメリカへ行った時にさんざんお世話になっ

ているわけだから。

松野 それは大変で、「宮澤さん」でなければ、ダレスに物も言えなかったんだ。黒金になると「黒金君」でしょうね。大平は「大平」でしょうね。呼び方が違う。「大平」「黒金君」「宮澤さん」と政治家の中でもはつきりしていますよ。

佐道 先ほどの話だと、大平さんは草履取りからやっただけですね。松野 そうだ。私たちも目の前で叱られているのを見えていますからね。「大平、お前のネクタイは趣味が悪い。そんな田舎つべみたいなのネクタイするな。宮澤さんを見る。これがいいんだ」と、目の前で言われるのを私は見ているんだ。そんなことまで言わなくてもいいと思った。私は「松野君」だったから、まあ真ん中でしょう。

伊藤 それで、福田さんと大平さんの対決の時は、両派で対策の本部みたいなものをつくっていたわけですよ。

松野 挙党協というのをつくっていたものだから、挙党協の流れです。保利茂がいた。挙党協の流れで、約束したじゃないか、約束はしてない、そうじゃなかったのか、ということになる。挙党協が行司になったわけだ。だから、民社党でも入れなければ、党内では勝つてこないと思ったのが私の直感だった。これはどんなにしても勝つてこない。そこで佐々木良作を口説いた。二日間口説いて、投票の朝になって言うんだから、方法がない。

有馬 そういう時、松野先生がちよっと民社党を頼みに行こうというの、松野先生の独断ですか。

松野 独断というか、福田君にはそれとなしに、了解はしないけれども、「もうそれしかないじゃないか」「そんなことできるかな」「できればいいんだろう」「できれば面白いな」という程度の話です。あとは私が独断でやった。全然知らずにやるわけにいかない。「民社党でも抱き込んでどうだ。政界再編成になるかもしれない。そこまでやってもいいんじゃないか。いつまでも自民党で、自民

党の近親結婚ばかりしていたんじゃないか」「それはできれば面白いな」というくらいの話です。それだけですよ。だいたい政治家お互い同士はそんな程度で、そうだが、こうだと言うと駄目なんだ。それが外に漏れてしまふ。漏れると、先に妨害される。三、四人とか、その程度の話で、話があつたかないかわからない程度にしておかないといけない。あとは結果で決めればいいことだ。

佐道 可能性としては、自民党分裂まで視野に入っている話ですか。

松野 再編成まであつたでしょうね。連立まではあつたんです。民社党を入れるという事は、はつきり佐々木良作に言わなければできない。連立まで行く。それでも党内が分裂したら、新党に行く。さしあたり連立で行く。あのころはまだ連立という言葉はなかつたですからね。

一度佐藤栄作の時に、春日一幸と連立をやるうと思つたことがあつたが、さすがに自民党内が反対で、春日一幸との連立は出来損なつた。何かのときに一度あつたんです。それは、沖繩返還か何かだつたでしょう。佐藤が沖繩返還でどうしても早く三分の二を取りたいので、春日一幸を連立に入れようとしてやったことがあります。しかしうまくいかない。自民党内が反対した。反対したのは田中角栄たちです。自分たちが天下を取ろうと思つたら、連立反対に決まつている。そんな経緯があつたから、私は佐々木良作に二日間会つて、佐々木もだいたい乗つてきたんですが、同盟のことを気にしやがる。投票の朝に言うんだから。「そんな恥かせるようなことをするな。入れてから言え。入れたら、あとはどんな礼儀も尽くす」と言つたが、とうとう場内では白票を入れた。初めは違うが、決選投票の時は白票を入れた。自民党の争いには入らなかつた。

伊藤 そういう時の福田派の働き手というのは、どんな人ですか。

松野 私と田中龍夫とかね。塩川「正十郎」もいましたね。そのころ、森とか小泉は走り使いの方でしたね。

伊藤 あまり活動家がいなわけですね。

松野 それから坊秀男です。

佐道 田中派に比べると、実働部隊が少ないわけですね。

松野 渡海元三郎。

伊藤 選挙が終わつて、大平さんが勝つてー。

松野 それで、福田派は閣僚を送らなかつたんだ。福田派の三池信とか三人ぐらいを、大平が閣僚に指名したんです。行かなかつたんだ。二日ぐらい官邸に行かなかつたので、組閣が二、三日遅れたはずですよ。私は「こんなもの行かないで、片肺飛行でやらせてしまえ」といつて強硬だつた。三日目になつたら、福田が「それは大人げない、松野君、いくらなんだつて。いままでおれもやつていたけれども、大人げないから」と言つて、三日目には元に戻つた。私は「放つておいて片肺飛行でやらせればいいじゃないか。閣僚は送るまい」と言つた。しかし大臣に指名された人はやりたいね。そのことを考えると、そう頑張れなくなる。私なら構わなければ、そうはいかない。やはりやろうといつても、なかなかうまくいかんものですよ。党外ならできるけれども、党内の闘争というのは限界がある。やはり国民の前に同じ党で出ているから、家庭内の争いには限度がある。

そこで今度の小泉の派閥選挙でも、小泉が総理総裁である以上、選挙が終われば、まさか指名で小泉を選ばないというわけにはいかないでしょう。選ばなければ離党、新党運動にならざるを得ないでしょう。そこまではいかない。党内に候補者がいない。

佐道 頭に担ぐ人がいないわけですね。

松野 小泉に対抗できる魅力ある人間はいまいません。そこで週刊誌ではよく石原慎太郎の名前が出るが、それはその先だ。石原というのはそんな男ではない。東京ではいいけれど、全国で

るんだといつても、なかなか体のいいのがない。

■藤山愛一郎のいふ

伊藤 それで大平内閣になって、先生はどうなったんですか。

松野 私は大平内閣に一切入らない。

伊藤 党の役員もなしですか。

松野 党の役員もしない。もう私はきらいな時は一切やらない方ですからね。

伊藤 そういう時は何をしておられるんですか。

松野 もうただの議員で、仲間同士で遊ぶ。仲間同士でゴルフしたりして公職は一切しない。ときどきインタビューだとか討論会には出て、悪口を言っていましたね。「自民党はいいけれど、大平内閣は間違っている。自民党のために早く替えなければいけない」と、そんなことを言っていましたね。

有馬 松野先生が大平さんと一番合わないのは、何なんですか。

松野 それは池田の流れだから。

有馬 ということですか。池田嫌い。

松野 田中角栄も池田だ。池田というのは、私は、その手腕には好感を持つが、人間がきらいだ。目の前で人を罵倒したり、そういうことを見ると、この男はいやだな、逆の立場に立ちたくないなどと思う。あいつの子分にはならないぞと思う。面白いのは、一時、広島高菜をいつもくれていた。それが、池田内閣になった途端に高菜が来なくなった。それは、総裁選挙で私は池田に入らずに藤山を担いだからだ。露骨なもので、高菜がそれからばったり来なくなった。それまで四、五年、毎年広島高菜が来ていたのに、総裁選挙からばったり来なくなった。これも露骨だな。漬け物が来なくなった(笑)。これが向こうの縁の切れ目だろう。私も

は無理でしょう。長野県と争っているぐらいではね。東京で威張っている、長野県は抑えられない。島根県もそうだ。だから過信しすぎているんじゃないかと思う。東京の石原として認めるけれど、日本の石原は無理だ。そういうことで、誰かいないだろうかといって探すけれども、私は無理だと思う。

伊藤 石原さんも福田派でしたね。

松野 福田派だった。よく見ていました。非常に言論、文章は見事なものです。ただ、長くつき合うとね鼻につくね。

佐道 最近の傾向で、ものすごく怖ろしいと思うのはイメージの問題です。石原さんのことも、松野先生のようによくご存知の方はそんなものじゃないとおっしゃるかもしれませんが。例えば田中真紀子さんの件で、実際あの人は外務省改革をやるような力量があるとは思えないんですが、大変な人気が集まる。そういうイメージ先行型の状況がある中で、石原さんみたいな人が担がれると、ムードだけで一時期はいく可能性があるのではないかと思うのですが。

松野 ちょうど味の濃い料理みたいなものです。初めはうまいけれど、それを二日食べたら、食えないんです。かえって味の薄い方が長続きする。味の濃い焼きは長く食えない。一回だけだ。その味の濃い焼きが石原でしょうね。それは一回はみんな喜んで食う。東京だつて少し味が濃すぎて、ほちほち、ということになるでしょう。今度の外形標準課税も、勝つかどうかかわからんですよ。いま外形標準で行政裁判をやっているでしょう、私はあの裁判は案外石原が負けるんじゃないかと思う。銀行が勝つんじゃないかと思う。そうなつてくると、ほちほちいっばいになる。それからカジノをやるとかね。日本中にカジノをつくつて、どうしますか。そんなことをして、ほちほち味が濃くなりすぎて、飽きてくる。私は石原の新党は、一回で終わると思う。田中真紀子は一回までいきますか。一回で懲りるでしょうね。じゃあどうす

これでもう池田の家には行かないと思つて、行つたことはない。それまでは、あの人が政調会長で、私が副会長だから、よく教えを請いに行っていました。毎朝と言わないが、週に一回は朝行っていた。それで、年中大平がいた。

しかしその総裁選挙の時に、もうやめた。総裁選挙でなぜ私が「藤山に」行つたかという、岸さんには悪いけれども、岸さんが「松野君、すまんけれども藤山を応援してやってくれ。おれは藤山をわざわざ財界から外務大臣に連れてきて、日米交渉をさせて、非常に苦勞させた」という。私は労働大臣でしたからね。藤山さんとは安保条約の労働法の関係で、毎日会うわけです。

それまでは「米軍基地労働者は」米軍の直接雇用だった。直接雇用だから、労働組合が米軍と争うんです。その進駐軍の労働組合の委員長が石橋政嗣。石橋はアメリカと交渉するから反米的になつてくる。そこで今度は日本政府の雇用にして、それを米軍に労働提供するという間接雇用に切り替えるということが、労働の一番大きな問題だった。それで、私は労働大臣だから、藤山さんと一緒に打ち合わせをするわけです。それで政府と全駐労との賃金闘争になつて、米軍とはやらなくなつた。それまでは米軍なんだ。それが反米闘争に用いられるわけだ。そこで安保条約の改定では、直接雇用の労働者を間接雇用にするということが重要な問題だった。

それで年中藤山さんと会っているし、岸さんとも会っているものだから、「総裁選挙で是非ひとつ藤山君を推してくれ」と言われれば、そうしないわけにいかない。そこで一緒にやつたのが、小泉純也です。それから南條徳男、江崎真澄、これらが一緒になつて藤山派をつくつた。そこで小泉のおやじと一緒になつたわけだ。

伊藤 間接雇用になつたら、今度は全駐労はどこと交渉するんですか。

松野 日本政府です。

伊藤 直接の窓口はどこになるんですか。労働省に来るわけではないんですか。

佐道 あとになつたら防衛施設庁ですよ。

松野 おっしゃる通り、防衛施設庁です。それまでは米軍だった。それで米軍が困るんだ。基地の前にみんな赤旗を立ててやるものだから、反米闘争そのものに見える。実は労働闘争なんですけれども、それを非常にきらつていた。

佐道 基地の前に赤旗が立つといやでしょうね。

松野 そこで防衛施設庁になつて、施設庁との交渉になつた。それがそのときの一番大きな変化です。それからPX「米軍売店」がなくなりましたね。あの時は、たしか「銀座の」和光かなにかにPXがあつて、町の中にPXがあつた。それも税問題で、税は一切国内法に従う。だから軍人のもの、基地のものだけは免税だけれど、国内のものは全部課税するという法律ができた。税の問題、労務の問題、それから安保の基本的な問題。経済問題もだいぶ入りました。いままでは本場の戦時安保だったけれども、経済安保に変わってきましたね。それから税とか労務とか、そういうところは非常に変わった。だから、改善されたことは間違いないですね。

それからたしかあどときに、重大な兵力の変更の場合、両方で交渉するという交渉事項が入つた。重大な兵の配置変更、これは要するに核持ち込みという問題で、核を持ち込んだ場合は両方が協議するという事前協議制が入つた。そのへんが大きな問題ですね。

伊藤 そうですか。つまり池田さんの流れは一貫して駄目なわけですね。

松野 いまでも一貫して駄目だ。

佐道 小泉純也さんも一緒にやられたとおっしゃっていましたか。

れども、小泉純也さんは、池田さんの一番最後の内閣の時に防衛庁長官になられますね。あれは藤山派からも、ということですか。松野 いまの話は岸の時の話ですから。それで藤山派に入っていて、「池田内閣の」一番最後の時に、藤山派からも誰か採らなければいけないというので、一番人柄のいい純也を採ったんでしょ。うね。私じゃなかったからね（笑い）。

その時に三井三池の闘争があった。岸内閣の末期、安保条約と一緒に。その時に総裁選挙があつて、私は藤山に行つたわけだ。その時は池田が閣僚でした。通産大臣ですか。閣議で顔を合わせるから困るんだ。総裁選挙が終わつたあとですよ。引き継ぎまですに二週間ぐらいあるわけだ。そのときに三井三池の闘争があつた。その三井三池の闘争の時、私は所管の大臣だ。岸さんに言うわけにいかん。通産大臣の池田に言わなければならぬ。しようがないので、通産大臣の池田に「三井三池はこういう状況でどうしますか」というと、「ああ、いいよいよ、放つておいてくれ」という。一切歯牙にもかけない。次は自分がなるに決まつているんだ。私は報告しないわけにいかないわけだ。どうするんだろうと思つたら、私のあとにすぐ石田博英をもつて来たんです。石田は間違ひなく池田に行つていた。

つまり石橋「湛山が総裁に選挙」の時には、池田は岸ではなく石橋に行つてゐる。岸、石橋ならそうかもしれない。だから、今度は石田は池田に入れてゐるわけだ。だから、石橋・池田というのは組んでゐる。その真ん中に岸が入つただけで、やはり底流はそのままでした。だから池田が圧勝したわけだ。一回で過半数を取つたから圧勝でしたね。それはその石橋の時の貸しがあるから、その貸しを返してもらつたわけで、当然勝つに決まつてゐる。伊藤 しかし、石橋内閣ができる時の石田博英の働きというのは大変なものだつたといひますね。

松野 大変なものだ。あれはわずか五、六人で始まつたんですか

らね。誰も石橋とは思わなかつた。五、六人で始まつて、とうとう内閣をつくつた。あの時の石田博英は大したものでしたね。

伊藤 そのあとはパツとしませんでしたけれども。

松野 まあ、乱暴な男でしたね。政治家だから、嘘を言うのもしかたないけれども、平気で話をつくつていましたね。麻雀してもインチキをしていたから。私たちより手が大きいんです。ひとつぐらい牌が入つてもわからない。本当にわからない。それで日経の新聞社上がりですから、新聞社で麻雀をするわけです。安い、一円、二円で。だから上手なんだ。ひとつ入つてもわからない。だから政治でも一つぐらいごまかしてやつていた。

私に、石橋に会つてくれという。そのとき「石橋は」鳩山内閣の通産大臣でしたから、石田博英が通産省に三人ぐらいを連れて行つて会わせた。東洋経済で、戦前の代議士をよく知つてゐるから話が上手なんです。「君は農政が詳しいそう。農林大臣が誰もいなくて困つてゐるんだ。松野君、君が来てくれれば、日本の農政のために、是非やつてくれ」と、まるで農林大臣を与えるようなことを言つてゐた。その言い方が上手でね。みんなにやつたんでしょ。うね。

伊藤 上手に話したのは、石橋さんの方ですか。

松野 石橋湛山です。湛山は上手ですよ。あれは戦前派ですからそつがない。それで、東洋経済で、わりあい政界には名が売れていたんです。政治家ではないけれども、政治家の中で尊敬された人物だつた。正力「松太郎」もそう。政治家ではないが、尊敬された人物の一人は湛山です。だから私だつて大先輩だと思つてゐる。通産省の大臣室で肩を叩かれて、「農林大臣を引き受けてくれ」と言われたら、ぐらつとしますわね。それを全部にやつたんだ。それを導いたのが石田博英です。石橋湛山は代議士を個々に知らないから、石田博英が全部の代議士を石橋湛山に会わせたわけだ。そして大臣の約束を全部したから、大臣が二〇〇人ぐら

いできたでしょうね（笑い）。私まで農林大臣のお墨付きを頂いたんだから。私はしかしその時は、ほかに行ってしまいましたから、それはしょうがない。

佐道 でも、二度は通用しない手でしよう。

松野 だから一度で終わっちゃったんだ。石橋内閣は一度だけです。二度は通用しない。しかし一度は通用して、二〇〇票取った。それを上手にくすぐったのが石田博英です。

伊藤 それで二、三位連合をつくったんですね。

松野 二、三位連合の時にやった。だから一番じゃなくていい。二番のときだけ来てくれといって、二、三位連合でひっくり返した。一位は岸だった。二、三位連合で、どうせ自分の派が負けたのならそれなりにしますよ。たしか石井光次郎だったが、うまくいかない、どうせ負けたのなら、岸に行くより石橋に行けば、半分でも何かおこぼれがあるかと思うんですね。それが間違いだった。

伊藤 あまりおこぼれはなかったわけですね。

松野 私はそのときは岸さんの方に行った。私はどうしてもそこまで行けなかった。石井さんの派はみんな「石橋に」行ったんですよ。私はどうも岸の方に行った。そうしたら佐藤が一所懸命、岸の応援をしていましたから。あの時は佐藤は無所属なんだ。無所属だから、党内に口が出せないなんです。そこで党外で一所懸命兄貴を推してくれという。私はあるの二、三位連合の時は、岸の方に行った。それだから農林大臣にはならなかったですけどもね。岸さんのほうへ行ったら、すぐ労働大臣にしてくれたから、やはり行ってよかった（笑い）。石田の麻雀のインチキにのらないで。

有馬 しかし石田博英さんというのは、一般的にジャーナリズムの受けはよかった人ですよ。

松野 よかったです。私たちは当選回数は一緒でしたからね。そ

れから、わりにあか抜けしてしまいましたね。

伊藤 まあ、それが命取りになったんじゃないですか。ダンディで。

松野 ダンディで、川口という舞踊家がいまして、よく引き連れられましたね。最後は目が悪くなった。悪行で目が霞んだんだ。

■議員辞職へ・現在の経済政策など

伊藤 それで大平さんの時ですか、グラマン問題で結局はじめをつけるというのは。

松野 グラマンは大平内閣の時です。それで大平のところへ離党するからといって、挨拶にいったことがある。

伊藤 その時は議員をお辞めになったわけではなくて――。

松野 離党してから議員を辞めたんです。

伊藤 その時は、どういう将来のお考えだったんですか。

松野 まあ、同じことをいつまでもいつまでも言うし、もうこれ以上言っちゃって駄目なんだ、これは行動態度で示す以外にないなと思った。どうせ一回きれいにすれば、また次には拾ってくれるだろうと思って辞めたんです。こういうものは、言葉ではもう駄目なんだな。行動で示さない限り、言葉ではもう駄目だと思ったので、行動で示すには、それしかない。

伊藤 だけれども、辞めたらいろいろな疑惑を認めたような形になるんじゃないですか。

松野 初めはそれを考えて、認めたようになると思ったが、逆にいうと、この際すべてを無にしてやるのが本当かなと思った。認めた、認めない、ということとは私も考えて、辞めると認めたことになると思ったけれど、しかし政治家はやはりやることをやってから、またやればいいんじゃないか。やらないより、やった方

がいいぞと思った。さっきの話と同じように。それがいいか悪いかは別として、やってみて、また立ち上がれなければ、自分に力がない。力があれば立ち上がれる。いろいろ考えるよりも、行動でやってみようと思って、自分の一身を自分の行動に賭けてみたわけです。おっしゃる通り、異見もあります。しかし、もう行動が早い。それで、先ほどの言葉ではないけれども、やらないよりはやった方がいいだろうと。

伊藤 やはりそういう形で処理をされると、批判というか、それまでのように絶えず言われるということはなくなるわけですか。

松野 それは、相当傷つきますね。選挙民だつて傷つきます。選挙民は自分が選んだんだから。その時は各有権者にお詫びをして歩かなければいけない。それは相当大きな傷になります。

伊藤 でもお詫びの行脚というのは、つまり次の選挙のためになるわけですか。

松野 そうです。次の選挙にはよろしくということになるんですね。

伊藤 それは、そう言わなくても、そういうことになりますよな。

松野 まあ、それは一番きつい時期でしたね。やはり一回はそういう苦境に立ってみてもいいかなと思った。自分の試練だ。それまで順調に来ていたから。

伊藤 そう言われればそうですね。非常に順調なんですね。

松野 自らを寒風に晒すことも一つのやり方かなと思った。理屈はどちらもありませんけれどもね。そのことについてはあるけれども、政治家としてやる時は、やった方がいいなと思った。弁明していつまでも恋々と続けるより、切り替えの意味で私は人生を二回やっただけです。本心はその事柄よりも、自分の運命をこの際やってみようかと思った。実際にはあまり成功ではなかったですけどもね。たまに頑張ってもよかったかと思った。しかし、やるだけやってみないと、あとでやる機会はない。私は自分の人生は

失敗が多いなと思うけれど、失敗も経験だと思っています。

成功か失敗か、私は総裁選なんかほとんど失敗しています。全部負けている。私は意地っ張りです。全部弱いほうを応援しているんだ。なんでまた勝つ方にやらなかっただろう。私がやったのは全部負けだ。石井さんで負け、藤山で負け、佐藤でも負けたんですからね、池田の時は。そして福田で負け、みんな総裁選挙をやつて、私は負ける方ばかりについているんだ。あとで勝っているけれども。なんで勝つ方につかないんだろうと思うけれども、どうもそこが私の意地っ張りなところで、好き嫌いがあるのか、わがままなんでしょうね。本当に総裁選挙で最初から勝つたことは一回もない。負けて、あとでひっくり返るけれども、最初から勝つたことは一回もない。

有馬 わりと珍しいのかもしれないですね。党内であるポジションを占めている人が、実は調べてみると、総裁選挙はたいいてい負け組だ、ということだ。

松野 全部負けている。それで結構地位にはついていてるんですね。(笑い)。

伊藤 そうです。それがおかしいんです(笑い)。

松野 本当に私は総裁選で、一回で勝つたことは一回もない。負けて、あとでひっくり返って勝つたり、逆転して勝つたり、順送りです。勝つたりするようないことばかりで、一回ぐらい総裁選挙です。

ボツと勝つてみたい。不思議なものですな。

佐道 総裁選挙で勝つて、勝利の美酒というのはないわけですね。松野 ない。負けて、あとで向こうが倒れて、こっちが繰り上げ当選になることばかりなんだ。それもまた不思議なんだ。繰り上げ当選か逆転当選している。だから、見る目がなかったわけではないんだ(笑い)。その時は、なんだか多数につくのが快くないんでしょね。人並みというのが「快くない」。角を立ててみたいとか、自分の意見を言ってみたいとか、何かあるんでしょ

ね。多数について黙っていればいいんだけど、黙っていられない。一言（いちげん）いわざるをえない。それですべて私が負けることになった。

伊藤 しかし、そのわりには順調に進みましたね。

松野 政界でいまだにこうやって歩いているんだからね。永田町で歩いているんだから、不思議だ。それはやはりいろいろに体験、経験しているからです。私はじいっと無事無難に総裁選挙に勝つ方について、何もせずに大臣も何回もやったなら、語れないだろうな。苦境の時にこれはこうしたんだ、ああしたんだと教えられない。常に逆流に棹さすから、もめると私のところに聞きに来る。どうだろうという。それは体験、経験が豊富だからでしょう。

小泉も三木おろしそっくりみたいにしておろされそうだけれども、その立場は同じでしょうね。だから、そんないろいろな経験話を常に逆流でしている。与党が反対しても、提出権は内閣にある。法案は内閣が出すものは出していいんだ。そうすると与党は「けしからん、党議で決まっていけない」と必ず言う。審議権は党にあるけれど、提出権は内閣にある。内閣と党で、行政権と審議権は違うんだ。それを常に与党が、口利き料ではないけれど、審議権と行政権と一緒に事前審査をやる。これははっきりいって、おかしい。便宜主義でそうなっている。これははっきりいって憲法上は違うんだ。その話は、小泉にも長年にあいだにしている。

それをやることはなんだという、吉田さんの時におれたちはやったんだ。「よし、予算を提出させない」と総務会で一兆予算を否決したんだ。吉田さんが「何を言っている、提出権はおれにあるんだ。おれは出す」「よし、それじゃあ審議権はおれたちにあるから、修正審議をする」と言っていて、やったことがあるんだ。それで予算を修正することにおれたちは決めて、質問をさかんにやった。やった結果、残念だけれどもできなかった。

できない理由は公共事業を増やそうとすると、文教予算を減らさなければいけない。文教予算を減らすということは、文教族がいて承知しない。今度は農林予算を増やそうと思うと、公共事業を減らさなければいけない。とうとう党内がまとまらなくなっちゃった。結局最後は予算を通過させてしまったんだ（笑い）。やるだけやってみればいいんだ。ことに予算というのは不思議で、増額予算ができない。歳入権は政府にある。政府の歳入がないものを、議員が予想歳入をする権利がない。減額権あるいは組み換え権はあるんですが、増額権というものが憲法上ない。

伊藤 この前増額させたという話がありませんでしたか。

松野 ない。そんな増額はできなかった。歳入がないというのと、増額しても駄目なんです。どこかを減らさないとならない。減らすとなると文句が出る。だから結局修正も組み換えもできなかった。そこでいつも野党が修正するのは、防衛費だけを削れという。自民党は防衛費を削るというわけにはいかないんだ。野党は防衛費を否定しているから、社会党は防衛費を削って、それを公共事業とか文教にあてる組み換え動議に決まっている。それが与党はできないんだ。防衛費だって、防衛庁がみな承知しない。結局できなかつた。そういう例があるから、与党と政府が違ったからといって、与党に従う必要はない、ということも懇々と教えてやる。やるならやっつけていい。ただし、審議権は向こうにあるわけだから、それは仕方ない。しかし総理は総理であり総裁なんだから、やるなら仕方ない。やらせてごらんとやった。今度の医療三法もそれでしょうね。私は案ができてそれを否決はできないと思う。

伊藤 修正はどうですか。

松野 修正はするかもしれませんがね。「四月一日」というのを、「なるべく火急に」とかやるかもしれませんがね。しかし、そのへんは小泉の考え次第で、そういうことはできないといっていて、与党と内閣が決戦になれば、それは面白いでしょうね。それと野党が

いつ不信任案を出すかです。野党が不信任案を出す時期も重大だ。

このあいだの「武部勤」農林大臣じゃあるまいし、信任しておいて、辞めろということはおかしいんです。あれは誰がみてもおかしい。もしやるとするなら、「可決するからお前早く辞めろ」と言うならわかる。不信任案を採決する前にやるならいい。知恵者なら前にやると思う。「とても党内で君を信任できない。だからみんなの前に不信任にされて辞めるより、今日お前辞めてはどうだ」と言えばいい。額賀「福志郎」がそうだ。額賀は不信任前に辞めている。それは党幹部が口説いて辞めさせたんだ。

それはいいけれど、信任しておいて辞めろというのは、あれは私は証文の出し遅れだと思ふ。信任したら、この国会中は信任することです。それはやるでしょう、あんな無能な農林大臣でもやりますよ。いくら嫌われてもやります。それはおかしな話です。ちようど森内閣の末期と同じで、信任はしているが辞めろと言う。あれはおかしかったですね。あの時は小泉は一所懸命森を守った方だ。「信任された以上、辞める必要はないじゃないか」というのが小泉の意見だった。今度その逆の立場に立てば、信任されたんだから、農林大臣は辞めさせる必要はないじゃないかといって彼が頑張るのは当然なことだ。それならなぜ、あれ「不信任案」を否決する前に辞めさせると言わないんだ。採決したら駄目ですよ。

佐道 先ほど、小泉さんを応援しているのは三分の一ぐらいだとおっしゃいましたけれども、山崎幹事長がいま一つふらふらしているような気がします。

松野 山崎はふらふらしているが、だいたいあの男は年中ふらふらしているんですから。それで加藤に引っ張られて行ったんだから。私は、山崎はあんな男で、ふらふらしているのはあの程度の性格だからでしょう。別に小泉に反旗を翻すわけではない。それはないが、性格上、ああいう表現しかできない男だ。あれは性格

だ。

小池 演説も下手な人ですね。

松野 下手ですよ。表現が下手。九州では大きな牛をコッテ牛というでしょう、そのコッテ牛なんだ。敏感な牛じゃないんだ。牛小屋から引っ張り出したような牛だ。態度も敏感じゃない。あれはあの程度ですから、謀反はしていない。表現が下手。今度も株を簿価で買い取りなんて、ちよつと考えられないことを一人で行って一人で喜んでいられる。簿価で買い取るなんてとんでもないことだ。

伊藤 倍ぐらいの値段ですね。

佐道 反発が来るのは絶対ですからね。

松野 もうみんな持つてくる。国民がおれのも買ってこれといつて、みんな持つてくる。何十兆あつたつて足りない。私だつて株券を持つていつて、簿価で買ってこれというよ。半分になつているんだから。

佐道 小泉さんの身近にいる補佐役というのは、やはり福田さんということですか。

松野 福田ですよ。いまは福田。森よりも山崎と思いますが、支えているでしょうね。それから若手に案外いるんです。派閥の長はいないけれども、若手は各派にまたがつている。

伊藤 前のような派閥ごとではないんでしょう。

松野 派閥ではありません。各派の若手の中に、十人、二十人、三十人という。それがあの票になつたでしょうね。だいたい衆参議員全部で三六〇ですから、一五〇はあります。ちようど四割ぐらいでしょうね。それは何かというと、各派にまたがつているんです。だから森派だつて、小泉のところは六〇人ぐらいしかいないですからね。

伊藤 森派が全部支持しているわけでもないんでしょう。

松野 全部支持というわけでもありません。それでも、いちおう

森派が基礎となれば六〇ですからね。山崎のところは三〇、それで九〇。それから各派に分かれているんです。各派に若手がいて、一五〇でしょうね。それで三六〇の中の一五〇、四割でしょう。半分以下でしょう。それはいまでもあります。といっても、この次も小泉がやれば、半分、一八〇から二〇〇はとるでしょうね。一回選挙すれば、小泉は半数以上とるでしょうね。

伊藤 やはり選挙となると幹事長が肝心じゃないですか。

松野 幹事長が肝心で、幹事長はもちろん小泉の言うことをきいていますよ。今度の三割だって、聞いていますよ。ただ、性格があれだから。引いたごとく引かぬごときだ。あの程度でしょうね。小池 選挙になると。公認を出す出さないというのがありますよね。

松野 それも小泉の言うことは守るでしょうね。小泉に反対したことは、この九ヶ月間ないですよ。三割だって、最後は聞いていましたからね。自分であらぬ発言をしているだけだ。

伊藤 しょっちゅう変な発言をしていますね。

松野 しょっちゅう変な発言している。経済をもう少し大事にしないといけない。「小泉には」財政は君はいいけれど、経済は君は弱いよ、経済を注意しろ、ということとは私はよく言っていた。財政は君は間違いない。経済が駄目なんだ。それは自分で金銭欲がないからで、自分で苦労していない。小泉は会社を持って苦労していないから、自分が金を持って何かやろうと思っても、そういう体験がないんだ。なければいけないんだ。

伊藤 でも、松野先生もそれはないんじゃないですか。

松野 私はいつぱい会社へ行つて苦労しています。小さい会社ですが。

小池 電鉄を持っていらつしゃいます。

松野 会社をやつて、銀行に頭を下げたり、銀行にうまいこと話をしたり、いろいろやつたり、ゴルフ場をつくる時に銀行に金を

借りに行つたり、金利は後払いにしてもらつたり、いろいろ作戦と苦労をしていますよ。それからいろいろな担保を入れて、その担保が足らなかつたり、また増し担保を入れてくれとか、いろいろ苦労しています。私だって、小なりといえども。小泉はないんだから。

伊藤 そういう小さな会社もないんですか。

松野 ないんだ。私は、金利の後払いから、担保の増しから、株の増資から、全部商法に則つてやっている経験があるから。それから銀行はどうすれば金利を値切れるか。だから、いまの金利がいくらかぐらいのことは知っています。私だって二%以上の金利では払いたくないなと思っています。そういうことがわかるわけだ、いまでも。一・六%ぐらいにしたいけれど、銀行は二・二%だという、いや二だ、じゃあどうしようかという。ちゃんと自分でローンもやっているし、ローンも後を高く、手前を軽くとか、いろいろ私も経験がある。小泉はないんだ。だから君は駄目だ、と言うんだ。本当に駄目だ。このあいだもちよつと電話で言った。いま見ていると、塩川は承知しているが、竹中「平蔵・経済財政政策担当大臣」がやはり評論家なんだ。評論家は堺屋「太一」で失敗しているんだ。やはり評論家は評論家でおらなければ。これが実務家になったときは駄目なんだ。竹中も私は評論家としては尊敬するが、いまやっているのを見ると駄目だ。

それから柳沢「伯夫・金融担当大臣」が、過去の失敗をいまだに引きずっている。頭の切り換えができない。ゴルフだつて、一回スウィングを始めたら、途中で失敗だなどと思つても変えられないでしょう。ちよつと柳沢がそうなんだ。この前も資本注入で失敗しているから、失敗しているのわかつていても、もう変えられない。今度やると、また泥を打つんですよ。池ボチャです。スウィングはとても駄目だ。竹中は評論家で実務をやつたことがない。本は書いていても、自分でやったことがない。だから二つが失敗。

「もつと実務家をそばに呼んで、一回意見を聞け」と私は言おうと思つている。

だいたい、金融資本の不良債権というものに深入りしすぎた。不良債権があつても、爆発しなければいいんだ。凍結しておけばよかつたんだ。不良債権を暴いて、それをきれいにしようとしたから、深みにはまつたと思う。私は不良債権は凍結して触らないようにして、棚上げして金融でいけばよかつたと思う。銀行業を救済しようとしたところに間違いがある。あのまま不良債権を置いておいて、爆破しないで金融でいけば、いつの間にか経済が上がつてきて、その不良債権も救済できた。不良債権のガンを退治しようと思つてそこに集中したために、全部に蔓延したと思う。私はスタートの不良債権の判断が間違つたと思う。銀行屋のことをみんな聞いて、銀行救済をしているんだ。ここの金融が動かなくなる。それに政府の国債が上乘せしてくる。

小泉の言っているのは正しい言葉だ。もう財政は限度で、今度は金融でやるということだけは彼は決めてる。このデフレ対策は金融でやる。財政出動はしないと決めてる。そこでいま問題になっているのが日銀なんだ。それと財投、郵便貯金だ。郵便貯金と銀行の金融特融で、デフレを切り抜けよう、もうそれしかないんだ。もうこれ以上国債を発行したら、国債の価格がゼロになりますからね。だから金融となると、日銀と財投だ。日銀と財投で、これをなんとかしようとする。ただ狙いを、今度は間違えるなよ。中小企業の産業資金に回せよ。この金を金融資本に回すなよ。産業資本に回さなければいけない。それが中小企業救済だ。中小企業に何も行かなかつたんだ。みんな金融資本の救済に回して、産業資本に回っていない。産業資本ということは中小企業ですよ。それが私は最大の失敗だと思う。今度は金融資本ではなく産業資本にこの金が回るようにしていかない限りは、私は株価は上がらないと思う。

ところが困つたのは、中小企業基金というのは、ほとんど都道府県の金融だ。日銀特融が行かないところだ。私はそこに大きな金融政策の断層があつたと思う。都道府県単位の金融がいま必要なんだ。だから、ある県はいいけれど、ある県はひどい。金のないところはひどいものですね。日銀というのは全国の金融を握っているかと思つたら、そうじゃないものだからね。日銀の使い方と日銀法を緊急に変えなければいけないと思う。

もうひとつは資産デフレだ。株もそうだけれども、土地だ。土地に対する税は二年間ぐらい一切免除すればいい。小倉武一というのがそれを言っていましたよ。

佐道 亡くなりましたね。

松野 ええ、亡くなつたけれども、あれが土地税制に詳しくなつた。資産デフレなんだから、土地に対する税制だけは二年間無税にしなければ。それは税収に関係ありませんよ。そうしない限り、資産デフレは止まらない。そのくせ土地の外形標準課税はやっているでしょう。それから路線価格でしょう。路線価格で取引しているところなんかありはしないんだ。税金は路線価格で取る。だから、土地を持つてるとたまらないんだ。税金を路線価格で取る。地価は路線価格よりうんと下だ。このギャップがいつまでたつてもわからない。これはもう土地のデフレは当然だと思う。当分資産デフレだから、土地価格の取引は無税にしていかなければ。固定資産税は仕方がないけれど。そういう緊急なことをひとつやつてもらいたい。中小企業もそうだ。

それには、一回誰かの意見を聞けと私はいま言っている。実務家なら榊原「英資」かな。「ミスター円」ですね。実務家ならトヨタの会長「奥田碩」とか。そういうものに聞かなければ今ごろになって竹中を責めても間に合わない。柳沢を責めても間に合わない。「小泉自身の頭でもつといひものを聞け」と私は二、三日うちに言おうと思つていますがね。こういう人の話を聞け。

聞いただけでも、みんなの空気がもう少し変わるよ。同じ仲間でも、柳沢が特別監査をしようと云っても、同じものしか出てこない。それは、同じ役人が同じ監査をして、十一月に出たのを二月に変えて出すものですか。同じものに決まっている。少し上下はあっても、もつと悪いものが出てくるかもしれない。そんなものを聞いて、資本注入なんてできっこない。

小池 市場が反応しませんね。

松野 反応しない。もうわかっている。同じものしか出てこない。同じやつがやるんだから。特別監査をしても結論は同じ。四月一日にはもうペイオフが始まるんですからね。ペイオフが始まる前に入れなければいけないのに、終わってから入れるような時間的ギャップが必ず出てくる。ということは、この金融デフレの問題は、金融からは手が着けられない。ほかの方から手を着けなければいけない。産業から手を着けなければ、金融デフレは駄目だ。

佐道 そうすると、小泉さん自身がそうやって考えを変えるところも必要ですし、チームになっている柳沢さんとか竹中さんとか速水「優」総裁とかも変わることが大事になるわけですね。

松野 私は小泉が変われば、みんな従ってくると思う。あの連中も自信がないんだ。自分で責任を負うやつは一人もいないんだ。小泉がこうだと決めれば三人ともついてきます。ホツとするでしょうね。

佐道 解散総選挙になれば、みんな変わりますけれどね。

松野 私は小泉が言ってくればホツと思う。みんな自分が責任を負いたくなくて、縮まっているだけだ。見通しがない。柳沢も日銀も竹中も、私は三人ともついてくると思う。それには小泉の頭に、いい人間の脳みそを入れなければ駄目だ。それには、こういう人間はどうだと、今週にも言ってくる。

伊藤 早くやらないと駄目ですね。

小池 もう、それは一刻を争うんじゃないですか。

松野 いまのところ、今週また連絡があるかもしれないからね。それから考えないと。君の頭の中で自分の構想を示せ。いま井戸端会議をしても、いい知恵は出てこない。同じメンバーですから、新しい知恵を出す。

佐道 その政治的危機に対決をして、解散総選挙に持ち込むというのは、同時併行にやるわけですか。

松野 片一方は法案・議会問題、片一方は経済問題、もちろん関連はあるけれど、多少攻めにくいでしょうね。経済問題はなかなか攻めにくいんですよ。経済問題で内閣が倒れたことはない。不況という社会問題になったときには駄目だ。失業者があふれて飯が食えないというときには大変ですよね。まだ日本は、失業保険とか退職金とか年金という制度で、食えない社会ではない。だからアメリカも不況を放っておくというとおかしいが、あまり今度は責めなかつたのは、経済では倒れないからだ。

小池 社会不安は怖いですね。

松野 「不景気」と言っているうちはいいんですよ。「景気」という言葉が入っているんだから。「景気」がなくなつて、「不況」になった時が大変なんだ。それは何かというと、社会問題、生活問題だ。生活問題になった時は大変だ。日本はそこまでは行かない。不景気まではいい。というんです。

伊藤 それが不思議ですね。さて、時間です。

松野 ちつとも進まなくて。

伊藤 いえいえ。いちおう議員を辞職されて、そこからもう一度選挙をやられるというあたりから、今度はいろいろな内閣のお話も伺いたいと思います。

松野 「質問の」項目だけ書いてください。

伊藤 この後は先生がお書きになったものが何もないのでつくりにくいんですが、なんとかつくってみます。

松野 このあいだおたくから支払調書が来たけれど、けっこう私

はいただいているんですよ。私は小泉内閣になってから、ずいぶん稼いでいるんです。

伊藤 それは雑誌でしょう。

松野 おたくからののも大きいですよ。雑誌は五万、三万、七万ですが、あなた方のところは一年分だから大きいですよ。伊藤 では、しばらくお付き合いください。

松野 あなた方がよかったらどうぞ。伊藤 とにかく、現在のところに早く来すぎているんですが、これはこれでいいんです。

松野 すみません。勝手なことばかり言いました。伊藤 今日の話は非常に面白かったです。一同 どうもありがとうございました。

政局関連資料

「開かれた外務省のための十の改革」

(平成十四年二月十二日外務省発表)

外交は、国民の皆様を理解され、支持されなくては機能しません。一連の不祥事により失われた国民の皆様への信頼を一刻も早く取り戻せるよう、改めるべき点は改め、国民全体の奉仕者としての意識を外務省職員に徹底させ、国益を守る強靱な外交ができる体制を整えていきます。

(一)「透明性」「スピード」「実効性」をキーワードに、以下の改革を行っていきます。

一、不当な圧力の排除

外務省は幅広く謙虚に外交や外務省に関する意見を拝聴しますが、不適切なものは排除します。特に国会議員との間には新しい関係を築く必要があります。また、この問題は、外務省以外の官庁にも関係する、広く国会議員と官僚の関係の問題です。合わせてより広い枠組みで検討する必要がありますと考えます。

〔例示〕

- ・国会議員より職員に対して伝えられる問題については、書面で、大臣を含む政治指導層に報告し、省としての対応を決定します。
- ・上記書面を、情報公開の対象にすることを検討します。
- ・以上の点を含めて、国会議員との関係のガイドラインを作ります。

二、誤ったエリート意識の排除と

お客様志向

誤ったエリート意識を取り除き、国民全体の奉仕者としての意識を徹底します。また、時代の流れに敏感な感覚を養います。

〔例示〕

- ・在外公館の領事業務サービスや大使館の日本企業への支援状況などの活動をモニターするため、アンケート調査を実施し、意見を反映します。結果は公開します。
- ・若手職員が領事事務を経験するようになります。また、若手職員が地方自治体、民間企業、青年海外協力隊、NGOなどで実務に携わる機会を設けます。
- ・海外での研修中に、様々な機関・団体の活動を体験させます。
- ・現在の規則・慣行が時代の要請や民間の基準に合うよう改善します。

す。(着任や帰国のための準備期間を含む待遇、福利厚生措置など)

三、人事制度の再構築

職員の士気を高め、組織としての活力を最大限引き出すために、競争原理を積極的に取り入れます。同時に、地道な努力がきちんと評価され報われる人事を行います。

〔例示〕

- ・主要国の大使を始め本省・在外幹部ポストに民間を含む各界の優れた人材を積極的に起用します。
- ・課長・室長以上のポストに、I種職員以外の職員を一層幅広く配置します。次回定例人事で実現します。
- ・I種職員の大半が大使ポストに就いていたこれまでの人事のあり方を改め、能力と適性に基づいた配

置を行います。

・適材適所を実現するため、必ずしも入省年次にとらわれない幹部人事を行います。

・ハイレベルを含む各界の幅広い分野との双方方向の人事交流を進めていきます。

四 秘密保持の徹底

外交では、信頼が基本です。そのために、秘密保持を更に徹底し、それに反した場合には厳しく対応します。

〔例示〕

・現在の文書管理規則を見直し、秘密を漏洩した場合の処分を厳格にし、人事に反映させます。

五 ODAの効率化・透明化

国民の税金を無駄にしないよう、ODAを透明性を持った形で実施します。

〔例示〕

・外部の方の参加によりODAの透明性を高めるための新たな仕組みを設けます。在外公館は、現地で活動するNGOの意見を聞いた上で、判断します。本省では、選択肢の一つとして、第三者の参加を得た委員会で援助の分野やプロジェクトの優先順位を議論し、決定することを考えます。

・経済協力局幹部（評価担当）に外部の人材を起用します。

・ODAの実施に当たり、適切な監査手法の導入について検討します。

六 外務省予算の効率的使用・透明性の確保

調達などの会計手続の見直しや監査・査察制度の活用により、不正の再発防止を確かなものとし、また、行政経費は、競争手続に従って一層効率的に使用します。

〔例示〕

・新年度に検事を監察官に任命する予定です。

・全公館に公認会計士の参加を得て査察を実施します。

・調達全般にわたって一元化を実現します。

七 NGOとの新しい関係

NGOとの対話や連携を強めます。

〔例示〕

・NGOに対する助成は、透明性が確保できる客観的な基準に基づき実施していきます。

・NGOとの協力関係を考える懇談会を立ち上げます。

八 広報・広聴体制の再構築

職員に国民全体の奉仕者としての意識と時代の流れに敏感な感覚を浸透

させるため、国民の皆様のご意見を拝聴し、国民の皆様との対話を深めます。

〔例示〕

・「外務省タウンミーティング」の開催

国民の皆様のご意見を積極的に反映させるため、外務省タウンミーティングを開催します。当初のテーマは、「外務省改革」とします。タウンミーティングには大臣をはじめとする政治指導層と職員が参加します。

・「外交広聴室」の新設

国民の皆様から寄せられる意見に耳を傾け、改善に努めます。

九 大使館などの業務・人員の見直し

海外渡航者や在留邦人の方からの様々な要望にきめ細かく対応します。このため、領事業務サービスを拡充します。

〔例示〕

・旅券申請事務のインターネット化を進めます。

・ニーズの多い在外公館では、週末や夜間でも素早く丁寧に対応する体制を強化します。

十 政策立案過程などの透明化

政策立案の過程をできるだけ透明にします。

〔例示〕

・国民の皆様にはわかりやすい言葉で

外交の理念や政策の目的を説明します。

・「外交政策評価パネル」の設置

各界からの意見を外交政策へ反映させるため、本省で「外交政策評価パネル」を創設します。同パネルは、定期的に政策をレビューします。

(二) 改革は、次のようなアクション・プログラムを進めます。

一 第三者からなる「変える会」を設置し、上記一から十の改革について、例示した点も含め、幅広く具体的な措置を検討して頂きます。

二 その過程で、公聴会を開きます。

三 「変える会」は、結論が早く出せるものから取り組み、発足後三ヶ月を目標に「中間報告」を、その後遅くとも夏までには「最終報告」を作成し、大臣に提言として提出頂きます。それぞれの報告の中には、各措置の実施期限と、できる限り具体的な目標を盛り込んで頂きます。報告書は公表します。

四 中間報告や最終報告を待たないで、できることは直ぐに実施します。

五 「変える会」には、最終報告作成後も、改革の実施状況を定期的に見直して頂きます。その結果は公表します。

見直して頂きます。その結果は公表

松野頼三 オーラルヒストリー

第17回

[2002年4月2日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員)

■『大正天皇実録』公開・政治家の不祥事について

松野 「『大正天皇実録』が六十五年ぶりに公開されたが、墨塗りの箇所が非常に多いことについて」……かえって疑惑を高めるような気がしませんね。

伊藤 何を消したのか、ということが問題になりますからね。

松野 もう戦前のことだから、多少違和感があっても許されることなのに。

伊藤 本当は「宮内庁」書陵部というのは全部公開することになっているんです。あれは情報公開法に引つかからないんですが、情報公開法に従ってやっただけですね。その情報公開法を非常に厳格に適用して、プライバシーは駄目だといって、「マスキングを」やっただけですね。僕はだいたいNHKで悪口を言ったんですが、「先生、すいませんけれど、公共放送なものですから」といって、いろいろしゃべった中で、彼らがうまい具合に編集して、短くしました。

松野 私たちが子供の時に「遠眼鏡問題」というのが有名だったけれど、口にするると憲兵に逮捕されるから言わなかつただけですね。小池 いまでは大正天皇は英明だったという説もあるぐらいですから。

伊藤 この一ヶ月間、「鈴木」宗男問題で鼎の沸くような騒ぎでしたが、今度は加藤「紘一」の事務所代表脱税疑惑」、辻元「清美」の秘書給与詐取疑惑」と出て来ましたので、本来的な政局とは違って、何か変な感じになりましたね。

松野 政治不信になるでしょうね。私は国民が解散を要求すると思う。小泉にはそれしかないでしょうね。私はもう解散が正しいと思う。

伊藤 解散をするには大義名分が必要でしょう。

松野 国民の世論が出てくるかもしれない。こんなことをしているなら解散しろ、と。

伊藤 国民がそう言うかどうか。

佐道 先生のこのあいだの話だと、「解散のためには」内閣支持率五割がメドだということでしたが、かなり厳しいですね。しかも自民党全体に向かい風が吹いているので、解散をしても、小泉さんは「改革派」対「抵抗勢力」という感じで明確にできないので、選挙をしてもかなり苦しいのではないのでしょうか。そうすると解散に踏み込めないという感じもしないでもないんですが。

松野 このあいだ「三月三十一日」の横浜「市長選挙」でも、自民党は負けても、小泉は負けていないんだ。

小池 そうですね。中田「宏・新横浜市長」も小泉支持ですからね。

松野 だからいまの話でも、自民党は負けても小泉は負けないだろうと思う。それが逆に言えば改革かもしれない。自民党が勝つたら改革にはならない。横浜がその通りで、自民党は負けても小泉は負けていない。あの男は小泉支持だ。

伊藤 しかしあの横浜の選挙で、社民党まで相乗りしていたのは、エツと思つたけれど。

松野 あんなのに乗っているとは、私は知らなかった。相乗りぐらい選挙で危ないことはないですね。金は余計取るんだから。

伊藤 辻元問題はどうか。

松野 根本的に政治家としての訓練・教育がなっていない。まず政治家のグループ、政党の訓練だね。責任を他に転嫁するな。自分のことは自分で処理しろ。風呂に入らばちゃば他人にすべきをかけるようなことをするな。これが政党のABCなんです。その訓練がなっていない。誰かに教わったとか、誰か指南役がいたと言ったら、言わなくてははいけない。言いたくなかったら、「教わったということも」言わなければいいんだ。誰だつてアド

バイスはあります。結論は自分なんだから、アドバイスに責任をかけるなんていうことは、政党の訓練のABCを知らないおぼさんだと思ふ。言うなら言えはいい、言いたくないなら言わなければいい。自分で責任を負わなければならぬ。どんなにアドバイスがあつても、最後に決定するのは本人ですよ。私はあれを見て、これは個人プレーは知っていても団体訓練の行き届かない無知な女だな、と思つた。

伊藤 もともと団体訓練のない人ですからね。

松野 あんなのと一緒に政党を組んでいたら、傍にいても危ない。

伊藤 あれで社民党もずいぶん大きな打撃になつたでしょうね。そもそも、ほとんどないというふうな状態なのに。

松野 与野党で不正が出てくると、私は政界浄化の旗印が立ちませんかと思ふ。自民党が悪いから自民党だけとは言えません。与野党ならいけるかな、と思ふ。小泉には、「解散の大義名分を見つけることが君の今後の最大の政治使命だ。それが総理大臣の任務だ」といった。

伊藤 でも選挙をやるときに一番大事なのは幹事長でしょう。その幹事長「山崎拓」が何かあやしい問題で――。

小池 女性問題で、統一協会ですかね。

伊藤 統一協会だと言っているからね。

松野 統一協会の女につかまっていますね。もっと上品なものと添わなければいかん。

小池 山崎は国防族なのに。

松野 橋本龍太郎は中国の女だという。片一方は統一協会といつたら韓国系でしょう。幸か不幸か、韓国系が多いけれど、みつともない。私は行儀は悪い方だったけれど、公職におけるあいだは遠慮しましたよ。三役に就いているときは遠慮しましたよ。

武田 そういうものですか。

松野 それぐらいの自制心がなければね。一年中、春の馬みたい

にさかっていたら駄目だ。春駒みたいじゃ困るんだ。

伊藤 しかし山崎さんも元氣なものだな。

松野 奥さんが亡くなつたんでしょね。

小池 いや、ちゃんといふんです。文春によると、福田「康夫」官房長官の奥さんと電車の中で会つたとか。そして吊り広告を見てショックを受けていたと書いてありましたから。

松野 福田家は、親父以来「そういうスキヤンダルは」ないんだ。一度もない。「君は不幸だね、奥さん以外の女性を知らないなんて不幸だね」と私が冗談を言うと、「それでもないよ、おれだつて知らないとは言わないよ」という程度の話だ。

伊藤 何事もそうですが、辻元の場合もそうでしょうし、やはり問題が表に出てくるときは内部告発でしょうね。

松野 内部告発です。

伊藤 やはり徳がないということですかね。秘書の給与云々ということは、一般的に行なわれていたでしょう。

松野 行なわれている、いまでも。

伊藤 いまでも、ですか。

松野 みんなやっているからいいじゃないかとは言えませんね。あんなに一人でスターになつたら、ひがまれますよ。あのために発言できない議員がたくさんいるんだからね。社民党の持ち時間を辻元が独占していたんですからね。そこを本人がわからないんだ。われわれは、申し訳ない、私に演説をさせてもらつてありがとうという気持ちがあるんだ。社民党の持ち時間は二十分しかないんだ。それを誰がやるか。辻元は自分が独占して当然だといふ顔をしている。だからひがんだやつは内部告発に決まっていますよ。その謙虚さがない。私たちが代表演説をするときは、仲間と挨拶をすると同時に、こういうことを言いたいけれど、ほかに何かご要求がありますか、と謙虚に挨拶すれば、ひがまれません。何かほかのご要望の項目があれば教えてくださいと、

みんなに自分の原稿の項目だけは見せますよ。それでみんなに回して、これを加えてくれとか、北朝鮮を入れてくれとかいうと、それを入れる。それが謙虚さなんだ。それを、あの女はわからないと思う。

小池 しかし、全共闘世代のマスコミにはえらく受けましたね。

伊藤 加藤絃一の世代か。

松野 加藤絃一は陰険で暗い男だ。暗い。五月雨のミミズみたいだ。大嫌いだつた。

佐道 加藤絃一さんについては、あの人は嫌いだという方がけっこう政界にいらつしやると思うんですが、そのわりには宏池会のエースとかプリンスとか言われて、派閥を継承されたりしていませんね。

松野 あれは権力者に取り入るときは別人だ。土下座しても、玄関に看板を置くような男だな。

佐道 宮澤「喜一」さんにそうやって取り入ったわけですか。

松野 宮澤に取り入った。

伊藤 だけど、下には人望がないわけですね。

松野 ない。人望がないから、金をばらまくしかないんですね。ばらまいたその金が、今度は問題になった。

伊藤 あれもやつぱり内部告発でしょう。

松野 利権には競争相手がいますからね。内部告発よりも競争相手がいるんだ。取るか取られるかだから。私が土建業に近づかなかったのは、必ずやられるに決まってるからだ。間（はざま）が取れば、鹿島は敵だ。鹿島が取れば、大成は敵だ。内部で常に争っている。いつかやられるから、土建に近づくなというのが、私の家の家訓だった。あの当時はみんな知っているんだ。

伊藤 熊本には土建の国会議員もいたわけですか。

松野 おりませ。松岡利勝というのがおるでしょう。

伊藤 いまはそうでしょうけれど。

小池 先生の頃はどなたなんですか。

松野 昔は藤田義光というのがいた。園田直なども多少そうだが、藤田は別だけれど、園田なんていう名を惜しむやつはほどほどにするんだ。千万欲しくても三百万で我慢する。それは利権にならないわけだ。ほどほどにする。三百万のところ五百万寄せといったら、駄目なんだ。それは利権になる。加藤はそういうことをしていたから。

伊藤 加藤自身は知らなかったと言っているんでしょう。

松野 あれは知らないと言つて、委員会を通そうと思っている。でも責任者は加藤ですからね。知らないで通るなら、日本中の会社の社長は知らないで通るわけだ。

佐道 監督不行き届けだけで呼ばれようとしているんですね。

松野 弁護士と相談して、監督不行き届けだけで済ませようとしている。私は秘書の問題で検察に呼ばれていると思う。何回か呼ばれていると思う。それで検察のことも用心しているんでしょうね。それで辞めない、辞めないと言っている。

小池 じゃあ刑事告発の可能性があるわけですか。

松野 本人はそれを心配していると思う。それで六月まで逃げたいと思っているんだ。

伊藤 なんで六月ですか。

松野 国会中は不逮捕特権がある。まさか逮捕許諾はしないだろう。それでいま辞めなければ六月までは大丈夫、そのあいだに事件は片づくだろう、警察も二ヶ月もこんなことはやっていないと。そういうことを、私は言葉の端々に感じる。

有馬 やはり、辞めたらやられる、ぐらゐの感覚はあるんですね。

松野 あるでしょうね。

伊藤 鈴木宗男もそうですか。

松野 はい。辻元も。やれば与野党でしょうね。

伊藤 検察は与野党ですから、やりやすいでしょうね。

小池 しかし民主党の鹿野「道彦」まで名前があがっていますね。

松野 鹿野はほとんど関係ないだろうな。過去で古すぎますからね。あの秘書「尾崎光郎」は四年以上前のことですからね。北沢直吉が死んだあとで秘書になったんだから、だいたい六年前じゃないでしょうか。鹿野と別れて四年ですから、六年ぐらい前のことです。

小池 それも鹿野の「秘書の」ときの人間関係ではありませんからね。

松野 あれは山形ですからね。加藤も山形、鹿野の秘書も山形だ。それで山形利権で両方がぶつかっているんだな。山形総合病院なんていうのは、加藤の秘書「佐藤三郎」と、鹿野の前の秘書がぶつかっているんだ。

鹿野の前の秘書はだいたいぶやり手のようですね。鹿野なんか問題にならないほどやり手だな。それで運輸省の役人の徳島の知事の円藤「寿穂」、あれが引つかかっているんだ。あれはあの頃の役人だから知っていた。役人と代議士秘書だ。それで役人の時代に飲み食いしている。それが知事に出るといので、応援しよう、その代わり仕事を世話してくれよ、ということでも自然に行っただけですね。

伊藤 なにか、すごくわかるような気がしますけれどね。

松野 筋道は時間がかかるが、ぐるっと糸がなれば事件にはなりません。必ず糸がある。道がある。けもの道がないと、なかなか畏にかからない。けもの道をたどると、みんな出てくる。鹿野はただ利用されただけでしょうね。加藤のほうは、加藤が秘書の佐藤を利用したんでしょうね。加藤の方が上だ。秘書は使われた。鹿野は秘書に使われた。

佐道 加藤は、実質的にこれで将来の復権は無理ですか。

松野 もう不可能でしょうね。

佐道 少なくとも重要なポストに就くとか、そういうことはもう

無理ということですか。

松野 もうない。一番いいのは、早く辞めて、早く出直すことだ。その時間的余裕と度胸があるかどうかだ。

佐道 もう遅い、という気がしますけれど。

松野 身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれで、早く捨てれば早く浮かぶんだ。それで私は早く捨てたんだ。これは自信があったからだ。いつまでもおると、一生追われる政治家で終わってしまう。噂の政治家では駄目ですよ。噂を消すためにはどうするかというのと、一番いやなことをしなければならぬ。自分の持っているものはみな捨てる。憐憫の情というので、深追いするのは男じゃない。日本人はきれいになると、それを追うやつの方が悪口を言われる。私の場合、辞めなくてもよかったです。辞めないと一生、弁明政治家として終わるな、と思ったから辞めたんです。弁明政治家は政治家ではありませんからね。ただ議席があるだけでね。

無所属で三人「鈴木、加藤、中村喜四郎」並んでいても何の役にも立たない。発言なしです。あんなところに追い出すのもおかしい。毎日仲間と顔を合わせ、恥ずかしい思いをして。友達も冷たいもので、ああいうことになる、遠くで挨拶をしてもそばにいつて物を言うやつはいなくなる。そんなところを写真に撮られるといやだからね。鈴木宗男なんかと一緒に写真を撮られるのはいやだから、みんな逃げる。鈴木から金をもらったやつでも逃げるんだ。それははっきりしている。私は、無所属でいるなら、辞めた方がいいと思う。

佐道 いま加藤が駄目になって、河野洋平さんも病気でですから、宏池会に再編の動きがありますね。麻生太郎さんが浮かび上がっています、最終的には麻生さんで宏池会はまとまっていくんでしょうか。

松野 最終的には麻生でまとまるが、それには河野が色気を捨てなければね。まだ河野が色気を持っているうちは駄目でしょう。

亀井「静香」が色気を持っていたら平沼「赳夫」は浮かばないんだ。河野がまだ色気を持つているから駄目でしょうね。

佐道 もう病気で駄目じゃないですか。

松野 病気でまだ生き上がるうと思つて、息子の細胞をもらつてやろうとしているでしょう。親が子に細胞を上げるというのは初めらわかるけれど、息子の細胞を親に移植するなんていうのは初めて聞く。だからまだ未練があるんじゃないでしょうか。

佐道 執念ですね。

松野 橋本だつて、今日生き返つてきましたね。それだからうまく行かない。全部捨てれば、結局「宏池会は」麻生になると思う。古賀「誠」か麻生かといつたら、麻生に決まっていますよ。あとはいない。平沼、麻生の時代でしょうね。麻生は面白い男だと思ふ。言うことがはっきりしている。やはり吉田「茂」さんの血を引いているんでしょうね。

小池 演説がうまいですね。聞いたことがありますけれど。

松野 青年商工会議所ですからね。青年商工会議所がいつでも一つのシンボルですよ。青年ではないけれど、彼が名委員長なんだ。それがいまだに残っている。麻生はものになるけれど、他人を怖れないから、人好きが必ずしもよくないでしょうね。私はいいと思ふ。媚びない。

佐道 小泉さんとは、政策や考え方がだいぶ違うような気がしますが。

松野 違います。言われても平気だ。両方とも違つていることを承知してつきあつている。どちらも尊敬している。

佐道 仲はいいんですか。

松野 悪くはありません。意見は違つても、いやなことはしないからね。違つた意見のままで大人はやつていくんです。自分の意見を通そうとか、相手をねじ伏せても通そうなんていう下品なことをすると駄目なんだ。意見は違ふことを表示して、あとは大勢

に任せる。それが大人の勝負だ。違つていふことは言つていけないことはない、言つていいんです。ただし最後のとどめは、我慢しなければならぬ。みんなが決める方で我慢しなければならぬ。その度量は、どちらもあります。それは争ふことはあります。

■ダグラス・グラマン事件のつと

伊藤 前回、質問要項をつくと申し上げたんですが、ちょっといろいろ考えてやり方を変えまして、だいたい大平内閣の時代から、新聞記事にどういふふうになつたら、とてもいやな顔をなさるのではありませんかと思ふんですが。

松野 わかります。大平「内閣」の 때가、私は一番いやなときでしたから。

伊藤 それを思い出させるように申し訳ないんですが、これがその当時の新聞のコピーなんです。「分厚い新聞のコピーを示す」。これを中心に、武田君から質問をさせていただきたいと思ふんです。

松野 今日「テレビに」出るが、このとき一番いやな思いをしたことで、いま私が受けているのは、この体験談をみんな聞きに来るんですね。今日も、「ザ・ワイド」に出るのは、このときのことを聞きに来る。このときの、二十三年前のフィルムを持ち出してやつているんです。だから私の一番いやな時代。ということはいま一番いやな事件の多いときでしょうね。

伊藤 加藤に辞めろ、というメッセージになるわけですか。

松野 それを私は言つたんです。

武田 このB4の紙「朝日新聞見出しデータベースからの抽出」が、見出しを拾つた一覧です。一番最初に松野先生の名前が出て

くるのが、一九七八年十二月十六日です。福田さんと党の改革推進で一致、という話です。

そして同じ日に、ロッキード事件にも見え隠れしているということ、ダグラス社の話が、朝日新聞に大きく出ています。

松野 私はロッキードはあまり知らないんですがね。

武田 ここには航空機メーカーと商社の関係の経緯が図になっているんですね。

伊藤 ここにグラマンが出てくるんですね。そして日商岩井と。

武田 つながってくる。ロッキードに対して、ダグラス・マグダネルですか。

松野 このとき大きな商社があつたんですが、伊藤忠ではなくて丸紅ですね。丸紅がロッキードでしょう。丸紅の社長はなんといつたか、水戸の男だ「桧山広（事件発覚当時は会長）」。それが結局、私を選ぶか田中を選ぶかということだった。丸紅が近づいてきたんです。飛行機はアメリカが露骨に来るんです。アメリカは日米協定の貿易問題の中で、アメリカ大使館から日本政府に、貿易問題のリストが出てくる。その中に防衛産業が入ってくる。貿易問題の中に防衛産業をうんと入れてくるんです。これが一番金額がはるし、競争がない。イギリスとフランスがそれに対して文句を言ってくる。それらも飛行機をやっていますからね。しかし貿易金額でいうとなんといいっても日米だ。アメリカの言うことを聞かざるを得ない。そのリストの中にザーツと入ってくる。

丸紅が「私のところに」来て、「今度アメリカから軍用機の要求が来る。どういうお考えですか」という。私は二回か三回、二人だか来たので会いました。

伊藤 それはアメリカ大使館ですか。

松野 丸紅です。

伊藤 ここは評判だった日商との関係ですね。

松野 これは日商だけれど、丸紅も私のところに来た。日商も来

た。日商は岸「信介」さんの秘書だ。丸紅は本人が来た。何回かゴルフに呼ばれた。横浜カントリークラブだ。二回ぐらい行きましたかね。それで、「今度貿易で、アメリカから要求が来ます」という。もう両方とも商社として知っているわけだ。だから「日本として、それをピックアップしてくれればいい。どういう姿でピックアップしてくれるか」という質問が来た。その頃、私には言わなかったが、その男は田中角栄のところにも行っていた。私か田中か、探りに来ていたんだ。そのうちに、私が日商岩井と親しいということがわかったから、サッと向こうに逃げていった。それで私の方には来なくなった。

日商岩井も同じことです。「アメリカから要求がある。日米片貿易でどうしても買わなければいけないんだ、それについて協力してもらえるか」ということですね。

武田 松野先生の名前が朝日新聞に出てくるのは、ロッキード事件の調査の関係で、いまお話があつたような販売競争があつて、実はロッキードだけではなかった、ダグラス社もそうではないか、ということですよ。それが、ちょうど七八年十二月、年末なんですよ。そして年が明けて一月九日になると、突然チータムの証言が出て来て、岸、福田、松野、中曽根氏の介在があつたという記事が出て来て、ワツと火がつくということだと思えます。

松野 E2Cというのはなんでしたかね。

佐道 早期警戒機です。

松野 これは私は関係した覚えがないな。話を聞いただけでしょうね。買ったのは田中ではないかと思う。

伊藤 ここではグラマンからカーン、川部「美智雄」さん、岸、福田、松野。日商岩井の側は海部八郎と島田「三敬」。

松野 さつき糸の話をしたが、日商がいろいろなルート、けもの道を見つけてくるんだ。日商岩井というのは昔は鈴木商店といつていた。台湾を一手に握っていた。その鈴木商店と私の親父が関

係が深い。鈴木商店が破産したときに、私の父に、「樟脳会社を引き受けてくれ。原価でいい、額面でいいから、樟脳会社を引き取ってくれんか」ということで、私の父に話があった。それで額面だけで引き取った。その関係で、鈴木商店というのは、その後もずっと親しかつた。その番頭が私のところに、神戸から来たんだ。もう死にましたが、そのときは生きていたんです。「高畑誠一氏?」。「私はあなたのお父さんという経緯がある。鈴木商店の番頭で、私はそのときの立会人です。鈴木商店が破産して、全部の事業を競売にした。そのときに、一つだけあなたのお父さんから額面で買ってもらった。普通なら半値なのに、鈴木商店は気の毒だと額面で買っていたいたえらい人があなたのお父さんだ」という。それは知りませんが、そういつて、真っ先に私のところに飛んできた。

「それで、私の子飼いの、私の養子みたいな者が、海部八郎だ」という。何か隠し子だという噂ですけれどね。鈴木商店の隠し子みたいな地位があつて、日商岩井の中で海部が威張っていたんだ。鈴木商店はいまでも日商岩井の株を持っていますからね。合併したといつても、少なくとも一〇%ぐらいは鈴木一族が株を持っています。一〇%持つていけば大きい。それで海部は隠し子だと言われた。それでそのじいさんが海部を連れて私のところに来た。

それは岸さんから来る話と符合するわけだ。事実はどうか別として、来たことは間違いない。私は親父から話を聞いているから、その話が合うんだ。額面で買ったかどうかは知りません。向こうはそういつて、恩人だと言いつた。「額面で買っていたいたのはおたくのお父さんだけで、あとはみんな三分の一とか四分の一にたたかされた。しかし額面で、サイセイ樟脳という会社を鈴木商店から引き取ってもらつた。おかげで鈴木商店の整理に非常に貢献してくれた」という。その鈴木商店の、鈴木の子が海部

だ。海部は日商におるけれど、鈴木商店の代理なんです。だから日商の専務の中でも権限がある。専務は六人ぐらいいたはずですが、六人の専務の中でも特にこの人は鈴木商店代理だ。

そのときの番頭というのは、私が五十歳ぐらいの時に八十歳ぐらいのじいさんだった。それがわざわざ京都から出て来て、築地の「吉兆」に海部を連れてきた。それが岸さんから来る話と符合するわけだ。やはりけもの道というのは、不思議にどこかつながっている。それが私と日商のつながりだ。海部八郎は、そういう意味では、私は非常に信用していた。その八十歳のじいさんの、鈴木商店の本当の番頭の話を知っているものだから、私がやや信じたのは、そのけもの道のルートがあまりにも見事だからだ。事件というのはただ起こるのではなしに、陥りやすい七つ道具が揃っているんだ。

伊藤 このハリリー・カーンという人には、先生は会いましたか。

松野 会いました。川部との筋でした。

伊藤 でもこの人は日本語をしゃべれないんでしょう。

松野 しゃべれない。川部が通訳をしている。川部というのは岸さんの事務所の個人通訳です。岸さんが外国に行くときには、公式には別ですが、ゴルフだとかパーティーに行くときには川部がついていく。川部はアメリカで皿洗いか何かをして、アメリカに明るい、アメリカ英語をしゃべりました。ハリリー・カーンというのはー。

伊藤 ニューズウィークの人でしょう。

松野 いろいろあつて、川部がレポートを出すんだ。日本の政治レポートを週に二回出すと、ハリリー・カーンが二千ドルぐらいくれるんだ。そういうルートができてくるんだ。レポートがいいか悪いか別です。要するに、二千ドルとか三千ドル、長年捨て扶持をもらつてくるんだ。こういうときに活かすために、岸さんを使うためには川部を仕込んでこなければ芝居はできない。それで川

部はレポートさえ出せば二千ドル、三千ドルくれるから、七、八年、通訳の内職としてもらっているわけだ。だからハリリー・カーンは岸さんには自由に会えるわけだ。それで岸さんに取り入るにはハリリー・カーンが一番いいわけだ。私も川部が連れてきました。この人は非常に紳士だという。

伊藤 「ハリリー・カーンは」グラマンのコンサルタントなんですね。松野 コンサルタントになったんでしょね。グラマンが日本に売り込むために、つけたわけだ。それはアメリカは見事なものだ。きのうは敵でも今日は味方になりますからね。だからハリリー・カーンがグラマンに「自分を」売り込んだんでしょ。『飛行機を』売り込むなら俺を使え、俺にコミッションを払え、そうすれば俺が岸につないでやるという。前もって投資しているから、それができるわけだ。人脈投資ですね。

武田 グラマン・インターナショナルのノーマン・ポールという法律顧問が、カーンさんを紹介したと書かれていますね。

松野 そういうルートがあるんだ。川部というのは岸さんの秘書をしているときに、ほうほうから誘いを受けて、レポーターになっているんだ。レポートは大したことがない。日本の新聞をちょっと翻訳して出すようなものだ。向こうは人脈が欲しい、岸との人脈が欲しいから、川部に金を前から払っているんだ。

武田 このときカーンは「フォーリン・レポート」というの出しているんですね。

松野 それでは、「フォーリン・レポート」です。私にも何回か来ましたよ。英語だから読めないんだ。

武田 中東情勢にも詳しいようですね。

松野 中東情勢にも詳しくかった。私は川部に紹介されて、レバノンに行ったことがあります。それは中東情勢だ。川部が紹介して、レバノンに行ったときに、フェニキアというホテルに泊まった。日本人はそこに入れないそうだ。私は紹介されて泊まった。どう

して日本人は入れないんだと聞いたら、日本人の団体が行ったときに、ビデを知らずに、あそこでみんなうんこをしちゃった。だからビデが詰まって、流れなくて大騒ぎになった。それ以来日本人はお断り、泊めなくなつたという。だけど川部の紹介だと泊めてくれるというので、川部の紹介状を持っていったら、そのホテルに泊めてくれました。

伊藤 中近東というのは石油の問題ですかね。

松野 石油のブローカーなんだ。川部もそれに入っていましたね。大きいものではない、要するに石油のブローカー程度だ。

伊藤 ハリリー・カーンがそうなんですよ。

松野 ハリリー・カーンはオイルのブローカーだが、オイルだろうが飛行機のブローカーだろうが、何でもしますからね。

武田 『佐藤栄作日記』でも、たしか佐藤がハリリー・カーンに紹介されて、石油会社の人と会うというのが出て来ますね。

松野 ハリリー・カーンは日本でいえば政商でしょうね。そのルートをくつたのが川部でしょうね。

武田 その方はもういま亡くなっていますね。

松野 もう亡くなりました。そんなに悪いことはしていません。その程度のレポートを出しているという話で、わりに紳士でした。

武田 そして「一九七九年」一月十五日の新聞を見ると、塚田徹さんが渡米する、グラマン疑惑を調査、という報道がかなり大きくされています。

松野 これはなんで行ったんでしょうね。

伊藤 グラマンの疑惑を調査するという話でしょう。

松野 なんてでしょうかね。そんなに大きな意味はなさそうですよ。

武田 ちょうど国会図書館の予算を取るための小委員会があつて

。松野 それは私はあまり印象に残っていませんね。「一月二十二日付の朝日の見出しを見て」「松野氏以外にも暗号」、こんなこと

はちよつと大袈裟で、私は暗号なんでもらっても読めないんだから。私たちの知らないいろいろなことがニュースに流れる。塚田が行くとそれをグラマンにつなげてみたりする。ニュースというのは、箸ひとつ落としても暗号という。神経過敏でそういうふうになってしまふ。暗号なんて私はもらったことはないし、もらつたつてわかりやしない。いまだにそんな記憶はありません。しかし、そういうことがすべてそうなるんだ。

武田 暗号で松野さんはPFと呼ばれている。

松野 それは川部とカーンのあいだの暗号だったんでしょうね。それは私には関係ない。彼らが勝手につくつた暗号だ。

武田 松野の「松」が「パイントウリー」、「野」が「フィールド」でPFだというんですね（一同笑い）。

松野 私も初めて知ることだ（笑い）。何を言われているか私にはわからない。

武田 一月半ばを過ぎると、岸さんの名前がすごく新聞に出るようになって、松野さんよりも多くなりますね。

松野 それで私はなるべく岸さんの話はしたくなかった。ルートはそこだけけれど、それをやるとしても、辻元じゃないけれど、人を巻き込むことになる。私は岸さんのところが一番大きな舞台だとわかつていけるけれど、それを出したら駄目、大変だと思つて、私は一切、ひとことも岸という名前を出さない。それだけに追及が厳しかった。厳しいけれど、言わないと決めたら言わなければいいんだ。

伊藤 たぶん僕が岸さんのインタビュをやっていたのはこのころだと思ふですね。毎日毎日、グラマン、グラマンで岸さんの名前が出てくるわけですよ。それで日赤のビルに行くんです。「いやあ、よく出ていますね」というと、「いや、別に大したことはないよ」という。中央公論の人も、連載を始めたのはいいけれど、いつ捕まつて中止になるかわからないといつて心配していた

んだけれど、本人は平気な顔をしていた。

武田 悠々としている感じですか。

伊藤 全然、動じていない。

松野 岸という人は、他人には利益を与えても、自分で利益を取らない。知つていても取らない。それがあの人が安心してゐるところだ。どんな事件があつても、自分は取つていないんだから。周辺が取るんだ。「岸さんは周辺が」取つてゐることを知つてゐるし、それを認めている。しかし自分は取らない。

伊藤 それが一番悪いやつなんだ（笑い）。

松野 だから安心してゐるんだ。それで岸さんの生活はどうするのか。それは川部とか中村「長芳」という秘書がとるだけ。岸さん自身は、金銭を見たことも触つたこともない。利権を知つても取らない。それでいつも悠々としていた。私は直接金銭の話をしたことがない。全部、川部と中村の話だ。

伊藤 中村という秘書はおつかない顔をして事務所にいましてよ。

松野 それがやり手なんだ。それが加藤の佐藤みたいなもの、岸の中村なんだ。

小池 金庫番ですか。

松野 金庫番であると同時に、裏の仕事を全部切り盛りしていた。また岸さんもそれを認めてやらせていた。その代わり一切、岸は知らない。経理も中村が報告しなければ、岸からは聞かなかつたでしょうね。それぐらいうまく行つていた。

伊藤 大胆不敵といえは大膽不敵ですね。

松野 岸さんが、あれはどうなつた、なんて聞いたことはない。中村が報告するまで、岸は一切聞かない。それは大物中の大物だな。だから岸さんにあれほど噂が出たけれど、直接の核心までいつたものはない。

伊藤 新聞で派手に出るわりには、中味はあまりないんですね。

佐道 同じような話の繰り返しでした。

松野 私は政党訓練は、私の親父から教わっている。他に責任を転嫁するようなことはするな、仲間から外されるよ。それで私は岸さんの名前を、二時間やっても言わない。片一方のルートしか言わなかった。私の親父以来の鈴木商店の話ししかなかった。本当は両方が合体したんですが、私はこちらばかり言っていたんだ。親父以来の鈴木商店の話を、議会の証人喚問の話を、一時間ぐらいい話した。いまの八十のじいさんの話も、そのときは覚えていましたが、それが来た。私の父からのことだから、人脈遺産だなど言った。そのとき岸のことを何度聞かれても、岸の話はしなかった。けもの道の方の話ばかりした。私の親父も死んでいるし、そのじいさんもそのときはもういないし、いくら話したっていいわけだ。

伊藤 検察は全然だったんですか。

松野 検察は何もなかった。

伊藤 参考人聴取もなかったんですか。

松野 呼ばれました。それは海部の問題なんだ。海部八郎が逮捕されたんです。

武田 ちょっと飛ぶんですが、五月になると松野さんが入院されますね。

松野 入院した。

伊藤 それは政治的な入院ですか。

松野 政治的な入院だ。

武田 そのあいだに聴取を受けているのではないかという記事がたくさん出ています。いろいろなホテルに長時間入って、なかなか出てこない。新聞記者に追われて大変だったと思うんですが。

伊藤 あの入院というのはどういふふうにするんですか。

松野 懇意な病院に頼むんです。普通の病院では駄目だ。懇意な病院に裏口入院を頼むんです。名前も別名で、カルテもつくらない。

い。病気じゃないんだから。

小池 このときは高血圧となっていますね。

松野 そう、高血圧ということにした。私は低血圧なんですけれどもね（一同笑い）。

武田 事務所はニュージャパンにあっただんです。

松野 ニュージャパンだ。ただ、毎日毎日あまりうるさいので、しゃべらなければしゃべらない。しゃべればしゃべる。どっちでも駄目なんだ。だから入院するしかない。海部が逮捕されたときに、海部の裏付け証言を取られるんだ。その証言をしないと海部八郎が釈放されないんだ。それで検察側に、おれは関係ないからいやだよと断ろうとしたら、「あなたが断ると海部八郎の裏がとれないで、いつまでも拘留しなければならぬ。それが困るんだ。二十一日、二十一日間で四十日経ったから、取り調べは済んだんだから、その済んだ中のあなたの裏付けを取らないと、事件にできないんだ」と検察から頼まれた。「そうしないと海部の調書が揃わない。もちろんあなただけじゃない、いろいろな人がいるが、あなたのだけ残っているんです」と言われた。

伊藤 そうすると海部さんは松野さんの名前を挙げているということですね。

松野 挙げているから、あなたの証言をとるというんですね。

武田 「海部氏は」松野さんと同席したということが一番最初に言っている。

松野 金額が合わないんですよ。私が想像するより、海部は多いんだ。

武田 多く言っていましたね。

小池 五億円ですからね。

松野 多いんだ。私は別に帳面をつけていないが、私の勘定よりもだいぶ多いんだ。どうしようかと思ってるね。

伊藤 その差額はどうなったんだろう。

松野 本当にそうだ。それで、検事総長が辻「辰三郎」というやつだった。私の弁護士がトミタ。トミタも海軍で同期生、辻も同期生なんだ。

伊藤 話がうまくでき過ぎている（笑い）。

松野 トミタは検事正でやめたから弁護士になっている。辻はそのまま検事総長になった。そこに私の事件が来た。それでトミタと辻が電話で、松野をどうするのか。いや別に松野に容疑はない。かけるべき法的根拠はない。しかもすでに時効にもなっている。役職もない。ただの一議員だ。政治的権力者ではあるけれど、それは刑事問題としては、贈賄の対象にはならない。職務権限はない。そういう話をずつとして。「ただ、一回も出てこられないので、調書だけ取らせてくれ。どこでもいい、希望する場所に検事が行くという。ただし自宅は困る。私の自宅・事務所では困る。それは検事が味方をしたということになる。自宅で調書を取るということは公平な調書とは見られない。だから第三者機関にしてくれ、それはホテルでもいい、どこでもいい、検事調書は自宅は駄目だ」という。証言の権威が損なわれるという。病院でもいい。伊藤 自宅・事務所だったら、すぐに新聞記者に嗅ぎつけられるじゃないですか。

松野 嗅ぎつけられる。検事調書は、そこは駄目で、あとは病院でもいいというので、二時間ばかり。

伊藤 松野先生の方から場所を指定したわけですか。

松野 もちろんです。

伊藤 どういうところにしたわけですか。

松野 病院とホテルだったかな。ホテルも私の希望するホテルだ。

伊藤 そういうのは新聞記者に嗅ぎつけられないで。

松野 嗅ぎつけられない。入口の多いホテルとかですね。「入口が」たくさんないところもありますからね。だからニューオータニとか、オークラとか、出入口が六つぐらいあるところだとわか

らない。それでそのときに、金額が検事が言うのと違うんだ。それで私は待つてくれ、ちよつと昼飯で二時間休憩してくれと言つて、トミタ弁護士に会つて、「金額が違うんだけれどどうしよう」と聞いたたら、「違うつたつて、君は違うということはどうして言えるんだ。君は記憶があるのか」と言うから、「いや、記憶だけだ」と言った。そうしたら「君は違うとも言えないじゃないか」と弁護士が言うわけだ。「ちよつと多すぎると思う」「おい、松野、間違つたら裁判の時に言い直せばいいから、記憶でそのまま呑んじまえ」という。これまた弁護士も大胆だ。「もし裁判になつたらまた言い直す機会がある。調書で争うことはよろしくない。これは向こうの調書だ。君のじゃない。対等なら争う方がいいけれど、君は被告じゃないんだから、何もそこで争うことはないじゃないか」という。

伊藤 そういうものですか。

松野 そういものらしい。

伊藤 しかし、その金額をもらったことになると、税金の問題であつてやられることにならないですか。

松野 それは政治資金規正法がない。そのときは個人献金は無制限だ。税金は関係ないんだ。

小池 三木内閣の前ですかね。

松野 それを言うわけだ。政治資金規正法の個人献金は無制限だった。税金を申告する必要もなかった。政治資金の届け出もいらないう。そのときの政治資金規正法はそうだった。「おい松野、ここで争うこともおかしいぞ。きみがそこで争うと、君は帳面を持つていてということになるぞ。記憶で言うのなら、記憶で呑んでしまえ。その方がこの事件は早い。相手がそれで済めば、君はいいじゃないか。今度君に降りかかるのは政治資金規制法だ。政治資金規制法は個人の献金は無制限だ、届け出はいらないう。所得も関係ない」というわけだ。

伊藤 いまだつたら、それは大変ですね。

松野 いまなら大変だ。そのとき弁護士は言うんだ、「これは松野、早く片づけた方がいい。ここで金額が違おうと争うとまた事件が伸びる。伸びるとまた釈放も先になる」。裁判は二年ぐらいあつたから、その方が政治家としていいということで、呑んじやつた。

伊藤 それは検事と一対一でやるんですか。

松野 いまの話は弁護士との話だが、調書の時は二人です。検事と書記の二人です。

武田 松野さんの弁護士の方は同席できないんですか。

松野 できない。調書を取るときはできない。私の調書じゃないんだから、海部八郎の調書の裏付けだから、私は被告ではない。だから弁護士がつくことは許されない。

伊藤 だから昼休みに！

松野 昼休みに、トミタという弁護士に、「金額が違いすぎる。いくら俺の記憶違いにしても、違いすぎる」と言ったら、「君は帳面をつけているのか」「つけていない」「この問題は早く解決することが大事なんだから、金額の裁判問題は一年か一年半後だ。そのときはそれでまた対策ができる。いまは早く海部八郎を出すことが事件の解決になる。ここで違おうと言ったら、また海部が二十一日間、その問題で追われる。そうするとまた君は呼ばれる。そのあいだに新聞が大きく書いて、ありもせんことを言われる。だから早くすることが要件だ、呑め」ということだ。

伊藤 「金額については」たぶんそうだと思います、というわけですね。

松野 私は記憶がない、たぶんそうだと思います。それでいいですかと言ったら、それでいいという。向こうの言うとおりに金額を言うから、たぶんそれでいいと思いますと言った。それでどんどん早く進んだ。しかしその金額は裁判で問題にならなかった。

為替管理法違反か何かで、海部の時は金額は問題にならなかった。

武田 「海部氏は」為替管理法違反で捕まったんですね。

松野 政治献金じゃないんだ。政治献金は罪にならないんだ。私の方は政治献金の問題、海部の方は為替管理法違反の問題、だからケースが違うんだ。だから金額は出てこない。それだけが為替管理法違反ではないんです、ほかにいろいろあつたんです。

伊藤 それでは、後世相当な金額を松野先生は受け取つたという形になるわけですね。

松野 それは議会で質問されるんだ。海部の言つた金額が世間に出ている。さあ困つた。「たぶんそのへんでしよう。長年のことで、少なくとも四年ぐらいのあいだの金額で、ことに私は帳面をつけていない。そのあいだに選挙も三回ぐらいあつたから、私ももらつては使い、もらつては使ひして、わからん。たぶんそのへんでしよう。向こうが献金したというのなら、その金額でしよう」と言つて、とうとうやむやなままだ。だいたい五億という感じですよ。

伊藤 いちおう五億は確定しちゃつたじゃないですか。

松野 本当とはだいぶ違うんですけどね。向こうは何かいろいろなものを入れたんでしょうね。政治献金というのはそのときは無制限なんだから。

伊藤 抜いたやつがいるな。

松野 私が記憶している中でも何千万かあるけれど、それはいいか、と思つてね。問いただす必要もないし、それによつて利害ができるわけではない。ただ餽頭が少し小さかつたというだけだ。それを言うのも大人げない。物事は大局を見なければならぬ。その弁護士は同級生だが、なかなか大胆だった。いまでも生きていますけれどね。ときどきクラス会で会うと、この話をする。

「二月十五日付朝日新聞の見出しを見て」「海部メモ」というのがありますね。

伊藤 これは議会ですか。

武田 「海部メモ」というのは何種類かあるんですね。

松野 海部が証人喚問を受けたときでしょう。

伊藤 これは海部の方ですか。

松野 そうです。それはいま見ると、いろいろ書いてある。自分個人のこと、他人のこと。やっぱり日記とかメモは、自分の都合のいいように書くんだ。日記を見てごらん下さい、自分の悪口を書いたやつはいない。それをいちいち否定するわけにもいかんしね。それが利害が相対立するならお互いに主張するけれど、私は利害が対立しないんだから。この時代は、いま考えれば本当に大人げない話で、よくこんなことをしたなと思うし、なぜこうなったかと思う。それはいま言った人脈ルート、けもの道のじいさんが海部を売り込んだ。その売り込み方が、鈴木商店の申し子が海部八郎だという。たしか、日商岩井の出資金の一〇%ぐらい持っているんです。その代表みたいなことを言う。そのときに海部というのは、「この政治献金で一切ご迷惑をかけません。私が全責任を持っています。会社の社長も私には関与できない」と言っている、非常に信用があるようなことを言った。私は海部八郎というのが全部自分でやっていると言っていると過信したところもあるんですね。

武田 この事件の過程で、海部さんが「海部メモ」の筆跡鑑定を拒否して、有森「国雄」さんも何も話さないということ、これは何かあるんじゃないか、という雰囲気をつくった。同時に、海原「治」さんの予算委員会での発言と、海原さんが書いています本で、「PR会社と某商社」という部分があつて、これはやっぱり何かある、ということになったんですね。

松野 海原というのは伊藤忠なんだ。そこにも内部告発がある。伊藤忠で、そのとき争った飛行機があるんです。

武田 F5とF4ですね。

松野 F5だ。F5とF4が争った。F5を伊藤忠が売り込んで、

ずっと来ていた。私が就任するときに、岸事務所で、「伊藤忠の海原というのがF5を売り込もうとしておる。これをまず用心しろ」というのが第一命令だったんです。海原というのが悪いやつだということを、就任前から私は言われていたんだ。それは中村から、岸さんの目の前で言われたんです。私は岸さんに挨拶に行つた。今度防衛長官になりますと。そうすると、そこに中村が来て、「頼ちゃん、頼ちゃん。ちょっと先に伝えとかなきゃいかん」といって、岸さんの前で滔々と海原が一番悪いやつだという話をした。軍人を馬鹿にしているとんでもないやつだ、これが一番悪いやつだ、という就任のときの先入観から教わつた。だから私は海原を色眼鏡で見るわけだ。そこで海原がF5の説明をするときは、私はああこいつだな、と思つて、それがこの問題の裏の内部告発につながつてきているんだ。私も告発された、海部も告発された。それは伊藤忠と海原だ。それでなければこんないろいろな細かなことは出て来ませんよ。

伊藤 「二月二日付朝日新聞の見出しを見て」この「日商岩井と松野氏同族会社」というのはどういうことですか。

松野 それは樟脳会社です。樟脳会社を引き取つてやっていたから。

伊藤 その樟脳会社は、先生ご自身も。

松野 私の親父が全株を持ってやっているんだから。私の兄貴がいまでもやっています。いまでもあります。もう樟脳といつても、天然樟脳はありませんけれどね。いまはナフタリンだ。あの頃はクスノキで樟脳をつくつた。

伊藤 台湾ですね。

松野 台湾だ。あの樟脳は火薬に入れるんです。そうすると爆発力が強くなる。

伊藤 それで日本火薬なんか関係があるんですか。

松野 そうです。樟脳を入れるわけです。その会社です。

伊藤 日本火薬というのも鈴木商店の關係の会社ですね。

松野 そうでしょう。私の同族会社というのは、そのことなんです。

伊藤 そういうことまでほじくり出されるわけですね。

武田 むちゃくちゃ書かれていますね。

松野 それは私の親父のときだから、何を言われてもね。そのときはまだ私が生まれていないときの話ですからね。

佐道 伊藤忠、海原氏からの告発という話ですが、海部さんの証言でも、松野先生に防衛庁の人事をお願いして、海原氏の官房長から国防会議への転出についてはご尽力いただいたというような話があるんですが、このあたりはどうなんですか。

松野 それは私の次の増田「甲子七」のときにやったことだ。

佐道 そうですね。

松野 私のは、短いからとうとう人事の異動ができなかった。その次には増田だから、私が増田に引き継いだんです。

佐道 やった方がいいぞ、ということですか。

松野 こういうふうにしたかったけれど、私のときにはまだ転勤の任期が来ていなくてできないから、任期が来たら、こういうことがいいんじゃないかと私が増田に引き継いだんです。それで増田がそんなことを議会で聞かれたんだ。それで増田甲子七は、さすが侍だから、「私は話を聞いても、するかせんかは私が決めたんだ」と言った。

武田 そういうふうに言っていましたね。

松野 だから「何も松野君が決めたんじゃない。そんな不見識なことは俺はしない。話は聞いても決めるのは俺なんだ」と言った。

増田甲子七はさすが侍だから、そういう答弁をしましたよ。「松野から聞いた、聞いたけれど、それは参考で、決定は俺がするんだ。決定権は俺にあるんだ。松野に言われたから俺はやったのではない。俺がやったんだ」と議会で言っていました。さすが増田

は当然の常識がある。私たちはそういう教育を受けているから、他人に責任を負わせるようなことはしない。この事件でも他人に責任を負わせるようなことは一つもしなかった。どうせ同じなんだ。一人でかぶろうが、みんなにやろうが、ただ風呂の湯をぶっかけるだけで、つまらんことだ。それでは再び仲間に入れてくれませんよ。それが辻元なんかにはわからないんだ。

武田 このとき自民党で特別小委員会が開かれて、永田亮一さんが小委員長になりましたが、永田さんとはどういう関係でしょうか。

松野 永田セイランといって、慶應で私の先輩になるかもしれない。淡路島出身のおとなしい男です。二世ですね。敵でも味方でもない。永田が何か出ていますか。

武田 記事によれば、永田さんが、アメリカへの派米議員団の団長になって行かれて、SECから出たという非公開の資料を探してきて、そこに、ダグラス社の代理店を三井から日商岩井に替えた、そのときに示唆した某高官というのが松野さんだという情報載っているという資料をもらってきたとあります。これはあとのこと、これが松野さんだという確証はまったく出ていないですね。最初は岸さんだったんですね。

松野 岸さんでしょうか。私ではない。

武田 それが途中で、おそらく松野さんだろうという話に変わっていくんですね。

松野 私はそれは岸さんというか、中村だと思う。私はその記憶はない。私のときには、その筋に変わった後の話です。

武田 この事件にはいろいろな文脈があるんですね。

松野 あのとときはSECというのは大したものではなかったんだ。ところが世界中に、インドネシアから広がった。それが次々に出て、私のいまの話が出たり、田中角栄になったり。SECはあの頃のはやりで、独禁法の関係みたいなものではなかったでし

ようかね。海外投資株式調査委員会みたいなもので、インドネシアの大統領が出たり、アラブが出たり、ほうぼうの問題が出たんです。

伊藤 そのあと、このSECはほとんど出てこないですね。

松野 出てこないんです。大したものではなかったんです。たまたまインドネシアの大統領に触れたり、いろいろなことがあったのでワッと出たんです。そのあと正義の味方みたいになった。それからほとんど問題になっていませんね。「新聞の見出しを見ながら」まあ、岸事務所、松野と、毎日毎日こんなものばかり出ていますね。出ている、出ている。

伊藤 いろいろな人が証人喚問されますね。

松野 その証人喚問のときも、野党が予算を通す通さんといって大騒ぎする。そのときは大平「内閣」だった。

武田 金丸「信」さんが国対委員長で、ずいぶん。

松野 それで、「なんとか証人喚問を吞んでくれ」と言つて金丸が来るんだ。「吞んでやつてもいいけれど、俺と何の関係があるんだ。俺のは俺、予算は予算でやればいいじゃないか、何の関係があるんだ」「どうしてもいつぱん出てくれ」「しかたない、出てやる」といつて出たんです。

伊藤 それは何月ですか。

松野 二月の終わり頃じゃないですか。

武田 参考人聴取が五月初めぐらい、だから四月ぐらいからやつたんでしょうか。ちょうどその頃に松野さんは入院。

松野 桜の頃でした。

武田 それで五月十二日に退院されて、国会と党の方針に従いますと松野さんが記者団に言うということですね。このときは、自民党が国会運営が厳しいという話ですね。

松野 そうです。大平が電話で頼むと言うし、金丸は何度も来るし、私も面倒くさいから、もう辞めちまえ、と思った。もう一つ

は、どうせ選挙が暮れにあると思った。選挙まであと半年あるなと思った。辞めて、翌月選挙ではおかしい。選挙を計算に入れて辞任したんです。それでだいたい六ヶ月後に選挙になったと思う。だから五月に辞めて、暮れには選挙だった。それを私は計算した。あまり近いとおかしいと思うし、あまり長くてもいけない。ほどほどのとき、一年以内と思って、選挙を見据えて早く辞めたんです。

伊藤 五月八日の朝日新聞の社説は、「国会は松野氏喚問を最優先に」となっていますね。

松野 そう。私は参議院まで出たんですよ。衆議院議員だから衆議院だけでいいので、参議院に出る義務はないんだ。それでも出てくれと言うので。

伊藤 それは予算を通すためですか。

松野 いや、そうじゃない。私の親父が参議院議長をしていたものだから、参議院にも敬意を払ってくれと。

佐道 義理を果たすためなんですか。

松野 義理を果たすためだ。こんなに丁寧な者はいませんよ。それで私は威張つて言うんだ。私は衆議院と参議院に、出なくてもいいのに出たんだ。それは親父が議長をしていた参議院を軽視するのかと昔の仲間が言ってくる。親父に敬意を払って出ようかというので、私は出た。だから私は証人喚問については優等生なんだ。出なくてもいいのに出ているんだから。私は問題の本質に自信があったから。要するに岸さんのことさえ言わなければいいんだ、あとに私には罪がない。政治資金は金額がいくらだつて私は無罪だ、追徴を受けないし、税金も関係ない。すべてのことで私は刑事問題になったり法律違反にならないという自信を持っていたから出られたんだ。だから芝居はあったんです。参議院に行つたら、私は「みなさん、お世話になって、親父の気持ちがいま頭の中をよぎって」なんて芝居がかったことを言っていました

れどね(笑い)。

武田 一九七九年の一月にチータムの発言があつて、三月に松野さんがずつと沈黙を続けている。そのあいだに福田派の若手国会議員なんかと会つていたという記事があるんですが、このへんはご記憶ですか。

松野 それはみんな一緒です。あのときは福田の縁で、福田の仲間とずつと一緒だった。ただそれに渡したか渡さんかというようなことを、そこで質問する。それをなんべんも聞いた。それはいまの鈴木宗男じゃあるまいし、三十六人に出したとか、あんな帳面を出す馬鹿はいません。だからその意味でも仲間信用を受けただ。

伊藤 しかし五億円ぐらいもらつたら、それはどこへ行つたということになる。

松野 誰だつて、こんな金を分けたと言われたら困るでしょう。選挙区にも。だから一人の名前も言わなかつた。議会では何に使つたかという。「金というのは貯めるときは難しいが、減るときは早いものです」と言つた。

武田 いまでも五億円は大変でしょうけれど、当時だつたらかなり大きな金額ですからね。

松野 私は一人の名前も言わなかつた。それは、さすがにあまり追及しなかつたな。

伊藤 野党が、ですか。

松野 野党が。

伊藤 野党に金を流したわけではないんでしょね(笑い)。

松野 一通りに質問は全部したけれど、追及する者はいなかつた。私は言わないということはわかっているから。それは岸さんのことも何遍も聞かれたけれど、言わなかつた。腹を決めていけば怖くない。中途半端で接するといけない。ここここは言わないと決めて、こつちは何を言つてもいいと決めてあれば、証人喚問も

怖くない。

佐道 記事によると、喚問が終わつた後、松野先生は一人でかぶつたとか、役者が一枚上だつたとか、自民党内で株が上がつたということですね。

松野 私が一人の名前も出さなかつたことでしょ。それで政党訓練というのは大事なんだ。松野と組んだら大丈夫だ、どんなことでも他人に責任を転嫁しない、その信用が上がつたんでしょね。これだけ大きな金を使って、一人の名前も出ない。仲間はホツとしますよ。岸の名前も出なければ、佐藤も出ない。

伊藤 五億円を独り占めした(笑い)。

小池 ただ、大平政権ですね。前の話になりますが、先生は三木内閣の改造のときに、三木首相は先生を政調会長から幹事長にしたいという提案がありましたね。しかし、それを宏池会が反対をして潰したという経緯がありますね。それから見ていると、宏池会・大平というのは先生に冷たかつたんじゃないですか。

松野 大平は私は大嫌いだ。そのとき総理だつたんだ。大平の総理官邸に行つて、「党のために俺は出たんだから、党のために離党も辞任もするよ。しかしその恩義はいつか返せよ。君たちのために俺はやるんだから」と、総理執務室で大平に怒鳴つたことを覚えてる。二人だけだつた。「おい、大平、覚えておけよ」と言つた。「はい、わかりました」と言つたが、その代わり何もしやしない。

伊藤 証人喚問されたときには、社会党、共産党あたりが先生に對して突つ込んだわけですか。

松野 あまり突つ込まなかつたですね。あまり困つた質問はなかつた。社会党はさかんにやつていましたね。

伊藤 ではあまり記憶に残るようなことはなかつたんですね。

松野 あまり記憶に残るような厳しいものはなかつたですね。

伊藤 相手の名前も覚えるほどのこともない。

松野 どうして覚えていないか。覚えていても、忘れることもあるからね。人生には、覚えていなければいかなこともあるが、覚えていてはいかなこともある。恩人は覚えなければいかなが、恨みは早く忘れた方がいいこともあるだろう。恩はいつまでも覚えていなければいけないが、恨み言は忘れた方がいいだろうなんて、そんな妙な答弁をしていましたよ。とにかく二時間もてばいいんだから。質問時間は二時間だから、向こうが一〇分質問すれば、こっちは二〇分答えればいいんだから。

伊藤 それを含めて二時間なんですね。

松野 含めて二時間だ。

伊藤 じゃあ、余計なことをいっぱい言えはいいんですね。

松野 いっぱい言えはいいんだ。だからいまのような話だね。質問を受けてから立つて答えるまでに時間をかけて、一所懸命考えて真面目に答えるような顔をしながら、言葉も二回ぐらい言いつわすわけだ。そうすると答弁の時間が長くなる。質問と答弁を含めて、二時間我慢すればいい。それはこちらも慣れていきます。なるべく与党の質問を長くしてもらおう。与党質問を一時間してもらおう。あと一時間を野党に回す。一時間の与党質問は、どんなことでもなあなあだから、長く答えてもいいわけだ。そういうことは慣れていますから。野党質問は、共産党なんか一〇分ぐらいしか時間がない。そういうふうになっている。一〇分という、質問を二つもすれば終わりですよ。それはわざと答えなければいいんだから。

伊藤 それほど向こうも核心に迫るような根拠がないわけでしょうから。

松野 残念だけれど、法的問題がないだけに困る。政治資金規正法違反ではないかといっても、政治資金規制法は違反ではない。法的に何も無い。小さいことでも法的にあれば、それを言うでしょうね。税金を払ったか、とか。小さいことでも脱税ならやはり

いかんでしよう。虚偽の申請で告発されるでしょうね。小さな脱税問題で告発される。

だからこういうときは、辻元ではないが、小さくても法律違反があるといけない。あれは所得税法違反になるでしょうな。「政策秘書に」五万円しかやっていなくて、四十五万受け取っているんだから。

伊藤 詐欺罪になりますね。

松野 詐欺になる。税法も引つかかるでしょう。私はいくら大きくても引つかからない。そこで詰めようがなかった。

武田 朝日新聞は「構造汚職」というような言い方をしていますね。

松野 構造汚職でも法律がないんだから、止めようがない。職権もない。私も大臣在任中においては、一切金銭を受け取っていませんからね。大臣在任中にそういう言動は一つも入っていませんから。飛行機の選定なんていうことは一つもいつていない。だから大臣在任中の行動、発言、答弁に、いまの日商岩井のことは関係ないんだ。それは全部調べたんだ。しかし、ないんだ。

伊藤 それは攻める方も攻めにくかったですよね。

松野 攻めにくい。ないんだから。

伊藤 いちおう野党としては証人喚問をやってー。

松野 結局一番大きな問題は、海部の伊藤忠の恨みです。それが出て来たんだ。だから海原の証人ときの答弁なんかひどいものでした。海原は露骨に暗示するようなことを言いましたね。「私は気がつかないけれど、そういうことがあったかもしれない」とか、暗示して言ったでしょう。それはスタートが違うから。私は就任のときから、これが悪いやつだと思っていたから。ちゃんと吹き込まれていったんだ。海原は知らないものだから、私に近寄って、伊藤忠と接触を保とうとしたことも事実ですね。私は先入観があるから、伊藤忠とは一切、食事もしない、話もしない、会ったこ

ともない。

武田 衆議院の委員会に出席する前、衆議院が二十四日ですが、二十二日に松野さんが突然自民党の総務会に出られますね。それが新聞で、どういう意味があるのかということが書かれています。ですが、ご記憶はありますか。

松野 あります。総務会で私は、「私のことでみなさんにご迷惑をかけて申し訳ないが、私自身自分の行動は私が責任を取る。傍からとやかく言わないでくれ」ということを言いに行っただんです。「皆さんに迷惑をかけていることはわかるけれど、私のことは私に任せてください。私の政治家としての信念の上に行動しているんだから、野党との取引の材料にしないでくれ。私の一生の政治生命を賭けてやっていることだから、それを取引材料にせんでくれ。私のことは、政争の外に置いてくれ」ということを明言しに行っただんです。私は自分の行動に責任を負う。それを総務会に言いに行っただんです。総務会でワーワー言って、取引材料にしようとしたから、私は行っただんだ。

伊藤 どういう取引ですか。

松野 要するに、出す代わりに予算を通すとか、そんなことを言っていたから。それで総務会に乗り込んで行って、みんなの前で言った。「党も大事だけれど、松野頼三の政治生命も大事ですよ。党も大事だけれど、私のことは私が責任を持つ。それで取引をせんでくれ」ということを総務会で言った。みんなが「そうだ、そうだ」と拍手したけれど、しかし結局、金丸なんかは取引をしているんだ。

伊藤 まあ、取引をしたんでしょね。

松野 そんなものくだらんね。なんだかわからん。それが北朝鮮に行っただから、わからないんだ。

小池 もう一つ、当時大平と福田は遺恨を残していましたから、先生はどちらかというと三木、福田に近いということがあってー。

松野 大平とは駄目だった。大平とか金丸、田中派とは駄目です。大平と田中は親しかったから、一緒でしたからね。福田と私たちは一緒だ。いま考えると、ずいぶん激しい中に私もいたんだなと思う。いまの加藤とは桁違いです。

武田 桁違いですね。

松野 加藤とのときの記事は、私のときに比べれば一〇分の一だ。

伊藤 真っ黒という感じですね。

松野 加藤はあれであんなにおろおろしているんだからね。

武田 この年は「巨悪」という言葉が流行ったぐらいですから。

松野 毎日毎日、これだった。それと比べると加藤なんか、まだ苦勞が足りない。あんなことでおろおろしていたらみつともない。

伊藤 みつともないといつても、あれは法にかかるとは（笑い）。

松野 かかるようなことをしてはいけないんだ（笑い）。

小池 かからないのに、これだけやられているというのはすごい（笑い）。

松野 それと比べると幼稚なんだ。

佐道 この当時、テレビはどうでしたか。

松野 テレビも大変ですよ。私の家なんて間取りまで出た。大変だったんだ。それから石を投げられたり、右翼の飛行機が私の家に突っ込むという噂が出たりして、警察も大変だ。昼夜、私の家は煌々とライトがつけられて、出入りを監視されている。家中大変だった。

伊藤 松野先生はそのときはおたくはどこですか。

松野 芝、いまの家です。その家をいつ買ったかとか、そういうことが出てね。

伊藤 それは五億円の中か（笑い）。

松野 もちろん、真っ先にそれでした。いつ買ったか、五億円の中に入っているかどうかというのが真っ先です。ところがそれはずっと古くて、五億円に入っていなかったんだ。「家を」買った

方が先だ。そうすると、そのときに借金してその穴埋めをしただろうとか言われるんだ。だからそれが真つ先です。私はそれを知っていたんだ。政治資金は政治には使っていないけれど、私的に使っていない。事務所はいいけれど、個人の家はいい。だから壁一つ別にしなければいけないという事は知っているから、今度の加藤みたいなあんな馬鹿なことはしない。私も家と事務所と二つあるから、こっちは政治資金、こっちは個人のもの、ちゃんと区切りをつけなければいけない。登記するときからだ。それが証明なんだ。それぐらいのことは私は知っていたけれど、加藤はわからないんだ。あんな馬鹿なことではない。登記のときからしなければいけない。借りるなら、契約のときからしなければいけない。それが証明になる。それをわからずにやっているなんて、素人だ。私は家主と契約書をつくる。これは政治資金としてお借りする。これは住宅として借りる。決めておけば何でもなし。そうしたら加藤も答弁する必要はないでしょうね。それぐらいの用心は私はしていたから。「テレビなどでは」事細かに、家の住宅、部屋の間取り、土地の買収、期日、克明にやられました。でも一銭も、それには関係がないんだ。

これ「当時の新聞のコピー」を見ると、驚くほど、毎日毎日やられていますね。灰色高官、と大変だったな。よくまあこれで生きてきたものだ。若かったからですね（笑い）。

伊藤 結局、灰色として残っちゃったんですね。

松野 灰色として残ったかもしれないですね。灰色も時間が経てば色が褪せますからね。まあ灰色といわれたのが十年でしょうね。選挙のたびに退いていくものだから、選挙を経なければ駄目です。洗礼を経なければ。

伊藤 五億円がどうなったのか、というのが！。

松野 一番興味があるんでしょうね。

伊藤 そもそも五億円だったのかよくわからないけれど。

松野 ちょっとおかしいな、と思うものもある。共同で何かしたものがあるかもしれないけれどね。共同投資のものが入っているんじゃないか。あれも入っているのかな、あれも入っているな、ということが気付くけれど、それをいう必要もなければ、言わなければいけない立場でもない。ああ、あいつはあれも入れたな、これも入れたなという事はわかります。でもそれを問いつめるわけにはいかない。こっちはもらっているんだからね。

伊藤 偽証罪で、ということがちらちら出ていますが。

松野 偽証はないんです。だいたい参議院で偽証、偽証と言われたが、刑事局長が「偽証というわけにもいきませんね。これはレコードの裏表みたいなものです」といって答弁したのを覚えていて。「レコードのA面、B面みたいなもので、一つのレコードを分けるわけにはいきません」と答えていた。「ちょうどレコードのA面とB面で、二つに切るわけにはいかない。偽証でもない」といって刑事局長が参議院で答えていたのをいまでも覚えています。

佐道 それは伊藤「永樹」刑事局長ですね。伊藤刑事局長が衆議院で「五億円は松野先生が要望したんだ」という言い方をして、「それは証言と違うのではないか。それは証拠があるのか」「責任を持って答えている、根拠のないことは答えない」ということをいっている。でも結局証拠は出ていないわけですね。

松野 それは私と海部とのあいだに、その八十歳のじいさんが入っていたんだ。その三人の暗示なんだ。私が言ったというわけでもない、海部が言ったというわけでもない、そのじいさんが、「非常にお世話になつていいるから、先生にできるだけのご恩返しをしろ」と言ったんだ。「これは取引の話ではないんだ。海部よ、おまえのできる最大のご恩返しをしろ」と言ったわけだ。さすがに商人だ。「先代の松野先生にお世話になつていいる、また今後お君はお世話になるから、ご恩返しをしろ」という。そのご恩返

しの金なんだ。だから取引の金ではないというじいさんは、さすが侍だ。それを私と海部の前で滔々と述べたのを覚えてる。私も金額を言わない、海部も言わないけれど、その中で自然に「できるだけ」という言葉が出てくる。おまえができる最大のご奉仕をしろというときに、海部がだいたい頭の中に描いた金額がそれでしょう。金額は全部出ていない。しかし頭の中で、それぐらいの覚悟でやったということがわかる。実際にはそこまでは届かなかったけれど、努力はそのときに自然に出たような気がする。それはじいさんの話で、取引のパーセンテージではなかった。鈴木商店がお世話になったお返しをしろということだった。

伊藤 日商岩井ではなくて、ですね。

松野 はい。それを懇々と言ったんだ。そのときに暗々裡に出た金額が五億を目標にという感じだったと思うな。

伊藤 それは口に出たんですか。

松野 口には出ない。口には出ないが、いろいろな話で、だいたい一億よりも多いなど思うし、十億は多すぎるなど思うし、そんな話を聞いていて自然に――。どれぐらいやるのか私もわからなかったけれど。

伊藤 一度に五億というわけではないでしょう。

松野 そんなことは全然ない。何年かのあいだです。

伊藤 そういう政治献金みたいなものは、キャッシュで来るわけですか。

松野 もちろんキャッシュです。小切手で来ることはありません。

武田 証人喚問で、「どうやって持って来たんですか、かばんですか」と聞かれて、「いや風呂敷だったと思う」と松野先生が答えていらつしやいました。

伊藤 風呂敷の中に新聞紙で包んであるのかな（笑い）。

松野 風呂敷だった。

佐道 検事総長も法的な問題はない、先生を訴追することはでき

ないという。これはかなり早い段階からわかっていると思うんですね。ただ伊藤刑事局長の発言は、賄賂性があるということ認めています。刑事局側がそういうふうには認識しているということ、質問している人が言わせたかったのかもしれないが。

松野 刑事局長は、そういうリンクをしてみましたね。賄賂とは言わない、賄賂性があると言っていた。

佐道 そういう発言ですね。

松野 検察からすると、そういう方に持っていきたいんでしょうね。検察というのは自分の事件に持ち込みたいんでしょうね。

伊藤 持ち込みたいといっても、確信がなければ持ち込めないでしょう。

松野 できない。いつも賄賂性という中途半端な答弁をしていますがね。レコードのA面、B面みたいなものですとか言っていた、そんな記憶があります。なんで中途半端なことを言うんだと思っていた。

佐道 法的に訴追ができないとわかっているながらも、一応われわれもやっているんだよ、ということを示すためということもあるんでしょうか。

松野 そういうことでしょうかね。検察の姿勢を示すためかもしれませんがね。また検察が、あまりこれは事件になりませんと言ったのは困るでしょうね。これだけ世間が騒いでいて、ある程度ガス抜きではないけれど。私はそういうふうに見ていた。だんだん萎ませるためにもここで水をかけるわけにもいかんなど思った。

佐道 おもしろいのは、先生が証言で五億円について、日商岩井が先生を政治家として育てるための政治献金だったと主張されて、刑事局長が、「結果においてお育ちになったかもしれないが、捜査ではそういうふうには捉えていない」と言うところですね（一同笑い）。

松野 私は、年寄りのじいさんが私と海部の前で懇々とといった言

葉をそのまま使ったんだ。「政治家として松野先生を育てて、できるだけのことはしろ」と言ったその言葉を引用して言ったんだ。お育ちになったかもしれないけれど。」

伊藤 お育ちになったかもしれないが、というのは。

松野 私は一方のことだけは、堂々と長々と話した。だから偽証ではない。もう一方は言わなかっただけのことだ。言わなければいかん、ということもないから、言わなかっただけだ。

武田 最初にチータムの発言が出たときに、松野さん、岸さんのほかに、福田さん、中曽根さんの名前が出ましたが、福田さん、中曽根さんの方は結局、ほとんど出てこないんですね。

松野 出てこない。福田、中曽根は関係ない。中曽根は特に向こうが用心していましたね。

小池 アメリカ側が、ですか。

松野 そう。特に用心していた。

小池 反米的、ということですか。

松野 目立ちたがり屋だから。

佐道 危ないということですか。

松野 危ない。秘密が守れない男だと。そこでどうしても相手が用心した。

伊藤 東京地検が航空機疑惑の捜査終結を宣言というのはいつですか。これは日付が見えないけれど、五月十六日より前ですね。

武田 早いです、たぶん五月十五日だと思っただけですね。

それで捜査終結宣言が出されるんですね。

伊藤 それで政治家は灰色決着で、関与は松野氏一人を示唆ということですね。

松野 岸さんが出てこなければ誰も出てこない。だから私一人になった。本当は岸を入れたかったんですね。

伊藤 「巨悪」「霧の中」という言葉がー。

松野 それで海部もとうとう偽証だけでした。金額も、出ても

何もないんだ。五億だろうが三億だろうが、関係なくなつた。取るに渡っていないんです。向こうが勝手に減らしたものがあつた。それはしかし仕方がない。お育ちになるためのお金だから。私がいくらでなければ、と言うわけがない。私が五億くれなんて言うわけがない。お育ちになるために好意として受け取るんだから、金額をいろいろ言わない方がいいと言つた弁護士の見解がまさに該当するんだ。それを多いとか少ないとか言うこと自体がおかしいんだ。

伊藤 東京地検が捜査終結を宣言したあとも、新聞には延々と出て来ますね。

松野 新聞は何か欲求不満だ。

武田 野党も、岸を喚問しろとずっと言っていますね。

松野 そのときは証人喚問なし、中村もなし。私だけで済ませた。岸さんと年中会って何と話したと言つたら、あの人は大物ですから、「よう元気か」「はい元気です」と、それだけしか話さなかつた。

武田 それで伊藤先生のインタビューを受けていたんですね。

伊藤 でもこれは、いつまでもいつまでも続くんですね。見出しだけ見てもエツと思うけれど、「松野喚問の背後に天皇の影」、これは何ですか(笑い)。

佐道 よくこういう記事を書くものだな、と思いますね。

武田 これは元号法制化の問題ですね。元号法を通じたかったら、松野さんの問題は早く決着をつけて、国会を正常化したかったという話ですね。

松野 すごく見出しですね。

武田 本当かな、と思いますね。

佐道 先生が出られたのも無言の圧力があつたということなんですね。

松野 まあ、政治というのはそういうものでしょうね。一種の芝

居だな。時代の芝居だ。だれが仕掛けるわけでもないけれど、そういう空気になってしまふ。人間の社会というのは空気というか、雰囲気というのか、付和雷同というのか、それでワツといくかと思ふと、ワツと返ってくる。私もワツとなつたけれど、それから潔い男だったということになってみたりするから、わからないんだ。自分は同じことをしているだけだけれど。歴史というのは、いろいろ見ると、どれが真実かということは難しい。真実を求めてもわからない。各人みんな真実を持っている。自分の真実を持っている。それが社会だということだ。だからオーラルヒストリーもみんな自分の真実を語るんだ。合わせるとちよつと違っているんだ(笑い)。

伊藤 六月になって離党問題が出てくるんですね。

松野 離党問題が出て来ましたが。私は離党しようか、しまいかだいぶ考えたんですが、結局、議員辞任はしてもいいが、離党のことについては、非常にしたくなかつた。議員を辞任すれば、選挙で当選すれば上がる。離党というのは、私も自民党の創立者ですから、私が自分で本家と思つているのに離党するのはいやだなと思つていた。そのことではずいぶん私は悩んだんです。結局大平との約束で、選挙で上がれば当然復党する、だからいいじゃないかという話をした。そこで辞任と離党を併せてしたんです。

伊藤 辞任と離党を一緒にしたんですか。

松野 ほとんど一緒です。辞任だけして、離党はやめようかと思つた。辞任は、噂を消して再選されれば、国民にも役人にもきれいなことになる。離党はまた入党から始まるから、それは片一方にしたいなと思つてずいぶん考えたんです。それで大平と二人で話をした。「それは松野さん、同じじゃないですか。どうせ当選されれば入党なんだから」と大平が言う。「よし、それじゃあそうする。おれのこの真意をよく覚えておけよ」と言つたけれど、大平はやめて、そのときは鈴木から中曽根になつていた。なかなか

か入党させないんだ。腹が立って、腹が立って。大平は途中で鈴木になりましたね。大平との約束は守れない。たしか、鈴木の中曽根になつたときに入党したはずですが。大平は選挙中に死んでしまつたんだ。

伊藤 選挙はその年ですか。

武田 十月ですね。

伊藤 このときは無所属で立候補したんですね。

松野 それで当選しました。大平が鈴木に替わつたんですね。大平との約束は、大平が死んでしまつたものだから、守られなくなつた。半年ぐらい無所属にいましたね。

伊藤 無所属にいと、あの一角に置かれるんですね。

松野 一番後ろですね。

伊藤 ときどきテレビが映すんですね。

松野 しかしいまのあの無所属とは違いますからね。当選した無所属だから。いまのは無所属に移っているやつです。あのときはきれいな無所属だから文句は言えない。いまは離党した無所属ですから、ちよつとかつこわるいんです。じゃあだいたいこんなところでしょうか。

伊藤 もう時間ですね。再選される話、選挙でまた上がってくるよきの話ですね。そのよきの話から、この次また伺いたいと思います。

松野 これ「当時の新聞のコピー」を見ると、いまの加藤なんて問題にならないね。私は十倍ぐらい追われていたんだ。

伊藤 すごい英雄ですよ。

松野 だからいま、その経験を語ってくれ、と言われるんだ。いまテレビの4チャンネルでやっているかもしれない。加藤の問題で、先輩が語るということで、早く辞めろと言つたわけですよ。

松野 いま、有識者が頻々と外務大臣のまともなものを早くつくつてくれと言つてきますね。

小池 川口は駄目ですか。

松野 問題にならないでしょうね。

伊藤 でもこの大幅な更迭はどうですか。

松野 川口は行政官ですよ。外交官じゃない、行政官です。「日本テレビの放送を見ながら」これに私は先輩として語っておいたんですが、今日どこでやるか。

佐道 この番組でやるんですか。

松野 昨日、ここに来て、ここで撮ったんです。スタジオに行く

のはいやだと言ったら、こっちに来ると言ったから、来るならいいと言ったんだ。出処進退というのは何ですかという話だ。「出処進退」の「出」というのは宮仕えをすることで、それを辞めて野に帰ることを「退」というんだ。

「以降、日本テレビの「ザ・ワイド」で、松野氏が登場し「出処進退」について語るところまで見る」

松野頼三 オーラルヒストリー

第18回

[2002年5月7日12:00~14:10]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員)

(於：松野頼三事務所)

■現在の政局・若手政治家のことなど

松野 ……とにかく政治というのは難しいものです。予想しないことがあるし、予想したことはうまく行かないしね。

伊藤 予想は基本的に外れる(笑い)。

松野 予想は外れるんですよ。まあいろいろな事態、事件ばかりでね。これは政治の枠に入るのか、刑事のほうに入るのか、本当にいやなことばかりだ。政治の空白というけれど、いまほどの空白はないですよ。選挙したほうがよっぽど早い。

伊藤 選挙も難しいでしょう。

松野 こういう事件が起こると、みんな代議士は浮き足立ちますよ。みんな身に覚えがある。大小の問題だ。風呂で一人ががちゃがちゃ騒ぐと、お湯が揺れるようなもので、誰だつて多少はあることだから。

伊藤 まったくすねに傷を持たないという人はいないでしょうね。

松野 いませんね。小泉は少ない方でしょうね。あれは変人だから。常人はみな駄目でしょうね。傷があるのが普通でしょう。

小池 しかし「山崎拓」幹事長までやられましたからね。「週刊文春」で報じられた夜這い不倫疑惑。筋が違いますけれど。

松野 あれはちよつとね。

武田 あれも別の意味で変人かもしれませんね(笑い)。

松野 本人の個人的な異常性格、変態性格だな。

伊藤 あれは本当ですかね。

松野 いや、否定できないでしょうね。否定も肯定もできないでしょう。

佐道 新聞記者もなかなかインタビューできない。

伊藤 肯定して、それでなんで悪いんだ、と言ったら(笑い)。

松野 否定するためには証拠を出さなければいけません。

伊藤 挙証責任もといったら、とてもじゃないけれど、できませんね。

松野 それはできないでしょうね。裁判で強姦罪というのは、それに似たところがあるけれどね。もつと難しいかもしれない。

伊藤 しかしとうとう加藤「紘一」さんも辞めましたね(二〇〇二年四月九日)。

松野 辞めた方がいいですね。

伊藤 辞めたからといって、復活の可能性はあるんですかね。ちよつと遅すぎたんじゃないですか。

松野 それは私はわからんけれど、辞めなければもつと駄目でしょうね。辞めれば、復活の可能性がないとは言えない。鈴木「宗男」のほうはないでしょうね。加藤のほうは、あるかもしれない、十年も我慢すれば。

伊藤 十年も我慢すると(小池 七十歳を超えますから)、もう政治家としては駄目ですね。

松野 でもまだ、みそぎを経れば、「復活は」ないとは言えないかな。

伊藤 田中真紀子の問題は、もやもやですね。

佐道 うやむやのままなんですかね。

松野 あれは強いですね。

伊藤 手を出さないんですかね。野党もできないでしょう。なんでもできないんだろう。

松野 田中真紀子だと野党も遠慮して、情けないですね。

小池 でもイメージは悪くなつたんじゃないですか。

松野 野党は質問するというけれど、「田中氏を」証人にでも出さない限り質問しにくいものですね。大臣じゃないから。大臣だつたら、もつと質問できたでしょうね。

伊藤 最近では小泉は野垂れ死にかと、新聞ではそういう感じですよ。

ね。

松野 今のままで駄目ですね。

伊藤 一番の支援者がそんなことを言っているんじゃないか。

佐道 解散のタイミングをうまく掴むということですか。

松野 もう解散するしかないでしょうね。解散する以外に生きる道がない。解散のタイミングをうまく掴めばね。

伊藤 本当に、道路公団であろうと何であろうと、一つぐらいボ

ンとやらなければね。それでも役人の抵抗というのは強いもので

すね。なんで押し切れないのかな。

佐道 肝心の郵政事業法案では、ヤマト「運輸」も佐川「急便」

も乗ってこなかったのは痛いですね。

松野 乗って来られないような状況は、すべて郵政大臣の許可が

いるとか、事前審査があるとかですね。あれではやりませんよ。

伊藤 面倒くさくてやっていられませんね。参入しようとすると、

お代官様がいろいろと難癖をつける。最近テレビを見ていたら、

「国民の郵便局」なんていって、一所懸命コマーシャルを流して

いますね。そんなお金がよくあるなあ（笑）。

松野 一番腹が立つのは土日にはやらないというお上の感覚だ。

お上は土日にはやらないでしょう。そのあいだの不便なこととい

つたらない。

伊藤 サービス機関だということを忘れてるんだな。

松野 私は土日にやらないのが一番腹が立つ。

伊藤 ポスト小泉として、ときどき人の名前が出て来ますね。

松野 人物なら麻生「太郎」でしょうね。麻生が抜群だと思っ

伊藤 でも麻生さんの名前がちらちら出てくるけれど、最初に出

て来たやつは駄目とか。

小池 麻生が出てくる時には、古賀「誠」が一緒に出て来ます

ね。

松野 あれが駄目なんだ。古賀と一緒にいたら駄目だ。麻生の顔

にこぶをつけるようなものだ。こぶは取らなきゃ。

佐道 古賀は抵抗勢力の中心というイメージができてくるから、

ちよつと担ぎにくいということもありますね。

武田 福田「康夫」さんですか。

伊藤 ちらちらと福田さんの名前も出て来ますね。

松野 麻生は、言うことが生きていますからね。自分の体験から

言っているから、経済論は生きています。役人のように死んでいな

い。このあいだ医療問題のときに、「病院には赤字のところも黒

字のところもたくさんある。自分のところの病院は赤字だ。同じ

単価で同じ治療をして、なんで赤字なのか。看護婦だ。看護婦が

働く病院が赤字だ。看護婦が働かない病院は赤字に決まっている。

どこを直すよりも、従業員の質を直さなければ駄目だ」と言っ

ていましたね。そんなこといままでも言われていない。新しい意見で

すね。医者の給料といっても、四十人ぐらいしかいない。看護婦

は四百人ぐらいいる。これが一時間真面目に働か働かないかで、

四百時間違う。だから看護婦の質で決まる、という。

小池 麻生の病院「飯塚病院」は株式会社ですね。戦前から認可

をもらっていて、何か特殊な形態なんですね。

松野 あれは昔は炭坑病院ですからね。わりと大きくて、四百床

以上あるんですよ。

伊藤 病院の形態も、医療法人だけではなくて、いろいろな形が

あり得るようになったわけですね。医師会も必ずしも昔のような

力を持っているわけではない。

松野 回転が速い病院ほど儲かるそうですね。患者も動かない、

じっとしているのが多いと駄目だ。早く入院して、早く退院して

くれるのが一番いい。

伊藤 病院に行くと、看護婦さんの質の問題というのはわかりま

すね。

松野 「政治家では」若いの中がいいのがいますからね。

伊藤 民主党にもかなりいるでしょう。

松野 わりにいいのが、たくさんいますよ。

伊藤 でもまだ若いでしょう。

松野 まだ四十歳前後ですね。

伊藤 新聞もテレビも、政治に絡んだワイドショーはあまり、はやりませんね。もう飽きたかな。

小池 石原新党ぐらいじゃないですか。

松野 田中真紀子がいなくなったからね。

伊藤 田中真紀子も今度はおとなしくしているんですかね。何か言うと、またあの問題が蒸し返されるから。

佐道 あれ「秘書給与流用疑惑」は刑事罰の対象になりうるものですかね。

小池 なりうるでしょうね。

佐道 検察が動いてもおかしくないですね。

伊藤 検察と政治というのは、よくわかりませんね。

小池 なぜ鈴木「宗男」については、あんなに早く動いたんですかね。

伊藤 やらなければ大変でしょう。何やってんの、ということになる。

小池 田中真紀子にも動いていい。

武田 外務省の側から、やってください、という話が出ればー。

小池 いくらでも資料は出しますって、鈴木宗男のときみたいにね（笑い）。

佐道 外務大臣のときも、勝手に秘書官を任命してやっていただけじゃないですか。何をやっていくかわからない。

松野 鈴木宗男みたいなのは常識がないけれど、昔は派閥というものが教育機関だった。相撲の部屋みたいなものだ。そこで先輩

が教えてくれるわけだ。毎日行けば、毎日わかるわけだ。

佐道 派閥の力が弱くなると、そういう教育的なことができなく

なるということですか。

松野 自分の選挙区のことばかり考えて票を稼いでいると、田舎代議士で終わるぞ。国のことも考えて政治家をやらんと、という注意をしたりね。

伊藤 いや、田舎代議士でけっこうです、と言ったら（笑い）。

松野 そうしたら、おまえ大臣になれないぞ、と言うわけだ。

伊藤 大臣になれなくてけっこうです、というところ。

松野 大臣にならなくてもいいやつもおるわけだ、派閥の中には。

伊藤 みんながなりたいたいと思ったら、喧嘩ですからね。

松野 いろいろなことを教えてくれるわけだ。

伊藤 その地方で親方になっていたい、という人もいるんですよ。

松野 それもおるんだ。その代わり、それは県連会長で終わりだ。

だから大臣にならないんだ。それでもいいわけだ。

佐道 でもときどき間違えて、大臣にもなりたいたいと思う人が出る。

松野 まあ最後に、七十歳にもなって引退大臣ぐらいになる。

伊藤 ポツダム中尉みたいなものだ（笑い）。

佐道 そういう人が、「重要な問題ですから、政府委員に答弁させます」なんて言ったり、わけのわからないことを言ったりする。

松野 わけがわからない。質問するほうも、そういう大臣には質問しませんよ。またそういう役所を選ぶわけだ。行政管理庁長官

なんて、あまり答弁がありませんからね。

伊藤 あまりないですか。

松野 何もない。

伊藤 何もない、ということもないでしょうが。

松野 それは行革法案を出すとき以外には、予算には何もないですから。

佐道 法案で言えば、今国会は有事法制あり、郵政ありですが、残された会期はすくないですね。鈴木宗男の件もあり、というこ

とだと、とても会期中には全日程は無理じゃないでしょうか。

松野 それは難しいでしょうね。いまやっている有事法制なんていうのは、果たして必要なかどうか。

伊藤 ええ？ そうですか。

松野 懸案だから、ということですね。

伊藤 でも小泉さんは昔から言っているじゃないですか。

小池 しかしあれを廃案にしてしまうと、社共が強くなってしまうって、選挙にとつてよくないんじゃないでしょうか。

松野 まあ、継続でしょうね。秘密保護も継続でしょうね。ただ、郵政だけはやらないと。これはメンツがある。

伊藤 でも郵政も棚上げにしようと言っているんじゃないですか。

松野 これを棚上げにしたらいかんでしようね。小泉のキャラクターがー。

伊藤 解散、ですか。

佐道 抵抗勢力が「郵政法案の棚上げを」やったから解散だ、という名目は立ちますね。

伊藤 それはいいかもしれませんね。ただ、内容が内容だから（内容が無いようだから）。

佐道 そうなんです。抵抗勢力がいかんと見栄を切れるような法案じゃないので、そこが弱いところですね。

松野 参議院の議長「井上裕」がああいう事件で辞めてはね。国権の最高機関ですよ。あれは私はよくないと思う。それだけでも解散の価値があるかもしれない。ただ参議院ですからね。衆議院なら解散の価値がある。

伊藤 参議院の自民党も、次から次へとよくあるものだな。村上「正邦」さんもあったし。

小池 いま、青木「幹雄」さんですね。

松野 青木も何か出てくるでしょうね。

■落選と再選

伊藤 すみません、先生。この前のお話では、「一九七九年に」議員をお辞めになって、その年にすぐに選挙に取りかかるわけですね。このときの選挙は大変だったんじゃないですか。落選されたんですね。

松野 大変でした。

伊藤 いままでの支援組織がガタついたわけですか。

松野 ガタつきました。

伊藤 ということは、ほかの候補にある部分が取られたということですか。

松野 支援部隊が動けなかったんです。支援部隊はそう乱れてはいなかった。活動ができなかった。

伊藤 言い訳「をしなければならぬから」ですか。

松野 行くといい訳をするから、動けなかった。

伊藤 いやですものね。

松野 いやだ。だから私の支持者だけの票しか入ってこなかった。

伊藤 そうすると、堅い支持者票だけが入ったわけですか。

松野 それだけが入りました。運動ができなかった。

伊藤 そうすると、次点ぐらいになってしまうわけですか。

松野 次点ぐらいだ。

伊藤 ちよつと上乘せすると当選なんですね。

松野 私もやっついて、その感じを受けたけれど。まあ一度、これで見そぎかな、という感じもしましたね。

伊藤 一回落選してー。

松野 それが見そぎかな、と感じました。

伊藤 では次の選挙までは院外団になるわけですか。

松野 いや、じっとしていました。

伊藤 こういうときは、派閥からはシャットアウトされるんですか。

松野 いや、行けば入れます。

伊藤 福田派ですか。

松野 そう。行けば入れるけれど、あまり行かなかったですね。

伊藤 ここに事務所を持っておられるわけですか。

松野 そのときはニュージャパンでしたね。

伊藤 ではずっと「東京に事務所を」持っておられたわけですか。

松野 いちおう、もういっぺんやるぞ、ということですか。

伊藤 そういう体制をとっていました。

松野 それは大平内閣のときに落選をされて、鈴木内閣のときに

。

松野 中曽根のときですね。

伊藤 それは党籍をとったということですね。

松野 そうです。

伊藤 「一九八〇年六月」鈴木内閣「成立直前の選挙」のときに

当選されたときは、無所属ですか。

松野 無所属です。

伊藤 自民党は、「別の候補者を」立てるわけですか。

松野 「私は」自民党の非公認という形だったんです。自民党で

非公認というと、無所属ということになるわけです。

伊藤 党籍証明もなし、ですか。

松野 なし。だから無所属で出たわけです。

伊藤 自民党は対抗馬を出すわけですか。

松野 中選挙区ですから、いままで通り、同じものが出ました。

伊藤 顔ぶれはあまり変わらな、ですか。

松野 四人ぐらい出たでしょう。五人の定員に、七、八人出ます

からね。自民党が四人は出ます。

伊藤 落選してから当選するまでのあいだですが、やはり地元で

。

松野 地元で、県会議員を集めて話したりしていましたね。

伊藤 自分で有権者を回るとか、そういうことは。

松野 自分で回ることもありましたが、呼ばれれば。

伊藤 主として東京におられたわけですか。

松野 半々ぐらいでしたね。どうせ次に上がるんだ、という自惚

れた自信を持っていましたからね。

伊藤 まあ、それぐらいの気持ちがあればやれないでしょう。

松野 一回休みだ、ということですか。

武田 実際にその通りになったわけですね。

松野 そのあいだに、新しいものが入って来なかったですね。

伊藤 それは支持者ですか。

松野 支持者に若い青年が入ってこなかった。それが一番目に見

えることでした。古いのが全部逃げたりはしないけれど、新しい

のが入ってこない。

伊藤 婦人はどうですか。

松野 婦人もあまり入って来なかった。既存の勢力を守るのに精

一杯でした。やはり若いのが入って来ないとね。その流れが顕

著に見えたな。

有馬 それは落選しているからですか。

松野 落選しているからだ。

有馬 時代的な変動ということを感じられたことはありますか。

松野 私の年齢も老けてくるんだ。六十歳過ぎて、七十歳近くな

る。自分の年も老けてくるし、時代も変わってくる。それが露骨

に見えたから、最後に引退したときは、立候補を辞めて引退した。

これは無理にしても駄目だ、時代が違うな、ということだ。

伊藤 落選したときと、その次に当選したときは、状況は少し違

うんですね。

松野 当選できたのは、いままでの者が必死で動いてくれたから

当選できたけれど、新しい地盤はできなかったな。

伊藤 次につながるものがー。

松野 次につながるものがない。一回途切れると、新しいものとのつながりができない。

伊藤 そういうものですか。

松野 古いものの維持はできるけれど。古いものの維持に全精力を使つて、新しいものの獲得の手が抜ける。それでつくづく自分の年齢を感じました。それで私はわりに早く引退した。それを身感じたから。

伊藤 当選して、すぐに自民党に入党されたわけですか。

松野 少しかかりましたね。それは私を煙たがるやつがたくさんいますからね。入れたい者もおるけれど。味方も多いが、敵もおるものだから。

伊藤 「敵というのは」やはり宏池会とか、田中派とか。

松野 宏池会が多いですね。そういうところが抵抗してましたね。佐藤派とか三木派は応援してくれたけれど、宏池会と田中派は、あいつがいるとうるさい、という感じでしたね。またうるさかったんでしょうね。

伊藤 でも入党したからといって、党の役員になるというわけではないんですね。

松野 それはしばらくありません。

伊藤 そうすると、一議員として活動するということになるんですか。

松野 一議員として活動する。代議士としてすべて平等だけれど、一緒に会合すると違うんです。やっぱりうるさがたが上の席に座るわけです。

伊藤 長老ですか。

松野 長老というのか、自然にそうなるでしょうね。あなた方の教授会だって、並ぶと自然にそうなるでしょう。あいつより上に

座つてはいけない、椅子はどこでもいいけれど、自然に古狸が上の方に座るでしょう。やっぱり空けておくでしょう。

伊藤 いや、そんなことはないですよ。

佐道 普通はそうです。伊藤先生や小池さんは違うけれど。

小池 僕は下座のほうですから。

松野 そこに、当選回数とか、なんとも言えないものがあるんです。

伊藤 序列意識があるんですね。

松野 序列意識だ。だから「私が」行けばどこでも、序列は上の方でした。

伊藤 じゃあ、「松野先生！」と言つて、上の方に。

松野 言わなくても空けてある。だから会合など、入つて行くと必ず誰かが空けますよ。それは狸は狸で、狐は狐で、動物の中では自然にできる。どこでもそうだ。

伊藤 それでは当選した後は、福田派の会合にはー。

松野 一番上の方で出ていましたよ。

佐道 党籍を回復されるのは、復活されてからしばらく経つてからになりますよ、この前のお話では、自民党を離党するときに大平総理との約束で、当選したらまた復党してもらおうということでした。しかし最初の選挙で落選されて、その次の、大平さんが亡くなったときの選挙で当選されるわけですね。

松野 そうなんだ。大平がいなくなつていんだ。

佐道 だからその約束は履行されなかつたということでしょうか。

松野 それでちよつと時間がかかつたんです。大平がおれば、その日にも入れるはずだったんだ。いなくなつたものだからー。当選したらすぐに大平に電話して、その日に入党というつもりに思つていた。選挙中に亡くなつたんだ。鈴木善幸には、その話は遠いんですね。

伊藤 「おれは知らないよ」と言つたんですか。

松野 いや、「あつ、そうですか」で終わりだ。それがわかって
いるから。

伊藤 わかっているから、行かない。

松野 行かなかった。

佐道 復活されたときは、選挙戦の手応えとして、これは大丈夫
だな、という感じでしたか。

松野 それは大丈夫だった。そのときは私は選挙中から大丈夫だ
と思っていた。

佐道 その前の選挙とは、かなり反応が違っていったんですね。

松野 前は、みそぎで仕方がないかなと。

佐道 では途中からは、復党できるかということがかんがえられ
事でしたか。

松野 復党は必ずできると思っていました。ただ時間の問題だ。
それは県連から申請を出すんです。県連が反対を言うわけだ。選
挙しているライバルだから。

伊藤 そうですね。一番の敵ですからね。

松野 県連がぐずぐずして、急がんでいい、という感じだった。
そこで本部までなかなか来なかった。本部もその意向を容れて、
両方でキャッチボールをしていた。

伊藤 本部から言うことはないんですか。

松野 本部から言うこともありませぬ。そのときは、本部は言うほ
ど、私に対するものはなかったですね。政党にはおもての党則が
あるんだけど、それをどう運用するか、そのときの感情もあり
ますからね。

■鈴木内閣から中曽根内閣・安倍晋太郎のこと

伊藤 鈴木内閣に関しては、先生は――。

松野 私はほとんど関係ありません。

伊藤 それで中曽根内閣になって復党するわけですね。

松野 多少は関係します。

伊藤 関係するというのはどういうことですか。

松野 中曽根は、一緒に三役をやっていましたからね。「復党の
話を決めてくれよ」と言える仲だし、電話も通じる仲だ。鈴木と
はそれほど仲ではなかった。また、鈴木は予想しないで急にな
った総理ですからね。中曽根は、秤にはかつて「総理に」なった。
中曽根のときには私は官邸に行きまして、その話もしました。

伊藤 三木内閣のときに中曽根さんと一緒ですからね。その中曾
根内閣では何の役割もなしですか。

松野 何もありませぬ。

伊藤 公式には、ですね。非公式にはどうですか。

松野 中曽根は初めはなかなかダツシユがよかったですけれど、
途中で弱くなったな。あのまま真つ直ぐに行けば、いい内閣かな
と思つたけれど、途中で延命を図つたんですね。憲法論です。
「国務大臣は憲法を守る義務がある、総理大臣は特にあるんじや
ないか。それなのに君が憲法改正ということは、職務に矛盾があ
るのではないか」、そんな質問から弱くなりましたね。国務大臣
は憲法を守る義務があるというのが、公務員法か何かにあるん
でしょうね。

伊藤 けれども憲法には改正の規定もありますからね。

松野 あるけれど、公務員法か何かの中に、たしか遵守するとい
う項目があるんですね。「その長である総理大臣が憲法改正論者
だというのは公私混合ではないか」という質問を受けて、「在任
中は守ります」と言いましたね。そういうことから憲法論、彼の
特徴が消えたような気がします。在任中は憲法を守りますといっ
た。

たしか佐藤もそうでしたね。総理大臣になるとみんな改憲論が

弱ってしまふ。ことに中曽根は改憲で出た男ですからね。あれから中曽根内閣の特徴がなくなりましたね。

伊藤 中曽根内閣の外務大臣は安倍晋太郎ですが、安倍さんとの関係はあまりないんですか。

松野 あります。安倍はいまでも、息子「晋三」とも関係があります。岸さんの関係ですね。岸さんの秘書官みたいにしていましたからね。私は岸内閣のときの閣僚だから、よく知っています。大臣室の総理の横の秘書官室にいましたけれどね。

伊藤 安倍晋太郎という政治家は、どういうふうにごらんになっていましたか。

松野 有能ではないですね。人柄はいい。素直な性格で邪気はない。あまり勉強はしていなかったな。

伊藤 じゃあ何をやってるんですか。

松野 人柄の安倍ですね。みんなに好かれますね。

伊藤 このとき安倍、竹下、宮澤と言われましたね。

松野 その中で有能なのは、宮澤でしょうね。

伊藤 だって宏池会じゃないですか。

松野 宏池会でも有能だな。人の好いのは安倍。

伊藤 竹下はどうですか。

松野 暗い陰気なこけみたいな男だったな。

伊藤 陰気ですか。

松野 陰気ですよ。表面は明るくしていますが、本心は陰気な男です。陰気な、こけのような男だったな。

伊藤 そうですか。僕はインタビュウをやっていて、明るい人かと思っていた(笑い)。

松野 表面は明るいけれど、性格が陰気なんだ。

小池 僕はちよつと大平文書を整理しているんですが、そこに取材記録がありまして、三木内閣のときに先生が記者などに、次の総理候補として宮澤さんをごく推しているんですね。あれは本

気だったんですか。

松野 本気だった。宮澤はいまでも惜しい男だと思うけれどね。「総理に」なる時期が悪かった。あれはよく勉強もしているし、財政にも詳しいし、語学はかえって良すぎて邪魔ですね。鼻にかけちゃうんですね。しかし財政論はよく知っていましたよ。

武田 大蔵官僚ですからね。

松野 あれはいいと思うけれど、運が悪かったな。大事な時期に出てこなかった。池田のときにもつと伸びなければいけなかった。それから仲間ができない男だ。人間が素直だと仲間ができない。水が濁ると泥鰌が増えてくる。

伊藤 先生のところには泥鰌がいましたか。

松野 あまりいなかったですね。水清くして魚住まず、です。

(一同笑い)

伊藤 しかし五億円配ったらー。

松野 だから多少の泥鰌はいたけれど、濁ってはいない。濁っていると、泥鰌もフナもわからずにごちゃごちゃいる。田中とか竹下とか、そっちの方はわからない。宮澤は中でもきれいな方だった。

伊藤 松野派といわれるような人は何人かいたわけでしょう。

松野 十七、八人仲間がいましたね。田中と別れたときですね。

伊藤 この頃、再選された頃もいたんですか。

松野 再選されたときには、七、八人いましたね。まだ寂しくはなかった。

伊藤 それはどこかで集まりをやるわけですか。

松野 よく集まっていました。

伊藤 それは松野事務所ですか。

松野 夜の会合をする。あの頃はまだ料亭があつて、そこに行けば必ずいましたからね。

伊藤 誰がいたんですか。

松野 保利茂とか、塚原俊郎とか、渋谷直蔵、細田吉蔵とか。

伊藤 もう故人が多いですね。

松野 ほとんどいなくなりました。「その頃は料亭に行けば」いつもいましたからね。

武田 会の名前はあったんですか。

松野 会の名前はなかったけれど、いつも集まっていた。

伊藤 中心は松野さんですか。

松野 私です。料亭「きのした」とかね。

伊藤 どこにあるんですか。赤坂ですか。

松野 赤坂に、いまでもあります。小さな料亭です。

伊藤 そこが巢なんですね。

松野 そうですね。

伊藤 でもそういうのを持っていたら、政治資金もけっこういるんじゃないですか。

松野 そう大したことではなかったですね。

伊藤 今度もう政治資金規正法がありますからね。

松野 そう高めのものをとらなかったですね。昔の料亭の小さい部屋を借りたぐらいのものですからね。紀尾井町に一つ事務所みたいなものをつくったりしていましたね。

伊藤 それは誰が維持するんですか。

松野 それはみんなで払っていましたね。七、八人でみんなで払っていた。

伊藤 事務員か何か置くわけですか。

松野 岸さんの秘書の中村「長芳」というのがずっと世話していました。それで安倍なんかとも親しいわけだ。いまの安倍の息子とも親しい方でしょうね。

伊藤 じゃあ安倍内閣をつくらうと。

松野 つくらうという意味で、安倍を応援していたわけだ。福田の後は安倍だと。まあ、順番から言ったたらそうでしょうね。福田

が岸さんに世話になったし、岸さんに恩返しということで安倍をするということでしょうね。政治家の人脈からいうとね。

伊藤 さっきの仲間というのは、福田派の別働隊ですか。

松野 福田派の別働隊。福田とは親しかったですからね。岸内閣の頃、岸さんと福田との連絡はほとんど中村がしていましたからね。岸内閣はなかなか波乱の多い内閣でした。安保で池田が辞めたりしてね。

伊藤 中村というのは、どういう感じの人ですか。

松野 秘書といいながら、岸事務所の主任みたいなものでしたね。

伊藤 事務所長みたいな感じでしょう。

松野 事務所長みたいだ。

伊藤 それで多少ダーティな部分を持っているわけでしょう。

松野 もちろんそうだ。ダーティな部分を全部引き受けたでしょうね。だから岸さんは、いつさい手を汚したことがないんですね。中村まででしょうね。岸さんは中村を子供のように可愛がっていましたね。

伊藤 それを雇っているんですね。

松野 それで、岸さんが御殿場に隠居部屋をつくるとき。

伊藤 あれはいいところですよ。

松野 あれは中村が募金を集めてつくったんですからね。岸さんのスポンサーを回って、中村が金を集めてあそこにつくったんです。

伊藤 屋敷の中に滝があるんです。

松野 あの近くに松岡洋右さんがいたことがある。東山荘という松岡洋右の別荘が近くにあつて、岸さんもその近くを探した。なかなか御殿場の風格のあるいい場所です。近いしね。それは全部中村だ。岸さんは一切知らない。中村がやっていることは知っています。どこが金を出して、どこから集めたかということは、いちいち岸さんは聞いていません。全部中村が集めて、出しても

らった。

伊藤 それでその数人の「いわゆる松野派の」集まりも、中村さんが仕切っていたわけですか。

松野 仕切っていました。あのときは中村に金を出してもらったことはありませんよ、みんなが出して、走り使いをやってくれる。

伊藤 中村さんも集めたかもしれませんかよ。

武田 中村さんというのはどういう経歴の方なんでしょうか。

松野 長州の「岸と」同じ選挙区の出身です。岸さんは後からで、初めは佐藤のところでした。大津「正」という秘書官がいるでしょう。その下についていましたね。それで岸さんが復活してから、佐藤から岸さんの方に行った。同じ山口県人ではあるわけだ。その関係でしょうね。

伊藤 中村さんは、その後どうなりましたか。

松野 いままだ山口におりますよ。

武田 まだご存命なんですか。

伊藤 いくつぐらいですか。

松野 七十四、五歳になったでしょうね。

伊藤 まだそんなに歳じゃないんですね。

武田 数年前、文春に何か回想録を書かれましたね。彼は亡くなられたわけではないんですね。

松野 まだ生きています。ちよつと身体が弱っていますけれどね。東京に出てこれないぐらいだ。

伊藤 じゃあインタビューをやらなければ（笑い）。

松野 もう、少しほけたかもしれない。ときどき電話してくるけれど、声かもうはつきりしない。「小さくかすれた声で」しばらく、元氣い？ おれもお」という感じだ。軽い中風をしているから、足にも来ているはず。今頃インタビューしても、何を言うかわかりませんよ。ちよつとほけてきた。

伊藤 「松野さんについてどう思いますか」と聞いてみたら、「あ

れは悪いやつで」と言うかもしれない（笑い）。

松野 「いや、頼ちゃんはなあ」という感じでしょう。もう東京には来られませんか。脳溢血を二回ぐらいやった。それで歩くこともできない。一回まではよかったんですが、二度やると、電話が精一杯。電話も、昔の話はもうしない。

伊藤 その事務所はしばらくはあつたわけですか。

松野 しばらくありました。

伊藤 先生がリタイアした後もありましたか。

松野 それで終わりましたね。

■政界を引退

伊藤 リタイアされたのは、平成二年ですか。

松野 平成二年の選挙を辞めて、リタイアしたんです。もうこれ以上は無理だと思った。年齢的なものが第一だ。第二には、世相が変わっている。昔のものはおつても、新しいものが全然集まらない。時代が変わったから、息子「松野頼久」に譲った方がいいかな、と思いました。もう時代が違う。

伊藤 福田さんも息子に譲りましたからね。

松野 ただ息子に譲るとなると、若い者がついてくるけれど、年寄りがなかなか来ない。二世というのは、やっぱり遺産相続みたくにはうまく行かないんですね。みんな二世を嫌うけれど、二世は二世なりに苦労している。本当の譜代が来ると、若いのは来ない。若いのが来ると譜代が逃げるんです。二世の苦労はそこなんです。親代々の譜代のものを大事にすると、新しいものが来なくなる。新しいものを大事にすると、譜代たちが謀反を起こす。私も親父に対して同じ経験をしたので、私の息子もいま同じ経験をしているんです。どちらかというと、「息子は」若い労働組合な

んかを一所懸命仲間にしてやっています。そうすると、私のときの県会議員は向こうに行ってしまう。自民党に行ってしまう。

小池 魚住「汎英」とかに、ですな。

松野 「古い県会議員は」呼ばば来るけれど、呼ぶわけに行かない。呼ぶと、今度はこっちの組合が逃げちゃう。組合といつても総評系ではない、民社系ですけれど、逃げて行っちゃう。県議員では戦っているから。そこで時代の差というか、ギャップがありませんね。

有馬 先生ご自身がお父様の跡を継がれたときは、新しく開拓するのはどういう層になるんですか。

松野 新しい層というのは、年代の若いやつだ。青年団長みたいなものを集める。そうすると私のおやじのときの県議員とかは来ない。県議員たちは、お座敷に呼んで、上座に据えて、「よろしく」と仁義を切らないと動かないんだ。

伊藤 それぞれを別にやる以外にないわけですね。

松野 別々にやると、選挙費用が二倍になる（一同笑い）。だからなかなか苦労したけれど、同じことです。結局、譜代の方を捨てて若い方に行かなければ駄目だ。数が違う。譜代が十だとすると、若い方は百だ。それでこっち「譜代」は機嫌が悪くて横を向いて、なかなか来ませんよ。来ないけれど、最後には入れてくれるんです。運動はしないけれど、投票はするんです。同じようなことを、いま私の息子がやっていますよ。県議員はなかなか息子のところには来ないんだ。それは無理に頼めば来ますが、来ると新しいものと合わないんだ。

伊藤 それは県政と関連しているんですか。

松野 県政の中で、組合と県議員はー。

伊藤 民主党の中にもいろいろあるでしょう。

松野 いろいろあります。

伊藤 組合もあるし、旧自民党の流れの人もいるし。その軋轢も

あるんじゃないですか。

松野 それはいいけれど、ボスが駄目なんだ。県議員という肩書きを持っているものはなかなか難しい。自分が選挙に出ているから。県議員の選挙のときの地盤があるんだ。そうすると、息子の地盤とうまく合わないんだ。選挙をしない人はいいんです。選挙をするとなると、自分の選挙地盤があるわけだ。それが息子の選挙地盤とは合わないんだ。

伊藤 松野先生がご自分で選挙をやっているときは、松野先生の地盤と、支持している県議員の地盤はほぼ一致するわけですか。

松野 ほぼ一致します。その時代はほぼ一致していました。社会党と共産党と、思想的にもはつきりしていましたからね、人種的にも（一同笑い）。昔の方がわかりやすいんだ。いまは、もうわからぬ。

伊藤 そうですか。顔を見ただけでわかったんですか。

松野 あの頃は、顔を見ただけでわかったんだ。

伊藤 最終的に、もう立候補をするのをやめようとして。

松野 それは平成二年ですか、選挙に出ようと思って、熊本に帰っていたら、どうも集まりが悪いわけだ。

伊藤 いちおう出るつもりではいたわけですね。

松野 出るつもりではいたが、集まりが悪い。それで最後に幹部会が集まった。そうしたら若い県議員が二人ばかり来なかった。年寄りの人はみんな来てくれた。六人来なければいかに、四人しか来ない。そんな姿勢を見て、これはいかなんと思った。そこでみんなで話をしたら、四人の中からも、「自重した方がいい」という声も出る。「ここまで来たら、出ればもちろん一所懸命やります。しかしあまり無理されん方がいいでしょう」というような声も出る。

「一晩考えさせてくれ」といって、一晩考えて、若い新聞記者を四、五人呼んで、聞いてみたら、「先生、無理せん方がいいで

す。時代が変わっている。若いのは来ません」という。それが私には一番こたえた。それで私は譲ろうかな、と思った。これ以上無理をして、醜態をさらしてはいかん。それは見極めでしょうね。

武田 最後は落選したわけではなくて、出なかつたんですか。

松野 出なかつた。辞退したんです。

伊藤 それは選挙が始まる前ですか。

松野 告示の前々日ぐらいです。

伊藤 それが平成二年のことですね。

松野 そうです。それで私は立候補辞退宣言をした。

伊藤 当選十五回ですね。

松野 十六回目は辞退した。

武田 「私が作成した資料に」落選したと書いてありますが、それは間違いです。直しておきます。

■三木・海部との関係

伊藤 そのあいだに、中曽根内閣があつて、竹下内閣があつて、短いですが宇野内閣があつて、それで海部内閣ができる。これだけ内閣が替わっているわけですが、この中で先生が絡んだことは。

松野 それは海部には絡みませんでしたね。

伊藤 どういうふうに絡むんですか。三木派だからですか。

小池 先生は三木内閣のときから「海部氏を」かっていますよね。

松野 私は海部をかっていた。「三木内閣の内閣官房」副長官でしたから、よく知っています。その「海部内閣の」ときには、橋本龍太郎が幹事長代理か何かだった。安倍が幹事長か。

佐道 「橋本龍太郎が幹事長だったのは」宇野内閣のときですね。

松野 海部のときに、橋本龍太郎を使え、と言ったことを覚えてるな。

佐道 大蔵大臣になりましたね。

松野 大蔵大臣でしょう、それを私が言ったことを覚えている。

伊藤 あいだでは名前があまり出て来ませんでした。海部さんとのつき合はずつとあつたということですか。

松野 海部とはずつとあつた。総理になつてからもなんべんも電話をしています。

伊藤 さつき福田派の話が出ましたが、三木派との関係はどうだつたんですか。

松野 福田の推薦で、「私は」三木「内閣」のときに政調会長になつた。それは福田の推薦です。

伊藤 では先生は、三木派ともいいわけですね。

松野 よかつたわけです。そのうちに、福田と三木が喧嘩してしまふ。喧嘩をした理由は田中逮捕です。福田はそのとき副総理なんだ。「副総理のおれに、三木は田中逮捕のことを耳打ちもしなかつた」と言つて、それが非常に福田の逆鱗に触れた。私を呼んで、「君はいつ田中逮捕を知つたか。三木から話を聞いているだろう。三木はおれに言わない。君はいつ知つたんだ」と私に詰問するように福田が聞くんだ。「私も聞いていなかった」「そんなことないだろう、本当に知らないのか」「知らない。朝の七時のニュースを見て驚いた」「本当か？」と何回も聞くんだ。会うたびに聞いたでしょう。四、五日するとまた聞くんだ。

私は本当に逮捕のことは知らなかつた。ただし、年中三木と会つていたから、いろいろなことを言つておつたことは事実です。田中が新聞に大きく出る。「田中の問題は」と私が聞くと、「困つたな、困つたな」という。そのうちにその話が進行する。「田中は不用心なようだね。直接関係している」なんていうこともひよつと言うわけだ、その端々を聞くと。「田中の問題がどうあるうと、日本の民主主義は健全だからね」とか、そういうことをときどき言うようになる。それを総合して全部くつつければ、一つの

形になるけれど、その一つひとつが細切れで、わからないんだ。逮捕という言葉は出てこない。

それで終わったときに、三木本人に聞いたんです。「あなたはいつ逮捕を知りましたか」「中間報告は受けていたけれど、逮捕を知ったのは夜中の十二時だ」という。朝の七時の逮捕を知ったのが、夜中の十二時だという。「稲葉「修・法相」から、『朝、逮捕することになった』という電話があつて、その後につけ加えて『もっと早く教えれば良かったけれど、教えるとかえってお困りだろうから、お知らせしなかった』というのが、夜中の十二時過ぎの電話だった」という。

前もって知らせても変わらないのに、聞いてしまうとあなたがお困りでしょう、だからお知らせしませんでした、と言ったのが十二時だ。だから私が知らないわけだ。福田にも知らせる暇はなかったでしょう。それは稲葉が、この問題を一切政治問題にしないということになっているから、政治問題にしない方がいいと思つて、知らせなかった。福田は怒るけれど、私が知らないのも本当だ。

伊藤 福田さんはずっとそれを後々まで疑っていたんですか。

松野 それが三木・福田の争いのスタートです。

伊藤 あいだに挟まれて、とんでもない話でしたね（笑い）。

松野 どんなに私が言つても駄目なんだ。それを後で解説すると、稲葉が、この問題は政治が関与しないと検事総長に厳命している。その筋で来たんだから、彼に逮捕許諾の書類が上がってきて、その通り自分はするんだ。また、そうしたんだ。それをあなたに教えることはかえつてよくないから、知らせなかった。それで前の晩の十二時に初めて稲葉から電話があつた、というのが三木の話だ。私はあまり福田が聞くから、立场上、三木に聞いたでした。私が知らないのは本当なんだ。

伊藤 海部さんが総理になるときは、三木派は少数派ですね。海

部さんが総理になるときは、誰がどういうふうに動いたんですか。松野 一番大きな問題は宇野ですよ。宇野で、竹下たちが大失敗した。

伊藤 これ「宇野」は中曽根さんの子分でしょう。

松野 ええ。その失敗も、醜態だ。それでまたきれいな、清潔な者だ。

伊藤 三木のときと同じようなことですね。

松野 一番清潔な者、という和三木派に来るわけですね。田中の後で三木が来たのと同じだ。田中は金権で引かかったから、金権に関係ない者として三木を選んだんだ。

伊藤 今度は女性問題ですか。

松野 女性問題と金銭問題がないということで、海部になった。海部の場合、女性問題はあまりなかったですね。あの奥さんがなかなか潔癖なんだ。河野金昇の秘書が海部で、「奥さんは」そのときの女性軍団長だから、海部の場合はないでしょうね。

伊藤 それはずいぶん海部さんも助かっているでしょうね。海部さんによると、婦人の票が非常に多いそうです。

松野 多いんだ。あの奥さんの票は大したものだ。奥さんが出た方が上がるかもしれない。

伊藤 ではこのときは、海部さんを支えるというつもりでおられたんですね。

松野 海部は、小泉と同じように私には可愛い政治家でしたからね。私はわりに清潔なやつが好きだ。利権はいやだ。利権は常に計算で動くからね。この法律に反対か賛成かという、計算で動くからね。それはスタンスが違う。

佐道 清潔さのほかで、「海部さんを」評価をされているところは。

松野 あれは雄弁だ。NHKの討論会でよく一緒になりました。海部はよく出ていた。私はいやな質問をするし、海部は雄弁だ。

あれは雄弁会だ。雄弁会といえば、いまの「衆議院」議長「綿貫民輔」だって雄弁会ですからね。早稲田雄弁会というのは、ろくなのがない。

伊藤 森「喜朗」さんとか。

松野 竹下、森、海部もそうだ。いまの議長も、「副議長の」渡部恒三も。それから小淵もそうだ。不思議にあの雄弁会はみな成功しているんです。大したものでもないと思うけれど、出世している。

伊藤 では海部さんに対する評価は高いわけですか。

松野 海部はいまでも悪くはない。

伊藤 海部さんもいま立場としては、保守党の最高顧問ですね。

松野 あれは自民党を出るときにだいぶ苦労したんです。あれは中曽根が「出ろ、出ろ」といって勧めたんですからね。中曽根も一時は海部に投票したんです。中曽根も右に行ったり、左に行ったり、ブレてはいるんだ。小泉のときだってブレていましたよ。それは亀井「静香」に入れていたからね。

伊藤 まあ、ブレない政治家というのはいまありませんか。

松野 やはりブレ方だな。納得するブレはいいけれど、私利私欲でブレたのは悪いな。国民が認めるブレはいいけれど、自分が大臣になりたいからといってブレたやつは、大臣になってもそれきりで伸びない。それで死んでしまいますね。

■ 中曽根内閣後・安倍晋太郎の周辺等

伊藤 竹下内閣のときにリクルート事件が起こりますね。江副「浩正」は先生のところに持って来ませんでしたか。

松野 江副というのは、私も何回か会って、わりに親しかったん

です。しかし私とは裏のつき合いをしなかったな。昼間しか会わなかった。江副のリクルートの会社に何回か行って、昼間に会ってきたが、夜のつき合いはなかった。みんながリクルートの株をもらったのに、私のところにどうして持ってこないんだろうと思って、そのときは不平だったけれど、後からみると、持ってこなくてよかった（笑い）。

伊藤 そうですね。松野さんが引かかったら、前のこともあるから。

松野 東郷民安の殖産住宅もそうだ。中曽根のところに持って行って、私のところに持って来ない。東郷は、麻布中学で「私」と同級生だ。中曽根とは静岡高校で一緒なんだ。静岡高校で一緒の中曽根のところに株を持って行って、私のところには持ってこなかった。江副もそうです。なんで持って来ないだろうと思ったが、もらわなくてもよかった。

伊藤 ということは、低く評価されたんじゃないですか（笑い）。

松野 私は金銭的には淡泊な顔をしていたんでしょね。欲しそうな顔をしていなかったのかもしれない。本当は欲しいんだけど（一同笑い）。向こうが持って来れば、私は受け取りますが、持って来ないものを「くれ」とは言えない。それが私も悪いところなんだ。持って来れば受け取るけれど、「くれ」という言葉が言えない。そこが最大の欠点だな。

佐道 もう少し遡るんですが、中曽根内閣が終わって竹下内閣ができませんが、竹下内閣ができるときに、中曽根さんは宮澤、竹下、安倍の三人から「次期首相を」選ぶ。それで最終的に竹下、ということになったわけですね。その三人が候補で競争したとき、かつての福田派、安倍派でもいろいろおやりになったと思うんですが、先生はそのときには何かなさいましたか。

松野 私はそのとき一所懸命安倍を応援していましたが、安倍には非常に来にくいと特に思ったのは、福田と中曽根だからだ。福

田、中曽根は犬猿の仲だから。昔から同じ選挙区で、どっちが上か下かで争っていたから。同じ選挙区で三人のあいだで争うから、それは仲が悪いです。中曽根はおそらく、福田が応援する安倍にはしないだろうと思った。あとは宮澤か竹下だろう。宮澤はわりに金銭にきれいな男だ。まあ、リクルートのときに多少ありましかたけれどね。たまたまそれは江副との個人的関係で、利権的には金銭にきれいな男だ。竹下だろうと、私は決めたんだ。案の定、金丸「信」と中曽根で話をつけて、竹下になった。私は決定的に竹下だろうと思った。

ただ、宮澤と安倍と連合すればいい、ということだけ一所懸命やった。宮澤・安倍連合に私は走った。安倍派の中には竹下・安倍連合に走ったものもいます。私は、宮澤と連合しようとした。宮澤・安倍連合のほうに私は入っていた。どうせ中曽根は竹下を選ぶに決まっているんだ。こつちが二人組めば選挙に勝てるじゃないか、という話をした。

佐道 当時、安倍と竹下は比較的仲がいいと言われていましたね。

松野 安竹（あんちく）で仲がいいという馬鹿みたいな空気がほとんどです。私は、これは危ないと思った。

佐道 そのときに、先生を除いて、安倍さんのブレインになっていた人は。

松野 安倍のブレインの中に森なんかはいたでしょうね。

佐道 三塚「博」さんは。

松野 三塚もいました。森より、三塚の方が上でしょうね。安竹なんて馬鹿みたいに浮かれていたけれど、私はこれは危ないと思った。私は宮澤と組む方が正しいと思った。

佐道 安倍さんのあとは三塚さんが派閥を継ぎますが、そのとき加藤六月が派閥を出ますね。

松野 加藤六月も、あの頃は安倍の代貸の方でしょうね。加藤六月と三塚が争っていたでしょうね。二人が両翼でした。

佐道 そのあたりが両翼で、安倍さんを補佐するという形だったわけですね。

松野 私たちはもつと先輩ですからね。

佐道 長老ですからね。塩川「正十郎」さんはどういうポジションなんですか。

松野 塩川もそのへんにいました。塩川、加藤、三塚。塩川がいちばん人間はよかったですよね。しかし塩川は資金集めがへたでした。三塚とか加藤が集めてくる。それが派閥の運営の費用になりますからね。稼いでくるのはそつちでした。三塚が一番多かったです。

伊藤 三塚さんというのはどういう政治家なんですか。あまりはつきりしたイメージが浮かんでこないんですが。

松野 あの辺で一番親しかったのは、地方財閥で小針「暦二」という人がいた。

伊藤 福島でしたっけ。

松野 福島です。その小針と親しかったですね。「宮城県の三塚と県が」隣だから。小針財閥と三塚だ。

伊藤 小針というのもちよつとあやしい感じではないですか。

松野 政商でしょうね。たしか那須野高原開発をした。仙台の都市開発までやった。もともとと交通業ですからね。

伊藤 福島交通ですね。

松野 それで仙台の交通ターミナルなんか、三塚が運輸大臣のときにつくりあげたでしょうね。そういう政商で、福田のところにも年中来ていました。福田のところにも行くし、竹下のところにも行く。各派閥のパーティーがあると、小針はどこにでも来ていましたからね。どこにでも顔を出す人でしたね。

伊藤 あちこちに保険をかけているんですね。

松野 政商だから、ギブ・アンド・テイクでしょうね。自分も政治家を利用するし、また政治家も小針を利用するでしょうね。そ

ういう人でしたね。

伊藤 その小針という人と、先生はおつき合いはなかったんですか。

松野 私も親しい。でも一回も私に金の話をしなかった。知ってるんだけど、知っていて、私に金の話をしないんだ。

伊藤 金の話をしない政商というのは、どういふものですか。

松野 私は人がどうしているか、見ているけれど、私はその中に入っていないかなかったし、向こうも入れなかったでしょうね。だから仙台の線路の下をくぐる大きなものがあつたはずですよ。小針がそれを三塚に頼んでやつたでしょう。そんな話を聞いているし、那須のご用邸と那須野開発は、河野一郎と小針が組んだ。それも知ってはいる。私はいろいろな人がやっていることはわかるけれど、私は中に入れてくれないんだ。入れてくれればもつと役に立つだけだよ。

佐道 たまたまあつた丸紅云々でー。

松野 たまたまね。これは大丈夫だろうと思つた。私のおやじ以来の話をされたものだから。向こうが私のおやじの話から鈴木商店の話までしてくれるから、大丈夫だと思つた。でもしてくれないんだ。小針もしてくれない、江副もしてくれない。みんな知つていふんですよ。会えば、「松野さん、松野さん」といつて、えらく私をおだてるけれど、おだてるだけで実益なし。だから私には一つも入っていない。入れてくれないんだ。

佐道 派閥の継承というのは、どの派閥でも苦勞すると思つてますが、田中派も、竹下が飛び出すという形でクーデターをやつたわけですね。宏池会は大平さんが亡くなつて鈴木さんに、という形ですが、福田派は、福田さんがご存命でお元氣なうちに安倍さんに移つたわけです。福田さんの安倍さんに対する影響力はどうだったんでしょう。

松野 福田がおるうちに、安倍は総裁選挙に立候補しました。も

ちろん惨敗でした。そのときから、この次は安倍だということだ。岸さんの関係で次は安倍ということだ、これは平和交替でしたね。ほかはみんなクーデターですよ。

伊藤 そのとき福田派は全部ついていきましたか。

松野 ほんとどついていきました。安倍が嫌いなものはあまりいりませんでしたね。ただそこで、代貸の勢力争いで、加藤六月と三塚が争つて、片一方が飛び出したということはありますが、安倍に対してはなかった。ほかはみんなクーデターですよ。田中派はみんな金をばらまいてやつたでしょう。ばらまかれなかつた十七名の私たちが、福田の方に行つたわけだ。それが佐藤派の分裂ですね。私たち十七名は田中に行かず、福田の方に行つたわけだ。それがさつきいつた保利とか坪川「信三」だ。

伊藤 宏池会はクーデターなしじゃないですか。

松野 あのとときは、大平と前尾「繁三郎」が争つた。人徳は前尾なんだ。しかし大平が仲間と組んで、突然総会で、次は大平さんにしようじゃないか、とやつた。前尾がおる前で、ですよ。それでみんな困つた。大平さんにしよう、大平さんにしよう、前尾のおる前でやつて、とうとう総会で決議した。それはいやだといつて立たなかつた連中が六、七人おるはずだ。前尾と一緒に宮澤も立たなかつたでしょう。それから私のところの吉田重延も立たない。ひどい、目の前で、総会で。総会屋みたいな話だ。前尾がおる前でやつたんだから。

伊藤 やはり一種のクーデターですかね。

松野 その話は、総会屋のやり方と同じだ。

伊藤 大平さんから鈴木さんというのは、亡くなつたからしょうがない。

松野 これは不慮のことで、小淵から森みたいだ。

小池 鈴木善幸から宮澤というのも姻戚関係がありますからね。

松野 多少ある。鈴木善幸というのは欲のない男で、なる気もな

かったし、なったからといって威張ったわけでもなかった。それで早く引退したでしょう。一年足らずで。

小池 宮澤に行くときには、田中六助と宮澤喜一で争う、ということでしたね。

伊藤 一六戦争というのは、本当にすごかったんですか。

松野 それは前からあったでしょうね。田中六助が若いうちに幹事長になって、勢力を伸ばした。田中六助はちよつと急いだな。やはり死に急ぎましたね。宮澤の方が年齢も上なことから、宮澤を立てておけばいいんだけど、待てなかった。それが運命だな。だから早死にしまった。

小池 大平と宮澤が悪かったということもあって、田中六助が非常に大平に可愛がられたところがあったんじゃないですかね。

松野 大平と宮澤は悪かったですね。それは宮澤の方が上ですよ。大平が下だった。誰が見ても宮澤だ。

佐道 福田さんは、福田派を安倍さんに譲ったあとは、派閥には口をまったく出さなかったんですか。

松野 出さなかったですね。部屋も別にしました。同じ赤坂プリンスだけれど、大きい部屋を安倍にやって、自分は隠居部屋みたいな小さい部屋にいました。私は小さい方の部屋にしか行かなかった。安倍の部屋には行かなかった。福田の部屋に行つて、雑談をしていましたね。

佐道 中曽根さんが辞めるとき、安倍、竹下、宮澤が候補になりますね。このときは安倍さんも可能性としてはあるわけですから、そのときに福田さんが出て来て何か言うとか。

松野 竹下が、「この次は安倍ちゃん、あんただよ」と言つておだてていましたね。安倍で。その直後に安倍が亡くなったものだから。政治家を見ると運命を感じるな。田中六助は馬鹿にあわてたなと思う。

伊藤 安倍さんも、このときは、もしかしたら行けると思つたん

でしょう。

松野 安倍も、あのときに、なればよかった、なれたかな、いつて亡くなった。そういう者がたくさんおるんだ。中川一郎がそうだ。

伊藤 渡辺美智雄。

松野 無理して、何か急ぎすぎる。候補者になって。無理せん方がいいのと思うけれど、みんな自分の運命を知っているんじゃないか。それぐらい動物的勘があるのかもしれない。みんなそうですね。橋本龍伍もそうだった。やけに急いで家を造つたんだ。家をつくつて、来月入るといふときに死んだ。だからその家はお葬式だけ出した。私は行つて涙が出た。葬式のために家を造る。葬式が済んだら、その家はまた債権者に渡すわけですからね。なんのためだったか。借金してつくつたので、また元に戻したんでしようね。

伊藤 息子がそれに乗つたんだ。

■高橋圭三との関係

佐道 お葬式という話でお聞きしたいんですが、高橋圭三さんと先生はどういうご関係ですか。高橋圭三さんの葬儀委員長をされましたね。

松野 高橋圭三というのはNHKの頃のスターなんだ。パーティに行くが高橋圭三に会う。向こうは光っている。こっちは若手の代議士だった。それで高橋圭三はインテリだから、話せといえ、話せる。パーティで会つて話しているうちに、いつべん食事をしましょうや、という話になって、二人で食事をした。そして私の娘の結婚式に司会をかって出てくれた。そのうち参議院に出るといつて、「政治家はどうですか」と私に聞きに来る。「派閥はどう

「しましよ」と聞きに来るから、「派閥は入らんがいいよ」といった。全国区で出て当選して、六年はいままで通りの交友をした。最後に、「おれが死ぬときは、高橋君、君が葬儀委員長になってくれよ」と言っていたら、逆になっちゃった。逆になったから、私が葬儀委員長になっただけで、話は逆なんです。

そういう中で、きれいな男だった。これぐらい話術の上手なのはいい。人の悪口を言わないんだ。私たちは言うんですよ。大平はどうだ、竹下はどうだと言っていると、そばにいて、あはは、おほほと言つて、本人は言わないんだ。「高橋さん、どうでしょう？　そうでしょう？」という、「ええ、まあそんなところですかね」という。話術がうまくて、あれほどみんなが言つても、人の悪口をひとも言わない。こんなに話術のうまいのはいなかった。それで、みんなが二時間も三時間も人の悪口を言つていゝ話術の中に入つていゝんですよ。本人も話をするんですよ。するけれど、話がうまい。「ひと、それぞれですからね。趣味がありますからね」という言葉だから、悪口にはならない。「あの男はどうも酒癖が悪くて困るね」と言つても、「いや、おのおの人はありますからね」と言うから、悪口ではないんだ。その話術には感心した。それであの人には葬儀委員長を頼んでおいたんだけど、逆になつたから、私が葬儀委員長を務めた。奥さんも信頼しておりましたからね。

伊藤 ご家族とのつき合いもあつたんですね。

松野 ありました。奥さんも一緒にトルコに旅行をしたりしましたね。

伊藤 それはプライベートな旅行ですか。

松野 ええ。トルコは行つてみると、いいところですね。

伊藤 トルコって、本当のトルコでしょう（笑い）。

松野 イスタンブールですよ。新宿のトルコじゃありません（笑い）。伊藤さんもいろいろなことを言うね。トルコに行つてい

のか（笑い）。

伊藤 最近トルコといつてもわからないですね。

松野 いまはトルコとはいわれないからね。あのトルコはよかつたな。トルコには申し訳ないけれど、あのトルコという言葉は傑作だつたな。誰がつけたか。

伊藤 でも本当のトルコはどうでしたか。

松野 いいところですね。

伊藤 それは観光旅行に行かれたんですか。

松野 仲間が呼ばれて、六、七人で一緒に行きました。私はいろいろな外国に行つたけれど、いちばん印象に残つたのは、ベニスとトルコだ。ベニスは珍しかった。

伊藤 それはどこから招待されたんですか。

松野 会社の三十周年記念で、創立からお世話になつたから、ということだ。私と高橋さんがその会社の顧問みたいにしていたから、おかげで繁盛しましたからといって、三十年記念で招待を受けた。高橋さんご夫妻と、私は家内がないから看護婦をつけて、六、七人のご招待だ。トルコには行く機会がなかつた。アジアとヨーロッパの接点だ。そのときに私はガイドブックを持っていたが、イスラムなのかキリストなのかわからない。それで私はイスラム教の力を見た。トルコはイスラムですからね。まだみな三時とかに集まつてきて、こうやるんだ「お祈りの手振り」。あれを見て私は宗教の怖ろしさを感じた。イスラムは一日五回おまいりするんだ。

その前に私はヨルダンに行った。これはだいたい前だけれど、キリストの聖地に行った。キリストの聖地かと思つたら、イスラムのお寺がある。あそこの連中に聞くと、キリストのことをあまりよく言わない、「あれは十字軍の落とし子ですよ」なんていう。聖地の真ん中でね。宗教の怖ろしさを、トルコに行つてまた感じた。

伊藤 トルコは比較的穏和なほうですね。

松野 穏和でも、宗教はイスラムだ。寺院を見ると、また素晴らしい寺院だ。何時かになると、ワーツと「礼拝を」やる。三時から五時になるとやるでしょう。こんな文明社会でもまだイスラムだ。だからあの戦争を見ていると、とても終わらないと思う。

それから東京のイスラエル大使館にも行ったんですね。それはなぜかという、一回私は、この戦争の焦点のイスラエルに行ってみようと思った。

伊藤 それはいつの戦争の話ですか。

松野 テルアビブ。

小池 岡本公三ですか。

松野 岡本公三事件の前。

小池 第三次中東戦争ですか。

松野 イスラエルという国が建国して十年目ぐらいだ。国が見たかったんだ。コルホーズみたいな、なんていうんですか、キブツを見たかった。

伊藤 それは議員のときですね。

松野 議員のときだ。それで国弘「正雄」という、参議院議員になった通訳がいるでしょう。国弘が三木さんの通訳をしていたけれど、国弘と一緒にいった。とても上手で同時通訳してくれる。しゃべっていることを耳元で説明してくれる。だから一緒に笑えるんだ。普通は向こうが話して、あとで通訳が言うから、向こうが笑ったあとで三分ぐらいしてから笑わなければいけないので、笑いが一緒にならない。国弘が後ろから説明してくれるから、一緒に笑えるわけだ。それで二人でイスラエル大使館に行った。鉄の扉が三つもある。まず門のところ、玄関、大使の部屋の前と、鉄の扉が三つあるのに驚いた。そこに国弘と一緒に行って、イスラエルに行ってみたいと言ったら、いらっしやいという。ご招待するという。「どうしてあなたの国はそう強いんですか」と聞く

と、「私のところには人口が五百万しかない。相手のアラブは五千万人いる。アラブは負けても逃げていく場所がある。私のところの五百万は負けると海に落っこちる。背水の陣でやっているから私たちは強いんだ」。そんな話をして、是非ヨルダン川を見て来たいと思って、行こうと思ったけれど、さてとなると戦争が始まる。それでどうとう行く機会がなかった。それで今度トルコに行つて国を見ると、宗教は怖いと思った。

伊藤 トルコは、外見は西洋風なんですか。

松野 外見はほとんど西洋風。宗教以外は西洋風ですね。『オリエンタル急行殺人事件』、アガサ・クリステイが何かの小説で見たいけれど、まだその部屋があったり、ホテルがあったり、駅があったりしました。歴史のあるところです。そんなことで、高橋さんと旅行した。高橋圭三というのは惜しい人物でした。私より三つぐらい若かった。

武田 NHKから民放に行った初めてのアナウンサーになるんですか。

松野 NHKから初めて民放に出て行った。そのときに成城のはじめに立派な家を買っているんだ。それは死ぬ前の話です。奥さんの話で、あの頃、NHKのアナウンサーが一万五千円だったそうです。終戦直後。そのときに高橋圭三は、「話の泉」のスターになったら、三十万も買ったそう。三十万というのは、NHKで出せる最高額だそう。おそらく理事長が三十万ぐらいで、それより上はないでしょう。それを「話の泉」のアナウンサーになつてもらったんだ。だからよそのアナウンサーの二十倍ぐらいの月給をもらった。それで成城の畑の中に一反の土地を買った。「反」で買った。「それがいまのこの家ですよ」と奥さんが話なんです。その頃は畑で、買うなら一反です、「坪」じゃなかったというんだ（笑い）。

宮田輝というのが出ましたね。宮田輝が六年後に出るんです。

出ると、宮田輝は高橋圭三と競合するんです。「高橋さんは」争うことが嫌いな人だから、人を押しつけることがいやなものだから、自分は身を退くといって退いて、宮田輝が当選した。だから一期で辞めた。もう一期やりなさいよ、と私は勧めたけれど、人と争うのがいやなんだ、人の悪口を言うのもいやだから、争うのも嫌いなんだ。それで宮田輝に譲って、高橋圭三は一期だけで、きれいにやめました。

■引退後——政界の語り部として——

伊藤 さて、先生はリタイアされて、そこから先はどうしようと思っておられたんですか。

松野 私は、ほかに何もありません。

伊藤 政治を除くと、ですね。

松野 文学もできない、才能もない、何もないんだ。それで語り部みたいに、自分の政治を人に教えることがいいかなと思った。幸い、海部とか安倍とか、小泉もそうですが、若い議員が私を食事に誘ってくれたりする。議員を辞めても、案外呼んでくれるんです。それで議会の近くにいるわけだ。向こうからも電話で尋ねてくる。私は身の上相談ではないけれど、政治相談のようなことでもするしかないな、と思う。

伊藤 相談を受けるといふことは、いろいろ情報も入ってくるということですね。

松野 情報も入ってくるんだ。新聞記者もわりに来るように、親しい。

伊藤 新聞記者もまた情報をくれるでしょう。

松野 情報をくれる。また私も情報になる。そういうのが七、八人おると、いつのまにか、ここ「永田町」に住んでいても飽きな

くなる。

伊藤 だいたいこのへんのことかわかるんですね。

松野 だいたいわかるし、また人が来るし、新しい人が来る。それで自然にこの近くにいる。ここはだいたい二十年、ニュージャパンが焼けてからですからね。

伊藤 ああ、焼けたときはどうだったんですか。

松野 いたんです。

伊藤 焼けるその瞬間ですよ。

松野 瞬間にはいけないけれど、私の事務所があった。

伊藤 じゃあ丸焼けですか。

松野 丸焼けだけれど、私は権利があった。借地権だ。

伊藤 借地権があるということは、部屋を買っていたということですか。

松野 家賃を払って借りていたんだ。横井英樹に。

佐道 あの社長はご存知ですか。

松野 知っていますよ。

佐道 大変な人ですね。

松野 大変な男だ。横井英樹が、焼けて三日目ぐらいに私のところに来た。よれよれの洋服で、タクシーに乗って、朝の七時半頃、ドンドンと来て、疲れ切った顔をしていた。「ニュージャパンが焼けてまことに申し訳ない。真つ先に先生のところにお詫びに来た。どうぞひとつ、私があなたにできる、これがすべてですから」と言つて、千円札で三十万円、束にしてここ「懐」から出して、「どうぞ、これで」という。ほろほろの千円札で三十万。「いいよ、もう君、そんなことはお互いだから。苦勞するときに君に無理なことは言わないよ」と言つた。

それもあとから聞いたら、一つの芝居だったかもしれない。その後で補償連盟という組合をつくつたんだ。私は真つ先に誘われたんだ。私はその三十万をもらったものだから、おれは入らん、

と行って入らなかつた。あとはみんな補償連盟に入って、私だけ入らなかつた。それは、私がかわいそうだと思つて男気を出して、その三十万を受け取っているものだから、なんだか気が引けた。いま考えてみれば、あれも芝居だったかもしれない。そのときはタクシーで来たのに、しばらくしたら大きなリムジンに乗つてね。横井というのは、すばしこいやつだ。だから私は、いまのように見れば、子供みたいに騙された。とうとう連盟に入らないで、補償金ゼロです。その三十万で終わりです。

伊藤 そこが焼けたので、ここ「パレロワイヤル永田町」に来たんですか。

松野 ちようどこが空いていたから、ここに越してきたわけだ。越してから、もう二十五年ぐらい経つかな。「秘書の女性に向かつて」君は何年だ（秘書 十四年です）。

松野 前の秘書が十二年だから、二十五、六年前だ。

伊藤 じゃあ、ここは長いんですね。

松野 長いんです。議会の近くにいないと、人が来ないし、ニュースが入らない。私も生きていく意味がなくなる。新聞記者か代議士か、一日二人ぐらい来ますね。そうするとニュースが入る。

伊藤 かなりホットなニュースが入るわけですね。この前お話になつていた「アサヒ芸能」も来るでしょうしね。

松野 来ましたよ。また一年間くれるそうです。私の秘書が喜んで、毎週読んでいる。「週刊ポスト」もくれるそうです。毎週くれる。だから週刊誌は、「サンデー毎日」「週刊朝日」「週刊ポスト」「アサヒ芸能」「AERA」「SAPIO」、いろいろのが来ます。今日も来ているだろう。

しかし政治家で語り部のようだ。このあいだ田原「総一郎」が、わからんことがあるから聞かせてくれと言つて、一時間来ました。二、三人のスタッフを連れてきた。何を聞きたいんだ、と言つたら、「吉田さんは再軍備賛成でしたか、反対でしたか。いま吉田

研究をやっているが、そこがわからない。吉田さんはマッカーサーから朝鮮戦争のときに再軍備をしろと言われて断つた。だから吉田さんは再軍備反対だったんですね」というから、「それは違う。明らかに吉田さんは再軍備賛成論者だ。じゃあどうして断つたのか。断つた理由は明白だ。あの頃日本の軍人がうるうる余つていた。溢れていた。もしあれを再軍備で使えば、全部昔の旧陸軍が復活する。しかも恨みがあるから強くて、朝鮮なんかいっぺんにやつつけちゃう。やつつけた勢いで、また日本国内に軍国主義が出てくる。またパール・ハーバーを攻めるかもしれん。だから君のためにもおれのためにもよくないから、いまは再軍備はできない。自衛隊とか警察の力待ちにしなければいけない。軍といたら、いま二百万も余っているから、二十万ぐらいすぐに集まる。しかも精鋭部隊だ。ついでこの間まで戦争をしていた連中だ。米軍だつてやられちゃうぞ。それが吉田さんが断固として反対した理由だ」と言つた。

「初めてわかつた。いや今日は面白い話を聞いた。それならわかりやすいですね」と言う。「それはそうだ。もつとすごいことを言っているんだよ。朝鮮という国は、アメリカが考えているような国ではない。単純な国ではない」ということも吉田さんは言つたんだ。あの国はロシアと中国と日本を手玉にとつた老獪な民族なんだ。アメリカが考えているように、南北と割り切つた話じゃないぞ、ということも吉田さんはマッカーサーに言つたんだ。おまえ用心しろ、やられるぞ、とまでは言わなかつた。吉田さんはそう言つていた。朝鮮は老獪な民族だ。だから日韓併合は、いかに日本が合併したようだけれど、朝鮮は中国もロシアも手玉にとつて、日本も手玉にとつていた。日本の軍隊がたまりかねて実力で占領した。やらなかつたら日本は朝鮮民族の手練手管にやられていたんだ。それを吉田さんは言いたかつたんだ。だから、李承晩と会えと言つても会わない。あの民族と会つても駄目だと

いうことだ。

そんな話は初めて聞いたという。私は直接本人から聞いた話だから、どこにも記録は残っていないけれど、そう言う話が初めてわかったという。吉田さんは再軍備反対論者だと思込んでいた。あの人はどちらかという憲法改正論者だ。

私は語り部で生きていこうと思ったんだ。

■ 闇鍋会の誕生

伊藤 「壁に飾られている写真を指して」その闇鍋会は、そういう中で生まれてくるわけですね。

松野 私がその闇鍋会のメンバーを引いたのは、もともとが自民党であるということがひとつ。第二番目に、将来これがものになるかということを見た。ものになるかならないか、将来を見るには過去を見なければいけない。過去を見るということは、家柄も見なければいけない、本人の行動も見なければいけない。もちろん、あの連中は若くて、まだものになるかならんかわからないとさですけれどね。まだ、せいぜい副長官ぐらいの時代ですからね。

伊藤 それは何年前ですか。

松野 五年前からです。これは最近の写真で、第五回目だ。

伊藤 そうすると、リタイアされて数年経って、これを始めたんですね。この言い出しっぺはどこなんですか。

松野 私だ。いまのように、みんなが来るから。この連中は、来る人です。その連中を私が忘年会に呼んだわけだ。それで「週刊朝日」が政治家の忘年会を取材したいというから、取材と私の忘年会を併せて、第一回をやったわけだ。「週刊朝日」はそれを機会に、これに闇鍋会という名前をつけてやり始めた。毎回「週刊朝日」がやるんです。この写真が五年目で第五回目だ。

伊藤 これは「週刊朝日」が費用を持つわけですか。

松野 このときだけは費用を持つ。だからいくらご馳走してもらいわけだ（笑い）。これは「週刊朝日」の記事にするために、費用を出しますよ。五年間、このときだけは、ほかのことを抜きにして、出すわけですよ。全員よく来るんです。同じメンバーなんですよ。

伊藤 変更はナシですか。

松野 この中で塚原俊平が死にましたから、死んだものは変更するけれど、あとはみな同じです。

伊藤 補充はしないんですか。

松野 補充はしない。いまのところ。これだけ揃うと、新しいのが入ると話が乱れる。同じだと、この前の続きで話せるでしょう。去年はこうだったな、と話せる。新しく入ると、去年はこうだったという話を通じない。みんな成長しました。

伊藤 この人たちは、それぞれ先生に縁があるんですね。

松野 縁があるのを呼んだ。だいたい、おやじを知っているやつばかりです。おやじを知っているから、息子も知っている。息子を直接というより、おやじをよく知っていますからね。

伊藤 じゃあ、小泉「純一郎」さんもそうですか。

松野 私の前防衛長官は小泉純也ですからね。防衛の問題で、わたしはずいぶん助けてやりましたよ。

伊藤 鳩山「由紀夫」さんは。

松野 鳩山は、おやじの威一郎が私と一緒だ。大蔵省の主計局長をして、事務次官をして参議院議員になった。私と海軍で同級で、中曽根なんかと一緒だ。それから鳩山一郎は私のおやじと一緒ですから、それは親子三代みんな知っている。羽田「孜」のおやじ、羽田武嗣郎も、「私の」おやじが一緒だった。鹿野「道彦」も、鹿野彦吉はおやじが一緒だった。麻生は吉田さんと、麻生太賀吉の息子だ。

伊藤 あとは平沼「越夫」さんですね。

松野 平沼はちよつと違いますが、慶応の後輩で、いつも先輩、先輩と言つて走つてくるものだから、可愛いやつということを入れてあげた。みんな成長しました。私は利権の臭いがするやつは駄目だ。鈴木宗男なんて話をしたけれど、ものの考えが駄目ですね。自分のことに置き換えて議論するから、素直に聞けない。国民を中心に話をしないものだから。

伊藤 スタートしたときは、「小泉さんは」総理でもないしー。

松野 小泉は橋本内閣の厚生大臣になったかならないか、でしょう。鳩山は昔「直人」のときの幹事長、羽田も副代表、鹿野は小沢「一郎」と喧嘩して飛び出して、太陽党ー。

伊藤 一時期、太陽党というのがありましたね。

松野 小沢と喧嘩して、向こうつ気が強いんだ。それで入れたんだ。鹿野のおやじもよく知っています。山形の農林議員でおとなしい男でしたよ。

この次の総理もこの中から出るだろう。麻生か平沼だ、という噂が出ている。野党なら鳩山が出るだろう。鳩山は、民主党の連中がいろいろなことを言ってくる。鳩山は食い足りないとか何とか言ってくるから、「それは君、よく考えてごらん。三国志を読んでごらん。劉備玄德なんていうのは、あまり有能な武将でもなかったよ。それを担いで、勇猛とか勇将とか武将が出たのではないか。だから鳩山みたいに担ぎやすいものは、得難い人間かもしれないよ。彼に勇気と武將を求めるとは無理だ。しかし担がれつぷりは、これぐらいいいやつはいない。君は劉備玄德になれるぞ、君は諸葛孔明になれるぞ」というんだ（笑）。

鳩山には「民主党はおれのものだ」というぐらいの愛情を持って。君が追い出されるときには民主党の看板を持つて出るぐらいの腹を据えなければ駄目だよ。民主党を出るときは、もし追い出すのなら民主党も連れて行くぞというぐらいに腹を決めておけ」と言

っている。いま鳩山を、一回は総理にしてやりたいと思つて。「閣議会には」小泉と鳩山を入れた。小泉は鳩山を弟ぐらいにか見ていませんよ。

伊藤 小泉なんていう人が総理になるとは思わなかったでしょう。

松野 思わない。本人も思っていない。「なった以上は、たじや降りるなよ、第二の宇野とか、第二の森になるな。なった以上、二度となれないんだから、最後までがんばれ」と言っている。

伊藤 そうですよ、二度なった人はいないんだから。

松野 こんなにちまで見えていて、日本がえらかったなと思うのは、日本民族がえらかった。誰とは言わないが、日本民族は秀でている。日本は宗教戦争を持ち込んだり、妙なものは持ち込まない。誰が言うことなく、日本民族は秀でているんだ。選挙で間違つたら、解散すると一番いい数字が出てくる。私はいまの政治は、一年ごとに三回選挙すればきれいになると思う。三分の一ずつ変わりますから、三年やるとずいぶん変わるんだ。だからすべて、選挙をやれば不安はなくなる。それだけ日本民族を信頼していいと思う。誰がやったのか、そういう伝統か。文部省教育なんていいとおもわんが、なんととはなしに国民教育がひとつのレベルを持つて、常識を持つて、偏つた妙な風潮にはならない。東条「英機」には騙されたけれどあとは平穩に元に戻っていく。軍国主義も芽生えないし、平和ぼけの共産主義にもならないし、なんととはなしにフランスがとれている国でしょう。負けたらどっちかに偏るんだ。フランスなんて今度は急に偏つたようだけれど、日本はそれもない。私はこの日本民族は、なんとない知性と安定を持つているんじゃないかなと思う。

■農林問題の関わりについて

伊藤 全然話が違います、農林議員だということは、ずっと農林問題に今日まで関心があるということですか。途中でオレンジと牛肉の自由化の問題がありましたね。このときは何かなさいましたか。

松野 レモンの自由化というのがあった。そのとき私は反対をした。レモンの生産なんてあまりなかったんだ。淡路島に少しあるだけだ。それだけで、本当はないんだ。それでも柑橘類だから、レモンが自由化されたらオレンジだ。オレンジが自由化されるとミカンが困るといっているので、まずそこを口説けといっているので、レモンの自由化反対に私は走ったんだ。あとで見たらレモンは全然なかった。それでも自由化に反対した。

そうしたらレモン輸入業者が喜んだ。レモン輸入業者は自由化されると駄目なんだ。割り当てだと儲かるんだ。そうするとレモン一つが二百円も三百円もするわけだ。本当なら十円もしない。それで私たちが反対していたら、期せずしてレモン業者が喜んだ。それはあとの結果ですが、私はレモンの自由化反対。本当をいうと、反対をしなくても大したことはなかったんだけれど。いまは逆に安くなっている。自由化ですからね。私たちの熊本県は柑橘類の生産地なんだ。

伊藤 みかんでしよう。

松野 農民の票を取るには、レモンに反対しなければならぬ。一万票ぐらい違う。それで反対をした。その頃なぜそうだったかという、私の選挙区の農村地帯では、農村の票が六〇七割あった。それで私は農村議員で走ったわけだ。いま見ると、農村人口がああ頃の四分の一もないでしょう。兼業を入れても五〇八%でしょう。日本の農業は変わった。いま私が批判をすれば、日本農

業は過保護のために進歩を遅らせた。保護政策というのは、緊急ならいいけれど、永続すると進歩しなくなる。逆に退歩する。生産を抑えているんだから。いま私は日本の農業は、保護が成長を抑えてしまっていると思う。

だから日本の農業が中国のネギに押されるなんて恥ずかしいですよ。みつともない。あんなネギに抑えられて、大騒ぎしている。米の保護政策のために、生産制限を三分の一しているんですよ。水田の三分の一が生産制限。生産制限の代わりに、失業対策のように補助金をもらう。その補助金のために生産ができない。それが進歩を遅らせている。あの三分の一の水田にネギでも植えてごらん下さい。ネギは腐るほどできる。でも生産制限の補助金をもらうためにネギ生産もしないんだ。だから私に言わせれば、保護政策のために日本農業は進歩を遅らせていて、発展がない。若い人がやっついていかない。三ちゃん農業の限度にきているでしょうね。いま逆に都会のものが農業を望むんだ。それは農地法があるから駄目なんだ。家は建てられるけれど、農地がとれないんだ。それは農地法という保護法がある。生産を妨害していますね。農地法、補助金によって日本の農業は衰微させていると思う。

伊藤 それは小泉改革でやらなければならぬでしょう。

松野 それは私たちの後輩の農林議員の連中が悪い。またそのバックボーンとして、農協の幹部が目が覚めない。この二つです。農林議員と農協の指導者が動かないと、農民は動けない。もうひどいものだ。一番遅れた産業は農業でしょうね。

伊藤 ものすごい補助金を食っていますね。

松野 多額な補助金だ。おそらく農林省の予算は相当なものでしょう。ほとんど補助金だ。補助金で食っているものだから、生活保護と失業対策で食っているようなものだ。働かなくていい代わり、金持ちにもなれないんだ。それに気がつかないんだ。補助金をもらえばいいといつてやっていると、働く場所がなくなる。農

地法と農業補助金が足枷になって、日本農業はどんどん衰微していく。大変な時代になりつつある。できれば、小泉改革に農業を入れてもらいたいな。

伊藤 時間になりました。次回、最後になるかもしれませんが、歴代内閣についてお話を伺いたいと思います。闇鍋会まで行ってしまいました。

松野 最近は語り部だから。

伊藤 それでは次回を決めさせていただきます。

■父松野鶴平関係の文書について

伊藤 僕らのニューズレターは来ていますか。

武田 「オーラルヒストリー」という名前ですが。

松野 それは記憶にないな。

伊藤 このオーラルヒストリーを受けてどうだったか、ということ、別の人にインタビュをさせますので、その日、終わったあとよろしいですか。それから写真撮影もしたいと思います。

松野 はい、いいです。

伊藤 それから先生、もう一つお願いがあります。僕はこの前、鳩山さんの日記を本にしたんですね。その後、「鳩山」薫さんの日記、鳩山さんが亡くなるまでのあいだのものを本にするんですが、前の本を見てもわかるように、松野さんはいっぱい出てくるんですね。佐藤日記にもいっぱい出てくるわけです。それで松野鶴平さんの文書はあるのでしょうか。

松野 薫子さんの方は、母「瀧の」がよく出てくる。

伊藤 お父様には、いろいろな人から手紙が来ているでしょう。見てくださいよ。それから政友会とか自由党とか、そういうところからいろいろな情報も来ているでしょう。どこか物置か蔵の中

に入っているに違いありません。

松野 あるかもしれないけれど、大変だ。探しましょう。

伊藤 探してくださいよ。なんだったら、捜索に行きますから。

松野 一番の心配は、私の家は戦災で焼けていますからね。

伊藤 どこで、ですか。

松野 東京で。

伊藤 吉田さんからの手紙とかね。

松野 古いものは戦争で焼けている。だから終戦後のものしかない。戦後というとあまり大したことはない。

武田 いや、そんなことはありません。

伊藤 吉田さんとの関係もあるし、佐藤栄作との関係もあるし。

吉田さんの手紙なんかあるんじゃないですか。

松野 ありますよ、三つや四つは。

伊藤 三つ、四つあるということは、ほかにもあるということじゃないですか。

松野 私が持っているのが三つ四つということですよ。

伊藤 ではとりあえずそれをちょっと貸してください。これをブック化するときに、それを付録に付けますから。そのほかのものを探してくださいよ。きつと蔵の中にあるから。

松野 それは焼けちゃったから。

伊藤 熊本にあるんじゃないですか。

松野 熊本にはほとんどありません。

伊藤 熊本には蔵はありませんか。

松野 ありません。

伊藤 熊本にはお宅はあるんですか。

松野 ありますが、蔵はない。

伊藤 蔵はなくとも物置があるでしょう。

松野 そんな、侍の家じゃあるまいし（笑い）。

伊藤 侍の家は没落しているから駄目なんです。

松野 吉田さんの鳩山さんのもあるかどうかわかりませんが、
ど。

伊藤 僕はあると思うんですね。積極的には捨てないはずだから。
有馬 『松野鶴平伝』をつくるときに、何か集められたりしたこと
はありませんか。

松野 集めたかもしれないな。熊本の方でやったんですからね。鳩
山薫子さんののは、私の母が出ています。非常に親しかったから。
謡(うたい)をやっていた。

伊藤 先生、「我善坊」というのは何ですか。

松野 我善坊は土地の名前です。

伊藤 そこに何かあったんですか。

松野 謡か何かの先生がいたんでしょう。

伊藤 でも鳩山自身も行っていきますよ。

松野 我善坊というところで謡をやっていたんじゃないかな。そ
れを土地の名前で呼んでいたのかな。

伊藤 何か鳩山さんのあれがあったんじゃないですか。

松野 鳩山さんのかの女はいませんよ。

伊藤 かの女ではなくて、追放になっているときに、奥さんと入
れ替わりで我善坊に行っているんです。

松野 麻布我善坊でしょう。

伊藤 何かあったんだろうな。石橋さんの家があったのかな。

松野 石橋さんの家は鳥居坂だった。我善坊というのは、いまの
テレビ朝日の近くです。六本木のテレビ朝日通り。あのあたりに
我善坊があった。

武田 いいところと言えば、いいところですね。

松野 中国大使館の下の方を我善坊といていた。

伊藤 我善坊町ですか。

松野 我善坊という地名でしたね。いい名前ですね。

伊藤 いまはもうないんでしょう。

松野 頭の悪いやつが何丁目なんてつくっちゃったから。

伊藤 どうもありがとうございました。では、先生すみません。
何か機会があったら、探してください。

松野 頼三

オーラルヒストリー

第19回

[2002年6月4日12:00~14:50]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員)

■政治家のスキャンダル・小泉内閣の解散について

松野 ……あなた方とこうやってお話をしているけれど、もう私もボケてきたから、これが最後の本になるかもしれないな、と思っ
てね。

伊藤 どこか、本を出してくれるところはありますか。

松野 ありません。どこも出す予定はない。

伊藤 どこか、これ「このオーラルヒストリー」を出してくれるところはありますか。

松野 それはまだ何も話していません。

武田 話せば絶対に大丈夫じゃないでしょうか。

伊藤 どこに話しに行こうかな。先生が知っているところがいいと思うんです。

松野 いずれにしても、私がこんなにお話するのは最後ですよ。

伊藤 それはわからないですよ。

松野 もう記憶がないから。

伊藤 お話を伺った最初のころは、小泉内閣の大人気のときで、それがいまはちよつと寂しいですね。

松野 よくないですね。本人はこのあいだも大丈夫だと言っていた。「大丈夫か?」「大丈夫です!」とえらく樂觀していますね。

樂觀しているところに油断があるな、と思う。

伊藤 政界の常識があの人には非常識なんだから。

松野 ちよつと油断というか、たるんでいますね。

伊藤 疲れたんじゃないですか。

松野 精神的に疲れたでしょうね。

伊藤 誰が一番小泉さんを助けているんですか。山崎「拓」幹事長では助けにならないでしょうか。

松野 「山崎は」あんなふうに逃げては駄目なんだ。男女関係は、

逃げるならやるな、というんだ。やったら逃げるな。このあいだテレビで、「私も男女関係はいくらでもある。でも逃げやせんよ」といった。だいたい男女関係は、ラブレターとかそういうものが必ず出てくる。今度の山崎の「スキャンダル」はラブレターが一つもない。ホテルの領収書ばかりだ(笑い)。

武田 四百枚ですか。

松野 こんな馬鹿なことはない。だいたいラブレターとか、愛の物語がどこかにある。あいつの場合は一つもない。そういう番組をやるならおれはいつでも出てやる。たくさん体験談がある。「先生はどうしますか」と聞かれれば、「この問題だけは代理がきかないんだ。おれの代わりに、おまえ、あの女のところに行ってくれ、という代理がきかないんだ」という(笑い)。

初めて大臣になる前に、その女性に「今度おれは大臣になるかもしれないよ」と言っ、「相手の女性が」「それはいいですね、名誉なことですね」と言えば、これは大丈夫。「今度大臣になるかもしれないよ」「あんなのお辞めなさいよ」と言うと、この女は危ないと思う。少し手入れをしておかんと危ないと思う(笑い)。これだけは人に頼めないんだ。それで、いくら金をやるか、危ないのには先に渡しておく。

衆議院議長で死んだ伊藤宗一郎は、議長になった途端に女から手紙が来たそう。それであわてて二百万渡したそう。議長になれば来ますよ。急いで二百万渡したという。

伊藤 そういう話はどこから洩れるんですか。

松野 洩れますね。女が直接本人に言えんときには、親しい友達に言うんです。私にはちよつと言いくいから、私の友達に言うわけだ。「松野先生に会いたい」と。そうすると、その会いたいという理由は何か、ということになる。「どうして会いたいんだ?」というのと、「実は六年前に……」となる。そこで興味本位に聞けば、みんなわかりますものね。

伊藤 男女関係で、あいだに人が入るといふのは具合が悪いでしょう。洩れる元じゃないですか。

松野 入らないでいることも危ないんだ。とんでもないあばずれ女だとね。ふだんは入らんほうがいいけれど、悪い女の場合は、入っていきたくないって危ない。

伊藤 初めから危ない女だとわかって手を出すわけじゃないでしょう。

松野 危ない女ほど、毒のある花ほど、きれいなんだ。毒のない女は魅力がない。

伊藤 おっしゃっていることはわかるような気がします（笑い）。

松野 毒花ほどきれいなんだ。夜見ると。

伊藤 昼間見ても、毒を持っている花のほうがかきれいなんですね。

松野 そうでしょう。

伊藤 いま小泉内閣に先生がアドバイスしたらどうしますか。やはり解散しろと言いますか。

松野 最後は解散。

伊藤 めちゃくちゃになってもいいから、とにかく解散だということですか。

松野 解散せずに下りるようなことをするな、という。

伊藤 閣内に解散に反対するやつがいたら、クビを切ればいいんですね。

松野 クビを切ればいいが、反対はしませんよ。反対をしても、その場で罷免すればいいんだから。それがわかっているから、誰も反対しませんよ。

伊藤 小泉さんが本気になって解散をする気になったら、もう反対はできないということですか。

松野 そう。「解散せずに辞めるような、第二の森「喜朗」のようにはなるな」と言うと、「絶対になりません」と言う。それだ

けは私との約束だ。

小池 しかし解散する大義名分が必要ですね。

伊藤 大義名分なんていくらでもできるでしょう。

松野 いまなら、政界腐敗だな。鈴木宗男でも逮捕されたら政界不信だ。

小池 出直し選挙ですね。

松野 政界改革。

小池 自分の政敵には「悪いやつ」が揃っているわけですから、それはやりやすいですね。

松野 政界の構造改革だな。鈴木でも逮捕されればね。昔も利権はあった。いま目に余るのは、利権の集団ができたことですよ。

利権屋の子分が徒党をなして、暴力団みたいになったことが間違いないんだ。鈴木宗男を頂点に利権集団ができた。これは未だかつてないことだ。案外パトロン、後援者が野中「広務」だということらしいね。すでに政治資金規正法で三十人ばかり出ていますからね。七百万から、五十万とか百万とか、名前が出ています。

出ている金額だけでもそれだけある。たとえば道路公団反対というのと、その委員会に三十人が雪崩をうって出席する。「人間の数より熊が多いとは何だ」「そうだ、そうだ」と三十人で多数をとるわけだ。その委員会には二十人ぐらいしか来ていないから、三十人も来れば多数。それで審議をやらせないわけだ。今度農林関係だと、また三十人が農林委員会に雪崩れ込む。こんなことはなかった。こういう集団はいままでない。個々の利権はたくさん見えていますよ、集団はない。

佐道 いつ頃からそういう傾向が出て来たんでしょうか。

松野 やはり人物が小さくなると、そうなるでしょうね。大物の利権は一人でやる。金丸「信」ぐらいになると一人でやる。子分がついてくるだけで、数を頼らなくても自分の政治力で行けるわけだ。ほかのやつは、政治力がないから数で行くわけだ。そこで

私は悪さが違うと思う。これは大掃除をせんといかんでしょね。
佐道 巨悪ではなくて、小悪がいっぱいグループを作っているんですね。

松野 小悪軍団だ。

伊藤 しかし政治資金規正法で締め上げた結果でもあるんじゃないですか。

松野 政治資金規正法で締め上げた結果でもあるけれど、政治資金規正法はこういうものがなくなることを理想としたんだ。ところが逆に繁殖してしまった。ポウフラが湧いたようなものでしょね。昔は大きなナマズが利権を食っていたけれど、いまは小さなポウフラがたくさん湧いて利権を食っているようなものだ。これは嘆かわしいことだ。昔は大きなナマズがいて、ばくばく食っている。ナマズの周辺に仲間がおるだけだ。だからナマズにさえ話をつければ済んだ。そのナマズが大野伴睦であり、金丸であり、田中角栄だ。いまのは、小悪党が多くていかんな。この方が危ない。

伊藤 危ないですか。

松野 危ない。大悪党で大親分はわりがいいんだけど、下っ端のやつらほど危ないでしょう、切った張ったをする。大親分は切った張ったじゃない、それなりに一つの哲学を持っていますよ。小悪党のほうが危ない。

佐道 それは金丸さんが最後で、あとは小悪党になってしまいましたか。

松野 金丸でボス政治の終わりでしょうね。

■ 細川護熙との関係

伊藤 いままでお話を伺って、この前は闇鍋会まで行ったんです

が、いままでお話がなかったことがあります。

宮沢内閣が崩壊して、小沢さんが「自民党から」出て、自民党が政権から離れる時期がございましたね。そして細川内閣ができますが、細川さんは熊本ですから、先生はいろいろご関係があったのではないかと思うんです。それで細川内閣の前後のお話です。細川内閣をどう見たか、ということもさることながら、先生はいろいろ動かれたんじゃないかなという気もしますが。

松野 細川は熊本の藩主ですから、私の親子は常に敬意を払って、正月には門前に名刺を置いていくぐらいのつき合いをしていたわけです。利害はないけれど。それで細川護熙も新聞記者になったとき「一九六三年」に挨拶に来ました。たしか朝日新聞で鹿児島にいたんですが、たまに東京に来たときに挨拶に来ました。

その後、「私は選挙に出たい」と言って私のところに来た。「どこから出るんだ」というと、衆議院の私の選挙区から出るという。「しかし五人おるからまあいいだろう。ただ君が出ると困るね」と言いながら、出るものは止めようがない。それで衆議院に出ました。そのとき細川は当選しなかった。そんなことで、そのうち「一九七一年」参議院の全国区に出て、京都が中心で、全国で上がりました。

伊藤 なんて京都が中心なんですか。

松野 細川家は京都なんです。むかしから京都が地盤ですからね。

伊藤 具体的には。

松野 もちろん京都には屋敷もあるし財産もある。もともと京都の公家さんの家ですからね。それから、裏千家、表千家、どちらも親類だ。華族はみな縁類だ。だからそれが多かったでしょうね。小池 近衛の血も入っていますし。

松野 裏千家、表千家の全国票が一番多かった。

伊藤 熊本も、ですか。

松野 京都が一番多いですからね。全国区で百万以上入った票の中には、それが一番多く入ったわけだ。全国の茶道は、全部細川に入れたでしょうね。熊本も郷里だから、熊本と京都が一番多かった。もちろん東京でもある程度入りました。全国区では百二十万ぐらい取らなければ、上がりませんからね。細川家はもともと京都から熊本に来たんだから。もともとは京都の公家さんだ。殿様というのか公家さんというのか。そういうことで、参議院に出て、参議院議員になつてからもちよいちよい会つたわけだ。

そのうち突然「一九八二（昭和五十三）年」、今度は熊本の知事に出たいという。そのときの沢田「二精」という知事がおつた。私が沢田知事をつくつたんだ。寺本「広作」知事に対抗して、私が沢田知事をつくつたんだ。沢田にはもう一期だけ、四期目をやらせると約束したものだから、「君は出ないでくれ」といったが、「いや私は出る」という。「おれは困る、おれも義理があるから君を応援するわけにはいかんよ」と言つて、熊本の代議士会をやつたところが、みんな、「沢田で行こう、細川は駄目だ」という。それで沢田で行こうということに私は決めた。

そういう話をしておつて、夏休みになつた。そして秋になつて九月に会合を開いた。そうしたら代議士会が全部、今度は細川だ、というんだ。夏のあいだにみんなひっくり返つちやつた。沢田だというのは私一人なんだ。「なんだおまえたち、いつのまに変わつちやつたんだ」というと、「いや、松野君、選挙区に帰つてきたら、どうも細川の方がいい。沢田は駄目だ」という。みんな、なんだか買収されたみたいになつた。

武田 買収されたんじゃないですか（笑い）

松野 口が濡れたな、と思つた。それで私はしようがない、それならと言つて、私と沢田だけで頑張つていた。そのうち沢田と細川が会合したら、沢田がちょっと弱気になつて、「私は参議院に回つてもいい」という。参議院と知事とこうする「交換する」ん

だ。「両方とも」現職だから。沢田もちょっと弱気になつて、「先生、いろいろお世話になつたけれど、私は参議院に回つても仕方ありません」と言うんだ。こいつもそつちへ行つたのか。もうしようがない、細川にしよう、ということになる。それで参議院の補欠選挙と知事選挙が一緒になるわけだ。それで「一九八三年」二月が知事選挙ですが、正月には細川知事で、私も降りたわけだ。降りたら、私のほうの県議員のボスが突然私のところに来て、「これ、細川から預かりました」といって、風呂敷包みを出した。懇意な仲だから、「おいちよつと待てよ、きみ。これは開けないけれど、金が入っているんだらう」といったら、「そうです」という。「それはおれは駄目だ」「いやあ先生、これは受け取つてくれ。みんなお受け取りになつて、あなただけです」という。「それならなおのこと返してくれ。これは開けないから、返してくれ」「本当に返すんですか」「返す」「私は困る」「困つてもいい、返す」といって私は返したんだ。中味は開けてみないんだ。金だということだけは聞いた。「みなさんお受け取りになつて、先生だけです」なんて言われると、なお受け取れない（笑い）。私と細川のつながりができたのはそのことです。細川はそれを非常に私の徳としたと思う。それまでは平面的なつき合いだったけれど。

伊藤 徳としたんですかね。

松野 ええ。それから知事の四年のあいだ、私だけは特に大切にしてくれました。それは私だけだったんだ。それで「松野」頼久を、「細川が」あとで総理大臣になつたときに秘書にしてくれたんだ。総理になつたときに、総理大臣秘書にしてくれと私が電話で頼んだら、すぐにしてくれた。それはいまの「風呂敷包みの金を」返したことの手柄を信じたんでしょうね。だから私は細川に金銭の借りもなければ、金銭の貸しもない。貸し借りなしですからね。

それで細川という人間が知事になつたが、郷里ではいままでは、

泥臭い官僚の知事が多かった。泥臭いというか、垢抜けしていない。細川というのは殿(との)だから、ピカッと光る。なんとも言えない人気が出た。ことに外国の留学生を知事が呼んだりしたから、熊本に留学生が急に増えたりした。そういう明るいことをやる人だ。それから公文書の書類はみんな縦書きだった。それを横書きに変えたり、すべて役所の書式を変えた。だから熊本県が横書きになったのは、細川になったからです。縦書きだと数字が読めないというんだ。数字を書くときに困る。数字は横に書かなければいけない。それで彼のアイデアで全部横書きにした。それは若い知事でした。二期やりました。「一九九二年二月まで」。

三期やるかというときに、三期はやらずに二期で辞めて、今度はまた中央政界に、日本新党をつくって入っていった。とにかく十年で一回ずつ変わる。変わるたびに異常なぐらい成功している。それで政界にいて、総理を一年、新進党を二、三年ぐらいやったら、もう辞めてしまった。それで補欠で頼久が秘書から出たわけだ。

とにかく変わった男で、今度は陶芸をやっている。その陶芸がまた見事なものだ。先月陶芸の「壺中居」という一番大きな骨董屋で「展覧会を」やったんだ。一年前には値段がついていなかったんだ。ただきれいなのがあって、それを般若園で競売会をやった。競売会で値が出たんだ。一番高いものは百二十五万、安いものでも十五万、ほとんど茶碗です。それで先月やったときは、もう値が付いているんだ。三十五万から六十万のあいだだ。約八十点ぐらいありましたね。だけど全部売れるでしょうね。

去年は値が付いていなかったけれど、今年も値が付いている。去年は値が付いていないから、一つくれよ、と言って私はもらったけれど、今度は値が付いているからもらえない。金を出して買えということだ。去年は値が付いていないから、くれ、と言えた。今度は、まさか値が付いているものをくれとは言いにくくて、さ

すがに私は言えなかった。三十五万から六十万まで見事なものだ。この男は変わるたびに成功する。本当にその茶碗は四、五年しかやっていないんですよ。何十年やっているわけではない。四、五年でも、本物をずっと見て育っている。われわれが十年、二十年かかって本物を見て苦労をするけれど、あれはずっと本物の中で育っている男だから、DNAが違うんだろう。

細川という人間とは、私は親しかつたし、知事のとくもいろいろな相談もしました。わりに淡々としていましたから、泥臭い相談をしたことはない。請負工事の相談なんかしたことはなかったですね。そんなことは私はしません。知事になると請負工事やる。彼も請負工事には淡々としていた。細川に頼みに行く方が恥ずかしいでしょうね。そんなことは気にせん人だから。だから彼はそういう利権とか不正問題は一切ゼロです。関心がないんですから。請負は公平にやればいい、というだけでしょね。だから金を握ったり、取ったり、集めたり散じたりすることは嫌いな人だ。

伊藤 でもさっきのお話は散じた話じゃないですか。

松野 そのときに初めてそれをやったので、総理になったときに問題になったんだ。塀を直したとかなんだか言っていて、辻褄が合わないんだ。その金は京都の家か何かを売ったかどうかしたんですね。その金が政治資金に入ってきて、それをどこで使ったかということが問題になった。そこで彼は、自分の文化財の家の塀を直すのに一億何千万かかったと言っていた。けれども、どうもあのときの代議士の数と県会議員の数と合わせると、塀ではなくて、それなんだ。それは政治資金規正法違反と、選挙法違反になるから言えないんだ。そこでさんざん突つかれた。突ついているけれど、現職の議員の中に、目の前に、もらったやつがいるんだから。その代議士の数と県会議員の数と計算すると、ちょうどその一億何千万という金額になるんです。私は「思い切って言った

らどうだ」と言っただけで、言うとは、政治資金規正法違反と、選挙法違反になる。

伊藤 買収ですね。

松野 買収だ。それが言えないから、塀を直したとかなんとかかんとか言っつて、立ち往生したんだ。細川とはそういうことで、いまでも淡々とつき合っています。しかし泥臭いつき合いはしない。

■自民党の下野・細川連立政権の成立・そして自社連立へ

伊藤 長年政界におられて、自民党がついに政権の座から滑り落ちたわけですね。

松野 それは細川のおかげで滑り落ちたんだ。細川じゃなかったら、あれはまともじゃなかったでしょうね。第一党は自民党なんだから。八つの野党が連合して、その核がないんだ。小沢じゃ難しかった。小沢だと自民党の別働隊みたいで、みんなが信用しない。細川は前自民党にしても、ちょっと肌合いが違っていたし、知事をしていた。細川だから、八つの政党がまとまったでしょうね。

伊藤 実際に細川さんを動かしていたのは、やはり小沢さんなんですか。

松野 小沢でもありません。日本新党のときに私は会った。ゼロから三十人ぐらいになったんですかね。えらい躍進した。「おい、君は総理になるかもしれないね」と言ったら、「いや、私がなれまじかな」と言っつて、ならないとは言わなかった。気持ちはありましたがね。なれませんか、と言った。「落ち着いてやれよ。チャンスがあったら進んでやったほうがいいぞ」と言った。その気は最初からあった。その気がなければ日本新党もつづらなかつた。やつぱり野心はある。その野心が見事に当たる。いまは陶芸に野心

を持つて、陶芸が当たっている。

伊藤 自民党が政権の座を落ちたということは、そんなにショックではなかつたですか。

松野 それはショックですよ。自民党員がたいへんなショックだった。自民党の議員はみんな知っていますから。一番のショックは、部会をやる時、いままではぜんぶ予算説明に局長が説明に来てたわけだ。それが課長しか来ないそうさ。

武田 わかりやすいですね。

松野 わかりやすい。野党だから局長が来ないという。与党のときは全部局長が来た。それでみんな寂しい。課長相手に予算説明を聞く、こんな寂しいことはない。あれは八ヶ月だったけれど、二年経つたら自民党は崩壊していた。利権がないんだから崩壊していただろう。それで自民党は細川攻撃をした。村山と連立になれば「政権に」返れるから、そこで村山と連立をした。恥ずかしい話ですよ。社会党の首班を認めるなんていうことは自民党の良識からいうとあり得ないことだ。それでも与党の利権にくつつきたい。

伊藤 それはしかし、誰がやつたんですか。

松野 それは全員でしょうね。全部がその気持ちだ。

伊藤 ついこのあいだまで敵対していたのに。

松野 それは共産党の次は社会党でしたからね。その党首を迎えるなんていうことは普通はあり得ないんだ。さかさになつても、細川や小沢と違つて、社会党の村山を認めるなんていうことはあり得ない。議長に土井たか子を認めるなんていうことはあり得ない。それを認めるようになったんだから、私には、思想は別にしても、政権という権力と利権に結びついたとしか見えないな。私なら村山内閣なら野党に降りますね。絶対に入らない。

佐道 政権を取り戻すんだということで、具体的に村山さんを担いでという絵を描いた人は誰か具体的にいますか。

松野 その中には野中なんかもいるでしょうね。経世会の連中がほとんどそうですね。橋本「龍太郎」はじめ、小淵「恵三」、野中、そのグループですね。いまの鈴木宗男、額賀「福士郎」とか、経世会が中心ですね。

佐道 中心になる参謀役はいるんですか。

松野 一番は、いま見ると野中かもしれないな。あのころは野中は参謀まで行っていないませんでしたけれど、しかし次に橋本内閣のときは幹事長になったからね。「野中氏は森内閣の幹事長、橋本内閣の幹事長は加藤紘一氏」

伊藤 社会党のほうも、魚心あれば水心あり、ということですか。

松野 社会党は政権さえ取ればなんでもよかったですよ。六十年ぐらいの中で初めての政権だから。それは飛びつきますよ。伊藤 片山内閣以来ですか。

松野 片山内閣以来、もうそれは飛びつきますよ。片方は政権に飛びつき、片方は利権復活に飛びついた。

伊藤 村山総理は、自衛隊も合憲であると。

小池 安保も認めましたね。

松野 安保まで村山首相は認めた。結果、社民党に名前まで変わって、没落していった。あれは明らかに政権のために身を売った、心も売った代表的な政党でしょうね。国民はよく見ていますね。土井たか子も然りだ。衆議院議長になって、それが最後の墓場になったようなものではないか。本当に私は、社会党は節を折ったと思う。安保も認める、自衛隊も認める、その自衛隊はいい自衛隊だなんて言っているようでは、五十年間何を言っていたのか。さすがにカメレオンで色が変わった。

伊藤 その頃は「松野先生の」事務所はここ「パレロワイヤル永田町」だったんですか。

松野 もうここにありました。そのころ、見てみると、経世会がどうしても与党になりたい。局長が来ないと駄目なんだ。予算説

明に課長が来るんじゃないか。どうしたって、何でもいから政権復帰のために、村山を担いだんだ。村山を担ぐなんて考えられない。その前にちよつと羽田「孜」が「内閣を組織したのが」二ヶ月ありましたが。しかし自民党が村山を担ぐとは思わなかった。自民党はなりふり構わずだった。担ぐときは自衛隊を認めるという前提だろうが、それを認める村山にも驚いた。どちらにも驚きた。片一方は政権という欲に、片一方は利権という欲に、両方の欲の合体が村山内閣でしょうね。

佐道 いまのところ、羽田さんが二ヶ月で倒れますね。それで自民党が村山さんを担ぐときに――。

松野 そのときの「自民党」総裁は河野洋平ですね。

佐道 そのときに新進党側は海部「俊樹」さんを引き抜いてきて、海部さんを立てたわけですね。海部さんが出るという状況は予想されていなかったか。そういう動きはあったんですか。

松野 海部が出るときには、電話で相談がありました。どうしようか、という。そのとき、驚いたことに中曽根も勧めていた。中曽根は投票のときは海部に投票している。私も利権から脱皮しなければいかんから、替わった方がいいぞ、と勧めた。それで彼は新進党に行ったわけだ。いまは保守党になってしまったけれど。彼は小沢に誘われましたね。小沢に誘われて、どうしようか、という電話だった。小沢はいろいろあるけれど、いまの自民党の状況では駄目だろう。その方がいいだろう、と。

伊藤 松野さんは経世会のほうはあまりつき合いがないわけですね。

松野 私は田中のほうはないんです。橋本とは個々につき合いは深いですよ。慶応の後輩ですから。学生るときから私の家に来ていましたから。何回も来ています。それは橋本龍伍さんと私が非常に親しかったから。「龍太郎が」学生るとき、昼飯を食べるに何度も来ていました。橋本とは親しいけれど、橋本と親しくても経世

会とはまた別ですからね。小淵も個人的には親しいんです。しかし田中とか竹下とは私は合わないんだ。もちろん、田中とも竹下とも、会えば「やあ」「やあ」と言つて親しそうな顔をするけれど、腹の中ではどつちも、この野郎、危ないやつだ、と思つてゐる。だからみな親しいんだけど、方向が違う、ものの考えが違う。私は利権の代議士にはなりたくない。彼らは利権は当然だという感じだ。利権をやるために政権を取るんだという考え方だ。

伊藤 橋本さんもそうでしょう。

松野 橋本も、初めはそうじゃなかったけれど、あそこにおいてだぶ染まつたようですね。自然に。あそこにおると染まるんですよ。

伊藤 橋本さんは、なんとか族のボスだといわれているじゃないですか。

佐道 運輸族、厚生族ですね。

松野 あれは本当はそうじゃなかったんだけど、あそこにおるとそうなるでしょうね。田中派に入るときに、「なぜ田中のところに入ったんだ」と聞いた。彼が立候補したときに真っ先に金を持ってきたのが田中だったそう。その義理がどうしてもある。三百万か何かももらったんだ。そのことを言うんだ。「田中のところはよくない、やめろ」と言つたら、「だつて私はもらったから」という。最初の三百万の選挙応援の義理を感じたんだ。やっぱり純真なところがあつたんでしょね。そのうちだんだん、朱に交われれば赤くなるということだ。どうしてもそのグループにおるとそうなつてしまふ。

伊藤 そういう構造になつてゐるわけですからね。

松野 なつてしまふ。目の前にそういうものがあればね。ないよりいいでしょう。

武田 細川さんも最初は田中派ですか。

松野 細川は田中派でしたけれど、精神的に田中というものの歩

みが太閤秀吉みたいな歴史的人物に見えたんでしょね。あとでは幻滅のようでしたけれどね。初めは、二世、三世の多い中に、「田中が」素っ裸で裸一貫で出たというところに、彼は魅力を感じていましたね。彼のような公家さんだと、そういうものに魅力を感じるわけだ。あとでは幻滅です。いろいろ見るとね。最後は、「私は田中でも何でもいいんですがね」と言つていた。

伊藤 細川内閣では、政治改革と言つて小選挙区導入に行くわけですが、そのへんのところは何か先生は関与なさつていませんか。松野 小選挙区だけ。小選挙区については、これはやるべきだと、細川には特に進言しています。小選挙区をやらなければ、中選挙区じゃ駄目だよ。過半数をとつても第三党がおつて、その第三党がろくなことはない。小選挙区にすれば、第一党、第二党で政権の交代ができるから、小選挙区だけはしろ、これだけは私は特に進言した。週に二回ぐらい電話をしていましたね。いまの話も、堀を直す費用の一億何千万の話のときも、何度も電話をした。「おれが証人に出てやつてもいいよ、おれもそのときの一人だから。金はもらわなかつたけれど、そのことを知つてゐるから」と電話で話したんだ。「あのときの選挙に使つたと、おれが証人に出ていいよ」と言うぐらい私は肩入れしたんです。

伊藤 証人に出たらまずいんじゃないですか(笑い)。

松野 選挙違反になるんだ。

武田 その証言が出ちゃまずいですね(笑い)。

松野 ただ、そのときは時効になつてゐるんだ。知事になるときの金だから。知事を八年やったあとだから、時効になつてゐるんだ。

伊藤 総理だから道義的責任ということになる(笑い)。

松野 時効になつてゐる。そのことも電話で話したんだ。「おれが名前を全部言つてもいいよ、金額も言つてもいいよ」と言つたんだ。

伊藤 「金額は」見なかったからわからないでしょう。

松野 わからんが、計算できる。代議士の数が十人。十人だと五千万ぐらいでしょうね。県会議員が三十人、それに単価をかけて計算するとだいたい一億二千万ぐらいになるでしょう。

伊藤 単価ですか。

松野 だいたい私がおの場に立つても、それぐらいが常識なんだ。だから私は風呂敷を開けなくなつてわかつているんです。

伊藤 厚みでもわかりますね。

松野 厚みでわかる。私が仮に知事に出るにしてもそれぐらいでしょうね。やつぱり三億ぐらいの金がかかるでしょうね。半分が工作費という名前だ。買収費とは言わないで、工作費でしょうね。それで半分が選挙費用でしょうね。それは常識的にそれぐらいかかるものなんだ。

伊藤 選挙費用というのは、運動員に払ったり、ポスターをつくったりというお金ですか。

松野 そう、それが一億五千万かかるでしょうね。ポスターをつくったり、運動費を払ったり、日当を払ったり。選挙事務所だつて要る。選挙事務所も一日相当かかりますからね。

伊藤 それも一ヶ所じゃないでしょう。

松野 知事選挙だと三ヶ所ぐらい要るでしょう。だいたい一億五千万は法定費用でしょうね。あと工作費というのがあからね。工作費がそれだ。私は最後まで一人で沢田で頑張ったものだから。まさか私がいadakわけにはいかんね。スジから言っても。最後になつたら沢田が、私は参議院に出てもいいです、なんて言い出したからね。おれが一所懸命応援しているのに、と思つたけれど。

伊藤 そういうことを「口を濡らす」というんですか。

松野 口が濡れたんでしょうね。口が濡れるということは、一緒に食事をして、酒を飲むから、口が濡れる。酒を飲むという意味だ。酒を飲めば、お土産がついて帰る。酒を飲むから口が濡れた

な、あいつも口を濡らした、飲んだな、相手の酒を飲んだな、という意味です。

伊藤 それは熊本の話ですか。一般に政界で言うんですか。

松野 政界でも言うでしょうね。口が濡れるというのは、要するに一緒に酒を飲んだな、相手の酒を飲むことでしょうね。

■新進党のついで

伊藤 新進党についてどんなふうに使われていましたか。

松野 細川については、私はよく電話して、小選挙区はぜひやれと言つた。

伊藤 新進党は最初たぐさんの政党の、新生党を初めとしていくつかが合体した政党じゃないですか。

松野 そのとき新進党の党首はー。

佐道 羽田でしょう。

松野 羽田でしたか。日本新党と合体したでしょう。

佐道 最初羽田と小沢が自民党を抜けたときに新生党をつくつて、細川さんの日本新党とか、さきがけとか、民社党とか一緒になつたんですね。

小池 公明も入つたんじゃないですか。

佐道 それで新進党になつたんですね。

松野 そのときの党首は羽田ですか。

小池 社会党の一部も入りましたね。

伊藤 あとで追い出されるでしょう。

小池 社会党は割れるんですよ。山花「貞夫」の一派が新進党のほうに入って、社会党の左派を中心としたグループが残つたんじゃないですか。

武田 横路「孝弘」ですな。

松野 それで公明党は抜けて元の公明党に戻って、小沢が自由党をつくった。あのときの合同の分裂は、まことに簡単に合同して、簡単に分裂しましたからね。あれには思想はなかったでしょうね。あんなに簡単に合同して、あんなに簡単に割れるなんて考えられない。政権を取るためだけなんです。政権が移動したら全部バラバラになった。自民党が村山を担いで与党になってしまったものだから。

伊藤 社会党の右派は、新進党で政権の中に入ったわけですね。大臣になった。残された社会党は野党だった。

小池 参議院で同一会派をつくるかどうか、一つの問題でしたね。入れる入れない、という問題でしたね。

松野 あのとときに、衆議院の公明党は一緒に入ったけれど、参議院の公明党が入らなかったんですね。

小池 独自会派をつくったんですね。

松野 まことに奇妙なことをしていました。分裂が前提の合同だったんだ。政権獲得のためだけだったんだ。

佐道 組み合わせですね。

松野 政権というのは結局行政権を取ることなんだ。行政権というのは、役人の上に座りたいわけだ。だから官僚攻撃をしながら、一番欲しいのは官僚なんだ。

佐道 いまの民主党とか自由党も、新人候補を発掘していますが、一番最初は細川さんが日本新党をつくられたときに、既成の保守政治家はだいたい自民党が押さえていますから、志がある新人を発掘するというところで、新しい仕組みの政党を作ろうとされたわけですね。

松野 それは私は大賛成だ。それがいいよ、時代が変わったよと、それは私も勧めた。それが成功した。一名だったのが三十五名になったんだ。それもみんな、自転車に日本新党という旗を立てて歩いているだけです。細川の魅力は大したものだった。

伊藤 日本新党の出身で、その後活躍している人はいるのかな。

松野 樽床「伸二」という代議士がいますね。いま当選三回ぐらいで、民主党にいます。樽床は優秀ですよ。

小池 横浜市長の中田「宏」も日本新党ですね。

松野 やはり優秀なのがおるんだ。

佐道 松下政経塾から行ったんですね。

松野 松下政経塾が非常に多い。

佐道 そういふ具体的な細かなプラン、新人候補を発掘するためにはこうしようとかいったことで、細川さんのブレインになっている方はいらっしやるんですか。

松野 細川さんのブレインはいろいろあるけれど、そんなに緻密ではなかった。方向を決めて、公募してやるというだけで、そんな緻密な時間はありません。方向だけ示しておいてやったところが、政経塾でいまままで抑えられていたのがみんな出て来た。自民党に押さえられていて出られなかったやつが、みんな出て来た。だから枠を外したらワツと来た。それは計画したものではない。自然発生です。

伊藤 それはいい解釈ですね。

佐道 時の勢いもあったわけですね。

松野 自然発生が日本新党だ。計画したって駄目、人選したって駄目。だって細川は顔も知らない、名前も知らない。それが当選した。当選してはじめて名前と顔を知ったぐらいです。何かこう、沸き上がるようなものなんです。それがなければ駄目ですね。作り上げたものは全部失敗する。やはり大衆の勢いというのか、ムードというのか、風向きに合わなければ駄目だ。風でしょうね。細川の風だ。またこの人間は、風をつかむことが上手なんだ。見事なものだ。彼が転身するたびに風に乗っている。やはり公家さんの血筋というのがあるでしょうね。

伊藤 ただ細川内閣のやったことは小選挙区だけ。

松野 小選挙区と自民党の利権を断ち切ったことでしょうかね。

伊藤 でもすぐ「自民党は」復活しちゃったじゃないですか。

松野 それが短すぎたんだ。

佐道 もっと長く続けばー。一年なかつたですからね。

松野 きちんと刈らないうちに、次の芽が出ちゃった。二年あれば変わったな。その芽が復活したのが、いまの悪いところだと思う。私はいまの自民党の利権体質は特に悪いと思う。鈴木宗男のあの通りです。小説みたいだが、現実だ。口利きで金をとって、予算をつける。予算といっても国家予算ですからね。予算をつけて、その予算の中からピンハネするというのは、誰が見たっておかしいですよ。

伊藤 でも、もともと利権というのはそういうものの大がかりなものでしょう。それを細かくあちこちでやった。細かいけれど、しかし合わせると相当な額ですからね。

松野 北海道から沖縄までだからね(笑い)。

佐道 きめ細かい利権がいっぱいあった。

松野 いま北海道から沖縄までと言われてるんだから。日本列島は千五百キロありますからね。これは珍しい。

■現在の政治家評・党内事情

伊藤 先生、人の名前を出しますが、梶山さんは創政会をつくった一人ですね。

松野 梶山静六も創政会の中の一人でしょうね。

伊藤 おつき合いはありましたか。

松野 ありました。あまり深くはないが。茨城県。私はみんななど、話や調子を合わせるんです。だけどみんな垣根をつくるからね。その垣根の手間ではつき合いますよ。これはあまり利権的政治家

ではなかつた。ただ金は持っていなかつた。個人としてはある程度あつたかもしれない。茨城の日立製作所とかね。

伊藤 自分で山を持って、石を切り出して、ということでしょうか。

松野 そういうことを言っていましたね。あの人は県会議員上がりですね。

伊藤 どうですか、期待していましたか。

松野 私はあまり期待していません。そんなに頭のいい男ではなかつたですよ。陸士か海兵を出た。あのころの陸士・海兵はだいぶレベルが低かつたんですよ(笑い)。数を増やしたから。昔の陸士・海兵は厳選なんだ。あのころになると、数が倍、三倍ぐらい増えているから、レベルも低くなっている。だいたい兵隊を増やすからね。そういうインフレのときの陸士・海兵だから、そんなに頭のいい男じゃない。

伊藤 渡辺美智雄はどうですか。

松野 これは税理士上がりで、どちらかというと小知恵の多い男だつた。だからいろいろ小さいことでは政策に詳しい。天下国家に目を向ける議論はあまり聞かなかつた。小さい話が多かつた。税理士で、税金のことなんか詳しくあつたですね。消費税を何%にするとか、そういうことは詳しいけれど、日本の国をどうするか、日本の教育をどうするかという話は、あまり向いていなかった。

伊藤 あまり期待している政治家ではなかつたですか。

松野 要するに一職人としては立派だが、全部を総合するにはどうか。大蔵大臣には向いても総理大臣にはどうか、という感じがしましたね。

伊藤 山下元利さんはどうですか。

松野 山下元利のほうが人物は大物でしたね、大蔵省で。渡辺美智雄よりも山下元利のほうを、私は高くかつていた。ただ、若くして死にましたからね。これはもう少し伸びるかなと思つたけれど、寿命が短かつた。

伊藤 何か具体的に。

松野 具体的に言うとは、一緒に政調会にいまして、税のこととか予算の話をするときに、山下元利はわりに幅が広がった。小さいことはあまり言わなくて、日本の国民生活がこれではやれないとか、国民生活を中心にどうだとか。役人のわりにはいいな、という印象が残っている。国民生活を中心に予算を議論しましたね。私は、「彼は」大蔵省だから、係数の話ばかりするかと思つたら、そうではない。いまエンゲル係数がどうだとかね。国民生活を中心に山下元利が話をした。それで私は気に入って、この男はもう少しうまく行くかなと思つた。何かのときに見ていると、ほとんどの議員は一緒に論議をしていますからね。山下元利は立派な男でした。

伊藤 何か一緒に行動したりということはありませんでしたか。

松野 あれは池田のほうでしたから、一緒に政治行動はしないけれど、政策的な話はよくしましたね。何かわからん大蔵省の件々には、山下元利によく聞きましたよ。こういうことはどうなのか、と。

伊藤 先生は社会党とはどのぐらい接点がありましたか。

松野 社会党とは、榊崎弥之助が九州だった。それから予算委員会では岡田春夫、民社党では春日一幸、もう一人、海軍を出た（小池 佐々木更三ですか）佐々木更三、これがほとんど同級でした。これは個人的に、一緒に食事なんかもしたことがある。別に違和感はなかったですね。

佐道 いまお名前を出された岡田春夫さんは、例の六五年の三矢事件のときに、先生がその小委員長をされて、いい加減にしろと言ったとか（笑い）。

松野 いい加減にしろ、と。それは、ちょうどいまの事件「防衛庁のリスト作成問題」と同じようなもので、三矢研究というのは若い青年将校の勉強だ。それを禁止したら勉強ができなくなる。

三矢だろうが、四矢だろうが、五矢だろうが、常に仮想敵国をつくって勉強するのは当たり前じゃないか。それがたまたまソ連に向かっているということ、君は誇張しすぎる。君は勉強をさせないようだ。

昨日のもそれ以上ですよ。当然やっているんだ。もう一つは、自衛隊は思想調査という悪いけれど、武器を扱うから、人物調査をせざるを得ないんだ。この男はどんな男か、入って来たときから、親子兄弟、みな調べるに決まっているんだ。武器と実弾を渡すんですからね。だからその延長線で、部外者を調査するのは何ともなかったと思う。当たり前じゃなかったかと思う。露骨に言えば、信書の秘密まで、必要があれば調べなければいけない場合もあるんです。ふだんはないけれど、危険人物ということになればね。だから今度の問題も、自衛隊から見ればなんでもないことなんだ。隠すことでもない、日常やっていることだ。それが世間に出ると、プライバシーの調査じゃないかと言われる。自衛隊は全職員を調べざるを得ないでしょうね。入隊するときから。武器弾薬を渡して、それが共産主義者やテロ集団に走られたら、これは困る。三矢も然り、今度の問題も然り、それを一緒に論議することが本当は間違いじゃないかな。

佐道 三矢のときと違って、今度は長官みずからが悪かつたと言つて謝っていますね。

松野 あの中谷「元」というのはまあ、防衛庁の教授ぐらいのものでね（笑い）。

伊藤 いやいや、教授は務まらないと思えますよ（笑い）。

松野 私は最初から幅が狭いと思つていた。

佐道 今度の有事立法の法案が、通る、通らないは別にしても、関係者はだいたい処罰されるかもしれません。

松野 有事立法そのものが、あの人には無理だつたでしょうね。荷が重すぎる。それは舞の海に小結を背負わせるようなものだ。

いくら舞の海でも、そういう相撲は無理。だから有事立法は、中谷では無理だ。現職の防衛長官の答弁が精一杯だ。有事立法というのは、警察から消防組織から、露骨に言えば民まで統合しなければ駄目でしようね。民は総合組織は作れないから精神組織でいいけれど。

佐道 有事立法審議のための重要な役割を果たしているのが中谷防衛庁長官と福田官房長官なんです。福田さんもいまゴタゴタしてしまいましたね。

松野 福田が言ったこと「非核三原則の見直しが必要ともとれる発言」は、弁明するほどのことだと思うけれど、言った内容と時期が悪い。それから出ちゃったからね。それが誤報だと言っても、出ちゃったからね。言ったことが違うと言っても、タネをまいた。誤報であっても誤報に近い話をしたんだね。それは福田の負けだと思う。

佐道 ガードが甘かったということですか。

松野 甘かった。ちよつと口が滑った。しかもこの時期に油断した、たるんだ。核兵器の問題は、日本は核拡散防止の提案者ですから、その提案者が核の話をするときには用心しなけりゃ。またいま言うべき時期ではないのに、たまたまインドとパキスタンとか北朝鮮とか、後進国とは言わないけれど、そういう国が核を持っていて日本は能力も経済力もあるのに持たないという感情から言っただけでしょうね。何か福田も甘すぎる。何かの懇談の「ときの発言の」ようですね。

小池 オフレコだったんですね。

伊藤 ちよつと引っかけられたような感じがなきにしもあらずですね。

佐道 福田康夫さんに関して、先生は期待されていますか。

松野 福田康夫は、私は期待しています。福田赳夫のように手堅い政治家だ。彼は一つの候補者になるかもしれないですね。私は、

あれと安倍「晋三」と二人は、次の次の総理だと思う。福田か安倍か、どつちかがなるかな、という感じだ。人柄のいい、上品な、利権の薄い男だから、あの二人は私は好きですね。次の次は、あの二人かな、と思う。

佐道 福田さんと安倍晋三さんは、いま仲が悪いという話ですね。どうなんでしょうか。

松野 ちよつと合わないでしょうね。性格が違うと思う。安倍のほう幅が広い、安倍は民、福田は官という感じですね。法律論は福田で、政治論が安倍でしょうね。安倍には、「なるべくテレビに出るようにしろ、君は人相がいいから、出ればプラスになるぞ」と言っている。話している内容は別としてね。あれは理論は私から見るとへたくそだ。顔つき、人相がいいから、めっちゃくちゃ言っても彼は受けるでしょうね。福田のほうは整然とした言い方で、冷たい。安倍のほうは、支離滅裂でもあたたかい。だから認められる。

伊藤 情熱的なしやべり方ですね。

松野 あの二人は、平沼「赳夫」と麻生「太郎」という感じでしょうね。理論と数字は麻生でしょうね。人柄は平沼だ。総理なら麻生、幹事長なら平沼。総理なら福田、幹事長なら安倍ということだ。官と民という感じだ。

それから、もう一つあった。私は、河野洋平が「自民党」総裁のころ、しばらく親しかったんだ。幹事長が森だった。そのとき参議院選挙に負けたから、村山が辞めるといふ。それで、「河野さん、あなたがなつてください」といわれた。あのときは連立ですからね。そのとき河野は、別室にいた森に相談した。相談した理由は、そこにさきがけの武村「正義」がいたからだ。

村山が「河野さんあなたがやってください、私は参議院で負けたから」と言ったときに、武村に「賛成してくれるか」と言ったら、「いやあ」といって賛成しなかった。そこで、河野が政権を

離れたくないものだから、「それじゃあもう一回、村山さん、あなをやってくれ」といつて、また継続してしまった。

そのとき私が言ったんだ。「何故君は大事なときに政権を取らなかったんだ。そんな、君、だらしがない」といつて、それ以来私は河野と断絶した。取るべきときに取らない、打つべきときに打たないで三振する馬鹿があるか。それで私は、河野は駄目だと思つた。そのときのお付きの者が森なんだ。幹事長だ。二人で相談したんだ。隣で森は待つていたんだ。それで「河野は」部屋から出て行つて、こういう状況だから、ここでおれが頑張るとききが反対する。さきがけが反対すると三党連立がくずれる。そうするとまた野党に戻るかもしれないという怖さがあつた。それでまた部屋に戻つて、「村山さん、もう一回やつてくれ」といつた。とうとう村山が続けてやることになつた。

伊藤 村山さんは、本当に渡すつもりがあつたんですかね。

松野 あとは生ける屍だ。辞めなければいかんと思つて、あとの半年間は何もなかつたですからね。そのときに、取らなければいけなかつた。それで私は、君は大事なときに三振だ、ストライクを打たないで、といつた。それで私は河野はもう駄目だと思つた。

伊藤 もともと、そういう愚図なところがあるんじゃないですか。

松野 あるんだ。やつぱり人だね。

伊藤 だけど、新自由クラブをつくつたあたりは、意気揚々としていたわけでしょう。

松野 それがまた聞いてみるとちがう。新自由クラブをつくるときに私は「やめろ」といつて止めたんだ。「まだ、馬鹿でもちよんでも自民党というのは航空母艦だよ。君が乗つていこうとするのは、駆逐艦よりもっと小さい。水雷艇みたいなものだ。しばらくこの母艦におれば、君はいずれ艦長になれる素質があるんだから、なつたらどうだ」といつてさんざん止めて、私は説得したんだ。一緒に行つた西岡武夫、これも親しい。山口チンネン「敏夫」、

これも小ずるい奴だけれど、親しいんだ。懇々と三人に話した。それは憲法問題でしたね。彼は憲法調査会をしていた。憲法改正が自民党の中から出ると、彼は反対だ。憲法擁護論だ。彼はどちらかというところ、党内で左の方でしたからね。それで、そんな自民党にはおれないといつて、新自由クラブをつくつた。

それで後日談だが、それが分裂してしまつた。西岡とは親しいから、「なぜ君たちは河野洋平を党首にしてもつと頑張らなかつたのか」といつたら、「先生、あなたは河野を見間違えていますよ」「なぜだ」「私はたちはまいつた。河野というのは、党首であるけれど、責任は一つも取らない。自分だけ名前を売つて、一切私たちの面倒も見なければ、新自由クラブの党の運営費さえ、彼は出さない。私と山口チンネンで、少ない募金を頼んで歩いてやつていんですよ。河野は金を持つていられるけれど、一銭も出さない。持つていても出さない。だから新自由クラブの河野を守る必要はありませんよ」といつた。それでバラバラになつたんだ。それを私は思い出して、もうこれは駄目だと思つた。

私はまだそれでも。河野洋平は、加藤紘一と官房長官争いをした。宮沢内閣のときだ。宮沢内閣ができたときに、官房長官が加藤紘一。私は河野洋平にすべきだといつて、わざわざ宮澤に、「宮澤君、河野洋平がいいよ。加藤紘一よりも河野にしてくれ」とわざわざ推薦に、宮澤の自宅まで行つたことがある。そうしたところが宮澤が、「加藤を一回どうしてもさせてくれ。その次に河野だ」といつた。それで順番として河野になつたけれど、それが河野と加藤の争いなんだ。私は河野のほうだ。

その争いが、その次の総裁選挙だ。河野洋平が総裁で、第二期をやるうとしたときに、幹事長は加藤紘一だ。加藤紘一は今度は橋本龍太郎を立てて、河野を追い出した。やつぱりそのときの恨みがずっと続いているんだ。河野が総裁になつたのに、加藤は橋本龍太郎を推して、河野を総裁から引き下ろした。宮澤のときの

官房長官争いの溝を、いまだに引いている。それがいまだに及んでいる。それで河野派ができて、加藤紘一のほうと一緒にならなかったんだ。それから河野が倒れると、加藤紘一が威張った。威張っているうちに加藤は、森おろしの乱で失敗し、今度の問題で失敗した。河野洋平は健康の問題で、肝臓でやられた。

伊藤 息子からもらったから大丈夫でしょう。

松野 いろいろ見ていくと、人間の感情なんだね。次々に恨み、仇討ち、敵討ちが出てくるんだ。

佐道 人の恨みは怖いすからね。

松野 人の恨みは三代続く。恩義は一代で終わる。

小池 そういうふうに見ますと、宏池会（池田派）は非常に大きかったんですが、どんどん小さくなっていく過程のように見えるんですけれどね。

松野 宏池会は人徳よりも実力者が出てくるんだ。その争いのスタートは、前尾繁三郎と大平「正芳」の争いだ。前尾が会長で、前尾の会長の任期が来たから、今度も当然前尾会長を満場一致で選ぼうと思っていた。前尾だと思ったら、突然手を挙げて、「それは駄目だ、選挙にしよう」といって、選挙を言い出したのが大平派だ。前尾が目の前におるのに、その目の前で選挙だという。選挙をすれば大平が多い。前尾は赤恥をかく。前もって言うっておけばよかったのに、その日になってからやる。そういう争いが、宏池会にはスタートからある。

伊藤 いつもそうですよね。前尾さんと大平さん。大平さんと宮澤さんもー。

小池 「関係が」悪いですね。それから、鈴木善幸と伊東正義も悪かったですね。田中六助と宮澤喜一の争いもありましたし。

松野 なにかあそこはもめるんですね。

伊藤 だけど、もめても、だんだん小さくなるというのはね。

小池 全体を守っていくという雰囲気は普通の派閥にはあるよう

な感じなんですけれど、あそこは細分化されていくという感じですね。

松野 争うと溝ができる。その溝をふさがないからね。

小池 溝をふさぐ知恵が、あそこにはないということですか。

松野 恨みが残って、恩義を忘れるんだ。その中には恩義もありますよ。恩は一日、恨みは三代だ。

伊藤 いま派閥というのは、一応はつきりしているんでしょうね。

佐道 所属はつきりしていますね。

松野 派閥というのはおかしいもので、私なんかは派閥はもういやなんだ。金をもらうのがいやだから。派閥では親分が金をくれるんだ。金をもらうのが私はいやなんだ。だから派閥はだいたい嫌いだ。派閥なんてろくなものじゃない。

そういうと、「馬鹿なことを言うな、池の鯉を見ろ、必ず群をなす。明治神宮の鳩を見ろ、みんな群をなす。群をなすのは本能だ、なぜ派閥が悪い」というのが派閥擁護派。それに対しては、「なんだおまえたちは動物以下か」といってけなすのが反対派だ。そんな議論が年中あった。よし、派閥を解消しようじゃないかと、派閥解消・党風刷新という看板掲げたのが福田越夫だ。福田には派閥がなかったんだ。福田の入る派閥がない。自分の派閥が持てない。だから派閥解消・党風刷新というグループを作って、倉石忠雄、三池信、坊秀男、私もシンパでしたが、数人で赤プリの小さな部屋で声明文をつくって、池田勇人のところに持っていった。池田が勢いのいいときだ。仙石原まで持っていったけれど門前払いだ、会わないんだ。満座の中で門前払い。門前払いがまたニュースに出た。そんな恥をかきながらやっていったんだ。

派閥というのは、金をもらうこと、金を集めること。また派閥に金を集めると幹部になるんだ。取り次ぐと。ルートをつくると幹部になる。

伊藤 でもその党風刷新連盟は、派閥解消を言って派閥になった。

松野 派閥になっちゃった。そのうち、派閥に金をくれる人がでてきた。福田越夫に。それで派閥になっちゃった。

伊藤 まったく群れないで無派閥というのは、奥野誠亮さんみたいな人ですね。奥野さんの話だと、「いや、おれは無派閥で来たけれど、新人が来れば、君らは派閥に入った方がいいよ、あれは効用がある、と言うんだ」と言っていましたけれどね。

松野 奥野誠亮みたいになると、仙人みたいなものだ。人が近寄らないんだ。仲間がいない。あれは高潔ですね。知識も高いが、あれだけ高潔だと人が寄らない。

佐道 それで無派閥。

松野 あれは入るところがない。

佐道 それと対極的なのが田中真紀子さんですか。

松野 それと同時に、一番通俗的で一番変わっているのが田中真紀子だ。これもいない。入れるところもない、つき合うやつもない。危なくて。

伊藤 自分で派閥をつくる以外にない。

小池 あのころ無所属というところ、例えば灘尾弘吉とか、椎名「悦三郎」とか、要するに三賢人「もう一人は前尾」と言われたような人たちがいますね。彼らは無所属だったわけですね。

松野 灘尾とか椎名は、むかしは派閥にいたんです。

伊藤 椎名派というのがあったんですね。

松野 派閥にいて、一人になっただけで、派閥経験があるんです。奥野なんて派閥経験がないからね。経験のないやつとはとてもつきあえない。

小池 椎名や灘尾とはつき合えたわけですね。

松野 それは派閥にいたからだ。

佐道 三木派が、そのあと河本派になりますね。いまは高村「正彦」さんが中心ですが、あそこだけはいまだに旧河本派と言われるんです。なんで、たとえば高村派と呼ばれないんでしょうか。

松野 まだ高村になつていないんじゃないでしょうか。
佐道 もう河本「敏夫」さんはいらつしやらないのに、なぜでしょう。

松野 それは高村が、自分の派閥を賄わないから。河本は賄ったんだ。

伊藤 そうですか。じゃあ誰が賄っているんですか。

松野 誰も賄っていないで、みなで出しているんだ。

伊藤 じゃあ仲良しクラブなんだ。

小池 高村は山口市内の弁護士ですからね。

松野 高村派というには、自分で賄わなければね。せめて事務所と電話料ぐらいは払わないと。

伊藤 それも払わないということですか。

松野 それを賄っていないから、旧河本派なんだ。

佐道 大臣ポストの割り振りなどの意味で派閥が一応必要だから、集団はつくっているけれど、高村さんが賄っているわけではないから、昔の名前で出ているんですね。

松野 そうだ。賄ってちゃんとすれば、届け出をするでしょうね。

佐道 どこに届け出をするんですか（笑い）。

松野 みんなが了承して、届け出をするでしょうね。今日から高村派というよ、ということ、みんな承認するでしょうね。いまはみんなで会費制でやっているんでしょう。あそこには森山「真弓」もいる。あの夫人もなかなかだ。外から見れば高村派だが、中を見れば、案外森山が威張っているかもしれない。それから党歴から見れば、谷川「和穂」なんていうのもいるでしょう。

だからどれになるか一致していないんですよ。

佐道 自民党政治が混迷すると、困ったときの三木派頼り、ということがあるじゃないですか。田中内閣が総辞職したときに三木さんが出て、竹下、宇野ときて、また困ったと思ったら海部さ

んが出て来た。ワンポイントリリーフ的に、例えば麻生さんとかではちよつと若いという話で、高村さんがという可能性はないのかなと思つたんですか。

伊藤 三匹目の泥鰌か(笑)。

佐道 そのために存在価値があるのかな、と思つて。

松野 小泉は、三木の運命と似ていると言つた。少数派だから、さかんに言っているわけだ。三木はとにかく三役を洗脳した。灘尾「総務会長」と中曾根「幹事長」と私「政調会長」を毎日洗脳した。うるさいと思うぐらい、毎日、毎日公邸に来てくれという。公邸に行くと、二時間民主政治の話をする。もういいよ、もう、一日ぐらい休ませてくれよと思うぐらいだ。中曾根は意見が違う、私も違う、灘尾も違う。そのうちに、「しようがない、今度だけは三木のいうことを聞いてやろうか。お互い、政策と思想は違つても、裏切ることはいしたくないからな。明智光秀にはなりたくない」。

それで仕方なしに、三木のいう政策を、政治資金規正法を聞いた。党内は全部反対だ。反対でも、総務会長、政調会長、幹事長が腹を決めていけば、会議は三時間、四時間、六時間やり、また翌日もやる。三日もやれば、だんだん議員たちも諦めてくる。出て来なくなつたときに、はいこれで満場一致ということで決めたわけだ。さあそれだつて本会議になると、なかなか出て来ない。出て来ないやつは電話で呼び集めて、とにかく数を集めて通した。その数が賛否同数になつた。それは一所懸命やつた。

いまの小泉はそれをやつていないんだ。自分一人でやるから苦労しているんだ。三役を毎日毎日説得する、それは三木のような老獪なやつだからできる。小泉は純心だからできない。三木は老獪なんだ。もうみんなの膝を叩いて、撫でて、毎日、もういいというまでやるんだから。毎日七時から九時まで連日だ。それは民主政治の話ばかりだ。それはまた「三木は」戦前議員だからよく

知つている。中曾根なんかも途中で眠りながら、「明日は休ませてくれ」という。休ませてくれというぐらい毎日呼ぶんだ。それが仕事なんだ。その三木の努力は大したものだ。

伊藤 小泉さんもそれをやらなければ駄目なんだ。

松野 小泉はそれができないんだ。「反対でもやるぞ」といつて書生っぽいから、彼に教えても無理なことだ。三役が全然ついていないんだ。彼についているのは国民だけだ。その国民も減つてきたからね。

伊藤 福田さんはどうですか。

松野 福田「越夫」というのは理論が非常に整然としている。彼は一から百まできつちり合わせた意見を持つてくる。だから、なかなかここが気に入らなくても、全部を合わせると福田に勝てないんだ。ここここは勝てるんだけど、全部やると福田に勝てないんだ。福田と理論闘争をしても勝てないんだ。勝つ場所はあるから、局部戦では勝つても、総合戦では負けてしまう。それが大蔵省の役人の知能だな。大蔵省はそういう役所だ。だから個々に、これはおかしいところはいくらでもあるんだ。おかしいといつても、できあがつた設計だから、玄関から台所まで全部ができている。居間だけを動かさない。そこで負けてしまふ。それが大蔵省の緻密な主計官のやり方だ。福田は名主計官だつたから、そういうところは彼の政策はどこへ出しても間違いはない。

伊藤 小泉さんとは合うんですか。

松野 小泉は非常に合う。小泉は福田の教え子みたいなものだ。秘書もしていたしね。だから彼の頭は大蔵省的なんだ。予算をまづ切り詰めること。

佐道 いまの先生のお話は福田越夫さんのほうですね、康夫さんじゃないですね。

松野 おやじのほうだ。

伊藤 康夫はどうか。

松野 康夫はその真似をしているだけでしょね。彼は大蔵省の経験はないんだ。秘書の経験だから、福田赳夫の外側を見ているだけでしょ。かえって小泉のほうが本筋を見ているだろうな。勉強している。素人だけに、勉強したからね。彼「小泉」は真っ白なところから福田を勉強したから覚えが早い。福田康夫はある程度知っているから、覚えが悪かったと思う。知っていたら覚えがない。小泉の政策はみんな節約ですよ。まず国債の節約、それから財投の節約。節約、節約をやるから、いまのデフレ対策にはならんでしょね（笑い）。彼に言うなら、節約をしてその金をデフレ対策に使うんだという言い方をするでしょね。無駄があるんだから、無駄をまず省いて、その余裕の金で有効なところに使おうんだというのが彼のいまの理論でしょね。

佐道 先ほど三木さんは三役を洗脳されたという話でしたけれど、いまは小泉さんと「麻生太郎」政調会長の言っていることは正反対ですね。これほど内閣に反対のことをおっしゃる政調会長がいらつしゃるといふことはかつてなかったと思うんですが、それは全然コミュニケーションがとれていないということですか。

松野 だから私が言ったように、異見はあってもいい。麻生は裏切りさえしなければいい。意見は違ってもいい。ただし、何かやるときに妨害しないようにしてくれればいい。私たちは意見は違っても、それを進めるときには我慢して、三木のいうことを聞いたんだ。だから麻生も我慢して聞け、というんだ。意見は違ってもいい。小泉のおるあいだは、小泉の意見を聞け。もしあれが本気でやれば、幹事長には麻生が一番いいと思っっている。ただし意見は違ってもいいが、裏切ることだけはするな。小泉のおるあいだは、必ず小泉を助けて、目をつぶって協力しなければならぬ。その度量がなければ駄目だ。それがあれば麻生が一番いいと思う。いままで反対であっただけに、なおいと思う。反対のものが賛

成してくれれば、反対派がついてくると思うけれどね。逆に言うと、麻生は小泉と政策が違っているから、違ったやつが賛成といってくれれば、反対派も動く。私が一番使いいのは、反対派の麻生だと思う。山崎はー。

佐道 山崎さんは幹事長としてまったく機能していないということですか。

松野 機能していませんよ。

伊藤 逆機能しているでしょう。

松野 あれは機能していない。あんなことは口で言えない。

佐道 山崎さんが幹事長のままで、もし選挙に入ったらどうなるんですか。

松野 もう駄目でしょうね。おそらく婦人票は逃げていくでしょうね。ホモに変態じゃなきゃ入れないだろうな。ノーマルな婦人は入れませんよ。

佐道 福岡の地元に戻って謝ったそうですが、そんなことでは済まないですね。

松野 奥さんにも謝ったんでしょうね。奥さんを外国に連れて行け、と言った。外国には四百回行ったというんだから。十年間に四百回というと、一年に四十回ですよ。月に三回以上行ったということだ。それは年中、外国に行ってたんだ。外国に行くんじやなくて、外泊なんだ。外泊に行っていたんだ。しかもその彼女が領収書を全部持っていたということにおいては驚くべきことだ。

佐道 外食はしない、お弁当を持っていくんだという記事が出ています。

武田 外国にお弁当を持っていく（笑い）。

松野 まあ下品な話で、ラブレターでも出てくるならもう少しユーモアがあるけれど、領収書ばかり出て来ててもね（笑い）。

伊藤 これはもう小泉内閣、駄目だな。

松野 小泉の一番のウィークポイントは、党がまとまらないことだ。

伊藤 党はまとまらないでしょう。

松野 そのまとめる山崎が駄目だ。私が気の毒だと思うのは山崎問題です。YKKが全部駄目なんだ。加藤が駄目でしょう。YKKというものが、いまになって足を引つ張っている。ただこのあいだテレビで言ったけれど、彼はなぜか運が強い。強運ということが彼の唯一の救いで、政策マンだとも私は思わない。運だけでしよう。

伊藤 政界は一寸先は闇というから、松野先生でもこれはどうなることだろう、ということでしょう。

松野 私が思わぬことがフツと湧くかもしれない。悪いこともあるかもしれないですよ。悪いことがあっても、私はいいと思う。最後の解散の名目がつけばね。悪いことがあれば、なおのこと解散の名目がつく、政界再編、巻き直した。

伊藤 最近、石原新党なんていうことが言われていますが、あれはどういうふうにお考えですか。

松野 茶番でしょうね。石原「慎太郎」というのは、そんな男じゃないですよ。それは淡水と海水みたいなものなんです、地方自治と中央政界は。淡水から海水に行つて大きくなるものもあれば、海水から淡水に入つて泳ぐのもいるけれど、彼は淡水と海水を往復したんだから、鮭みたいなものだ。鯨にはなれないんだ。もし彼がずつと海水の中いたら「鯨に」なったかもしれない。それが駄目なんだ。そういうところじつとしておれない人なんだ。彼は常に飛び上がっていなければいけない人だ。飛んでなければいけない人なんだ。止まり木に止まっていれば、あの鳥も大きくなったでしょうが、おれない人なんだ。彼がつくった右翼的な（小池 青嵐会）もだんだん減つて、最後には三人ぐらいしかいなくなつた。その中に中尾栄一なんていたけれどね、それも駄

目だつた。そこで彼は中央政界を見限つて地方政界に行つた。

辞めるとき、「とてもいまの中央政界はだらしなくて、私はおれない。こんな政界なら辞めます」といって、辞めるときに私のところに挨拶に来ました。私は辞めることが英断だ、といって辞めることに意義を見出し出していた。しばらくしたら東京都知事ですから、そういう人でしようね。落ち着いて卵を抱えて大きくするという気持ちがない人だな。常に何か羽ばたいていなければいけない人だ。

伊藤 でもあれを支持している人もかなりいることはいるんですね。

松野 中央に、ですか。あまりいないでしょうね。

小池 亀井「静香」とか野中の名前が出て来ますけれどね。

伊藤 亀井、野中がどうしてつながるんだらう。

松野 本気じゃないでしょうね。彼は新党をつくるといつても駄目でしょう。彼「石原」の一番の希望は、小沢と鳩山「由紀夫」の上に乗りたいんでしようね。民主党と自由党の上に乗りたいんでしよう。それで小沢と対立したいんでしようね。

小池 でも姻戚関係があるじゃないですか。

松野 姻戚関係があつても、自民党では伸びないことを知っているから。それが彼の希望だが、鳩山は推しませんし、小沢も推しませんからね。結局、それが彼の希望の構図でしょうね。

伊藤 いまのどの政党をとつてみても、未来像が描けるところがないじゃないですか。だからドカンとぶつ壊す以外に方法がないわけで、小泉さんは「自民党を壊す」と言つて登場してきたわけだから、最後にそれをやらないと完結しないんじゃないですか。

佐道 自民党よりも民主党のほうが平均年齢がかなり若いんですね。もちろん民主党も分かれていますから違いますが、特に若い人を中心に、より政策の勉強をしなければいけないということ。新しい動きをしている人が結構いらつしゃいますね。その意味で

民主党の将来に期待をかけたかと思っている人もいるけれど、鳩山さんが今ひとつ人気が出ないということで、例えば石原さんなんかを担げば支持層が広がるだろうということを狙っている人もいるんじゃないかと思うんですが。

松野 おります。このあいだ、そんなグループが来たから、「やめろ」と私は言った。「君たちは石原を知らないから、やめろ。鳩山が食い足りなくても、鳩山を育てていけよ。『三国志』でも

劉備玄德は勇将でも知将でもなかったよ。それでも関羽、張飛、諸葛孔明がいて「三国の一つの将に」なったんだ。指導者は有能なばかりが指導者ではない、据わりのいい者もいんだ。それを君たちは考えろ。もし勇将・小沢みたいなのがいたら、君たちについていけないぞ。だから小沢は大きくならないんだ。そんなことは鳩山に求めるな。鳩山はあれでいいんだ。その代わり、君たちが諸葛孔明なり関羽になればいいじゃないか。それが政党なんだ」というと、しばらく黙っていましたかね。「石原を連れてきたら、君たち、あとでどうする。困るぞ。一人だけスターができて、君たちは町を歩いただの平凡な者になる。そのうえに銀行税なんて言われたらどうする、カジノをやるなんて言われたらどうする。文教委員会のおばさんたちは大反対するぞ。一つひとつ見てみる、都知事だからいいけれど、あれが総理大臣でやられてごらん。カジノはやる、銀行税をやると言われたらどうする。婦人の票なんてなくなっちゃうよ、いい加減にしろ」と言うのと、黙っていましたね。カジノなんて言い始めたらどうする。婦人会や教育委員会は、いつべんに票がなくなる。私はだいたい鳩山で行けると思っていますよ。

伊藤 鳩山は据わりがいいですか。

松野 据わりがいい。

伊藤 小泉さんが総理になる前、そんなに据わりがいいとは思わなかった。

松野 元総理が悪いんですよ。それでいまは解散すると思うんだ。政界再編の声が出てくると思うんだ。それが解散の最大の問題です。いまのままではまず連立与党が崩れる。自民党がいま二四〇台だ。二四〇以上はとれないと思う。まあ二二〇でしょうね。

伊藤 そんなに取れるかどうかともわからないですね。

松野 そうすると政界再編になる。第一党は自民党ですよ。

伊藤 そうなりますかね。

松野 第一党は自民党だけれど、過半数は難しい。民主党が一三〇から一六〇とか、三〇ぐらい増えるでしょうね。そうすると今度は自由・民主の連立問題が出てくるかもしれない。政界再編になることは間違いない。

伊藤 もっと大きくガラガラツとならないですかね。

松野 なるかもしれない。それは票の出方次第。公明党がうんと減ったりすれば、それはなります。公明は増えないと思う。公明は小沢といい勝負でしょうね。小沢のほうが伸びると思う。

伊藤 小沢人気というのはどうしてでしょうね。

松野 どうしてか、あるんですね。

小池 選挙に強いですね。

松野 不思議に、あなたの方の周辺に小沢人気があるんだね。熊本でも、熊本県全部で二万か三万取るんです。候補者はいないんですよ。比例に入ってくる。九州一人で、西岡が当選したんだから、一人分は上がる。頼久のところの票だつて、二万票ぐらい比例の票があるんですよ。小沢人気というのは、案外公明党と似てくるんじゃないか。いま自由党が二八ぐらい、公明が三七、八でしょう。今度は同じぐらいになるんじゃないか。小沢人気というのはあるんですね。よくわかりやすいことを言いますからね。

伊藤 最近聞くと、わかりにくいような気がするな。

松野 小沢と鳩山と足した数と、自民党の数が似てくるかもしれない。それが二つの勢力になるかもしれない。自民党の勢力と

小沢・鳩山の連合軍の勢力が出てくると思う。

伊藤 しかし民主党の中にも横路さんのようなグループがありますからね。

松野 あっても、大した数ではない。一三〇の中の二七、八人でしよう。かといって、出るわけにも行かない。出れば社民党しかない。社民党は日暮れの政党だから、あそこに飛び込むのはいまいせんよ。あそこは土井たか子の個人プレイだからね。

伊藤 辻元「清美」というスターがいたんだからね。

松野 辻元もいなくなったしね。

伊藤 福島瑞穂もいるじゃないですか。

小池 でも参議院ですからね。

佐道 横路さんのグループ、左派は選挙をするたびに少なくなっていますね。

松野 また減ってくる。私は謀反はないと思う。意見は言っても、立候補する力はありませんね。

佐道 民主党、自由党でいいところに行くとなると、政権にいたいから公明党がすり寄ってくるということもあるんじゃないですか。

松野 公明はみつともない。

佐道 でも政権のためならなんでもする。

松野 カメレオンみたいな、社会党の村山みたいになっていきますからね。いまの公明の神崎「武法」。私は神崎を見ていると、昔の村山を思い出す。なんでもかんでも政権にいたい。私は公明は減ると思う。創価学会自体の中でもいやになるでしょうね。あんなに保守化してしまつたら。あれは保守化ですよ。

伊藤 やはり利権でしょうからね。細かい利権でしょうけれど。

佐道 前は公明党というのは創価学会政治部だつたことだったんですが。

伊藤 いまもそうでしょう。

佐道 基本的にはそうなんですが、政党としての独自の動きがあるということですね。

松野 私は創価学会自身が金中心になつてきたと思う。宗教団体が献金宗教になつてきた。やはり利権というか、利益を求め。地域振興券なんていうのは、おそらく創価学会の店だけが繁盛したでしょうね。あれは創価学会の店から買う金でしょう。私はそう思う。学会員が学会の店に落とす金を、地域振興券で九千億も小淵から取つたんだ。あれも、自民党と違う意味の、形を変えた利権だ。政策利権と言いたい。それで買収されちゃったんだ。九千億ですよ。あれをみんなに配つたんだから。それで商品券は創価学会の店で買う。

伊藤 だいたい伺うべきことはだいたい伺つたような気がしますが。あとのことですが、これを少し整理して、どこから本にして出すというのが一番いいと思うんですが、さつきちよつとお話ししましたように、どこと交渉するかな、ということを考えてくださいませんか。僕のほうからもやりますが。

松野 ちよつと考えます。

伊藤 それからあと、手直しなどしなければならぬし、重複とか、前後関係の整理とかもあります。整理していると、このへんが抜けているとか、そういう問題も当然出て来ますので、また補充の質問をさせていただくということもあり得ます。

松野 私も勉強してみます。

伊藤 ちよつといろいろな思い出してください。それからもう一つは、この前申しました、お父さんと先生ご自身の資料ですね。それをぜひお考えください。

松野 私の父の資料はたいへんだな。

伊藤 たいへんでも、なんとかしてください。

松野 なんとかしなければいけませんけれど、どこを探すかな。

伊藤 探すところがそんなにいっぱいあるんですか。

松野 あるんですよ。

有馬 それは伺いますから。

小池 取りに行くとか、そういうことでしたら、いつでもお手伝いいたします。整理ということでしたら、われわれもいくらでもいたします。

伊藤 大丈夫です。信頼してください。危ないものがあっても、ちゃんと処理しますから。

松野 危なくても、あればいいんですがね。

伊藤 でも何でもかんでも捨てちゃうということはないですからね。

小池 基本的には残しますよ。

松野 おやじもわりに筆無精でしたね。年中帳面に書くものは覚えなないんだ。おやじは覚えている。書くとなぜか覚えなないんだ。「書く」と安心するからおまえたちは忘れる。書かないでいるといつまでも覚えている。だからおれは書かないんだ。書かないと電話番号まで覚えている。書くともう駄目なんだ。おまえたちは書く」と安心して忘れる。書かないといつまでも覚えている」、「そう言っておやじは書かなかったですよ。だから書類がないんですよ」(笑い)。

武田 来た手紙がありますね。

小池 吉田さんみたいに、手紙をとにかく出しまくるといいう方もいらつしやるわけですから。

松野 いま「郵政関連法案で」問題になっている「信書」というものには、規定がないそうだ。広辞苑でも字引でも。ところが私はちよつと思つたんだ。「信書」というのは「親書」ではないか。それは吉田さんは、自分で届けた。それは「信書」ではなくて「親書」なんだ。

伊藤 みずから開けてくださいということですね。

松野 私は議論の中で、本当の「信書」というのはそのことで、

信書の秘密はそのことで、封筒は信書じゃないと思うんだ。本当に届けるものだけが信書で、いまで言えば親展書留だけが信書なんだ。普通の手紙は信書には入らないと思います。

伊藤 先生、この前吉田さんの手紙が何通かあるとおっしゃっていましたが、それだけでも見せてくださいよ。

松野 吉田さんの手紙は、あるところはわかっているんです。「吉田茂から松野鶴平氏宛の手紙を持つてくる」。一通はここにあるんですけどね。あと二通は別のところにあるんです。それは人にあげたから、表装してあるんだ。だからこれを含めて三通あった。そのうち二通を二人にあげた。それは会社に飾つてあるんです。これは本物です。

伊藤 いや、見たらわかります。間違いない。鳩山「一郎」のことをいま書いていて、とにかく松野鶴平はいっぱい出てくるわけです。だからおそらく鳩山さんからの手紙もあると思うんですね。松野 あるでしょうね。

伊藤 鳩山さんも比較的書いています。林譲治宛に二十通くらい、もつとありますからね。だから探してくださいよ。それから略年譜をつくりたいので、それはちよつとこちらで努力しますけれど。

武田 少しわからないところがどうしてもあるんですね。

伊藤 先生、履歴はありませんか。詳しいものは。

松野 詳しいのはない。

武田 例えば日立製作所に入った年とか、不明になっているんですね。

伊藤 あと、お書きになったもののリストもつくりまします。

松野 「吉田茂からの書簡の」あとの二通は、熊本にあるんです。

伊藤 しかし三通しかないということはないと思うんですけれどね。ちよつと、あちこち探してください。

松野 おやじの家に私の甥がおるものだからね。甥のほうは、長

男の息子ですから。今日にでもそつちに聞いてみましょう。どこか探しておけと。

伊藤 鳩山とか吉田とか、いろいろな手紙とか、紙くずみたいな書類とか、そういうものはないか、ということですね。なんだったら宅急便で送ってもらって、僕のほうで細かいリストをつくりますから、これはまずいとか、おっしゃっていただければ。

松野 もうまずいのではない。もう亡くなった人ばかりだからね。生きている人なら別だけれど、もう亡くなった人に悪いも何もないですよ。歴史だから。

伊藤 歴史は、ちゃんと資料が残らないと駄目なんです。

松野 そうだ。あなた方は正確だからね。

伊藤 先生ご自身もそうなんです。吉田さんからご自分が手紙をもらったことはありませんか。

松野 私は手紙はない。

伊藤 鳩山さんからはどうですか。

松野 鳩山さんはあります。

武田 佐藤「栄作」はどうですか。

松野 佐藤もあります。そのときは何かちよつとしたことだったな。

伊藤 そういふのはどうなさいました。捨てたりはしないでしょう。

松野 捨てたかもしれんな。いや、そんなには保存しませんよ。またいつでももらえるところのものだからね。

武田 三木さんからの手紙はどうですか。

伊藤 三木さんは毎日！。

松野 膝を叩いて説教させるからね。あれは説明してもわからない。

伊藤 それでは一人の写真も撮ってください。それから、「オーラルヒストリー」を受けたあとの「質問をさせてもらいます。

松野頼三関連文献目録

題名(編著者)発行年 出版社

※但し、主要なものに限った

執筆文献

著書

『総合テレビ・第一ラジオ 政治座談会 選挙区制改正とわが党の態度』

(松野頼三、堀昌男、山下栄一、渋谷邦彦、唐島基智三ほか)

昭和42年9月17日NHK報道局政経番組部

『議員生活25年―明日を目指して―』

(松野頼三著)昭和47年6月中央公論事業出版

『第七十五回国会 首相施政方針演説に対する代表質問』

(松野頼三著)昭和50年

『今年の日本経済の見通し』

(松野頼三著)昭和51年内外情勢調査会

『保守本流の思想と行動 松野頼三覚え書 戦後政治研究会聞き書き』

昭和60年11年朝日出版社

『細川・小沢政権陰陽のバランスが崩れるとき 権力のけもの道を知りつくした男・松野頼三』

(松野頼三著)平成6年4月日本テレビ放送網

新聞記事

『閣僚さつくばらん 協業で立体農業を―米が高いとは思わない』

昭和41年8月7日朝日新聞社

『政権は3人ではとれない(辛口ひとこと)』

(産経新聞記事)朝刊6面昭和61年11月23日産経新聞社

『元防衛庁長官・松野頼三さん―ときには権力の懐に入れ(私の九州論)』

(西日本新聞記事)朝刊2面平成6年5月30日西日本新聞社

『私なりの戦後50年』

(政治部外山衆司インタビュー)産経新聞記事
平成7年7月16日、7月28日産経新聞社

『FX疑惑で証人喚問・松野頼三氏に聞く―潔白、強く表現できる「静止面」つまらん(証人喚問「動画」へ前進―TV中継、衆院で見直し論議、民間人は撮影制限も)』

(朝日新聞記事)朝刊33面平成9年5月22日朝日新聞社

『保・保連合保守合同構築すべき、憲法改正も視野に入れて―期待持てる若手多い』

(読売新聞記事)朝刊21面平成9年5月24日読売新聞社

『調和のとれた多士済々―御意見番松野頼三氏が斬る―(慶應義塾「1」)』

(産経新聞記事)夕刊7面平成10年1月5日産経新聞社

『混迷の政局―政治家に志ない、小沢君は勘違い(争点論急)』

(田村元、松野頼三)毎日新聞記事)朝刊4、5面
平成10年1月26日毎日新聞社

『佐藤政権2797日 楠田実著―大道を歩んだ大政治家の軌跡(私の一冊)』

(産経新聞記事)朝刊14面平成10年3月30日産経新聞社

『あえて暴論 政治編「2」―出でよ「欲のない政治家」』

(産経新聞記事)朝刊3面平成11年1月4日産経新聞社

雑誌記事

『決算期を迎えた革新自治体―地域住民のための行政とは何か(地方選挙特別企画)』

(松野頼三、俵孝太郎、粕谷茂樹)『月刊自由民主』231昭和50年3月自由民主党

『政綱および政策に関する報国(第31回党大会―不況克服、総選挙勝利の決意も新たに)』

(松野頼三著)『月刊自由民主』24昭和51年1月自由民主党

『もう一度の誕生日―私の保守再生論』

(松野頼三著)『中央公論』昭和52年5月号)昭和52年5月中央公論社)私の保守

再生論(松籟会事務所発行)としてパンフレット化。

「松野頼三元防衛庁長官が今語る政治の内幕」グラマン、行革そしてライバル角栄…(沈黙を破った政界硬業師！)(インタビュー)」

(「宝石」9(11)昭和56年11月光文社)

「松野頼三衆院議員が爆弾発言」初めて明かす角栄逮捕秘話から善幸、中曽根論まで(インタビュー)」

(「週刊現代」24(30)昭和57年7月24日講談社)

「策士・松野頼三怪気炎」秋の政局大乱は私が仕掛ける(インタビュー)」

(松野頼三、三宅久之)(「週刊ポスト」15(33)昭和58年8月26日小学館)

「自民党政治が危ない」中曽根君釣りでもしたまえ！(野人派代議士大放談会)」

(松野頼三、長谷川峻、鯨岡兵輔、山口敏夫、桜井新、太田誠)(「朝日ジャーナル」29(19)昭和62年5月1日朝日新聞社)

「ポスト中曽根わが腹中にあり」

(松野頼三著)(「中央公論」102(9)昭和63年7月中央公論社)

「総理大臣」上「長期政権の3人(証言・戦後昭和史)」

(松野頼三)(「THESIS」6(1)平成元年1月読売新聞社)

「総理大臣」下「長期政権の3人(証言・戦後昭和史)」

(松野頼三)(「THESIS」6(2)平成元年2月読売新聞社)

「自民党は今や餓死寸前だ(緊急対談 細川隆一郎、松野頼三)」

(「週刊文春」31(14)平成元年3月30日文藝春秋社)

「吉田茂と鳩山一郎の4年間にわたる抗争秘話」スリリングな挿話を新証言で綴る—昭和・平成灼熱のライバル50人—

(松野頼三他)(「文芸春秋」69(2)平成3年2月文芸春秋社)

「黒幕っていうと、悪い印象だけど、要するに縁の下の力持ちなんだ(対談)」

(「ミックキー安川のここがポイント」39)(松野頼三、ミックキー安川)

(「政界往来」58(3)平成4年3月政界往来社)

「細川首相の強みは『目黒のサンマ』(編集長インタビュー)」

(松野頼三、大島信三)(「正論」260)平成6年4月サンケイ新聞社)

「二人の妖怪が読む今後の政局と宰相候補」意見番対談」

(田村元、松野頼三)(「正論」268)平成6年12月サンケイ新聞社)

「指南役・松野頼三が予言」細川は再登場する(細川辞任)」

(「週刊読売」53(17)平成7年4月24日読売新聞社)

「対談・村山退陣は六月!? (保・保連合への胎動)(松野頼三、中村慶一郎)」

(「THESIS」読売」6(2)平成7年5月読売新聞社)

「憲法こそ二大政党の対立軸」

(「THESIS」読売」6(2)平成8年3月読売新聞社)

「対談…平成の妖怪が住居団会に喝！—大蔵省から予算編成権を剥奪せよ」

(田村元、松野頼三)(「正論」284)平成8年4月サンケイ新聞社)

「KORONインタビュー1」

松野頼三(自由民主党・顧問)「憲法を軸にした保守合同の時代へ」

(インタビュー)南丘喜八郎(月刊公論」29(11)平成8年11月財界通信社)

「民主党は与党であってはならぬ」

(「週刊朝日」101(51)平成8年11月1日朝日新聞社)

「政界再々編はこう進む」

(「週刊朝日」101(53)平成8年11月8日朝日新聞社)

「ポスト橋本候補のホントの實力」

(「週刊朝日」101(54)平成8年11月15日朝日新聞社)

「永田町御意見番たちのこれだけは言っておきたい」

(一)「階堂進、後藤田正晴、松野頼三」『政界』18(12)(平成8年12月政界出版社)

「永田町千夜一夜」1」『週刊朝日』102(4)(平成9年1月31日朝日新聞社)

「凄まじかった吉田・芦田論戦」

『週刊朝日』102(5)(平成9年2月7日朝日新聞社)

「ワシが敬服した清廉な政治家」

『週刊朝日』102(6)(平成9年2月14日朝日新聞社)

「予算を節約した吉田、佐藤内閣」

『週刊朝日』102(7)(平成9年2月21日朝日新聞社)

「独裁者・小沢の追放が始まる」

『週刊朝日』102(9)(平成9年3月7日朝日新聞社)

「鳩曾は絶対に別れんだろう」

『週刊朝日』102(11)(平成9年3月14日朝日新聞社)

「小沢新進党の末期症状」

『週刊朝日』102(12)(平成9年3月21日朝日新聞社)

「蔵相は死ぬ気で予算を組むべし」

『週刊朝日』102(15)(平成9年3月28日朝日新聞社)

「首相と官房長官の名コンビ」

『週刊朝日』102(16)(平成9年4月4日朝日新聞社)

「三井三池炭坑の閉山に思ひごと」

『週刊朝日』102(18)(平成9年4月18日朝日新聞社)

「やるなら『保保合同』してみろ」

『週刊朝日』102(19)(平成9年4月25日朝日新聞社)

「沖縄返還の舞台裏を話そう」

『週刊朝日』102(20)(平成9年5月2日朝日新聞社)

「橋本政権のツキはいつまで続くか」

『週刊朝日』102(23)(平成9年5月30日朝日新聞社)

「政界キーパーソンを語る―新進党スター・ダストの危機」

(松野頼三著)『Ebisio読売』8(2)(平成9年5月30日読売新聞社)

「健全野党と世代交代の重要性」

『週刊朝日』102(24)(平成9年6月6日朝日新聞社)

「一発で効く参院改革案」

『週刊朝日』102(25)(平成9年6月13日朝日新聞社)

「族議員、かく使っべし」

『週刊朝日』102(27)(平成9年6月20日朝日新聞社)

「ガイドライン見直しで守るもの」

『週刊朝日』102(29)(平成9年6月27日朝日新聞社)

「翼賛国会」を糾す」

『週刊朝日』102(30)(平成9年7月4日朝日新聞社)

「都議選の重要ポイント」

『週刊朝日』102(32)(平成9年7月11日朝日新聞社)

「株屋と政治家の『おいしい関係』」

『週刊朝日』102(33)(平成9年7月18日朝日新聞社)

「松野頼三と小泉純一郎のホンネ対談」

『週刊朝日』102(34)(平成9年7月25日朝日新聞社)

「国会議員の外遊について」

『週刊朝日』102(35)(平成9年8月1日朝日新聞社)

「里帰りする政治家への戒め話」

『週刊朝日』102(36)(平成9年8月8日朝日新聞社)

「策士・梶山はキングメーカーになる」

『週刊朝日』102(40)(平成9年9月5日朝日新聞社)

「橋龍よ、加藤紘一を切れ」

『週刊朝日』102(42)(平成9年9月12日朝日新聞社)

「今の総裁選は時代遅れ」『週刊朝日』102(43)(平成9年9月17日朝日新聞社)

「日台国交断絶のウラ」〔週刊朝日〕102(44)〔平成9年9月26日朝日新聞社

「再選・橋本は「かわいい奴」―自民党の御意見番・松野頼三が初めて語る戦後宰相のベスト3は佐藤栄作、池田勇人、福田赳夫」

(松野頼三、岩見隆夫)〔宝石〕25(10)〔平成9年10月光文社

「橋本改造内閣の損得を占う」

(週刊朝日)102(47)朝日新聞社

「佐藤孝行を閣僚にするなら」

(週刊朝日)102(49)〔平成9年10月10日朝日新聞社

「本気でやれ!政治倫理国会」

(週刊朝日)102(51)〔平成9年10月17日朝日新聞社

「サッカー代表と同じ自民党」

(週刊朝日)102(52)〔平成9年10月24日朝日新聞社

「小泉厚相はなぜウケるのか」

(週刊朝日)102(54)〔平成9年10月31日朝日新聞社

「肝心なのは指導者のよしあし」

(週刊朝日)102(55)〔平成9年11月7日朝日新聞社

「細川元首相とホンネ対談」

(細川護熙、松野頼三)〔週刊朝日〕102(56)〔平成9年11月14日朝日新聞社

「クレムリン奥の院」

(週刊朝日)102(57)〔平成9年11月21日朝日新聞社

「ワシの景気打開策」

(週刊朝日)102(58)〔平成9年11月28日朝日新聞社

「総理に2年目の壁あり」

(週刊朝日)102(59)〔平成9年12月5日朝日新聞社

「基本は預金者保護」

(週刊朝日)102(62)〔平成9年12月12日朝日新聞社

「まず減税、次に人事だ」

(週刊朝日)102(63)〔平成9年12月19日朝日新聞社

「永田町の闇鍋(松野頼三、平沼赳夫、鳩山由紀夫、鹿野道彦、麻生太郎、塚原俊平、羽田孜)」

(週刊朝日)102(64)〔平成9年12月26日朝日新聞社

「インタビュー」この人に聞く「松野頼三・自民党顧問(元農相)の政界今昔」

「政治家は肩書を喜ぶうちはダメ」

(松野頼三著)〔月刊官界〕24(1)〔平成10年1月行政問題研究所

「官僚を悪くしたのは政治家だ(日本の最強権力をえぐる)」

(松野頼三著)〔TBSの読売〕9(3)〔平成10年6月読売新聞社

「私の生き方 目のない善盤の上で善をうつつてきた」寝技師「が見た戦後政治秘話」

(松野頼三著)〔公研〕9(9)〔平成10年9月公益産業研究調査会

「戦後政治の生き証人松野頼三氏に聞く 憲法改正は保守政治50年来の悲願党より国の根幹を考えた保守大合同を」

(松野頼三、上田泰輔著)〔ニューリーダー〕12(1)〔平成11年11月はあと出版

「松野頼三奉行 永田町の闇鍋―放談「今なら自民メタ負けだ」『選挙やればいい』自民VS民主(松野頼三、小泉純一郎、平沼赳夫、麻生太郎、鳩山由紀夫、羽田孜、鹿野道彦)」

(週刊朝日)104(57)〔平成11年12月17日朝日新聞社

「スーパード対談 この人に聞きたい!第21代防衛庁長官 松野頼三 女子自衛官生みの親・松野が吠えた!」基本は憲法だ!

(松野頼三、田崎喜朗)〔財界人〕13(1)〔平成12年1月政経通信社

「編集長インタビュー/青木官房長官の国事を忘れた失態―元防衛庁長官 松野頼三」(松野頼三・大島信三著)〔正論〕334〔平成12年6月サンケイ新聞社

「永田町の闇鍋―自民」森改造内閣」は、歴代最高の重責級だ/民主」民主党に政権とりなさいってことですよ(鹿野道彦、鳩山由紀夫、小泉純一郎、松野頼三、羽田孜、麻生太郎)」

(週刊朝日)105(56)〔平成12年12月22日朝日新聞社

「田中角栄 同期の私に差し出した挨拶代わりの金一封(20世紀の21人 聞けなかつた遺言)」

(週刊朝日)105(58)〔平成12年12月29日朝日新聞社

「対話 未来を創造するのが政治である―現状維持派が多い平成の政治家たち」

(公研)39(1)〔平成13年1月公益産業研究調査会

「松野頼三(元防衛庁長官)史上最悪のテロに日本は超兵器で対応を」

(松野頼三著)〔国際商業〕34(11)〔平成13年11月国際商業出版

「永田町の闇鍋 民主党は輪血しないとダメだね(松野頼三、麻生太郎、高村正彦、平沼赳夫、羽田孜、鳩山由紀夫)」

(週刊朝日)1003年三月十日号)〔平成15年3月10日朝日新聞社

関連文献

図書

「第九章 『政界人』の思想と行動―松野頼三の場合―」岡野加徳留著『多党制政治論』昭和43年1月10日経済往来社「松野頼三の社会党吸収論」

〔若見隆夫著〕金竹小とその時代〕平成4年12月25日毎日新聞社

新聞記事

「陰にちらつく政界仕掛け人、松野頼三氏―政局の節目に登場 二階堂出馬表明、自民愛党愛党の会結成」

〔東京新聞〕朝刊 2面 昭和62年5月23日中日新聞社

「迷走―世代交代横目に見て―あと10年・・・突走る党長老(次をにらむ九州・山口新選挙事情)〔3〕」

〔西日本新聞記事 朝刊 2面 昭和63年5月3日西日本新聞社

雑誌記事

「政界人脈の松野頼三(グラマン)の周辺(特集―キャラクター・ワイド版)」

〔田尻育三著〕(諸君)11(3) 昭和54年3月文藝春秋社

「沈黙の人―松野頼三氏の不透明な軌跡」

〔瀬合肇著〕(朝日ジャーナル)21(17) 昭和54年4月朝日新聞社

「衆参両院に喚問された松野頼三議員の全証言のなかにみむ疑惑とその論理(ダグラス・グラマン航空機購入をめぐる謎)4―(権力者の世界)6―」

〔自由)21(8) 昭和54年8月自由社

「道義的責任は回避しない(証言・参議院 松野頼三、五月二十八日) (ダグラス・グラマン航空機購入をめぐる謎)4―(権力者の世界)6―」

〔自由)21(8) 昭和54年8月自由社

「私を信じての献金(証言・衆議院松野頼三、五月二十四日) (ダグラス・グラマン航空機購入をめぐる謎)4―(権力者の世界)6―」

〔自由)21(8) 昭和54年8月自由社

「愚鈍の時代―松野頼三と新聞報道」

〔松原正著〕(諸君)11(12) 昭和54年12月文藝春秋社

「山鹿市にみる松野頼三の地盤崩壊」

〔大賀陸夫著〕(九大法学)第40号 昭和55年9月25日

「角栄に急接近する松野頼三―総裁選めざし動き出した仕掛人(丸亀弘明の政界深層レポート)」

〔丸亀弘明著〕(財界)32(11) 昭和59年8月19日財界研究所

「政局混沌で策士・松野頼三蠢動(二階堂+長老グループで中竹(中曾根・竹下)連合孤立化) (政界同時ドキュメント永田町の暗闘)〔56〕」

〔鈴木棟一著〕(サンデー毎日)64(15) 昭和60年3月31日毎日新聞社

「松野」佐藤が笑う不毛列島(平和と飽食)の選択」

〔週刊新潮)31(23) 昭和61年6月12日新潮社

「それでも松野頼三支持する熊本の恥(7月6日)同日選挙」列島を突っ走るアングラ公報」

〔週刊新潮)31(23) 昭和61年6月12日新潮社

「政変仕掛人・松野頼三の新たな蠢動」

〔政界往来)55(5) 平成元年5月政界往来社

「特集・屈辱の鎮庄」山下元利反乱軍」の黒幕は松野頼三」

〔週刊新潮)34(23) 平成元年6月15日新潮社

「政治家秘書への転身は墮落への過程か!? (新聞記者物語)〔3〕」

〔月刊TIMES)13(6) 平成元年7月

「院政狙う長老たちの実力度―橋本つぶしに動いた金丸信、橋本の相談相手といわれる松野頼三(特集・90政治をこう読む)」

〔財界)37(24) 臨時増刊号 平成元年10月5日財界研究所

「安倍亡き後、清和会制覇に動く三塚博の熱き野望(政局核心レポート)」

〔本沢一郎著〕(政界往来)57(7) 平成3年7月政界往来社

あとがき

松野頼三氏にお話をお伺いできるかもしれないということを、私がいくつかのオーラルヒストリーを一緒にしている小池聖一氏から聞いたのは平成十二年八月であったと思う。私は、是非推進して欲しいと頼んだ。九月になって、小池氏から、友人の佐藤元之氏（くまもと経済）に依頼し、ご子息の松野頼久氏（民主党代議士）を介してお引き受けいただいたとの連絡があり、最初の日取りを決めた。聞き手を、私と小池氏に加えて有馬学氏、佐道明広氏とし（第五回より武田知己氏も参加）、場所は松野氏の希望で、永田町のパレロワイアルにある松野氏の事務所で行うこととした。また、速記はベテランの丹羽清隆氏にお願いし、初回は松野氏が用意して下さったお弁当を食べながら行うことになった。

こうして第一回が同年十月十六日に開かれた。この日はお生まれ（松野鶴平を父とし、母方の祖父が野田卯太郎という家庭環境から）、少年時代、学生時代、動員での軍隊経験、そして敗戦による復員までのお話を伺った。また、しばらくの間は、『議員生活25年——明日を目指して』（中央公論事業出版 一九七二年）、『保守本流の思想と行動』（戦後政治研究会聞き書き 朝日出版社 一九八五年）を手掛かりにお話を伺うことにした（戦後政治研究会は久保紘之氏「産経新聞社」・堀川吉則氏「読売新聞社」・羽原清雅氏「朝日新聞社」・鈴木棟一氏「毎日新聞社」・久保庭啓一郎氏「日本経済新聞社」で構成）。

第二回は十一月十三日、復員から吉田総理の秘書を経て議員に当選し、三回当選で厚生政務次官に就任するまでの話しをお伺いした。第三回は厚生政務次官時代と指揮権発動問題について、翌十三年一月十五日の第四回では保守合同、総理府総務長官時代を経て労働大臣就任までのお話を聞きし、二月十五日の第五回は労働大臣時代のお話を伺った。三月十四日の第六回は佐藤派の五奉行の一人となった時期についてお伺いした。特に、佐藤派の構造についてのお話は大変貴重であった。四月十六日の第七回は防衛庁長官時代及び農林大臣時代のお話を伺ったが、前者では、我々のプロジェクトで、私も参加した『海原治オーラルヒストリー』上下を読まれての批判と当時の兵器国産化問題について詳しくお話を伺った。後者では農業保護政策についてのお話があった。五月二十一日の第八回では佐藤内閣時代のお話を、そして六月二十五日の第九回は田中内閣時代のことを中心に伺った。八月一日の第十回では、三木内閣の政調会長時代についてお伺いした。松野氏の三木首相観、三木首相に口説かれ、本来属していた福田派から疎まれたこと、公共事業予算の獲得の話などをお伺いした。八月三十日に行われた第十一回も三木内閣時代のお話の続きであった。九月二十七日の第十二回では、福田・大平内閣時代、そしてご自身のダグラス・グラマン疑惑で議員を辞職されたころのお話を伺った。

ここまでで、松野氏の政治家としての足跡はひとまわりになるが、十月二十九日の第十三回、十二月三日の第十四回、翌平成十四年一月十六日の第十五回は『佐藤栄作日記』の中の松野氏についての記述とその前後の新聞記事を用いた質問をさせていただいた。これまでとはかなり異なるやり方であったが、時期としては既に伺った時代であったものの、重複するお話は殆どなかった。この準備は途中から参加してくれた武田氏がしてくれた。

二月十九日の第十六回はもとのやり方に戻ったが、一旦政界を離れた前後、そして四月二日の第十七回は大平内閣の時期のお話、五月七日の第十八回は再度選挙に挑戦して落選、次いで当選、更に引退のお話をお聞きした。また、ここ数年『週刊朝日』に記事が連載され続けている「間鍋会」についてのお話も伺った。六月三日の第十九回は引退後のお話を伺って最終とした。この日、弓削康史氏にお願ひして写真撮影を行い、このオーラルヒストリーについてのご感想等を安田泉氏が伺った（その成果は「オーラルヒストリーに参加して―松野頼三氏に聞く―」<http://www.coe.orahistory.grips.ac.jp>を参照のこと）。

松野氏は、戦後早い時期に代議士になられ、父の鶴平氏の人脈にも助けられ、長期にわたって保守本流を歩かれた。ただ必ずしも常に主流にあったわけではなく、最後はダグラス・グラマン疑惑がその政治生命をほぼ断つてしまった。しかし、松野氏は、今日でも政治の世界に、ある一定の影響力を保持されている。速記録にあるように、お話の最中に電話で中断ということがあったが、多くは現役の政治家からのものであったようだ。氏はこのオーラルヒストリーで、極めてざくばらんに御自身の体験、観察をお話下さった。また、初回以降、各回の冒頭に、お弁当を食べながら、その時点時点の政治問題についての観察や関わりをお話下さったが、それらも貴重な証言として、整理の段階で省かずに収録した。また、最終的な整理の段階でも、お話下さったことについて、松野氏ご本人が削除されたところは全くなかった。冊子にするための最低限の整理やチェック、「政局関連年表（毎日新聞社のウェブサイトを活用させて頂いた）」「略歴」松野頼三関係文献目録」の作成は、藤木由美、藤谷洋平、浜田英毅、三宅淳子、川越美穂、佐藤純子の各氏が担当してくれた。

最後に貴重なお話を下さった松野氏、御紹介の労をお取りいただいた佐藤元之氏、毎回至れり尽せりの御世話をして下さった松野氏秘書の上原君子氏、一緒に話しを聞いてくださったインタビュアーの諸氏、毎回の準備と最後の冊子化に当たって尽力してくださったプロジェクトの関係諸氏に厚くお礼を申し上げます。

平成15年度 文部科学省研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕
研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕
発行：2003年8月20日《無断転載禁》

政策研究大学院大学(政策研究院)
C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2
Tel : 03 (3341) 0458 Fax : 03 (3341) 0446